プラトン全集15

定　義　集

向坂　寛訳

正しさについて
徳について
デモドコス
シシュポス

副島民雄訳

エリュクシアス

尼ヶ崎徳一訳

アクシオコス

岩波書店

目次

凡例

一、本全集は底本として、バーネット版プラトン全集(J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts)を用い、これと異なる読みをした箇所は注によって示す。

二、訳文上欄の数字とＢＣＤＥは、ステファヌス版全集(H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578)のページ数と各ページ内のＡＢＣＤＥの段落づけとの対応——おおよその——を示す(ただしＡは省略した)。引用は、このページ数と段落により示される(例えば『パイドロス』253C)。

三、各対話篇における章分けは、一八世紀以降フィッシャー(J. F. Fischer)の校本に由来すると見られる一般に慣用のものに従う。ただし対話篇により章別の一定していないものもあり、この場合は適宜区別を設けた。

四、対話篇名につけられている副題(ないものもある)は、ローマ時代のプラトン全集(トラシュロス)以来の、あるいはさらに古い伝承によるものである。所伝によって異同のある場合は、適切と判断されるものを選んでつけた。

五、ギリシア語の片かな表記は、ΦΧΘとΠΚΤとを同じように「プ」「ク」「ト」とし、母音の長短は普通名詞においてのみ区別し(例、ソピアー)、固有名詞においては区別しない(例、ソークラテースでなく、ソクラテス)。

六、〔 〕の括弧は訳者による文意の補足を示す。

七、略記号　DK＝H. Diels u. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*.　Diog. L.＝Diogenes Laertios.　古注＝*Scholia Platonica* (ed. W. C. Greene).

八、本全集における対話篇の収録順と各巻への配分は、右のトラシュロス編全集における九つの四部作集(tetralogia)の順序と括り方に従っている。

定義集

向坂寛訳

1 永遠なるもの。昔も今も、滅びることなく、全時間にわたって存在しているもの。

2 神。仕合せという点で自足した、不死なる生きもの。永遠なる存在[1]、善なるものの源。

3 生成。存在への運動。存在に与（あずか）ること[2]。存在することへの歩み。

4 太陽。それが登り、また沈むまでが同じ〔ところにある〕人々によって観られる唯一の天の火。昼に輝く星[3]。

B 永遠の生命をもつ最大の生きもの[4]。

5 時間。太陽の運行、運動をはかる単位[5]。

6 日。日の出から日没までの太陽の旅（運行）[6]。〔夜の〕闇と反対の光。

7 暁。一日の初（はじまり）。太陽の初光。

8　正午。ものの影がすべて一様にいちばん短くなる時。

9　黄昏。日の終り。

10　夜。昼の反対となる闇。太陽が失われること。

11　運。始めも終りも明らかでない成り行き、そして人なみはずれた不思議な行為の偶因。

C

12　老年。時の経過によって生ずる生命(いのち)あるものの衰え。

1　この部分はストア学派の断片と一致する。「神は仕合せの点で……完全で、不死なる生きもの」(H. von Arnim, *Stoicorum Veterum Fragmenta*, II, n° 1021(以下 H. A. と略記); Diog. L. VII. Zeno, 147)。

2　この部分は「存在性を手に入れることを生成すると呼び……」(『パルメニデス』156A)と一致する。

3　スイエに従い、411A7: οὐράνιον の後のコンマをとり、ὁραθῆναι の後に付加して読む。『トピカ』第六巻($142^{b}1$)で、アリストテレスは、このような定義は、定義されるべきものをもって定義している不充分さを指摘している。つまり、昼(日中)の中にすでに定義さるべき日(太陽)が含まれているからである。

4　ストア学派の考えで、「生命をもつ太陽もまた生じた……」とある(H. A., II. 806, 579; I. 499, 504)。

5　最初の定義はストア派が、二番目のはプラトンが定義した(Diels, *Doxogr. graeci*, p. 619, 38;『ティマイオス』38C)。

6　類似の定義をアリストテレスは『トピカ』第六巻($142^{b}3$)で批判している。上注3参照。

13 風。空気の、大地をめぐる運動(1)。

14 空気。場所における、その一切の運動が自然的であるような元素。

15 天空。いちばん上層にある空気そのものは別として、すべての感覚物を取り囲んでいるもの。

16 魂。自己自身を動かすもの(2)(=自己自身で動くもの)。生あるものの生命活動の原因(3)。

17 力。それ自身で、作用しうるもの。

18 視覚。事物を判別する能力。

19 骨。熱で固められた髄(4)。

20 元素。相寄って合成体をつくり、そして合成されたものを〔それへと〕解体するもの(5)。

D

21 徳。最善の状態。それ自体で賞賛に値する、死すべき生きものの〔心の〕習性。それを身につけているものは、

善いと言われる、そのような〔心の〕習性。法を互いに正しく遵守すること。その状態にあるものは、まったく立派だと言われる状態。公正さを生みうる〔心の〕習性。[6]

22 思慮。それ自体で、人間の仕合せを作りうる力。善悪の知識。[7] なすべきこととなすべからざることを、それに従ってわれわれが判別する〔心の〕状態。[8]

---

1 アリストテレスによって引用され、承認された定義(『トピカ』第四巻(127^{a}5))。

2 『パイドロス』(246A)で、「自分で自分を動かすものが魂にほかならないとすれば、魂は当然不生不死のものということになろう」と言っている。

3 アリストテレスは『霊魂論』第一巻(404^{a}8)でこの理論をデモクリトス、レウキッポスのものとして紹介している。

4 『ティマイオス』(73E)で造物主(デミウゥルゴス)が骨を作る過程を述べている。それによると、まず純粋な土をこねて、髄の中につけ、次にそれを火の中に入れ、その後、水にひたし、また火に入れ、さらに水にひたす。このことをくり返して火にも水にも溶けないものにしたとある。

5 クリュシッポスの定義に「元素——まず、それから万象が生じ、そして最後にはそれへと戻り行くもの」というのがある(H. A., II. 580; Diog. L. VII. Zeno, 136)。

6 P写本に従い、D2のἔχονを省く。アリストテレスは、この定義を、定義さるべき主語に必ず常に付随する特性を与えているとして評価している(『トピカ』第五巻(131^{b}1))。
これらの定義全体を通じて、アストは、διάθεσις と ἕξις をそれぞれ affectio, habitus と訳し、ミュラーは Gemütsbeschaffenheit, Gesinnung と訳し、使い分けている。アリストテレスはこの二つの語義を、共に性質の一種であるとし、ヘクシスはより安定的、長期の状態、ディアテシスは容易に動かされたり、変化したりする状態であるとしている。例えば、徳性はヘクシス、健康、熱病などはディアテシスとしている。しかし、ここでは徳性が時にはヘクシス、時にはディアテシスとして定義されている。そこで一応、ヘクシスを「〔心の〕習性」、ディアテシスを「状態」とした。

7 ストア学派の人々は、この定義に「善でも悪でもないものの知識」をつけ加えている(H. A., II. 174)。

8 ストア学派の定義の中に、これと類似したものがある(H. A., II. 105, III. 268)。

E 23 正義。心が自己自身と思いを同じくすること。そして心の諸部分が相互に、かつそれら相互関係における一切のことについてよく秩序づけられていること。各人に、その人の価値に応じたものを配分する心のもち方。[1]それを身につけている人は、自分に正しいと思われることを選択しうる、そのような心のもち方。人生において、法に従う心のもち方。社会的平等。法を遵守する心のもち方。

412 24 節制。魂が自己のうちに自然に生じる欲望と快楽について中庸を保つこと。[2]自然に生じる快楽と苦痛に関して、魂が調和と秩序を保つこと。支配したり、支配されたりすることに対して魂の中に協調があること。[3]自然にかなった自律。魂の理性的秩序。[4]美醜についての魂の〔念入りな〕取りあつかい。[5]それを身につけている人は、なすべきことを選んだり、〔なすべからざることを〕用心したりすることのできる〔心の〕習性。

B 25 勇気。恐怖にたじろがぬ魂の状態。戦いを恐れぬ心意気。兵法の知識。恐ろしいこと、危険なことに直面して魂が圧倒されないこと。思慮に従う大胆さ。死の予想に動じないこと。危険に際して、正しい判断を保ちうる〔心の〕状態。危険と釣合う力。徳への忍耐力。正しい判断によって、恐るべきであるとか恐れるに足らぬとか思われることがらについて魂が平静であること。恐るべきことにたじろがぬ意志を保つこと、戦の経験〔をもっていること〕。法を遵守する気構えのあること。[6]

26　自制。苦痛に耐える力。正しい判断に従うこと。正しい判断に基いた信念の矩(のり)をこえない力。(7)

27　自足。もろもろの善いものの所有という点で完全であること。その状態にある人々は、自分で自分自身を支配するような〔心の〕状態。

28　公平。権利の主張と利益を控え目にすること。(8)取引の契約において適度であること。理性的魂が美、醜を考

1　ストア学派の定義(H. A., III. 125, 262, 266)。21注6でヘクシスを説明したが、ここでは「心のもち方」と訳した。和訳上の統一は困難で、コンテクストによって訳を変えた。

2　ストア学派に類似の定義がある(H. A., I. 375)。

3　プラトンは『国家』IV. 442Cで『節制的』というのは、〔魂の三部分の〕友愛と協調によるのではないか、すなわち、支配する部分と支配される部分とが、思惟的部分(τὸ λογιστικόν)こそ支配すべきだと意見が一致し、それと争わない場合に」と言っている。

4　スイエに従い、411E10: ψυχῆς の後のコロンをとり、λογιστική の後に付加する。

5　ὁμιλία は元来、交際、取りきめ、指図の意であるが、ミュラーに従って「念入りな」という形容詞を補足して訳した。

6　スイエに従い、412A7: λογισμῶν を διαλογισμῶν と改める。『国家』IV. 429C～Dで「勇気」とは「恐怖の中にあっても、それを〔恐るべきこととは何かという考えを〕保ち、投げ出さないこと」とある。またストア学派は勇気を「苦境にあっても法を守る〔心の〕状態」としている(キケロ『トゥスクルム談義』第四巻(二四、五三)、H. A., III. 285)。

7　A、O[1]、P写本に従い、412B4: ἀνυπέρβλητος を ἀνυπέρβατος と改める。ストア学派の定義に同じものがある(H. A., III. 274)。

8　アリストテレスは『トピカ』第六巻(141^{a}16)で、この定義を批判し、一般的なことが述べられた後で(または平行して)、部分的なことがつけ加えられているとしている。つまり、「権利」は「利益的なもの」であって、利益の中に含まれている。すなわち、この場合、「権利」はどうでもよい余計なもの(περιττόν)だと言うのである。

慮するのによい秩序を保っていること。

C

29 忍耐。立派なことのために苦痛に耐えること。[1] 立派なことのために、もろもろの苦労に耐えること。

30 大胆。禍を予想しないこと。禍の到来に狼狽しないこと。

31 無苦。[2] 苦痛に陥らない〔心の〕状態。

32 勤勉。選びとった仕事を完成させんとする〔心の〕習性。自発的忍耐。労苦にめげぬ〔心の〕習性。

33 慎み。正しい仕方で、また最善と思われるものにてらして、大胆な振舞から自発的に後退すること。最善なるものの自発的理解。正しい非難に対する配慮。[3]

D

34 自由。人生を〔自ら〕指導すること。万事にわたっての自律。人生において、思うがままに生きる能力。[4] 財の使用と獲得におおらかであること。

35 寛大。適度な利益で満足する心がけ。適当なる財の贈与と取得。[5]

36 温和。怒りによる感情の興奮を鎮めること[6]。魂の〔諸部分の〕調和のとれた融合[7]。

37 礼儀正しさ。最善と思えることに自発的に服すること。身のこなしがきちんとしていること。

38 幸福。あらゆる善いものから合成された善。善く生きるうえの充分な能力。徳による完成。生あるものに必

---

1 アリストテレス『大道徳学』第二巻($1202^{b}30$)に「自制は快楽にかかわり……忍耐は苦痛にかかわる。つまり、苦痛を耐え忍ぶ人、この人が忍耐ある人なのである」とある。

2 ストア学派のゼノンは、善を究極的なもの、手段的なもの、そしてその両方であるものに分け、友や友から得られる利益などは手段的善とし、勇気や自由などと並べて無苦(ἀλυπία)を究極的善としている(H. A., III. 107; Diog. L. VII. Zeno, 96)。また、アリストテレス『弁論術』第一巻($1365^{b}39$)を参照。ἀλυπία には、快活、呑気などの意味もあるが、ここでは主体的意味を含む哲学的用語にとった。

3 ストア学派の定義(H. A., III. 432)。

4 D2: καθ' ἑαυτόν は「自己に従って」が直訳だが、それはどういう意味なのか。アリストテレスは『政治学』第六巻($1317^{b}12$)で「いやしくも好むままに生きることができないのは奴隷の定めで、好むままに生きるのは自由の働き……」と言っている。アスト、スイエは「思うがままに」(ut velit)の訳をつけている。クリュシッポスは「つまり、自由とは独立独行の力(αὐτοπραγία)であり、隷属とはその力の欠如である」と言っている(H. A., III. 355)。

5 アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第二巻($1107^{b}10$)で、「財の贈与と取得について、その中庸は寛大であり、その過超と不足は浪費性とけちである」と言っている。また、同所に「けちな人は、これに反し、取得において過超し、支出において不足している」($1107^{b}12$)とある。ストア学派の定義にも類似のものがある(H. A., III. 273)。

6 アリストテレス『弁論術』第二巻($1380^{a}8$)で「温和〔になる〕とは怒りを鎮め、和らげることと定義しよう」とある。

7 魂の各部分(理性的、欲望的、気概的等々)の和合と考えられる。

要な、充分な利得。(1)

39 高邁。極めて尊敬すべき人の正しい判断から生れる威厳。

40 利発。それを持っている人は、各人が必要としているものを見分けられる心の天分。知性の鋭敏。(2)

41 誠実。慎重さをともなった性格的率直さ。性格的真面目さ。

42 高貴。(3)最善なるものを選びとろうとする〔心の〕状態。

43 雅量。もろもろの出来事の扱いに垢抜けていること。理性をともなった心の幅広さ。(4)

44 人間愛。(5)人間を愛するように性格がよくしつけられている状態。(6)人間に対する親切心。感謝の気持。受けた善行を忘れないこと。

45 敬虔。神々に対する正義。(7)神々に自ら進んで奉仕する能力。神々への敬いを正しく理解していること。神々への敬いの知識。

46 善。自分自身のためにあるもの。

47 無畏。その状態にあれば、恐れに陥ることのない〔心の〕習性。

48 心の平静（アパテイアー）。それを身につけていれば、激情に陥ることのない〔心の〕習性。

---

1 これらのさまざまの定義は、多分一般に敷衍していた金言のようなものであったろうが、ソクラテスやプラトンの学園で受け入れられ、次いでアリストテレスが綜合したと言えよう（『ニコマコス倫理学』第一巻（四、八）参照）。

2 『カルミデス』160Aで、「抜け目なさとは魂の鋭敏さであり、物静かさではないのではないか」とある。

3 この抽象名詞は、プラトンの作品では見出されない。プラトンはカロス・テ・カガトスと分けて用い、立派な人、ジェントルマンの意味である。アリストテレスは人生における高貴で秀れている性格、またはそのようなものをさしている（『ニコマコス倫理学』第四巻（三）、およびA. Grant, *The Ethics of Aristotle*, II, p. 74 参照）。

4 ミュラーは412E9: τοῖς συμβαίνουσιν を Jemandem にとっているが、ここでは事柄の意味にとった。ストア学派はこれを「もろもろの出来ごとから超然たる知」と定義している（H. A., III. 274–275）。また、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第二巻（七）で、「名誉と不名誉に関して、その中庸は雅量（矜持）であり、その過超はいわゆる尊大のたぐい、その不足は卑屈である」と言っている。

5 博愛、人情の意味をもつ語だが、原意に即して訳した。

6 ストア学派はこれを「人々に友として接すること」としている（H. A., III. 292）。

7 アリストテレスの作品とされてはいるが、実際には少し後の時代の『徳と悪徳について』の論文の著者は、「敬虔」を正義の一部としており、正義の様々な種類の中で、神々に関する正義を第一のものとしている（1250^{b}19）。

49 平和。戦いをもたらす敵意へと向う静けさ。

50 安逸。魂の怠惰。〔心の〕気概的な部分が無感覚であること。

51 手腕。それをもっている人は、自分自身の意図を達成することができる能力(1)。

52 友愛。立派なこと、正しいことについての合意。同じ生き方の選択(2)。選択と行為について見解を同じくすること。生活の類似(3)。善意の交り。互いに善行をなしたり、受けたりすること。

B

53 高潔。生れのよい性格の徳(4)。言論と行為に関して魂が善く指導されること。

54 選択。正当な評価。

55 善意。人が人に対していだく共感(5)。

56 親族関係。同じ血族を共有していること。

57　和合。あらゆることがらに対する協調。考えや意見の一致。[6]

58　愛好。全面的に受入れること。[7]

59　政治学。立派なこと、利益あることの知識。国家において正義を実現する知識。

C

60　仲間関係。同年配の者たちのつき合いの情。[8]

1　アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第六巻(1144^{a}23)で、「手腕」とは「与えられた目標へ導くことがらを為し、目標達成を可能にするような能力」としている。

2　アリストテレスは『政治学』第三巻(1280^{b}38)で、「つまり、友愛とは共に生きることの選択であるから」と言っている。これらの諸定義は、『ニコマコス倫理学』第八、九巻のピリアーの定義の後に作られたように思われる。

3　ストア学派は「生活上の諸問題の……協調と一致」としている(H. A., III. 661)。

4　セネカは、「なん人も他の人より高貴であることはない、もしも生れの良さというものが、その人を高潔にしている……ということがない場合には」と言っている(H. A., III. 349)。

5　シュナイダー等に従い、413B6 : αἵρεσις を省く。

6　ストア学派の定義の中に、この定義をいく分、類推させるものがある(H. A., III. 292)。

7　文字通り、ストア学派の定義(H. A., III. 292)。アリストテレスは、『形而上学』第一巻(980^{a}22)で、人間が生れつき知ることを欲する証拠として、知覚へのアガペーシス(愛好)を挙げている。

8　ディオゲネス・ラエルティオスによると、プラトンは親愛の情(φιλία)に三種あり、その一つが友情であるとしている。ストア学派は仲間関係を「同年輩の間に見られるような、選択にもとづく親愛の情」としている(H. A., III. 112)。また、『パイドロス』240 C に、「よわい同じからざれば、たのしみも同じからず」とある。

61　分別。生れもった理性の徳。

62　信念。思われる通りに、事実そうであると本気に思うこと。習性(性格)の変りにくいこと。

63　真理。肯定と否定においての精神の〔正しい〕あり方。(1) 真なるものの知。

64　意図。よく熟慮した意欲。理知的欲求。(2) 理知をともなった、自然的欲求。

65　忠告。行いについて、どのようなやり方でなすべきかを他人に指図すること。

66　好機。なにかをされたり、なにかをなしたりせねばならぬ時を的確にとらえること。

D

67　用心。悪を見張ること。(3) その見張りに気を配ること。

68　秩序。相互に関係し合っているあらゆるもののうちで類似を作り出すこと。共同体の和。あらゆるものの相互関係の原理。ものごとを習得するにあたっての、守らるべき和。(4)

69 注意。理解へ向う精神の緊張。

70 才能。学びの速やかさ。自然の恵みある創造。生れもった卓越性。[5]

71 聡明。速やかな学びに適した、生れもった心の才能。[6]

72 裁判。対立する事柄に関する、権威ある判定。不正行為か、そうでないかに関する法的論争。[7]

---

1 アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第六巻(1139^b15)で、「精神は肯定もしくは否定によって真実を語る……」と言っている。

2 ストア学派の定義(H. A., III. 431-432, 438)。

3 キケロは「われわれはよいものを手に入れるために、悪いものを避けるのであるが、その回避が理性をもってなされること、それを用心と言う……」と述べている(H. A., III. 438)。

4 スイエに従い、413D2: ὁμοιότης を ὁμοιότητος に、D3: ὄντων の後にコロンを入れ、D4: συμμετρίας を συμμετρία πρὸς τὸ μαθεῖν に改める。

5 L^4、V、Z、O^1 写本に従い、413D6: φυτῶν を φύσεως に改める。ストア学派の定義に「才能とは一般に生れつき、もしくはしつけによって、卓越性を身につけるに適した心の素質である、言いかえれば卓越性を身につけやすい、そのような心の素質」としている(H. A., III. 366)。

6 『カルミデス』159Eで「聡明とは速かに学ぶことであり、学び難さとはこれに反して、静かに、のろのろと学ぶことであろう」とある。

7 スイエに従い、413D9: Νόμος を Δίκη に、D10: Δίκη を νόμιμος に改める。すなわち、Νόμος と Δίκη の二つの定義を Δίκη の定義の中に併せることになる。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第五巻(1134^a31)で「裁判とは正と不正との判定にほかならぬ」と言っている。

E

73 法秩序[1]。立派な法への服従。

74 愉悦。思慮ある人の行いが、われわれに与える喜び[2]。

75 名誉。徳行に与えられる善いものの贈与。徳が授ける尊厳。高貴なるものの現われ。価値あると思われるものの維持。

76 意欲。行動への選択の表現。

77 親切。自発的善行。善を施すこと。時宜を得た奉仕[3]。

78 和合。治めるものと治められるものとが、いかにして治めたり、治められたりせねばならぬかについて意見が一致すること[4]。

79 国家。仕合せに生きる上で充足している、多数の人々の共同体。多数の人々の、法を守る共同体。

80 先見の明。これから先のことに対する心の準備。

414 81 熟慮。これからのことについて、どうすれば有益であるかを考察すること。

82 勝利。競争における優越力。

83 機転。反論にうち勝つ洞察力。

84 贈物。善意の交換。

85 頃合。有益なことのための潮時。なにか善いものの取得に協力する時機。

---

1 スイエ、ミュラーともに「適法〔性〕」の意味にとっているが、ヒックス、アストの解釈をとった。プラトンは「国家の秩序(εὐνομία)」がどのような場合に実現するかという問題で三つの場合を挙げている。すなわち、①国法が立派な時、②人々が現実の法に従う時、③人が健全な慣習をもっている時、としている(Diog. L. III. Plato, 103)。

2 完全にストアの定義である(H. A., III. 432)。

3 413E6: ἀγαθοῦ の後にコンマを入れ、ὑπουργίας を ὑπουργία に改める。ストア学派は善行の中に、この自発性の考えを主張している(H. A., I. 579)。

4 プラトン『国家』IV. 433C に「〔国家を善くするには〕治めるものと治められるものとの考えが一致することなのか……」とある。

86　記憶。自己の中にある真理を保持しようとする魂のあり方。

87　熟考。思考の努力。

88　思考。知識の始原。

B

89　恭敬。[1] 神々に対して過ちを犯すまいとする用心。[2] 神に捧げる生れもった崇拝の念。

90　予言。証明なしに、前もってなりゆきを明らかにする知識。

91　予言術。死すべき生きものの、現在あること、及びこれから起ることを見通す知識。[3]

92　知恵。無前提の知識。永遠にあるものについての知識。存在する諸物の原因を観想する知識。[4]

93　哲学（愛知）。いつも変らずにあるものの知識を希求すること。真理を、そしてどうしてそれが真〔実〕であるかを観想する心のもち方。[5] 正しい道理をともなう魂の配慮。[6]

C

94 知識。理論によって反駁されることのない魂の承認。一つ、もしくは複数の対象に対する、理論による反駁を許さない理解力。思考に基いた、ゆるぎない真実の理論。(7)

95 思いなし。理論によって説得されやすい承認。思考の流動。理論によって、偽となったり、真となったりす

---

1 ἁγνεία には、神聖不可侵、清浄の意味と宗教上の義務の厳守の意味があるが、後者の主体的意味を生かして訳した。プラトン『法律』X. 909E を参照。

2 ストア学派の定義に、同じようなものがある(H. A., III. 432)。

3 クリュシッポスは「これから起るあらゆることがらを……見通し、前もって告げる知識」としている(H. A., II. 930)。

4 プラトンは『国家』VI. 511Bで、幾何学的諸術知が前提知であるのに対して、哲人(愛知者)のそれは無前提知まで進み行くことをのべている。また、愛知者の本性を「常に存在する……かの存在について……いつも恋をしている」と言っている(VI. 485B)。アリストテレスは知(ソピアー)に即しての活動として純粋観照を挙げている(『ニコマコス倫理学』第一〇巻(七)。

5 プラトンは『国家』VII. 521Dで、哲学を「生成するものから〔永遠に〕存在するものへと魂をひっぱる学問」としている。アリストテレスは『形而上学』第二巻($993^{b}20$)で、哲学の重要な課題の一つが、「ものごとの原因(どうして真であるか)を知っていること」だとしている。

6 スイエはこの部分をストア学派の考えに近いとし、「彼らは『哲学を正しい道理の追求に心がけること』だとしている」(H. A., III. 293)を引用している。ミュラーは「正しい道理に導かれた、魂への配慮」と解釈し、ソクラテス、プラトンの考えをとっている。「魂の」という属格を目的的属格にとるかどうか、いずれをとっても問題が残されるように思われる。

7 『ティマイオス』51Eでは「真なる思い」と「理性(その対象としての知識)」を区別して、一方が説きつけられて変り、他方は説きつけられても変らないとある。同様の記述は同29Bにもある。アリストテレス『トピカ』第五巻($134^{b}1$)参照。

る考え。(1)

96 感覚。魂の運動。肉体を通しての思惟の刺戟。(2) 人間の利益のために与えられる伝達、——それによって肉体を通じ、魂の中に非理性的認識能力が生れて来るような伝達。

97 性格。それによって、われわれがどのような人物であるか、人をして言わしめるような心のあり方。(3)

D

98 音声。思惟から発し、口を通って行く流れ。

99 文。存在する諸物のそれぞれを表現する書かれた音声。(4) 名前や述べ言葉(動詞)からなる、旋律のない言いまわし。(5)

100 名前。ものの本性から述べられることがらとか、それ自体で表現されるすべてのものを説明する単一の言いまわし。(6)

101 話。字母によって表現される人の声。そして旋律のない、ものを説明するある共通の標(しるし)。

102 音節。字母によって表現される人間の音声の分節。

103 定義。種差と類からなる説明。

E

104 証拠。明らかでないものを明らかに〔証明〕するもの。

105 証明。推論による真実の説明。前もって知られていることによって明らかにする説明。

---

1 知識と対立させ、プラトンが厳しく区別したもの。

2 スイエに従い 414C5 : νοῦ κίνησις [ψυχῆς] διὰ σώματος と読む。この二つの定義は『ティマイオス』43C, 45D にある。そこでは、外界の刺戟が肉体を通して魂の方へ流れ、つき当る、それが知覚とされている。アリストテレス『自然学小論集』「睡眠と覚醒について」($454^{a}9$)で「感覚は……身体を通して働く魂のある運動である」と言っている。

3 アリストテレスは『形而上学』第五巻($1022^{b}10$)で「事物のあるディアテシス(状態、配置)がその事物のヘクシス(所有、気質、性格)と言われる。たとえば魂の部分の徳性さえも魂のヘクシスと言われる」とある。

4 Diog. L. III. Plato, 107 で、プラトンは音声を、一つは生命のある、一つは生命のない音声に二分している。前者は生物の、後者は無生物の音声である。生命のある音声はさらに二分され、一つは分節のある音声、一つは分節のない音声、前者は人間の、後者は動物の音声であると彼は言う。そこでは、D2 : ἐγγράμματος(書かれた)は「分節のある」という意味で用いられている。

5 『クラテュロス』431B に「文章は述べ言葉と名前の結合したものだからね」とある。

6 スイエ、ミュラーに従い、D5 : μή を省く。なお、名前と訳した ὄνομα は一般に名詞と訳されるようであるが、プラトン、アリストテレスでは、名詞より幅広く用いられている。プラトンはオノマを「名指しの道具」(『クラテュロス』388A)としており、アリストテレスは、時には形容詞の類までオノマとしている(『詩学』($1457^{b}1$))。

106 音素。単一の音声。合成された音声を音声たらしめるもの。

107 有益なもの。暮しむきがよくなる原因。善の原因。(1)

108 有利なもの。善きものへ導くもの。

109 美。善いもの。(2)

110 善。存在するものの存続の原因。万物が自己の目標としてもっている元のもの、――それによってなにを選択すべきかが決定される元のもの。(3)

111 節度。魂の秩序。(4)

112 正しさ。正義を実現する法の命令。

113 自発的なもの。自己自らを行為へと導くもの。自己自らに従って選択されるもの。自分の考えに従って成就

されるもの。(5)

114　自由。自己自身を支配すること。

115　適度。術知の要求をみたす、過超と不足の中間。(6)

116　尺度。過超と不足の中間。

117　徳の報酬。それ自体のために望まれる誉。(7)

1　『ヒッピアス(大)』296Eで、「有益なものは善いものを作るものである」とソクラテスが定義している。

2　109はA、O写本では省かれているが、スイエに従った。

3　ストバイオス『選集』(rec. C. Wachsmuth et O. Hense, II. 134)では、類似した三定義がペリパトス学派に帰せられている。

4　『ゴルギアス』506Eで、「ところで、秩序をもつ魂は節度があるのだね」とある。

5　スイエに従い、415A1: αἱρετόν の後にコンマを入れ、τὸ を補う。アリストテレス『大道徳学』第一巻(1188^b26)で「自ら好まざるものは、必然に従ってばかりでなく、強制によって生起するのであり、また第三に考えを伴わずに生起するからである」と言っている。

6　『ポリティコス(政治家)』で「術知的なものはすべてなんらかの意味で測定術に関係があり……」(285A)、「測定術は一つには、適度、適切……そしてすべて両極から中点へと移された限りのものとの関係で測定する術知である」(284E)とある。

7　ストア学派の定義に「誉は善を志向する徳の報酬である」とある(H. A., III. 563)。

118 不死。魂をもって存在すること、永遠の持続。

119 敬虔。神の意にかなう神への奉仕。

120 祭祀(さいし)。法によって決められた聖なる時。

121 人間。羽のない、二本足の、平たい爪をもった動物。存在するもののうち、ただこのものだけが、推理に基いた知識を得ることのできるもの。(1)

B

122 犠牲。神に捧げる贈物。

123 祈願。善いもの、もしくは善いと思われるものを人々が神々に頼むこと。(2)

124 王。法に基いた、しかし責任をとわれることのない統治者。(3) 政体の長。

125 統治権。すべてに対する配慮。

126　司法権。法がそれに託されている、その権力。(4)

127　立法家。それによって国が治められるに必要な基準となる法の作成者。

128　法。期限の制約がない、大衆による政治的決定。(5)

129　仮定。証明されえない原理。論議の要約。

1　この定義のいくつかが、アリストテレスによって批判されている。たとえばその一つとして、あるものの特性を与える時には、それが本性上(φύσει)なのか、常に(ἀεί)なのかを明確にしないと混同が生ずるとする。二本足ではない人間もいるからである(『トピカ』第五巻(134^{a}5)。また同書第一巻(103^{a}27)、第五巻(132^{a}19, 133^{a}2)参照)。また、キュニコス学派のディオゲネスやセクストゥス・エンピリコスは、この定義の少くとも本質的部分をプラトンに帰している(Diog. L. VI. Diogenes, 40)。なお、解説二六九ページ参照。

2　『ポリティコス(政治家)』(290B)に「神官の種族は、祈りによって神々から善いものをわれわれのために祈願する術を知っている」とある。また『法律』Ⅶ. 801A 参照。

3　『ポリティコス(政治家)』(301B)で「……知識ある人を見倣らって、法に従い、独りで統治する場合、彼を王と言う」とある。「責任をとわれぬ」とは査察官(εὔθυνος)によって問責されない意味をもつ(『法律』Ⅻ. 945A sqq. 参照)。

4　ストア学派の考えで、「司法権は法的裁定を司る」とある(H. A., III. 544)。

5　プラトンは『ミノス』(314B)で、「法は全体的にみて国家が議決したものであるということになろう」と言っている。ここでは特に「大衆による」という限定があり、民主的性格が示されていると考えられる。アリストテレス『政治学』第五巻(1310^{a}4, 1305^{a}32)を参照。

130 政令。期限の制約をもつ政治的決定。

C

131 政治家。国家組織の知者。

132 国家。共通の議決に服する多数の人々の住い。同じ法の下に住む多数の人々の集り。(1)

133 国家の卓越性。立派な国家組織の確立。

134 戦術。戦の体験。

135 同盟。戦を共にすること。

136 保全。被害を与えずに、安全に確保すること。

137 僭主。自分自身の考えに従って国を支配する人。

138　ソフィスト。謝礼金目あてに、富裕で優秀な青年を狩猟する人。(2)

D

139　富。仕合せに生きるに適切な財の所有。仕合せにつながる財の豊さ。

140　供託品。信用に基いて預けられたもの。

141　浄化。悪いものの、善いものからの分離。(3)

142　勝つこと。競争して差をつけること。

143　善人。人に善を履行する心がけのある人。

144　節度ある人。欲望を適切に保つ人。

1　ストア学派の定義で、「国家は……法の下で生活する人人の集り」(H. A., III. 327)とある。

2　『ソピステス』(231D)では「若くて金のある者たちを、謝礼金目あてに狩猟する人」となっている。

3　悪いもの、善いもの、ともに原文は比較級になっているが、和訳上、これを省く。

145 自律的な人。魂の諸部分が正しい判断にさからおうとするのを統率する人。

E

146 真面目な人。徹底して善い人。その人固有の卓越性をもつ人。(1)

147 気がかり。理由のない苦しみをともなった思い。

148 ものわかりの悪いこと。学びの遅いこと。(2)

149 独裁政治。責任をとわれることのない、しかし合法的な支配。

150 非哲学。その状態にある人は言論嫌いであるような〔心の〕状態。

151 恐怖。禍を予感して魂がうろたえること。

152 怒り。理性を失った魂の、考えの足りぬ暴力的衝動。(3)

153 狼狽。禍の予感にたじろぐこと。

154 追従。最善なることを考えずに他人の気に入るように調子を合わせること。度を過ぎて他人の気に入るように調子を合わせる態度。

155 憤怒。激情が復讐へと〔人を〕駆りたてること。(4)

156 傲慢。侮辱的態度へと向う不正。(5)

---

1 アリストテレスの一〇のカテゴリーのうち、「性質」を論じている所で、「性質」を二つの種類、「状態(ヘクシス)」と「様相(ディアテシス)」とに分け、徳性などは「状態」のカテゴリーに入り、永続的であると言っている。また、事物がどのようかという性質づけにあたって、「性質に従って派生的に語られる語られ方」と「性質に由来して、ある別の仕方で語られる仕方」とに分け、「徳性をもつ故に立派な人」という語られ方は後者に属すと言っている(『カテゴリー論』(10^b8))、また『トピカ』第五巻(131^b1)も参照。

2 『カルミデス』159E にこれと同じ定義がある。

3 スイエに従い、415E6：νοῦς τάξεως を省く。おそらくこれは、初め欄外書込みとして、ἄνευ λογισμοῦ の注として書かれたものと思われる。

4 アリストテレス『大道徳学』第二巻(1202^b19)で、「激情が復讐へと駆りたてるもの」を怒りとしている。その他、『トピカ』第八巻(156^a32)でも「憤怒とは軽視されたと考えて、復讐に向う衝動」としている。

5 ストア学派の定義に類似のものがある。そこでは「賢者は傲慢であったり、傲慢な振舞をしない、というのも、それは他人を侮辱する不正であり、害悪であるから」とある(H. A., III. 578)。

157 無自制。正しい判断にさからって、快的であると思われることへと強いる〔心の〕習性[1]。

158 逡巡。労苦からの逃避。衝動を抑制する臆病。

159 始原。存在の第一原因。

160 中傷。言葉によって友人関係を引き離すこと[2]。

161 好機[3]。各人がなにかを甘んじて受けたり、なしたりするに適した時。

162 不正。法を軽んずる心の持ち方。

163 貧困。もろもろの善いものの欠乏。

164 羞恥心。予想される悪評への恐れ[4]。

165 見栄っぱり。自分に属していない一つもしくは複数の善いことを、自分に属しているかのように見せる性状[5]。

166 過ち。正しい判断から外れた行い。(6)

167 嫉み。友人たちの今ある善いもの、または前からあった善いものに対して、面白く思わぬこと。(7)

168 無恥。利益のために、悪評に甘んじられる〔心の〕状態。

169 無謀。たち向う必要のない恐怖に対する過度の大胆さ。(8)

---

1 アリストテレス『徳と悪徳について』(1250ª22)で、「無自制は欲望的部分の悪徳で、理性がそれをたしなめようとも、悪しき快楽を選ぶ」としている。なお、1251ª23も参照。

2 ストア学派の定義に、「偽りの言葉によって、友と思われる人々の仲を不和にすること」とある(H. A., III. 581)。

3 定義さるべき主概念「好機」(καιρός)は、85にもあり、また66でεὐκαιρίαとしても出て来る。事実上、同じような概念であるが、定義内容から85を「頃合」とし、66、161を「好機」とした。

4 アリストテレス『ニコマコス倫理学』第四巻(1128ᵇ11)で、「不面目に対する一種の恐れ」としている。

5 『ニコマコス倫理学』第四巻(1127ª21)で、「見栄っぱりとは、一般に尊重されることがらが、事実彼に属していないにもかかわらず、また事実彼に属しているより以上に、彼に属していると見せかける傾向のある人」としている。

6 ストア学派の定義で、「すべて正しい判断から外れているものは過ちである」とある(H. A., III. 455, 500)。

7 ストア学派は「他人の善いことがらを面白く思わぬこと」としている(H. A., III. 412, 414-415)。

8 アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第三巻(1115ᵇ28)で、「恐ろしいことに平然としていることの過度な人は無謀である」と言っている。

170 虚栄。考えなしに、浪費する〔心の〕状態。

171 性悪(しょうわる)。生れもった悪、そして生れもった性質の不出来。生れもった性質の病。

172 希望。善いものの期待(1)。

173 狂気。まともな考えを破壊する〔心の〕状態。

174 おしゃべり。話の無分別なしまりなさ(2)。

175 反対性。なんらかの違いをもち、同じ類のもとに属するもののうちで、最大の距りあること(3)。

176 不本意なこと。考えにさからってなされること(4)。

177 教養。魂を医療しうる力。

178　教育すること。教養を与えること。

179　立法学。国家を善くしうる知識。

180　訓戒。分別をもって加えられる非難の言葉。過ちを避けるための言葉。

181　救助。今ある害悪、もしくは生れつつある害悪を防ぐこと。

182　矯正。犯した過ちに対して、魂を医療すること。

1　クセノポン『キュロスの教育』第一巻(六の一九)で、「人がしばしば、誤った善の期待をかかげていると、このような人は信を得ることはできない」と言っている。

2　テオフラストス『性格論』(七)で、「おしゃべりとは、言葉のだらしなさ」としている。

3　アリストテレスは『形而上学』第一〇巻(1055ª3)で「同じ類に属するものどものうちで、最も多く差別あるものは反対のものどもである」と言っている。「同じ類のもとに属するもの」という条件は、類を異にすると、距りが大きすぎて比較不可能となり、反対性の範疇に入れることができないからである。

4　アリストテレスは『大道徳学』第一巻(1188ᵇ27)で、不本意なことは三つあり、一つは必然によって、二つは強制によって、三つは知性をともなわずに生じるとしている。つまり、前もって思惟もせず、誰かをなぐるとか殺すとかする場合、この人は自ら好まずして行ったと言える。「つまり、知性に基いてはじめて、自発的行為たらしめるのだから」と言っている。

183 能力。言行における卓越。それをもっているものは有能であるような状態。生得的強さ。

184 保護すること。被害のないようにすること。

〔定義の番号は、ミュラーの例にならって、便宜上訳者が付加したものである。また定義される概念の後の終止符もバーネット校訂本にはないものであるが、定義される内容と明確に区別するために、さらに、〔 〕内の語は、全体の文意をわかり易くするために訳者が付加したものである。〕

正しさについて

副島民雄訳

登場人物

ソクラテス

無名氏（あるいは友人）

372

一

ソクラテス　君は、われわれに「正しさ」とは何か言うことができるかね、それとも、君には、それについて議論をする価値があるとは思われないかね。

無名氏　大いに、価値があると私には思われます。

ソクラテス　では、それは何なのかね。

無名氏　つまり、正しいものというのは「公認されたもの」に他ならないのではないでしょうか。

ソクラテス　いや、どうかそんなふうに答えるのはやめてくれたまえ、むしろ、たとえば、もし君がわたしに、眼とは何かと尋ねるならば、わたしは、それでもってわれわれが見るところのものであると、君に答えるだろう。そして、もし君がわたしにそれを示すように命ずるならば、わたしは君に示すだろう。また、もし君がわたしに、魂(こころ)という呼び名は何に対してつけられたものか、と尋ねるならば、わたしは君に、それによってわれわれが知るところのものであると言うだろう。さらにまた、もし君が声とは何かと尋ねるならば、わたしは君に、それによってわれわれが互いに話しをするところのものであると答えるだろう。これと同じように君もまた、いましがたわたしが質問したものと同様に、「正しさ」についても、それは何のためにわれわれが用いるものなのか言ってくれたまえ。

無名氏　私はあなたにそんなふうに答えることはまったくできません。

373

ソクラテス　よしわかった、それなら、そういう仕方では君は答えることができないのだから、たぶん、何かこんなふうなやり方をしたら、われわれはよりたやすくそれを発見することができるだろうか。さあ、大きいものと小さいものは、何を用いて調べるならば、われわれはそれをはっきり識別するだろうか。ものさしを用いてではないだろうか。

無名氏　そうです。

ソクラテス　また、ものさしとともに、どんな技術によってかね。測量術によってではないかね。

無名氏　測量術によってです。

ソクラテス　では、軽いものと重いものはどうかね、はかりを用いてではないかね。

無名氏　はい。

ソクラテス　また、はかりとともに、どんな技術によってかね。秤量術によってではないかね。

無名氏　まったくそうです。

ソクラテス　ではどうかね、「正しいもの」と「不正なもの」は、どんな道具を用いて調べるならば、われわれははっきり識別するだろうか。また、道具とともに、それより前にどんな技術によってかね。これでも、まだ君には明らかではないかね。

無名氏　明らかではありません。

二

ソクラテス　それでは、もう一度、こういうふうに考えてみたまえ。われわれが、大きいものと小さいものについて意見が分かれる場合、われわれに裁定を下すのは誰かね。測量家ではないかね。

無名氏　そうです。

B

ソクラテス　では、多いものと少ないものに関する場合は、裁定を下すのはどんな人たちかね。それは計算家ではないかね。

無名氏　たしかにそうです。どうしてそうでないことがありましょう。

ソクラテス　では、われわれが「正しいもの」と「不正なもの」についてたがいに意見が分かれるような場合、われわれはどんな人たちのところに行くだろうか、そして、そのつどわれわれに裁定を下すのはどんな人たちだろうか。言ってくれたまえ。

無名氏　あなたは裁判官のことを言おうとしておられるのですね、ソクラテス。

ソクラテス　君の発見は正しいよ。では、さあ、次の質問にも答えるようつとめてくれたまえ。測量家たちは大小について、何をすることによって裁定を下すのだろうか。測ることによってではないかね。

無名氏　そうです。

ソクラテス　では、軽重についてはどうかね。秤る(1)ことによってではないかね。

無名氏　たしかに、秤ることによってです。

C

ソクラテス　では、多少についてはどうかね。数えることによってではないかね。

無名氏　そうです。

ソクラテス　それでは、正不正についてはどうかね。答えたまえ。

無名氏　わかりません。

ソクラテス　「言論を用いて[2]」と言いたまえ。

無名氏　はい。

ソクラテス　してみると、裁判官が正不正について判定する場合に、われわれに裁定を下すのは言論を用いてだね。

無名氏　そうです。

ソクラテス　また、測量者が小さいものと大きいものについて判定を下すのは、測ることによってである。ものさしは、それによってこれらのものが判定されるものだったのだからね。

無名氏　そうです。

1　測る(μετρεῖν)と秤る(ἱστάναι)とをここでは区別してこのように訳したが、この使い分けは『エウテュプロン』7Cにおいてなされているのに似ている。すなわち、そこでは、より大きいものとより小さいものについて意見が一致しない場合には分量の測定によって、より重いものとより軽いものについて意見が一致しない場合には重量の秤定によって、その不一致を判定するということが述べられている。

2　これは『国家』IX. 582A～Eにおいて、ものごとを立派に判定する基準となるのは経験、思慮、言論(ロゴス)であると述べられ、愛知者はその判定の道具として言論を用いねばならぬと言われているのに符合する。

ソクラテス　さらにまた、秤量者が重いものと軽いものについて、判定を下すのは秤ることによってである。はかりは、それによってこれらのものが判定されるものだったのだからね。

無名氏　ええ、じっさいそうでした。

D

ソクラテス　それからまた、計算をする者が多いものと少ないものについて、判定を下すのは数えることによってである。数は、それによってこれらのものが判定されるものだったからね。(1)

無名氏　そうです。

三

ソクラテス　そして、また、たった今われわれが同意したように、裁判官が「正しいもの」と「不正なもの」についてわれわれに判定を下すのは言論を用いることによってである。言論は、それによってこれらのものが判定されるものだったからね。

無名氏　見事なおっしゃりようです、ソクラテス。

ソクラテス　いや、ほんとうのことなんだよ。そして、どうやら、言論は、「正しいもの」と「不正なもの」がそれによって判定されるものであるらしい。

無名氏　ええ、たしかに、そのように思われます。

ソクラテス　ではそれは、「正しいもの」と「不正なもの」がいったい何であるからなのか。たとえば、誰かがわれわれに次のように尋ねた場合には、すなわち、ものさしや測量術や測量家は大きいものと小さいものを裁定

E

するのだから、それはその大きいものと小さいものが何であってのことか、と誰かが尋ねた場合には、われわれは彼に、より大きいものというのは超過したものであり、より小さいものとは超過されたものだからだ、と言うだろう。また、はかりや秤量術や秤量家は、重いものと軽いものを裁定するのだから、その重いものと軽いものが何であるからなのかと尋ねた場合には、われわれはその人に、天秤において下にさがるのが重いものであり、上へあがるのが軽いものであるからだ、と言うだろう。これとちょうど同じように、もし言論や裁判術や裁判官は正しいものと不正なものをわれわれのために裁定してくれるのだから、それはその「正しいもの」と「不正なもの」がいったい何であるからなのか、とひとがわれわれに尋ねたならば、われわれはその人に何と答えることができるだろうか。それとも、われわれはこれでもまだ答えることができないだろうか。

無名氏 ええ、できません。

374

ソクラテス では、どちらだろう？ 人はこの「不正なもの」を故意に(自分ですき好んで)もつと君は思うかね、それとも不本意ながら(自分では好まないのに)もつのだと思うかね。わたしの言おうとするのはこういう意味だ。彼らは故意に不正を行ない不正な人間であると君は思うかね、それとも不本意ながらそうなのだと思うかね。

無名氏 少なくとも私は、ソクラテス、彼らは故意に不正を行なうのだと思います。というのは、彼らは邪悪

1 『エウテュプロン』7B～C「数えることができるものについて、二つのうちのどちらのほうが多いかということについて、意見が分かれる場合には……計算に訴えて速やかにその意見の不一致を無くする……」、および『カルミデス』166A～B参照。

だからです。

ソクラテス すると、人は故意に、すき好んで邪悪で不正であると君には思われるのだね。

無名氏 少なくとも、私にはそう思われます。しかし、あなたはそう思われませんか。

ソクラテス そうは思わないね。詩人に従わねばならないならばね。

無名氏 どんな詩人にですか。

ソクラテス こんなふうなことを言っている詩人にだ——、
好んで邪悪な者はなく、好まざるに至福なる者もなし(1)

B

無名氏 しかし、ソクラテス、「歌うたいに偽り多し(2)」という昔の諺はなかなか名言ですがね。

四

ソクラテス その歌うたいだが、少なくとも今われわれの問題にしていることで、偽りを言っているかしら。もし君にひまがあるならば、われわれは彼が偽りを言っているか、真実を言っているか彼のことを調べてみようではないか。

無名氏 ええ、ひまですが。

ソクラテス さあでは、正しいのはどちらだと思う？ 偽りを言うことかね、それとも真実を言うことかね。

無名氏 むろん、真実を言うことです。

ソクラテス すると、偽りを言うことは不正だね。

無名氏　そうです。

ソクラテス　また、正しいのは欺くことかね、それとも、欺かないことかね。

無名氏　むろん、欺かないことです。

ソクラテス　すると、欺くことは不正だね。

無名氏　そうです。

ソクラテス　では、どうかね。正しいのは害する（害悪をあたえる）ことかね、それとも、益する（利益をあたえる）ことかね。

無名氏　益することです。[3]

ソクラテス　すると、害することは不正だね。

無名氏　そうです。

ソクラテス　したがって、真実を言うこと、欺かないこと、益することは正しいことであり、逆に偽りを言うこと、欺くこと、害することは不正である。

C

1　この句はアリストテレス『ニコマコス倫理学』第三巻（1113^{b}14）にも引用されている。しかし誰の言葉か知られていない。

2　この句はアリストテレス『形而上学』第一巻（983^{a}3）参照。スイエはソロンやピロコロスに帰している（*Du Juste*, p. 17）。

3　正しいことは益することであるということについては、『メノン』87D～89Aにおいて、徳は善きものであり、善きものは有益である、しかし有益なものは正しく用いられなければ有益とはならない、正しく用いられるのは、知が導く場合であると述べられている。なお次注参照。

無名氏　神かけて、まったくそのとおりです。

五

ソクラテス　はたして、敵に対しても同様だろうか。
無名氏　決してそうではありません。
ソクラテス　むしろ、敵には害をあたえるのが正しいことなのであって、これを益するのは不正なのだね。(1)
無名氏　そうです。
ソクラテス　ではまた、たとえ欺いても、敵を害するのは正しいことではないかね。
無名氏　まったくそうです。
ソクラテス　では、われわれが彼ら(敵)を欺いて害をあたえるために、偽りを言うことはどうかね、これも正しいことではないかね。
D
無名氏　そうです。
ソクラテス　ではどうかね。友を益することは正しいことであると君は主張するのではないか。
無名氏　たしかに主張します。
ソクラテス　友を欺かないでか、それとも、彼らを益するためなら欺いてもか。
無名氏　欺いてもです、ゼウスにかけて。
ソクラテス　しかしそうすると、欺いて益することは正しいが、偽りを言って益することはそうではないのか、

それとも、偽りを言ってもやはり正しいのだろうか。

無名氏 偽りを言っても正しいです。

ソクラテス すると、どうやら、偽りを言うことと真実を言うことは、正しいことでもあり、不正なことでもあるらしい。

無名氏 ええ。

ソクラテス 同じくまた欺かないことと欺くことも、正しいことでもあり、不正なことでもあるらしい。

無名氏 そのようです。

ソクラテス また、害することと益することも、正しいことでもあり、不正なことでもあるようだ。

無名氏 はい。

六

E

ソクラテス すると、どうやら、これらすべてのことはみな同じで、正しいことでもあり、かつ不正なことでもあるらしい。

無名氏 私にはたしかに、そう思われます。

---

1 『国家』I. 332D～336Eでは、正義とは「友には利益をあたえ、敵には害悪をあたえること」という定義をめぐってこの箇所とも相通じるような議論も含めて、詳細な検討がなされている。なおクセノポン『ソクラテスの思い出』第四巻(二の一三以下)参照。

ソクラテス　では聞きたまえ。わたしにも、他の人たちと同じように、右の眼と左の眼があるかね。

無名氏　はい。

ソクラテス　右の鼻孔と左の鼻孔もかね。

無名氏　たしかに。

ソクラテス　また、右手と左手もかね。

無名氏　はい。

ソクラテス　では、君は同じ名前をあてながら、わたしの身体の一方を右、他方を左であると言うのだから、もしわたしが、君にこれはどちらで、これはどちらかと尋ねるならば、君は、こちら側にあるものが右で、こちら側にあるものが左にあるものだ、と言うことができるだろうか。

無名氏　はい。

ソクラテス　では、さあ、先の場合も、同じものを名づけて、一方は正しいことであり他方は不正なことであると言うのだから、君は、どちらが正しく、どちらが不正であるか言うことができるね。

375

無名氏　それなら、私の考えでは、それらのことのひとつひとつが、しかるべき、時宜にかなったときに為されるならばそれが正しく、他方、しかるべきときでないときに為されるならば不正です。

ソクラテス　君の考えはなかなか結構だ。すると、それらのことのひとつひとつをしかるべきときに為す人は正しいことを為し、しかるべきときに為さない人は不正なことを為すのかね。

無名氏　そうです。

ソクラテス　したがって、正しいことを為す人は正しく、不正なことを為す人は不正ではないかね。

無名氏　そうです。

七

ソクラテス　それでは、しかるべき、時宜にかなったときに、切ったり、焼いたり、瘠せ衰えさせたりすることができるのは誰だろうか。

無名氏　それは医者です。(1)

ソクラテス　それは彼が知っているからなのか、それとも、何か他の理由によるのかね。

B

無名氏　知っているからです。

ソクラテス　しかるべきときに、鋤いたり、蒔いたり、植えたりすることができるのは誰だろうか。

無名氏　それは農夫です。

ソクラテス　それは彼が知っているからなのか、それとも、そうでないからなのか。

無名氏　知っているからです。

ソクラテス　それでは、他のこともまた同様ではないかね。知っている人は、しかるべき、時宜にかなったと

1　『ゴルギアス』521E～522Aに類例がある。それによれば、医者は切ったり焼いたり、にがい薬を飲ませたり断食させたり喉を渇かせたりして瘠せさせ苦しいまでに喉をしめつける、と述べ、そしてそれは健康のためになされることであると言われている。

きに、しかるべきことを為すことができるが、知らない人はできないのでは？

C

無名氏　そのとおりです。

ソクラテス　すると、また、偽りを言い、欺き、益することも、知っている人は、しかるべき、時宜にかなったときに、それらいちいちのことを為すことができるが、知らない人はできないのではないか。(1)

無名氏　おっしゃるとおりです。

ソクラテス　また、しかるべきときにこれらのことを為す人は正しい人ではないかね。

無名氏　そうです。

ソクラテス　しかるに、彼がこれらのことを為すのは知識によってである。

無名氏　まったくそうです。

ソクラテス　したがって正しい人は、知識によって正しくあるのである。

無名氏　そうです。

ソクラテス　では、不正な人が不正なのは、正しい人がそうあるのとは反対のものによるのではないかね。

無名氏　そのようにみえます。

ソクラテス　しかるに、正しい人は知恵によって正しくある。

無名氏　そうです。

八

ソクラテス　そうすると、不正な人は無知によって不正なのだ。

無名氏　そのようです。

ソクラテス　したがって、おそらく、先人たちがわれわれに知恵としてのこしてくれたものが正しさであり、無知としてのこしたものが不正であろう。(2)

D

無名氏　そのようです。

ソクラテス　ところで、人間が無知であるのは故意に(すき好んで)かね、それとも、不本意ながら(心ならずも)かね。

無名氏　不本意ながらです。(3)

1　『アルキビアデスⅡ』145A～B参照。ここでは、人が何事にせよ行なおうとする場合、その行為そのものだけでなく、どちらがより善いか、いつがより善いかということを知っている人を思慮ある人と呼ぶことができると言っている。また、『プロタゴラス』356D～357Eにおいては、正しい選択をするのは技術と知識であること、知識より強いものはないこと、誤った行為は知識なしに、無知によって行なわれるものであることが述べられている。

2　知恵と正しさ、無知と不正の結びつきに関しては、『国家』Ⅰ.350Cの「正しい人は知恵があるすぐれた人に似ており、不正な人は邪悪で無知な人に似ている」という記述、およびクセノポン『ソクラテスの思い出』第三巻(九の五)参照。

3　『ソピステス』228C～230Aにおいて、魂は、無知であるとすれば、心ならずも無知なのであると言われ、『国家』Ⅳ.413Aには、ひとが善いものを奪われるのはその意志に反して心ならずも奪われるのであるが、悪いものを奪われるのは自分の意志によって自らすすんでであること、さらに、同Ⅱ.382A～Bにおいて、神も人ももともとは偽るということき不徳のことは欲しないのであって、故意に自ら進んで偽ることはない、偽りは魂の無知からくると言わねばならぬと述べられている。

ソクラテス　すると、不正であるのもまた不本意ながらではないか。
無名氏　そのようにみえます。
ソクラテス　ところで、不正な人たちは邪悪だね。
無名氏　そうです。
ソクラテス　すると、その人たちは不本意ながら邪悪で不正なのかね。
無名氏　まったくそうです。
ソクラテス　また、彼らが不正を為すのは、不正であるためかね。
無名氏　そうです。
ソクラテス　してみると、それは不本意ながら(意志に反して)あることのためなのだね。
無名氏　まったくそうです。
ソクラテス　しかし、決して、不本意ながらあることからは故意に(意識的に)することは生じないのではないか。
無名氏　ええ、決して生ずることはありません。
ソクラテス　ところが、不正であることから不正行為は生ずるのだ。
無名氏　そうです。
ソクラテス　しかるに、不正であることは不本意なことである。
無名氏　不本意なことです。

ソクラテス　したがって、そういう人たちが不正を為し、不正な人間であり、邪悪であるのは、不本意ながらなのだ。(1)

無名氏　どうやら、不本意ながらであるようです。

ソクラテス　それゆえに、歌うたいはこの点では偽りを言ったのではなかったのだ。

無名氏　そのように思われます。

1　『法律』IX. 860Dに不正なる者は邪悪であるが、邪悪な人は不本意ながら悪くあると言われている。

徳について

副島民雄訳

登場人物

ソクラテス
ヒッポトロポス（あるいは友人）

一

ソクラテス　「徳」は、はたして教えられうるものだろうか、それとも、それは教えられえないものであって、むしろ、すぐれた(善き)人たちというものは、生まれつきの素質あるいは他の何らかの仕方によってそうなるものなのだろうか。(1)

B

ヒッポトロポス　いますぐには私には答えられません、ソクラテス。

ソクラテス　よし、では、それをこういうふうに考察してみようではないか。さあ、もし誰かが、堪能な(賢い)料理人がそれのゆえにすぐれているところの、その優秀さ(徳)においてすぐれた者になろうと欲するならば、どのようにして彼はそうなりうるだろうか。

ヒッポトロポス　むろん、すぐれた料理人から学ぶならば、です。

ソクラテス　では、どうかね。もし人がすぐれた医者になろうと欲するならば、誰のもとに行ったならば、彼はすぐれた医者になれるだろうか。

ヒッポトロポス　むろん、誰かすぐれた医者のもとに行くならば、です。

ソクラテス　ではまた、もし堪能な大工がそれのゆえにこそすぐれているところの、その優秀さにおいてすぐれた者になりたいと欲するならば？

C

ヒッポトロポス　大工から学ぶならば。

ソクラテス　それでは、もし人が、すぐれた、知恵のある人たちがそれのゆえにすぐれているところの、その徳(優秀性)においてすぐれた者になりたいと欲するならば、どこに行って学ぶべきだろうか。

ヒッポトロポス　思うに、その徳もまた、いやしくもそれが学びうるものなら、人間としてすぐれた人々から学ばねばなりません。それ以外のどこから学ぶことができるでしょうか。

ソクラテス　ではさあ聞くが、人間としてすぐれた人々というのは、われわれの国ではどういう人々だったのだろうか、すぐれた者を作り出す人たちがそれであるかどうかを考察してみるためにね。

ヒッポトロポス　それはトゥキュディデスにテミストクレスにアリステイデスにペリクレスです。(2)

D

ソクラテス　それなら、われわれはこの人たちの一人一人に教えた教師の名をあげることができるかね。

ヒッポトロポス　できません。その名を耳にしませんからね。

1　この箇所は『メノン』70Aの省略した言いかえで、冒頭から本篇と『メノン』との近似性の著しさが認められる。

2　トゥキュディデス(前五〇五年頃の生まれ)はアテナイの有名な政治家。貴族派の首領としてペリクレスの政敵であった。同名の歴史家とは別人。彼を含めて以下の三人は『メノン』93B sqq. にも言及されている。

テミストクレス(前五二八頃—四六二年頃)はアテナイの有名な政治家。『ゴルギアス』455E, 516Dの注参照。

アリステイデス(前五二〇—四六八年)はアテナイの有名な政治家で、将軍。民主派のテミストクレスと敵対する間柄にあった。『ゴルギアス』526B、『メノン』94Aの注参照。

ペリクレス(前四九四頃—四二九年)はペリクレス時代(前四六一—四二九年)と呼ばれるアテナイの黄金時代を現出させた政治家。

ソクラテス　では、どうかね。これらの人たちの弟子の名はあげられるかね？　外国人のうちのひとりであれ市民のひとりであれ、またその他、自由民であれ奴隷であれ、ともかく、彼らに師事したおかげで、知恵があり、すぐれた人物となったと噂されるような人なら誰でもよいのだが。(1)

二

ヒッポトロポス　それも、聞いていません。

ソクラテス　しかし、すると、彼らは他の人たちに徳を分かち与えることを、こころよく思わなかったのではないだろうか。

ヒッポトロポス　きっとそうでしょう。

ソクラテス　それは料理人や医者や大工がこころよく思わず物惜しみするのと同じように、自分たちに張り合う者たちが生じないようにかね。というのは、この人たちには、競争相手がたくさん現われることも、自分たちに似た多くの者たちの間に住むことも、得のいくことではないからね。すると、そういうふうに、すぐれた人たちにとっても、自分たちと似た者たちの間に住むことは得にならないのかね。(2)

ヒッポトロポス　たぶんそうでしょう。

ソクラテス　ところで、同じ人がすぐれた人間であると同時に、正しい人間なのではないかね。

ヒッポトロポス　そうです。

ソクラテス　そうすると、すぐれた(善き)人たちのなかにではなくて、悪しき(劣った)人たちのなかに住むこ

377

とが得になるようなひとが誰かあるだろうか。

ヒッポトロポス 私には答えられません。

ソクラテス それでは、君はこういうことも答えることができないかね。害することはすぐれた人たちのなすべきことであり、益することは悪しき人たちのなすべきことなのかね、それともその反対かね。

ヒッポトロポス その反対です。

ソクラテス そうすると、すぐれた人々は益し、悪しき人々は害するのだね。

ヒッポトロポス そうです。

ソクラテス それでは、益を与えられるよりも、むしろ、害悪を与えられることを欲する者があるだろうか。

ヒッポトロポス けっしてありません。

三

ソクラテス したがって、誰一人として、すぐれた人々の間に住むよりも、邪悪な人々の間に住むことを欲する者はいないのだ。(3)

ヒッポトロポス そのとおりです。

1 『アルキビアデス I』119A に似かよった記述がある。
2 ヘシオドス『仕事と日々』二五行、「陶工は陶工に、大工は大工に反感をもち、乞食は乞食を、歌うたいは歌うたいをねたむ」参照。
3 『ソクラテスの弁明』25C～D 参照。

ソクラテス　したがって、すぐれた人たちのうちには誰一人として、他の者をねたんでこころよからず思い、すぐれた人間、自分と同じような人間にしようとしない者はないのだ。

ヒッポトロポス　たしかにこれまでの議論からすると、そう思われます。

ソクラテス　さて、テミストクレスにはクレオパントス(1)という息子があったということを君は聞いたことがあるかね。

B

ヒッポトロポス　聞いたことがあります。

ソクラテス　では、テミストクレスが、息子ができるだけすぐれた人間となるのをこころよからず思うというようなことはなかったことは明らかではないかね。いやしくも彼がすぐれた人物であったならば、何ぴとたりとも他人をねたんでこころよからず思うというようなことはなかったはずだからね。しかるに、われわれが認めるように、彼はじっさいにすぐれた人間だったのだ。

ヒッポトロポス　そうです。

ソクラテス　さて、君も知っているとおり、テミストクレスは息子に、練達の(知恵のある)、すぐれた騎士になるような教育をしたのだ、——じっさい、クレオパントスは馬上で真直ぐに立ったままの姿勢をとりつづけたり、馬上から直立したまま槍を投げたり、そのほかにもいろいろ驚歎すべきことをやってのけたのだからね——、また、テミストクレスはほかにもたくさんすぐれた教師から習えるかぎりのことはみな教えて、息子をその道の練達の者にしたのだ。それとも、これらのことを君は年長の人たちから聞いたことがないかね。

ヒッポトロポス　聞いたことがあります。

四

C

ソクラテス　してみると、テミストクレスの息子の生まれつきの素質がすくなくともすぐれていないとは言えないわけだ。

ヒッポトロポス　たしかにあなたが言われることからすると、それは正しいことではないでしょうからね。

ソクラテス　では、次の点はどうかね。テミストクレスの息子のクレオパントスは、彼の父親が知恵があったのと同じ事柄において、すぐれた、知恵のある人間であったということを、君は若い人からでも年長の人からでもいままでに聞いたことがあるかね。

ヒッポトロポス　聞いたことがありません。

ソクラテス　するとはたして、彼は自分の息子に先のことでは教育を受けさせることを欲していたのに、自分

D

が賢くあったまさにその知恵にかけて、息子を、隣人たちよりも少しでもすぐれた人間にすることは欲しなかったと考えられるだろうか、――いやしくも徳が教えられうるものであったならば。

ヒッポトロポス　いいえ、けっしてそんなことは考えられそうもありません。

ソクラテス　かくて、君が挙げた人物は徳の教師としては、かくのごときていたらくなのだ。しかし、もう一人、別の人物を考察してみよう。アリステイデスのことだ。彼はリュシマコスを育て、教師から習えるかぎりの

1　クレオパントスについての以下の記述は『メノン』93Dにおけるものとほぼ完全に同じである。

ことでは、アテナイ人中最上の教育を受けさせたが、しかし人間として他の誰よりもすぐれた者にはしなかった。(1)というのも、リュシマコスのことは君もわたしも知っており、つき合いもあるわけだからね。

ヒッポトロポス　はい。

五

ソクラテス　なおまた、ペリクレスがパラロスとクサンティッポス(2)の二人の息子を育てたことを知っているね、E ――あまつさえ、このうちの一人を、ぼくのにらんだところ、君は恋していたことだしね。これらの息子たちをたしかに、君も知っているように、ペリクレスは、アテナイ人のうちの誰にも劣らぬ騎士になるように教育し、また、音楽や他に体育競技や、それから、その他技術によって教えられうるかぎりのことは教えて、何びとにも劣らぬ者にしたのだ。それなのに、ペリクレスは彼らを人間としてすぐれた者にすることは欲しなかったのだろうか。

ヒッポトロポス　いや、たぶん彼らはすぐれた者になったでしょうよ、ソクラテス、もし彼らが若死しなかったならばね。

ソクラテス　君が、君の想いを寄せる人たちの肩をもつのも無理はあるまい。しかしペリクレスは、もしも徳が教えられうるものなら、そして彼が息子たちをすぐれた人間にすることができたならば、音楽や体育競技におけるよりもずっと以前に、自分自身が卓越している徳の点で彼らを練達の者たらしめたであろうに。だが、それ 378 は教えられえないものなのではないだろうか。というのは、トゥキュディデスの場合も二人の息子、メレシアス

とステパノス(3)を育てたわけだが、彼らのためには君は、ペリクレスの息子たちのために弁じたのと同じことを、言うことはできないだろうからね。なにしろ君も知っているとおり、彼らのうちの一人は老年まで生きたし、他の一人もずいぶん長生きだったからね。それからまた、この父親は二人の息子にほかにもいろいろ立派な教育を与えたが、とりわけ彼らをアテナイ指折りの相撲の名手にしたのだ。というのは、彼は前者をクサンティアスに、後者をエウドロスにゆだねたわけだが、これらの人たちは、当時並ぶ者のない相撲の名手、という評判だったからね。

ヒッポトロポス　そうです。

六

B **ソクラテス**　すると、明らかに、もしも徳が教えられうるものならば、トゥキュディデスは、出費をして教えねばならなかったことは自分の子どもたちに教育したのに、すぐれた人間にするのに何らの支出も要しなかった

1　リュシマコスについての記述も『メノン』94Aとほぼまったく同じ。なお彼は『ラケス』の登場人物の一人。

2　この箇所も細部のエピソード的記述を除いて『メノン』94Bに同じ。なおこの二人については、『プロタゴラス』315Aにもその名があげられていて、同篇319E～320Aには、ペリクレスは彼が教師を見出すことのできる事柄については、その子に最上の教育を施したが、自らの賢であるものについては自ら教えもせず、他の人に委ねることもしなかったと述べられている。なお、二人とも父に先立って疫病のために死んだと伝えられている。なお、『アルキビアデスI』118E参照。

3　この二人に関する以下の記述も『メノン』94C～Eに同じ。メレシアスは『ラケス』の登場人物。

ようなことは、まったく教えなかったはずはないのではないだろうか。

ヒッポトロポス とうぜん教えたでしょう。

ソクラテス いや、おそらく、トゥキュディデスは、賤しい身分の人だったのだろうか、そして、彼には、アテナイ人たちの間にも同盟国の人たちの間にも友人があまりいなかったのだろうか[1]？ いやそんなことはない、彼は大家の出であり、この国(アテナイ)においても他のギリシア諸国においても大きな勢力をもっていたのだ。

C

だから、いやしくもそれが教えられうるものであったならば、彼は自分の息子たちをすぐれた人間にしてくれるはずの者を、同国人たちのなかからであろうと外国人たちのなかからであろうと、発見しえたはずである、――もし彼自身が国事の顧慮に忙しくて、そのひまがなかったというのならばね。だが、じつのところ、友よ、徳は教えられえないものなのではないだろうか。

ヒッポトロポス 教えられえないようです、たぶん。

ソクラテス しかし、もしそれが教えられえないものなら、はたしてすぐれた人物は生まれつきすぐれているのだろうか。それは、何かこんなふうな仕方で考察すれば、たぶん見つかるだろうよ。さあ、いいかね、すぐれた馬の生まれつきの素質というものがあるだろうか。

ヒッポトロポス あります。

七

D

ソクラテス では、すぐれた馬の生まれつき、すなわち身体の面では速く走ること、魂(精神)の面ではどの馬

が気概があり、どの馬が気概がないかを識別する技術をわきまえている人たちというものがあるのではないかね。

ヒッポトロポス　はい。

ソクラテス　それでは、その技術は何かね。そしてその名は？

ヒッポトロポス　馬術です。

ソクラテス　では犬についても同様にして、犬のすぐれた(善き)生まれつきと悪しき(劣った)生まれつきとを、それによって判別する技術が何かあるのではないかね。

ヒッポトロポス　あります。

ソクラテス　それは何かね。

ヒッポトロポス　狩猟術です。

ソクラテス　それにまた、われわれのところには金や銀についての鑑識者というものがいて、彼らは目で見て、その善し悪し(優劣)を判定するのではないかね。

E

ヒッポトロポス　はい。

ソクラテス　では、そういう人たちを何と呼ぶかね。

ヒッポトロポス　銀鑑定人と呼びます。

ソクラテス　さらにまた、体育教師は、人間の身体の生まれつきを調べてみて、そのどんなのがそれぞれの作

1　ヘルマンに従って、この文は疑問文に読む。

業に対して有用であり、どんなのが有用でないか、また、老若の身体のうちでは言うに値するものとなりうるはずのものはどれどれで、身体に関係するかぎりのいろいろの仕事を立派に為しとげる見込みがあるのはどれどれかを識別するのだ。

ヒッポトロポス そのとおりです。

八

ソクラテス ところで、国々にとって大切なのは、すぐれた馬や犬やその他その種のものだろうか、それとも、すぐれた人間だろうか。

ヒッポトロポス すぐれた人間です。

ソクラテス それではどうかね？ もしも徳に対しての人間のすぐれた生まれつきの素質というものがあったとしたならば、人間はその生まれつきを正確に判別するために、あらゆる工夫をこらしたことだろうと君は思わないかね。

ヒッポトロポス とうぜんそうしたでしょう。

ソクラテス さて、君は、すぐれた人間の生まれつきについて明示して、それを判定することができるような、そういう技術を何かあげることができるかね。

ヒッポトロポス できません。

ソクラテス しかし、そういう技術は最高の価値があることだろうよ、それにその技術を持っている人たちも

B ね。なぜなら、そういう人たちは、若者たちのうち将来すぐれた人間となる見込みのある者たちを、まだ子どものうちにわれわれに指し示し、われわれは彼らを引き取って、国家の名においてアクロポリスのなかに、銀貨同様に、いや、それ以上に、大事に保管し警護していたことだろう、——戦いにおいてもその他のどんな危険においても、彼らがわれわれのところの何か悪い目に会わないように、そして、成年に達したあかつきには、国の守護者となり恩恵者となってくれるように収蔵するためにね。[1] だが、しかし、おそらく徳が人間にそなわるのは生まれつきによるのでも学習によるのでもないのかもしれない。

ヒッポトロポス ならば、ソクラテス、もし徳は生まれつきによるのでも学習によるのでもないとすれば、ど

C のようにして生じうるとあなたには思われますか。すぐれた人たちというのは他のどんな仕方で生ずることができるのでしょうか。

九

ソクラテス それを明らかにするのは容易なことではないと思う。が、しかし、徳の所有はとりわけ何か神の恵みによるものであって、すぐれた人間は、予言者のうちで神のような人たちや神託を告げる人たちと同じように生ずるのだという見当はつく。つまり、これらの人たちがこのような者となるのは、生まれつきの素質によるのでも技術によるのでもなくて、神慮によってこのような者となっているのである。すぐれた人たちもまた同じ

1 『メノン』89B参照。

ように、起りそうなことや来るべきことどもを国々に対して常に、神託を伝える人たちよりもはるかに多く、かつ明瞭に、神慮によって語るのである。また、女たちもたしか、「この人は神さまのような人である」というような言い方をするね。それに、ラケダイモン(スパルタ)人たちも、人を絶賛するとき、「神のような人である」と言う。同じく、ホメロスもまた、いたるところでこの同じ表現を用いているし、他の詩人たちにしてもそうだ。

D そしてまた、神にしても国が繁栄する(うまくいく、幸福である)ことを欲するときは、すぐれた人たちを導き入れるが、国が衰退(悪くいく、不幸である)せんとするときには、神はすぐれた人たちをその国から放逐される。かくて、徳は教えられうるものでも生まれつきによるものでもなくて、神のみ恵みによってそれを所有する人たちにそなわるもののようだ。(1)

1 『メノン』99C～D参照。

デモドコス

——助言について——

副島民雄訳

登場人物

デモドコス

私

380

君は、デモドコス、君たちが審議するために集まった問題について、君たちに助言するようにわたしに命じている。しかしわたしとしては、君たちの集まりと、君たちに助言を与えようと思っている人たちの熱意と、君たちがめいめいに行なおうと考えている投票とは、いったいどんな効用があるのか、考察してみたいという気がする。

一

B なぜなら、もし君たちが審議するために集まった問題について、正しくかつ経験にもとづいた助言をすることができないならば、正しい助言をすることができない問題について審議するために集まることは、どうしておかしくないだろうか。しかし逆に、もしそのような問題について、正しくかつ経験にもとづいた助言を与えることはできるが、それをよりどころにして、そうした問題について、正しくかつ経験にもとづいた助言をすることのできるような知識がまったくないとするならば、それ(そういう問題の審議のために集まること)はどうして理不尽でないことがあろうか。だが、もしそれをよりどころにして、そうした問題に正しい助言をすることができるような何らかの知識があるならば、そのような問題について正しい助言をすることができる知識をもった人たちがまたいることも必然ではないか。また、君たちが審議するために集まった問題について助言することのできる

C 知識をもった人たちがいるならば、必然的に君たちもまたそれらについて助言することのできる知識をもっているか、もっていないか、あるいは、君たちのうちの或る者はそういう知識をもっているが、或る者はもっていな

いかでなければならないのではないか。ところで、もし君たち全部がその知識をもっているならば、どうしてなお君たちは審議するために集まる必要があるのか。というのは、君たちは各々十分に助言することができるからである。が、逆にもし君たち全部がその知識をもっていないならば、君たちはどうして審議することができようか。また、審議することができないならば、そういう集会が君たちにとって何の役に立つだろうか。最後に、D もし君たちのうちにはその知識をもっている者と、いない者とがあって、その後者の者たちが助言を必要とするのならば、知識のある人が無知無経験な人たちに助言することが可能な場合には、明らかに、君たちその知識のない者たちに[1]一人〔の知識のある人〕が助言をすればそれで十分であろう――それとも、知識ある人たちはみな同じ助言をしないだろうか――、したがって、君たちはこの人の言うことを聞いて、散会すれば適切なわけだ。ところが、今、君たちはそうはしないで、多くの者たちから助言を聞くことを望んでいる。それは、君たちに助言しようと試みる人たちは、彼らが助言する事柄について知っていると君たちは考えてはいないからである。なぜなら、もし君たちが、君たちに助言する人たちは、それを知っていると考えているならば、ただ一人のひとから聞けば、それで君たちには満足なはずだからだ。381 したがって、知らない人たちから、あたかも彼らが何か役に立つことをしてくれるかのように考えて、彼らから聞くために集まることが、どうして理不尽でないだろうか。そして、君たちの集会について、わたしが困難を感ずるのも、まさにこの点なのだ。

---

1 この箇所の読みはスイエに従い、οὐκ を補って、「君たちその知識のない者たちに」(τοῖς οὐκ ἐπισταμένοις ὑμῖν) と読む。

二

B　また、君たちに助言をしようと思っている人たちの熱意については、困難を感ずるのは次の点だ。すなわち、一方、もし彼らが、同じ事柄について助言しながら、同じ助言をしないならば、どうしてみんなが立派に助言すると言えよう、正しい助言者が助言することを彼らは助言しないのだから。あるいはまた、経験知識のないものごとについて助言しようと懸命になっている人たちのその熱意は、どうして理不尽でないことがあろう。というのは、むろん、経験知識があったら、正しくない助言をわざわざ選びはしないだろうから。他方また、もし彼らが同じ助言をするならば、どうして彼らがみながみな助言をする必要があろう。同じ助言をするとすれば、彼らのうちの一人で十分なはずだからだ。だから、このような何の役にも立ちえないことに熱意をもつことが、どうしておかしくないだろうか。したがって、無知無経験な人たちの熱意も、それがそのようなものであるからには、

C　理不尽でないはずはないだろうし、また、知識のある人たちがこのようなことに熱意をもつはずもないだろう、というのは、彼らは自分たちのうちの誰か一人が適切な助言をすれば、同じ効果があるだろうということを知っているからである。したがって、君たちに助言をしようと思っている人たちの熱意がどうしておかしくないだろうか。このところがわれわれにはわからないのだ。

三

最後に、君たちが行なおうと考えている投票について、それにどういう効用があるのか、この点にわたしはい

382

ちばん困難を感じるのだ。〔投票によって〕君たちは助言のできる人たちを判定するつもりなのか。しかし、大勢のほうが一人以上に助言することはないだろうし、また同じ問題について各人各様の助言が聞けるというわけのものでもないだろう。したがって、その点について君たちは投票をする必要はないはずだ。すると、無知無経験で、なすべからざる助言をする人たちを判定しようというのか。いや、そんな人間には、気違い同然、助言をゆだねないのが適切ではないか。しかし、もし経験知識のある者たちも無知無経験な者たちも君たちは判定しないのだとすれば、どういう人たちを判定するのか。いや、そういう問題を君たちが十分に判定することができるのなら、そもそも、はじめから、なにゆえに、他の人たちが君たちに助言をしなければならないのか。逆にまた、

D

十分に判定することができないならば、君たちの投票にどんな効用があるのか。あるいは、君たちは助言を必要とし、自分ではそうするだけの能力がないと考えて、助言を仰ぐために集まりながら、集まると、十分に判定を行ないうる者であるかのように、投票すべきだと思うとしたら、どうしておかしくないだろうか。というのも、君たちは、一人一人だと無知だが、集まると賢くなるというようなことはないのだから。それにまた、君たちは一人一人の場合は途方にくれるが、いっしょに集まると、もはや途方にくれることはなくて、君たちはどのようなことを為すべきか十分にわかるようになる、しかもそれを誰から学んだのでもなく、また自分で発見したのでもないのに、などということもありえないのだ。これは何よりも不可解なことである。じっさいもし何を為すべきかがよくわからないならば、君たちは、そのことについて君たちに正しい助言を与えてくれる人を、十分に判定しうる者とはなりえないからだ。そしてまた、君たちに助言を与えてくれる、ただ一人であるその助言者も、君たちの為すべきことを君たちに教えてやるとも、また君たちに間違った助言を与える者たちとそうでない者た

E

ちとを、そんなに短時間のうちに、そんなに大勢ではあっても、君たちが判定できるようにしてやるとも、言わないだろう。これは、明らかに、先の場合に劣らず不可解なことであろう。

四

しかし、もし集会も君たちに助言を与える人も、君たちを十分に判定しうる者たらしめないとするならば、君たちにとって投票の効用とは何なのか(君たちの投票は何の役に立つのか)。あるいは、君たちの集会は投票と、また投票は君たちに助言する人たちの熱意と、どうして矛盾しないのか。なぜなら、君たちの集会は、君たちが自分たちだけでは十分ではなくて助言者を必要とする者として、行なうものであり、投票のほうは、君たちは助言者を必要とせず、判定し助言することができる者として行なうものだからである。また、君たちに助言する人たちの熱意は、知識のある者としての熱意であり、君たちによる投票は、君たちに助言する人たちは無知であるとみなして行なわれるものなのだ。さらにまた、もし誰かが、君たち投票した人たちに対して、あるいはまた、君たちが投票に訴えた問題について君たちに助言した人に対して、「君たちが投票にかけた事柄を、そのためにしようと考えているその目的は何なのか、君たちは知っているのか」と、尋ねるならば、君たちはそれを言うことはできないだろうとわたしは思う。では、また、どうかね。もし彼が「君たちがそういう事柄をそのためにしようと考えているその目的がもし成就するならば、それは君たちにどんな役に立つのか知っているのか」と、尋ねるなら、君たちも、君たちに助言する人も、これに対しても答えられないだろうとわたしは思う。「また、いかなる人間が、こういう事柄について何ごとかを知っていると君たちは考えるのか」と、もし誰かがさらにこういう

D 質問をするとしても、君たちはこれにもまた応じられないだろうと思う。かくて、君たちが助言する事柄が君たちにとって明確でないような事柄である場合、そしてまた、投票する人たちも助言する人たちもそれについて無知無経験な場合に、君たちがまたこんなふうに言うのもとうぜんだろう、——助言がなされる事柄についても、投票が行なわれる事柄についても、不信と後悔に見舞われることがしばしばだ、と。しかし、すぐれた人たちに、そのようなことが起こるのはふさわしいことではない。なぜなら、彼らは、自分たちが助言する事柄についても、それがどのようなことであるか知っているし、また、彼らの助言に従う人たちには、彼らが何のために助言を行

E なうかという目的が確固としてあるのだということも、彼ら自身にも彼らの助言に従う人たちにも決して後悔があるはずがないということも知っているからである。かくて、このような事柄についてこそ、分別のある人ならば助言するのがとうぜんであると、わたしとしては思うのであって、君がわたしに助言するよう命じているような問題に関してではないのだ。前者の場合の助言は成功するが、後者の場合の饒舌は失敗に終るからだ。(1)

1 集会の場合の助言について、『プロタゴラス』319B〜Cでは、議会で助言を求める場合には、建築については建築家、造船については造船家というふうに専門家を求めると言われ、また『ゴルギアス』455B〜Cでは、国が集会を開いて国務のための医者や造船工を選考しようとする場合には、建築には建築家を、軍事には将軍をといったようにその道の専門家がその審議にあずかると述べられている。本篇でも真の助言者として、多数の人ではなく、一人の専門家が有用であることを認めているが、しかしそのような専門家がはたしてあるかどうか、あってもそれを見出す者があるかどうか、ということについては懐疑的であり、また論は終始仮定の上に立って行なわれている。これが、『プロタゴラス』や『ゴルギアス』のようなプラトンの真作における場合と本篇の場合との違いであるとみることができる。

五

わたしは或る人〔**A**〕が、自分の友人〔**B**〕を諌めているところに居合わせた。その言うところによると、彼〔**B**〕は、弁明する者の言い分には耳をかさないで、告訴する者の言うところだけ聞いて、その告訴するほうの者を信じたからだ、というのだ。その人〔**A**〕は言うのだった——、

383 「君〔**B**〕は自分がその場に居合わせたわけでもなく、[1] また、その場に居合わせた友人たちの証言を——君が彼らの証言を聞いて、それを信じてもとうぜんであったはずなのに——聞くこともせずに、その人をなじるとは、まったくひどいことをしているのだ。それにまた、双方の側から聞くことなしに、そのようにはやまって告訴する者を君は信じたのだ。しかし、ほめるにせよ非難するにせよ、ともかくその前に、告訴する者から聞くと同じように、弁明する側からも聞くのが正しいことである。というのは、対立する立場の双方の者から聞かずに、どB うしてひとは、正しい裁判をしたり、人々に適切な判決を下したりすることができようか。紫貝や黄金の場合と同じように、双方の申し立てを比較することによってよりよく判定することができるだろうからだ。あるいはまた、もし立法者が、そうするほうが裁判が裁判官たちによってより正しい、よりよい判決が下されると考えないなら、何のために時間[2]が対立する双方の者に与えられたり、裁判官は双方に平等に耳を傾けることを誓ったりするのだろうか。だが、君ときたら、あの、よく聞く文句も聞いたことがないようにわたしには思われる」と。

「いったいどんな**?**」と友人〔**B**〕は尋ねた。

C 「『双方の話を聞かざるうちは、なんじ裁きを裁くなかれ』というのだ。とはいえ、もしここに言われているこ

とが名言でなく、また適切な言葉でもなかったならば、これがこんなに人口に膾炙することはなかったであろうに。そこで、君に」と彼〔A〕は言った、「今後はこのようにはやまって人々を非難したりほめたりしないように助言しよう」と。

六

そこで友人〔B〕は言った――、

「わたしには奇妙なことに思える、もし万一、一人が話す場合には、真実を言っているのか偽りを言っているのか知ることはできないが、二人が話す場合には知ることができるとしたら……。また、もし、〔二人の〕真実を語る人から事の真相を教わることは不可能だが、この人と同時にもう一人別の、偽りを言う人から聞くなら、同D じこと（真相）を学ぶことができるとしたら……。さらにまた、もし一人では、正しくてほんとうのことを言っても、自分の言わんとするところを明らかにすることはできないが、二人なら、そのうちの一人が偽りを言って、正しいことを言わなくても、正しいことを言う人が明らかになしえなかったことを明らかにすることができるとしたら……」

1　その場にいて、目撃する経験の尊重については、『テアイテトス』201Bで、目撃者でないと真相を裁判官に伝えることはできないと言われ、『国家』II. 368Bでは、言葉からだけでは信用ができないと言われている。

2　口頭弁論の時間は水時計によって定められるので、時間内は弁論は続けられることになっている。『テアイテトス』201B参照。

彼〔**B**〕はつづけた、「そしてまさにその点にまたわたしは困難を感ずるのだ、――いったいどのようにして彼らが明らかにするのか、という点にね。というのは、黙っているか話すかのどちらかによるのではないのか。もし彼らが黙っていて明らかにするのならば、双方からは、言うに及ばず、どちらからも聞く必要はないだろう。またもし双方が話すことによって明らかにするのならば、ただし双方がいかなる仕方でもいっしょに発言しないとするならば、――というのは、めいめいが順番に言うのがとうぜんだから――、いかにして双方が同時に明らかにすることができようか。なぜなら、もし双方が同時に明らかにするとすれば、その場合にはまた同時に発言することになるだろうからである。しかし、これは許されないことである。[1] したがって残るところは、いやしくも彼らが話すことによって明らかにするとするならば、めいめいが話すことによって明らかにするということである。そして、めいめいが話すときには、両者それぞれにまた明らかにすることになるだろう。したがって、一方が先に言い、他方があとから言うだろう。そして一方が先に明らかにし、他方があとから明らかにするだろう。しかし、もしめいめいが同じことを順番に明らかにするのならば、どうしてあとから言う者の言うことをも、なお聞かねばならないのだろうか。なぜなら、先に発言した者の話から、すでに、明らかなはずだから」と。

彼〔**B**〕はさらに言った、「しかしもしそれを双方が明らかにするとするならば、どうして二人のうちの一方もまた明らかにしないだろうか。というのは、彼らの一方が明らかにしないとすれば、彼らが双方とも明らかにするなどということがいかにして可能であろうか。[2] しかしまた、もしそれぞれが明らかにするとするならば、むろん先に言うほうがまた先に明らかにするはずである。すると、その者からのみ聞いて、どうして知ることができないのか」と。

わたしとしては彼らの話を聞いていて、すっかり途方にくれてしまい、判定することができなかった。他のその場にいた者たちは最初の者の言うことがほんとうだと主張した。そこで、もしこの問題について君（デモドコス）がわたしのために力を貸して何か言ってくれることができるならば、どちらだろう、一人の話だけ聞いて、彼が何を言っているか〔その真相〕を知ることができるのだろうか、それとも、もし人がその人が真実を言っているかどうかを知ろうと思うならば、反対のことを言う者をさらに必要とするのだろうか。それとも、かならず双方から聞かねばならぬという必然性はないのだろうか。君はどう考えるかね。

B

七

最近、或る人〔**A**〕が、或る人〔**B**〕を、自分に銀貨を貸してくれようとも、信用しようともしなかったといって非難していた。そして非難をうけたほうの者も弁明していた。ところが、その場に居合わせたいま一人の人〔**C**〕が、非難している人間〔**A**〕に、「君を信用もせず金（かね）も貸さなかった者〔**B**〕ははたして過ちを犯したのかどうか」と尋ねた。

C

彼〔**C**〕はつづけた——むしろ君のほうが、君に貸してくれるように説得できなかったのだから、過ちを犯しているのではないかね？

1　双方が同時に発言することはできない、真を与えることができるのは一人である、もし二人が互いに反対のことを言うとすれば、それは同時に真であることはできない——この論理はメガラ派的の詭弁とされている。

2　メガラのエウブリデスの堆積論、禿頭論につながる。Diog. L. II. 108, VII. 82 参照。

すると彼〔A〕は言った(1)——いったい、どうしてそれがわたしの過ちなのだね。

〔C〕——どちらが過ちを犯していると君は思う？　望んでいたところのものを手に入れそこねた者か、それとも、そうでない者かね。

〔A〕——手に入れそこねた者だ。

〔C〕——ところで、君は借金を望んでいたのに、その当てがはずれたのではないかね。これに対して君に金を渡そうとしなかった者は、その当てがはずれたわけではないね。

〔A〕——そう。しかし、あの男がわたしに渡さなかったからといって、わたしが過ちを犯しているというのはどうしてだね。

〔C〕——それはこういうわけだ。つまり、一方、もし君が彼にすべきでない要求をしたのだったら、君は過ちを犯したとどうして思わないかね。これに対して、渡そうとはしなかったあの男のほうは正当なことをしたことになる。他方、もし君が彼にしかるべき要求をして、それがかなえられなかったのならば、君は必然的に過ちを犯していることにどうしてならないだろうか。

D

〔A〕——たぶんなるだろうね。しかし、わたしを信用しなかったあの男は、どうして過ちを犯さなかったことになるのだろうか。

〔C〕——では聞くが、もし君が適正な仕方で彼と交際していたならば、君は少しも過ちを犯すことはなかったのではないだろうか。

〔A〕——たしかになかっただろうよ。

〔C〕――すると、じっさいには、君は適正な仕方で彼と交際しなかったのだ。
〔A〕――そうらしい。
〔C〕――したがって、君は彼と適正な仕方で交際しなかったのだから、たとえ彼が君を信用しなくても、君が彼を非難するのはどうして正しいといえようか。

E

〔A〕――正しいとは言えない。
〔C〕――ではまた善からぬ扱いをする者たちには考慮をはらうべきではない、ということも言えないかね。
〔A〕――それは大いに言えるとも。
〔C〕――しかしそれなら、適正な仕方で交際をしない人たちは、善からぬ扱いをすると君には思われないかね。
〔A〕――わたしにはそう思われる。
〔C〕――では、もし君が善からぬ扱いをするとして、あの男が君に考慮をはらわないのだとするならば、彼はどんな過ちを犯したわけなのか。
〔A〕――ぜんぜん犯してないようだ。
〔C〕――では、人々はこのようなことをいって互いに非難し合い、自分たちによって説得されなかった人たち

1　以下は二人の対話となるが、便宜上一方を〔A〕、他方を〔B〕として、「〔A〕は言った」「〔B〕は言った」という繰り返しは〔A〕――、〔B〕――とした。原文ではこれらの句は必ずしも文頭にくるものではなく、むしろ、文中、文末に多く、また省略された箇所もあるが、訳文では煩雑を避けて、上記の記述方式を一貫させた。なお他の箇所における〔A〕―〔D〕の記号も便宜上挿入したものである。

に対しては、説得されなかったといってなじるのに、自分たち自身に対しては、自分たちが説得しなかったことをいささかもとがめないのはいったいどうしてなのか。

385 するとその場にいたほかの一人〔D〕が口をはさんだ――人が、誰かに対して親切な(善い)扱いをし、助力を与えておいて、それから今度はその人から自分が同じように扱われることをとうぜん要求(期待)するにもかかわらず、それがかなえられない場合には、そのような人はそれについて非難を鳴らしてどうして当然でないだろうか。

〔C〕――では、人が自分がするのと同じように扱われることをとうぜん要求(期待)するその当の相手は、彼に対してちゃんとした扱いができるか、それとも、できないかのいずれかではないか。そして、もしそれができないならば、彼ができないことを相手に期待するわけだから、どうして、立派な期待といえようか。また、もしできるならば、どうして、そのような人間を彼は説得しなかったのか。あるいは、こんなことを言っていて、彼らはどうして立派な言論を行なっているといえようか。

B 〔D〕――しかし、ゼウスにかけて、彼は少なくともそういう非難をしなければならないのだ、そうすることによって、その相手が今後は彼をより善く(より親切に)扱うように、また、彼が非難するのを聞いて、他の友人たちもそうするように。

〔C〕――君の考えではより善い扱いをするようになるのは、人々が正当なことを言って、要求する者から聞く場合だろうか。それとも、間違ったことを言う(過ちを犯す)者から聞く場合であろうか。

〔D〕――正当なことを言う者からだ。

〔C〕――これに対して、間違ったことを言う人の要求は正当ではないというのが君の意見だったね。

〔D〕——そうだ。

〔C〕——では、そのような非難をする人から聞く場合に、彼らはどのようにしてより善い扱いをするようになるだろうか。

〔D〕——けっして、ならないだろう。

C　〔C〕——では、人は何のためにそのような非難をするのかね。

〔D〕——なぜだかわからない。

八

或る人〔A〕が、「誰彼かまわずゆきあたりばったりの人間の言葉を性急に(たちまち)信用する」といって、他の人の単純さ(愚かさ)を、非難していた。すなわち、たしかに同国民や身内の者の言葉を信用するのはとうぜんのことだろうけれども、それまでに見たこともなければ、その話を聞いたこともないような人間を信用するのは——しかも、人間はその大多数は山師で邪悪だということを知らないではないのに——愚かさの小さからぬしるしだというのである。

D　すると、その場に居合わせた者たちのうちの一人〔B〕が言った——君は、誰でもよいが、人を速やかに知る者を、ゆっくり知る者より高く評価すると、わたしは思っていたのだが(1)……。

デモドコス

1　『カルミデス』160Aで、できるだけ速いものが最善であり、称賛に値すると述べられている。

最初の者〔A〕は言った——高く評価するとも。

〔B〕——では、ゆきあたりばったりの人間にせよ、彼らが真実を言う場合に速やかに(たちまち)信用するのを、どうして、非難するのかね。

〔A〕——いや、わたしが非難するのはその点ではなく、彼らが偽りを言ってもたちまち彼らの言うことを信用するからなのだ。

〔B〕——でも、もし長いことかかって、ゆきあたりばったりでない人間を信用し、そのあげくだまされたならば[1]、君は彼をもっと非難しなかっただろうか。

〔A〕——きっとそうしただろう。

〔B〕——はたしてそれは、ゆきあたりばったりでない人間を、ゆっくり(のろのろ)信用したからかね。

〔A〕——断じて、そうではない。

〔B〕——というのも、思うに、人が非難に値するのは、この故にではなくて、人々が信ずべきでないことを言う場合にその言葉を信用するからだと、君が考えているからなのだ。

〔A〕——たしかに。

〔B〕——すると、彼が非難に値するのは、ゆきあたりばったりでない人間をゆっくり(のろのろ)信用するからではなくて、ゆきあたりばったりの人間を誰彼かまわず速やかに(たちまち)信ずるからだと君には思えるのかね。

〔A〕——わたしにはそうは思えない。

〔B〕——それでは、なぜ君は彼を非難するのかね。

E

386

〔A〕――彼が過ちを犯すからだ、よく調べてみる前に、性急にゆきあたりばったりの人間を信用して。

〔B〕――しかし、もし調べてみる前にゆっくり信用したならば、過ちを犯さなかったのだろうか。

〔A〕――断じてそうではないのであって、そのようにしたところで過ちをやはり同じく犯したことだろうよ。だが、わたしの考えでは、ゆきあたりばったりの人間を信用すべきではないのだ。

〔B〕――しかし、もしゆきあたりばったりの人間を信用してはいけないというのが君の意見なら、見知らぬ人たちをたちまち信用するのもどうして妥当であろうか。むしろ、彼らが真実を言うかどうかを、前もって考察せねばならぬと君は思わないかね。

〔A〕――そう思うとも。

〔B〕――というのは相手が身内の者や友人だったら、彼らが真実を言っているかどうかを考察する必要はないからね。(2)

〔A〕――わたしとしては考察すべきだと主張したい。

〔B〕――それはたぶん、そういう人たちのなかにも信用すべきでないことを言う人たちがいるからだろう。

〔A〕――大いにね。

B

〔B〕――それなら、ゆきあたりばったりの人間よりもいっそう身内の者や友人のほうをとうぜん信用すべきだ

1　この箇所の読みはアストに従い ἠπατᾶτο を採る。

2　この箇所はスイエほか、大ていの解釈者のように疑問文に読めば、「相手が……だったら、彼らが真実を言っているかどうか考察する必要はないのかね？」となる。

ということに、どうしてなるのだろうか。(1)

〔A〕——わたしには答えられない。

〔B〕——では、どうかね。もしゆきあたりばったりの人間よりもいっそう身内の者のほうを信用すべきでないならば、ひとはゆきあたりばったりの人間よりもいっそう彼らのほうを信用すべき者とも考えてはならないのだね。(2)

〔A〕——まったくそうだ。

〔B〕——すると、もしそれが或る人たちには、親しい人間だが、他の人たちには、見知らぬ人間であるならば、同じ人間を彼はいっそう信用すべき者と考えたり、いっそう信用すべからざる者と考えたり、どうしてすべきでないであろうか。(3) なぜならば、君の主張だと、それが親しい人間であれ見知らぬ人間であれ、同じように信用すべき者と考えてはならないのだから。

〔A〕——それはどうもわたしには気に入らない。

〔B〕——同様に、彼らによって言われたことも、或る人たちは信用するであろうが、(4) 或る人たちは信用すべきものと考えないだろう、そして、彼らのうちのどちらも、過ちを犯していないことになるだろう。

〔A〕——それもまた理不尽だ。

〔B〕——次に、もし身内の者もゆきあたりばったりの人間も、同じことを言うならば、同様にしてその言われたことが、どうして信用すべきものとなったり信用すべからざるものとなったりしないであろうか。

〔A〕——どうしてもそうなる。

C

〔B〕――すると、そういう言説をなす人たちも、そういう言説を述べながら、同様に信用されねばならないのではないかね。

〔A〕――たぶんね。

彼らが以上のような言説を述べた時、わたしはすっかり途方にくれてしまったのだ、――いったいどちらを信用すべきであり、どちらを信用すべきではないのか、また、彼らが言っているところのことについて信用に値する人たちやほんとうに知っている人たちを信用すべきなのか、それとも、身内の者や知人の言うことを信用すべきなのか、とね。これらのことについて君(デモドコス)はどう考えるかね。

---

1 アリストテレス『詭弁論駁論』(173^a21)で、「人は賢者に従うべきか、それとも父に従うべきか」と述べられている。

2 この箇所の読みはシュナイダーに従う。

3 この箇所の読みはスイエに従い Ἐὰν οὖν . . . , πῶς οὐ δεήσει τοὺς αὐτοὺς μᾶλλον ⟨καὶ ἧττον⟩ πιστοὺς νομίζειν; とする。

4 スイエに従い、「信用するであろう」(πιστεύσουσιν) と未来形に読む。

シシュポス

——審議について——

副島民雄訳

登場人物

ソクラテス
シシュポス

387B

ソクラテス　われわれは、昨日も、長いこと君を待っていたのだよ、ストラトニコス[1]の弁論の披露があるというのでね、シシュポス。賢い人から、言葉と身振りによっていろいろすばらしいことが披露されるのを、われわれといっしょに聞きにくるかと思ったのだ。しかし君はもはや来そうもないと思われたので、われわれは自分たちだけでもうあの人の話を聞いたわけなのだ。

C

シシュポス　まったく、そうなんですよ。じつは、よんどころない用事があって、それをなおざりにはできなかったのです。というのは、われわれのところで当局の人たちが昨日審議会を催したからです。それで、彼らは彼ら自身に助言するように私に強いたのです。それに、われわれパルサロス人には、当局者がわれわれのうちの誰かに彼らに助言するように命ずるときには、当局者に従うべしという法律がまたあるからです[2]。

ソクラテス　たしかに法律に従うのは立派なことだし、また、市民たちから立派な審議員であるという評判を得ることも結構なことだ、パルサロスの人間の一人として、君もまた立派な審議員だという評判だが、ちょうどそのようにね。とはいえ、シシュポス、わたしとしては立派に審議するということについては、いまのところま

D

だ君と論議することはできないだろう、それには多くのひまと長い議論を要するだろうと考えるとね。むしろ審議それ自体について、それは何であるかを、まず君と論ずるようにつとめたい。では、はたして審議自体がいったい何であるか、わたしに言ってもらえないだろうか。立派に〔審議する〕とか、下手に〔審議する〕とか、上手に

〔審議する〕とかいうようなことが何であるか、ということではなくて、ただ審議それ自体がどのようなことなのか、どうか言ってくれないか。それとも、君自身そのとおり立派な審議員なのだから、そんなことはまったく雑作ないことなのだろうか。でも、君にこんなことについて質問して、余計なことでないといいのだが。

E

シシュポス　審議とは何か、あなたはほんとうにご存知ないのですか。

ソクラテス　知らないね、シシュポス、もしそれが、何かなさねばならないことについて、人がぜんぜん知識がなくて、それを予言したり、即興で語ったりして、ちょうど骨玉遊びをする者たち[3]とまったく同じやり方で、自分で当て推量をしながら、思いついたままを言う、といったようなこととは何か別のことならばね。骨玉遊びをする者たちは、自分の手の中ににぎっているものが偶数か奇数か、まったく知らないのに、それにもかかわらずそれらについてほんとうのことを偶然言い当てるがね。審議というのも、しばしば何かこれと同じようなもので、つまり、ひとが審議する事柄について何も知らないのに、偶然ほんとうのことを言い当てる、といったようなものなのだ。だから、もし審議がこのようなものであるなら、わたしはそれがどんなことか知っているが、しかしもしそのようなものでないならば、まだそれを知らないといってよいだろう。

388

1　有名なアテナイのキタラ奏者(前四一〇頃—三六〇年頃)。また、ソフィストの一人として弁論家としても高名であった。

2　テッタリアは大体、貴族政権下にあって、パルサロスも同様の状態にあったが、前五世紀の中頃以後、寡頭的となり、シシュポスのような土地の有名人が長官の一人として政権に参加してその助言が要求されたと言われている。

3　手のなかに、豆や胡桃や骨玉をかくし、相手にその数の奇か偶かを当てさせるギリシアのありふれた遊びの一つ。この場合の胡桃や骨玉が金や銀にとってかわられてばくちにされたとも伝えられる。『リュシス』206E、アリストパネス『福の神』八一六—八一七行参照。

シシュポス　それなら、それは、何かをぜんぜん知らないということではありません。むしろ、それは、問題になっている事柄の一部はすでに知っているが、残りはまだ知らない、というようなことです。

二

B

ソクラテス　審議というのは、ゼウスにかけて、何か次のようなことだと君は言おうとするのかね、——というのは、これは立派に審議するということについての君の考えを、わたしがある意味で予言するみたいに思えるのだが——、つまり、人が自分自身のためになしとげるべき最善のことを発見しようと努めて(探し求めて)いるが、それをまだはっきりとは知らない、がしかし、思惟の中に何か或るものとしてある、というようなことなのかね。君はそれを何かこんな意味で言っているのではないかね。

シシュポス　まったくそうです。

ソクラテス　さて、人々は、ものごとのうち知っていることを探求する(探し求める)のか、それとも、知らないことをも探求するのか。

C

シシュポス　両方です。

ソクラテス　それでは、君は、「人々は知っていることも知らないことも両方とも探求する」[1]と、こう言う場合に、それは何かこんなふうな意味でまた言っているのかね。——たとえば、誰かがカリストラトス[2]に関して、カリストラトスとはいったい誰であるかということは知ってはいるが、カリストラトスが誰であるかということではなくて、彼をどこで発見することができるか知らない、といった場合のようなものだ。「探求するのは両方で

ある」と君が言うのは何かこんなふうな意味で、かね。

シシュポス　まったくそうです。

ソクラテス　では、その人はカリストラトスを知るということ、そのことは探求しはしないだろうね。そのことは知っているのだから。

D

シシュポス　しませんとも。

ソクラテス　しかし、どこにいるかと、彼を探し求めるだろう。

シシュポス　そうだと思います。

ソクラテス　しかし、もしも彼がどこにいるか知っているとするならば、彼はカリストラトスをどこで発見しうるかと探し求めることもしないであろうに。むしろ、彼はただちに発見しただろうね。

シシュポス　そうです。

1　「知っていることも、知らないこともその両方を探求する」は『メノン』71Bの「それが何であるかを知らないでいて、それがどんなものであるかということをどうして知ることができるか」とも関聯して、探求不可能説へと導かれてゆくのである。また『エウテュデモス』276Dでも「学ぶ者は彼らが知っていることを学ぶのか、知っていないことを学ぶのか」という問題が提出されていて、学ぶということの諸義が説明されている。

2　前三七五年頃活躍した(三六一年に殺された)アッティカのアピドナ出の将軍で弁論家。しかしここではカリストラトス自身に特別の意味があるのではなく、ただ例として引用されているだけである。すなわち、カリストラトスが誰であるかを知ってはいるが、彼がどこにいるかを知っていないならば、彼を知っていることにはならないと言う。この例の古典的なのはコリスコスである。アリストテレス『詭弁論駁論』(179ᵇ1sqq.)参照。

ソクラテス　したがって、人々は何であれ知っていることを探求することはしないのであって、どうやら知らないことを探求するようだ。

三

しかし、もしもわれわれのこの論議が論争的であって、事柄〔自体〕のためになされているのではなくて、ただもっぱら議論のための議論のためになされていると君に思われるならば、シシュポス、それはいま言われたとおりだと君に思われるかどうか、こういうふうにして考察してみたまえ。はたして、幾何学の場合に、いま言われたようなことがあるのを君は知らないかね。幾何学者たちが対角線を知らないという場合に、〔彼らが探求するのは〕それが対角線であるか否かということではなくて――というのも、それを発見しようと彼らが今更努める（探し求める）こともないからね――、むしろ、対角線はそれが二分する正方形の辺に対して、長さにおいてどれだけの比であるかということではないか。これがまさに対角線について探求されることではないかね。(1)

E

シシュポス　私としてはそう思います。

ソクラテス　それこそ、彼らが知っていないことだからね。そうだろう？

シシュポス　まったくそうです。

ソクラテス　では、どうかね。立方体の体積を二倍にすると〔一辺の長さは〕どれだけであるかを、(2)君も知っているとおり、幾何学者たちは計算によって発見しようと努める（探求する）のではないかね？　これに対して立方体そのものを、それが立方体であるか否かを、彼らは探求することはないのであって、それなら彼らは知ってい

るのだ。そうだろう?

シシュポス　そうです。

ソクラテス　ではさらに、空気についてもまた、アナクサゴラス(3)やエンペドクレス(4)やその他天空のことについて思索する人たちはみな、君も知っているように、それが無限であるかそれとも限りを持つかを探求するのではないかね。

シシュポス　はい。

ソクラテス　しかし、それが空気であるかどうかということは探求しない。そうだろう?

シシュポス　けっして、しません。

ソクラテス　すると、他のすべてのことにおいてももはや同じことで、いかなる人も知識のあることについては少しも探求しないのであって、知識をもっていないことについて探求するのだということを、君は承認してくれるだろうか。

1　対角線の引用例については『メノン』82B～85B、『国家』VI.510D参照。

2　原文のとおりだと「立方体の体積の二倍はどれだけか」となるが、これでは事実上意味をなさないので、ほぼミュラーに従い、このように解した。なおこれは、デロスのアポロンの祭壇の面積を二倍する場合の一辺の長さを見出す問題に関係することとして興味が持たれていた。そして、その答は『メノン』85Bにおいてなされている。

3　アナクサゴラス(前四六〇年頃壮年)、小アジアのクラゾメナイ出身の自然哲学者。『ソクラテスの弁明』26Dおよびその注2参照。

4　エンペドクレス(前四七二―四四四年頃活躍)、シケリアのアクラガス出身の哲学者。『テアイテトス』152Eの注1参照。

シシュポス　もちろんです。

四

B

ソクラテス　ところで、審議というのは、まさにこういうこと、すなわち、「人が何であれ自分のためになしとげねばならぬ事柄について、最善のことを発見しようと探求すること」だとわれわれには思われたのではなかったかね。(1)

シシュポス　そうです。

ソクラテス　しかるに、審議がまさにそれであったところの、その探求というのは、そういう事柄にかかわるものである。そうだろう？

シシュポス　まったくそのとおりです。

ソクラテス　それでは、われわれはいまはもはや、探求を行なう者たちがその探求を行なう事柄について発見するのに、彼らの妨げになるのは何であるか考察せねばならない。

シシュポス　ええ、そうしなければならないと思います。

C

ソクラテス　すると、彼らの妨げになるものは、無知以外の何かだと言うことができるだろうか。

シシュポス　考察してみようではありませんか、ゼウスにかけて。

ソクラテス　そう、よく言う文句ではないが、ことのほか「帆綱をすっかり伸ばしきり」(2)、「言葉のかぎりをつくして」(3)ね。では、わたしといっしょに次の点を見てみたまえ。(4)はたして音楽の知識もなく、また、竪琴の弾き

方も、その他その種の音楽活動の何かをどのようにすべきかも知らない人間が、音楽について何か審議することができると君は思うかね。

シシュポス けっしてできないと思います。

D

ソクラテス では、統師術や舵取りの術についてはどうかね。それらのどちらも知らない人が、それらの一方に関して、何をなすべきかを、何か審議することができるだろうと君は思うかね。軍隊の指揮をすることの知識も船の舵を取ることについての知識もない、ほかならぬその人間が、どのように指揮すべきか、あるいはどのように舵を取るべきかということの審議がね。

シシュポス けっして。

ソクラテス それでは、その他のすべてのことについても同様であって、人がそれについての知識をもっていないような事柄については、その知識のない人はとうぜん知ることはできないし、また審議することもできないと君は思うかね。

シシュポス もちろんです。

---

1 388B 参照。

2 あらゆる努力を傾けて、の意。同様の文句が『プロタゴラス』338A に見られる。

3 『エウテュデモス』293A、『国家』V. 475A、『法律』X. 890D 参照。

4 ここから 390B に及ぶ議論は『アルキビアデス I』106C～107E との、著しい類似が見られる。

五

ソクラテス　しかし、ひとは知識していないことについて、探求することはできる。そうだろう？

シシュポス　まったくそうです。

E

ソクラテス　してみると、もはや、探求は審議と同じではありえないだろう。

シシュポス　いったいどうしてですか。

ソクラテス　探求は、むろん、人が知識をもっていない事柄についてなされるものであろうが、これに対して審議のほうは、それについての知識をもっていないような事柄については、人間の身でできることではないように思われるからだ。あるいは、このように言わなかったかね。

シシュポス　言いましたとも。

ソクラテス　ところで、君たちは昨日、君たちの国にとって最善のことを発見しようと努めて(探し求めて)いたけれども、それを君たちは知らなかったのではないかね。というのは、もし知っていたならば、むろん、それをなお探し求めようとはしなかっただろうからね。ちょうど、われわれは、われわれがすでに知識をもっていることは、ほかのことでも少しも探し求めはしないようにね。そうだろう？

シシュポス　まったくそうです。

ソクラテス　では、シシュポス、君の考えでは、ひとは知識をもっていない場合には、探し求めるべきだろうか、それとも、学ぶべきだろうか。

シシュポス　それはもう断然学ぶべきだと私は思います。

ソクラテス　君の考えは正しいよ。しかしはたして、探求するよりむしろ学ぶべきだと君に思われるのは、もし人が知識のある人たちから学ぶならば、知らない者が自分で探し求める場合よりも速やかに、また容易に発見するからかね。それとも、何かそれ以外の理由によるのかね。

シシュポス　いいえ、そういう理由によってです。

ソクラテス　ならば、どうして君たちは昨日、君たちが知識をもっていない事柄について審議することや、国においてなしとげるべき最善のことを探求することはいい加減にしておいて、誰か知識のある人から、どうすれば国にとって最善のことをなしとげることができるかを、学ぼうとしなかったのかね。いやむしろ、わたしの考 B えでは、昨日一日中君たちは、君たちの知識をもっていない事柄について、即興を語ったり、予言をしたりして、坐っていたようだ、――学ぶことは等閑に附してだよ。国の当局者たちも、そして彼らといっしょに君までもね。

六

しかし、おそらく、君は言うかもしれない、これはただもっぱら問答の手すさびのためにわたしが君をからか C って言ったことであって[1]、君に対してまじめに論証されたことではない、と。

1　直接にはすぐ前の、審議会で一日中、「即興を語ったり」、「予言をしたり」して坐っていた、をさすものと思われる。これらの言葉はしかし、「その場のとっさの思いつきを語る」「想像してものを言う」というような、まともな意味も同時に含意しうる。

しかし、この点をひとつ、ゼウスにかけて、シシュポス、今度はまじめに考えてみてくれたまえ。たとえ審議が何か意味のあることであるということを認めるとしても、そしてまた、たったいまわかったように、それは無知[1]、想像、即興といったようなものと何ら異なるところのないものではないのだとしても、つまり、ただ呼び名だけ他のいかなる名でもなくて、こういう、たいそうもったいぶった名で呼んでいるだけのものではないのだとしても、しかし立派に審議したり、立派な審議者であるということに関して、或る人たちが他の人たちよりそれだけすぐれていると君は思うかね、――ちょうど、他のすべての知識においても、或る人たちは他の人たちより、D つまり或る大工は他の大工より、或る医者は他の医者より、或る笛吹きは他の笛吹きよりすぐれているように、それにまた、他のすべての職人たちも、いまあげたような技術に従事しているそういう者たちにおけると同様に、彼らの間で優劣があるようにね。はたして審議においてもまたこのように、或る人たちは他の人たちよりすぐれていると君には思われるかね。

シシュポス　そう思われます。

ソクラテス　ではどうか、言ってくれたまえ。立派に審議する人も立派でない仕方で審議する人もみなことごとく、まさにあろうとする(未来の)何か或る事柄について審議するのではないか。

シシュポス　たしかに。

ソクラテス　ところで、未来の事柄というのはまだあるのではない事柄(存在しないもの)にほかなるまいね。

シシュポス　まったくそうです。

ソクラテス　というのは、もし現にあるなら、それはきっと、もはやまさにあろうとするのではなくして、す

E　でにあるわけだろうからね。そうだろう？

シシュポス　そうです。

ソクラテス　ではまた、もしまだあるのではないならば、そのとおりにまた、そのあらざるもの(非存在のもの)は生じたのでもないのではないか。

シシュポス　たしかに。

ソクラテス　それでは、それは、まだぜんぜん生じていないならば、それ自身のいかなる有りよう(存在性)もまだまったく持っていないのではないか。

シシュポス　ええ、まったく持っていません。

ソクラテス　すると、立派に審議する人たちも立派でない仕方で審議する人たちもみな、ほかならぬ、存在するのでもなく、生成したのでもなく、いかなる有りようも持たない事柄について審議するのではないだろうか、もし彼らが未来の事柄について審議する場合にはね。

シシュポス　そのようにみえます。

1　ここの読みは写本の ἐπιστήμη、ミュラーの ἐπίστασις を採らず、ズーゼミールの ἀνεπιστημοσύνη を採る。ただ、これは単に「知識の欠如・無知」と解することは困難であり、「人知の及ばざるもの」くらいの意味に解釈できようか(389E, 391C 参照)。

七

ソクラテス　すると、人は存在しないものを、上手にであれ、下手にであれ、射当てることができると君には思われるかね。

シシュポス　それはどういう意味ですか。

ソクラテス　わたしが言わんとすることをわたしの口から君に話してあげよう。まあ見てみたまえ。いかにして君は大勢の射手のうちから、そのうちの上手なのは誰で、下手なのは誰かを識別するだろうか。それとも、それを知るのはべつにむずかしいことではないのかね。というのは、きっと君は、何かの的を射るよう彼らに命ずるだろうからね。(1) そうだろう？

391

シシュポス　まったくそうです。

ソクラテス　それでは、的にいちばん多く命中させる者をまた、君は勝ちと判定するのではないだろうか。

シシュポス　そうです。

ソクラテス　しかし、もしいかなる的も彼らのために射るべく置かれていなくて、彼らがそれぞれ、自分の欲するままに射るならば、いかにして君は彼らのうちの上手な射手と下手な射手を識別することができるだろうか。

B

シシュポス　けっしてできません。

ソクラテス　それでは、審議を行なう人たちについてもまた、何について審議するのか知っていないならば、彼らが立派な（上手な）審議者なのか立派でない（まずい）審議者なのか君は識別するのに困るのではないだろうか。

シシュポス　まったく。

ソクラテス　ところで、審議する人たちは、未来の事柄について審議するのだとすると、存在しないものについて審議するわけではないかね。

シシュポス　まったくです。

ソクラテス　また存在しないものは、何ぴともこれを射当てる(達成する)ことはできないのではないかね。どのようにして人は存在しないものを射当てることができると君は思うかね。

C

シシュポス　けっしてできません。

ソクラテス　それでは、存在しないものを射当てることはできないのだから、もはや何ぴとも存在しない事柄について審議がかなう(達成できる)ということはないのではなかろうか。未来のことというのは非存在に属するのだからね。そうだろう？

シシュポス　そう思われます。

ソクラテス　それではまた、未来のことを達成しえない者ならば、人間のうち誰一人として、もはや立派な審議者でもなければ、まずい(立派でない)審議者でもないだろう。(2)

シシュポス　ないようにみえます。

1　射手の引用としては『テアイテトス』194A、『法律』Ⅳ. 717A, Ⅺ. 934B, Ⅻ. 961E、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第一巻(1094ª24)参照。

2　人間ではなくて、神々が未来のことに関する善き審議者であり助言者であることが示唆されている。

ソクラテス　また、もし存在しないものを、よりうまく達成する者も、よりまずく達成する者もないならば、或る人が他の人より立派な審議者であることもなく、まずい(立派でない)審議者であるということもありえないだろう。

D

シシュポス　ええ、まったくありえません。

ソクラテス　そうすると、いったい、人々はいかなる事柄に着目して、或る人々を立派な審議者であるとか、立派でない審議者であるとか呼ぶのであろうか。ともあれこのことについては、改めていつかまたとくと考えてみるだけの価値があるのではなかろうかね、シシュポス。(1)

1　ミュラーは『シシュポス』の題の由来について、ホメロスの『オデュッセイア』第一一巻五九三行以下におけるシシュポスの空しい努力が、本篇における助言の努力の空しさに比せられるものとして、本篇の『シシュポス』という題の偶然でないことを指摘している。

エリュクシアス

——富について——

尼ヶ崎徳一訳

登場人物

ソクラテス
エリュクシアス
クリティアス
エラシストラトス
プロディコス
無名の青年

一

ぼくとステイリア区のエリュクシアスがたまたま解放の神ゼウスの神殿[1]の回廊を散歩していると、間もなくクリティアスと、エラシストラトスの息子パイアクスの甥[2]に当るエラシストラトスがぼくたちのほうへやって来た。このエラシストラトスは、その時ちょうど、少し前にシケリアとその方面の諸地方からやって来たばかりだった。

B 「ご機嫌よう、ソクラテス」と彼は近づいて来て言った。

「やあ、君もね」とぼくは言った、「どうだい、シケリアの話でぼくらにとって何か面白いことでもあるかね」

「ありますとも」と彼は言った、「ですが、いかがでしょう、まずちょっと腰かけませんか。昨日メガラから歩いて来たので、わたしは疲れているのですよ」

「むろんいいとも、そうしたいというのならね」

「それであなた方は」と彼は言った、「あちらのうわさの何からまずお聞きになりたいのですか。あちらの人たち自身がどんなことをしているか、ということでしょうか、それともわたしたちの国に対してどんな感情を持っているか、ということでしょうか？　といいますのは、わたしの思うことですが、あの連中のわたしたちに対す

C る反応は、ちょうど黄蜂と同じことです。少しずつ刺戟して怒らせていたのでは、手のつけられないものになってしまい、彼らを攻撃してその巣を丸ごとそっくり取り去らないうちは駄目なのです。じっさいシュラクサイの

人たちにしても同じことで、誰かがことを起して遠征軍を派遣し、大挙かの地へ行かないかぎり、(3) あの国がいつかはわれわれに服するなどということはないし、現在やっているようなささやかな攻撃では、ますます彼らは腹を立てるばかりで、これではどうにも厄介至極なものになってしまうでしょう。今度も彼らは、わたしたちの国へ使節を送って来ましたが、わたしにはどうもわが国に対して何か策謀があってのことに思われます」

二

D ぼくたちがこう話し合っている間に、ちょうどそこにシュラクサイの使節たちが二人通り過ぎて行った。するとエラシストラトスは使節たちの中の一人をさし示して言った。

「ソクラテス、ほらあの人がシケリアの人々の中でもイタリアの人々の中でもいちばん金持なのですよ。なにしろ」と彼は続けた、「地所はふんだんにあって、望みのままにいくらでも耕作できる手だてはあるというので

1 『テアゲス』の対話が行われる場所もここということになっている。パウサニアス『ギリシア記』第一巻(三の二)によればアテナイ市の西郊外ケラメイコスにあったらしい。アテナイではペルシア軍を撃退したことを記念して、ゼウスをこの名で呼んで祀ったと言われる。しかしシュラクサイ、タラスなど他のポリスでは、またそれぞれ違った理由からこの名でゼウスを祀ったらしい。ヘロドトス『歴史』第三巻(一四二)にはサモスの話が書かれている。

2 アテナイの政治家・弁論家。プルタルコス『英雄伝』の「アルキビアデス」(一三)によれば、アルキビアデスが政界に登場した頃の政敵。トゥキュディデス『歴史』第五巻(四)によれば、前四二二年アテナイの使節としてシケリアに行ったこともある。

3 前四一五年のシケリア遠征以前で、おそらくはそれに近い頃に、この対話が行なわれたように設定されていることになる。

すからとうぜんでしょう？　それにその地所はギリシア人の中でも他に比類なく立派なものだし、さらにその他奴隷や馬や金や銀や――富に数えられるものは無尽蔵にあるのです」

393 彼が調子づいて、その人の財産についてなおもおしゃべりを続けようとしているのを見て、ぼくはこうたずねた。

「それでどうなのかね、エラシストラトス。その人はシケリアでは一体どんな人間だと思われているのだろうか？」

「あの人は」と彼は言った、「シケリアの人々の中でもイタリアの人々の中でも、誰よりもいちばん金持なのですが、それ以上に誰よりもいちばん悪い人だと思われてもいますし、事実またそうなのです。それはもし誰かシケリアの人に、誰がいちばん悪い人だと思うか、また誰がいちばん金持だと思うか、と聞いてみても、この人以外の人の名をあげる者は一人もいないだろうというくらいのものです」

三

ところでぼくは、彼の話していることは些細な問題ではなくて、最も重要だと思われている問題、すなわち徳B と富にかかわることなのだと考えて、彼にいま一タラントン(1)の銀貨を持っている人と、二タラントンの値打のある畑を持っている人と、どちらのほうを富裕だとするか、とたずねた。

「わたしは」と彼は言った、「畑の持ち主のほうだと思います」

「それでは」とぼくは言った、「同じ論法をもってすれば、もし誰かある人が、衣服や敷物やその他のもので

も、あの外国人の持っているもの以上に高価なものを持っているとすれば、その人のほうがもっと富裕だということになるのではないか」

そのことにも彼は同意した。

「ではもし、人が君に二つのうちのどちらかを選ばせるとしたら、君はどちらを望むだろうか」

「わたしなら」と彼は言った、「いちばん値打のあるものを取ります」

「それはどちらのほうがいっそう富裕だろうかと考えてのことなのかね?」

「そうです」

「さあ、そうすると、およそいちばん価値のあるものを持っているその人が、いちばん富裕であることはわれわれには明らかだね?」

「そうです」

c

四

「すると」とぼくは言った、「健康な人々のほうが、病気の人より富裕だということになるのではないか、健康を保つことのほうが、お金を持っていながら病気しているよりも価値があるものだとすればね。いずれにしろ、ペルシア大王のような財宝を持ってはいるものの病気しているよりは、少しの銀貨しか持っていなくても健康で

1　一タラントンは六〇ムナ、六〇〇〇ドラクメ。

(393) D

あるほうがいっそう価値がある、と考えないような人は一人もいないだろう。それは明らかに健康のほうがいっそう価値あるものと考えてのことなのだ。なぜなら、もし健康が財宝以上に価値あるものと考えなければ、けっしてこちらのほうを選ぶようなことはしないだろうからね」

「しないでしょうね」

「するとまた、もし他に何かが健康よりもっと価値が高いことが明らかになるとすれば、それを持っている人のほうが、いちばん富裕な人ということになるのではないかね」

「そうです」

「ではいま、ある人がわれわれのところへやって来て、こうたずねたとする。――『ソクラテスにエリュクシアスにエラシストラトス、人間にとって何がいちばん価値のある持ちものなのか、わたしに教えていただけますか。それは、人がそれを持ったならば、自分のことでも友達のことでもどうすれば最もうまく処理できるか、ということの点について、いちばん立派に思慮をめぐらせるようになるものなのではないでしょうか』――とね。われわれはこれを何と言ったものだろうか？」

E

「わたしには、ソクラテス、幸福ということが、人間にとっていちばん価値あるものに思われます」

「それで悪くはないがね」とぼくは言った、「しかしそれなら、いちばんよくやっている人のことを、われわれは人間の中で最も幸福な人と考える(1)のではないか」

「わたしはそうだと思います」

「それでは、自分自身のことでも他人のことでもめったに誤らず、大方は成功するような人が、いちばんよく

394

やっているのではないか」

「まったくその通りです」

「すると悪いことと善いこと、またやらねばならぬこととやってはいけないことを心得ている人が、最も正しく行っており、かつまた過ちも最も少ないのではないか」

彼はこの点にも同意した。

「そうすると、こうして知恵が人の持っているものの中でいちばん値打のあるものだと思われるからには、いまやわれわれには、同じ人が最も賢い人でもあり最もよくやっている人でもあり、最も幸福でもあり、最も富に恵まれた人でもあるように思われる」

「そうです」

五

「それはそうですが」とエリュクシアスが口をはさんで言った、「ソクラテス、もしネストル[2]以上に知恵があ

1 プラトンは「よくやる(エウ・プラッテイン)」と「幸福である(エウダイモネイン)」を、しばしば同義語として用いる。『カルミデス』174B～C、『エウテュデモス』278E、280B、『ゴルギアス』507C、『アルキビアデス I』116Bなど参照。なおこれはプラトンに限るものではないようで、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第一巻(1095a17–20)では一般の見解として定式化されている。

2 ピュロスの王。『イリアス』において、知謀にたけた長老として重要な役割を演じている。

B ったとしても、毎日の暮しにいり用な食べ物、飲み物、衣服、その他その類のものを持っていなければ、その人にとってはどんな利益があるというのでしょうか。その知恵は何の役に立つのでしょうか。いや、生活必需品の何一つとしてままならず、乞食をしても一向におかしくないほどのこの人が、どうしていちばん富んでいるということになるのでしょうか」

すると彼の言うことにも一理あるように、しきりに思われてきた。

「しかしどうだろう」とぼくは言った、「知恵を持っている人も、そういったものにこと欠く場合にはそんな C 目に会うことになるだろうが、他方、もし誰かプゥリュティオン(1)が持っているような家を持っていて、その家がまた金銀にみちみちている場合には、その人は何一つ不自由することはないだろうというのかね？」

「いや、もちろん」と彼は言った、「その人はそれらの資産を今すぐに処分して、それと引きかえに日常の暮しに今ちょうど必要としているものを手に入れるなり、あるいはそれら必需品を後になってそれと引きかえに調達できるだけの貨幣を手に入れておくなりするのに、何の妨げもありませんし、それもすべて即座にふんだんに手に入れることができるでしょう」

六

「ただしそれは」とぼくは言った、「あのネストルの知恵よりも、現にそのような家があることのほうを必要 D とする人が、ちょうどいまいたらの話だ。なぜなら、もし人間としての知恵とそれから生れてくるもののほうを、いっそう高く評価することのできる人であれば、その知恵もそこから生れてくる成果も、処分する必要に迫られ

本人もそうしたいということになったときには、その人のほうがもっとはるかにうまく処分できるだろうからね。それとも家の効用はまさに大、かつ必要欠くべからざるものであって、貧弱なあばらやによりはこのような家に住むことのほうが、人間の一生にとってもたらす違いは大きいものだが、他方知恵のほうは、その効用もわずかの価値しかないし、また最も重大な問題について知者であろうと無知であろうと、その差はわずかでしかない、というのだろうか。あるいはこの知恵のほうは人々はこれを軽蔑し、またそれを購なおうという人もないが、家に使われている杉材やペンテリコス産の大理石[2]は、これを必要として買いたいという人が大勢いる、というのだろうか。いやたしかに、もしも舵取りが知者であり、また医者がその技術において知者であるならば、あるいはその他のそういう方式の技術を立派に駆使できる人であるならば、そういう人は、どんなに大きな価値のある財物を所有するにもまして重んじられることだろう。また自分の問題にしろ他人の問題にしろ、どうすれば最もよく対処できるか、自分でよく思慮をめぐらすことができる人は、もしそうしたいと思うなら、どうしてその処分のできないことがあろうか」

E

七

エリュクシアスは、まるで何か不当な扱いでも受けたかのように、上目づかいに見て、答えて言った、「する

1　アテナイの有名な金持で、その家の豪華さはしばしば例に引かれていた。プルタルコス『英雄伝』の「アルキビアデス」(一九、二二)にその名が見られる。

2　ペンテリコス山は、アテナイ北東約一〇マイル、高さ約九〇〇メートルの山。そこから採られる大理石は白く硬いことでアテナイ人に喜ばれた。

とソクラテス、あなたはもし本当のことを言えと迫られたら、ヒッポニコスの子カリアス[1]以上に金持だとでもおっしゃるのでしょうか？　たしかにあなたは、いちばん重要な問題についてはどれ一つとってみても、彼よりも無知ではなく、むしろ、彼より知恵があると自認なさるでしょう。でもそれだからといって、あなたがいっそう金持だということには少しもなりません」

B

「君はどうやら」とぼくは言った、「エリュクシアス、いまわれわれの話し合っているこの議論を遊戯だと考えているらしい。つまり話はこうなっているけれども、本当のところはそうあるのではなくて、ちょうど将棋の駒のようなもので、これをうまく動かせば相手方を負かして、それを受ける指し手もないようにすることができるみたいなものだ、と思っているのだね。だから富裕な人々についても、おそらく君の考えているところでは、こちらのほうがいっそう真実だという説などひとつもなく、真でもあればまたそれに劣らず偽でもある、といったような議論が何かあって、それを主張して反対意見のものを抑えることができる、たとえばわれわれの場合は、

C

最も賢明な人がまた最も富裕である、とすることもできるわけであるが、じつはこれは正しいことを主張している人たちを、正しくないことを主張して抑えているのだ、と君はいうんだね。それもまあ何の不思議もないことで、ちょうど二人の人が文字に関して議論をして、一人は『ソクラテス』は『ソ』で始まると主張し、もう一人は『ア』で始まると主張する場合、『ア』で始まるとする人の議論の方が『ソ』で始まると主張する人の議論に勝つことがある、というのと同じようなものだ」

八

エリュクシアスは、そこに居合せた人々を見廻して、顔を赤らめ笑いながら、まるで先の話は聞かなかったような振りをして言った。

D
「わたしはこう思うのです、ねえソクラテス、話は、それをもってしてはここにいる人達の誰をも納得させられないようなものであってはならないし、また、それからは何の得るところもない、というものであってもいけないと思います。——だっておよそ道理をわきまえた人なら、われわれにとって、いちばん知恵のある人がいちばん富裕だ、などという説に、誰がいったい納得するものでしょうか？——いやむしろ、話は富を得ることについてなのですから、わたしたちが話し合わなければならないのは、どこから富を得るのが立派なことで、どこから得るのが醜いことなのか、また富そのものはどんなものなのか、よいものなのか悪いものなのか、ということだと思います」

E
「よろしい」とぼくは言った、「それではこのあとはしっかり気をつけることにしよう。君もいいことをすすめてくれるね。しかしこの話をもち出したのは君なのだから、富を得ることが君にはよいものと思われるのか悪いものだと思われるのか、どうして君のほうから言ってみようとしてくれなかったのかね。それに君の考えでは、今までの話はその点には触れていなかったというのだからね」

「それではわたしには、富を得ることはよいことだと思われます」と彼は言った。

1　父の大財産を相続して豪奢な暮しをしたが、しまいにはすっかり蕩尽して悲惨な晩年を送ったと言われる。『プロタゴラス』の対話の行われた所はカリアス邸とされている。また『ソクラテスの弁明』20A参照。アリストパネス『蛙』四三二行、『鳥』二八三—二八四行、『女の議会』八一〇行などにもその名が見られ、からかわれている。

九

彼がなおも何か言おうとしていると、クリティアスがそれをさえぎって言った。
「さあぼくに答えてくれたまえ、エリュクシアス、君は富を得ることはよいことだと考えているのだね」
「もちろんそうだとも。でなければぼくはきっとどうかしてるだろうよ。それにこの点に賛成しない人は一人もないと思うね」
「ところが」と相手が言った、「ぼくだって、富を得ることはある種の人にとっては悪いことなのだ、とする
396
ぼくの意見に賛成させられない相手は一人もいない、と思っているのだ。もしもよいものだとすれば、われわれの中のある人々には悪いものだと思われる、などということはきっとないはずだ」
そこでぼくは両人に言った、「ぼくとしては、もしいま君たちの意見が分れている問題点というのが、ひとはどうすれば最もすぐれた騎手になれるか、という馬術の問題について、君たちのうちのどちらがより正しいことを言っているか、という点であり、そしてぼく自身もたまたま馬術の心得がある、というのであれば、君たちの意見の相違をなくさせるよう進んで努力してもみることだろう——その場に居合せながら、できるかぎり意見の相違を止めようとしなかったというのでは恥ずかしいからね——。あるいは他のどんな問題に関してでも、君たち
B
の意見が相違して、いま問題になっているこの点で同意を得られないかぎりは、友人ではなくて、敵対していがみ合って別れるしかしようがない、という場合にはそうするだろう。

一〇

しかしいま君たちの意見が分れているのはまさに、生涯を通じて用いなければならない類のものに関してであり、それを有用なものと考えて配慮すべきであるか否かでは大きな違いをもたらすし、またそれらはギリシア人にとって詰らないものではなく、最も重大と思われるものの一つだ。――じっさい父親たちは、自分の息子がもう思慮分別もついたと思われる年齢になるとすぐに、いかにして金持になるかを考えるようすすめるが、それは君がもし何か富を得れば、ひとかどの者であり、得なければ何の値打もない者だ、と考えてのことだからね。――したがってもし、人々はこんな工合にきわめて熱心なのに、君たちは他の点では意見が一致していながら、こんなに重大なこのものに関しては一致していないというのならば、しかもその上に、富を得ることについて君たちの意見が相違しているのが、それが黒いか白いかとか、軽いか重いかとかではなく、それが悪いか善いかという問題であるのならば、君たちのように善悪に関して意見が一致しない場合ほど、お互いが敵味方に別れることになる問題はないし、しかもそれが、君たちが友であり親類であるのにそうなっているのだから――、そこでぼくは、君たちの意見がお互いに一致しないでいるのを、できるかぎり見逃すことはしないつもりだ。いやもしもぼくが自分でできるものならば、本当のところはどうなのかを君たちに話して、争いをなくさせるのにねえ。しかしいまは自分でそうすることはできずにいるし、君たちのほうはどちらも、相手を自分に同意させることができると思っているのだから、ぼくはこの問題の真相がどうなっているのか、君たちの間で意見の一致が見られるよう、喜んで及ぶかぎり援助する気でいる。そこで」とぼくは言った、「さあ、クリティアス、約束通りわれわ

(396)

れにも同意させるようやって見たまえ」

二

「いやおっしゃるまでもありません」と彼は言った、「わたしは、先に始めたように、このエリュクシアスに、人間には不正な人も正しい人もあると思われるかどうか、たずねることができればうれしいと思います」

「神かけて」とこちらは答えた、「もちろんその通りだとも」

「ではどうかね。君は不正をなすことは悪いことだと思うかい、それとも善いことだと思うかい」

「ぼくには悪いことだと思われる」

「ひとがかりに、金の力で隣近所の奥さんたちと不義を働くとしたら、そのひとは不正を働いていると君には思われるかね。それともそういうふうには思われないかね。とにかくこれは国家も法律も禁じていることだがね」

「不正を働いている、とぼくには思われる」

「それでは」と彼は言った、「もし不正な人間や、また不正をしたいと思っている人が、たまたま富裕であり、

397

お金も存分に使いうるものとすれば、その人は誤ちを犯すだろう。しかしもしその人が富裕というわけでもなく、使うに足る資金もなければ、したいことをなしとげることはできず、だから誤ちを犯すこともないだろう。してみればその人にとっては、金持ではないほうがいっそうためになるということになる、いやしくもその欲するところをなしとげることがより少なく、またその欲するところというのが邪悪なことであるからにはね。(1) もう一つ、

今度は病気であることは悪いことだと君は言うだろうか。それともよいことだと言うだろうか？」
「ぼくは悪いことだ、とする」
「ではどうだろう。抑制のきかない人たちがいると君には思われるかね」
「たしかに」
B 「そうすると、この人にとっては、食べものや飲みものあるいはその他の快いと思われるものも控えておくほうが健康のためにいっそうよいのだが、当人は抑制がきかないためにそれができない、というのであれば、この人にとっては、むしろそれらのものを調達できる資金を持っていないほうが、有り余るほどの便宜を持っているよりもましなのではないか。そうなれば、その人はいくら欲しても誤ちを犯す可能性はないだろうからね」

一二

C こうしてクリティアスは、見事にまた立派に話を進めたように思われ、そのためにエリュクシアスは、もしそこに居合せた人々の手前恥ずかしいと思わなかったら、きっと立ち上ってクリティアスをなぐろうとしたことだろう。富を得ることについて先に考えていたことが正しくなかった、と自分でも明らかになってみると、彼には、何か大事なものを奪いとられたような気がしたのであった。
ぼくはエリュクシアスのそういう気持を察知して、これが昂じて罵り合いやいさかいになりはしないかと心配

---

1 同様の議論は『エウテュデモス』281B～Cにも見られる。

(397)

して言った、「その議論は、ついこの間リュケイオンで、ケオス出身の人でプロディコス(1)という賢い人が話していたが、D そこに居合せた人たちには、馬鹿げたことを言っているように思われ、本当のことを言っているのだとは、そこにいた人の誰にも納得させることができないほどだった。とうとう一人のごく若い口の達者な青年が近づいて行って、彼の前に坐り、彼を嘲笑愚弄し、彼が言ったことの説明をして欲しいと責め立てた。しかもたしかにそれは、プロディコスよりはるかに聴衆に好評を博した」

「それでいったい」とエラシストラトスが言った、「あなたはその話をわたしたちに教えて下さることができますか？」

E 「もちろんだとも。ただちゃんと憶えていればだが。それはどうやらこんなふうなものだったようだ。――

一三

その青年は彼に、どういう意味で富を得ることが悪いことだと考えるのか、またどういう点でよいことだと考えるのか、とたずねた。プロディコスはそれに答えて、ちょうど君がいまさっき主張したと同じように言った、『立派なよい人にとってはよいものであり、また財産をいかに使うべきかを心得ている人たちにとってはよいものであるが、悪い人やそういう心得のない人たちにとっては悪いものである』とね。そして『その他のものについてもすべて同様である、それを使う人がどのような人かによって、もののほうも必然的にその人にちょうど似合った性質のものになるのだから』と言った。また言うには、『そしてアルキロコス(2)の詩にこう言っているのもうまく歌ったものだとぼくには思われる――

398

ひとはまたその時その時の行いにふさわしい思慮をもつ――』

『すると』と青年が言った、『いまもし誰かが、善き人たちが賢い人でもあるゆえんのその知恵においてわたしを賢くしてくれるとすれば、その人は同時にまた必ずやその他の事物もわたしにとって善いものにしてくれるはずです。それも、それらのことに対して直接には何も手出しせず、ただわたしの無知を変えて賢い人にしてくれることによってなのです。たとえば誰かがいまわたしを文法家にしてくれるとしたら、必然的にその人はまた他の事物をもわたしに対して文法に関係あるものにするし、またもしわたしを音楽家にしてくれるならば、わたしに関わりあるすべてを音楽に帰趨（きすう）させるはずです。それと同じことで、わたしを善き人にしてくれるという場

B

合には、同時にいろいろな事物もわたしにとって善いものにしてくれるのでなければなりません』

一四

しかしながらプロディコスはこれには賛成せず、ただ先の例には同意した。

『ではあなたはどちらだと思われますか』と青年は言った、『ちょうど家を作ることがひとの仕事であるのと同様に、ものごとをよいものにすることも人間の仕事だと思われますか。それとも善いものでも悪いものでも、始めに生じた通りのまま、それはずっと終りまでそのままであるのが定めだと思われますか』

1　当時高名だったソフィスト。『プロタゴラス』の登場人物の一人。

2　前七世紀の前半に活躍した詩人。そのFr. 67 (Hiller).

プロディコスはきわめてたくみに、彼らの話がどちらへ進んでゆこうとしているかを見て取ったらしくて、みなの居合す目の前で若造にやりこめられるところが暴露しないようにと――自分一人の時にこうなるのはいっこうにかまわないと考えていたから――、『それは人間の仕事だ』と答えた。

C 『あなたは』と青年は言った、『徳は教えられるものか、生まれつきのものか、どちらだと思われますか』

『わたしには教えられるものだと思われる』と彼は言った。

『すると』と青年は言った、『もし誰か、神に祈ることによって文法家になれるとか、音楽家になれるとか、あるいは何か他の知識を、本当は当人がそれを他の人から学ぶなり自分で見つけ出すなりしなければ持つことができないものなのに(1)、それを手に入れることができる、と考えている人があれば、あなたにはそれは愚かな人だと思われるのではありませんか』

D 彼はそれにも同意した。

『それでは』とその青年は言った、『プロディコス、あなたがよくやって行けるように、自分によいことがあるようにと神々に祈る場合には、ほかでもない、立派でよい人になりたいと祈っているのではありませんか、立派でよい人にはものごともよくあり、悪い人には悪くあるということでしたらね。そこでもし徳が本当に教えられるものでしたら、あなたが祈っておられるのはほかでもない、知らないことを教えてほしいと祈っておられるのは明らかです』

一五

E

そこでぼくはプロディコスに対して、もし彼がこの点で間違いにおちいっており、われわれの祈ることが神の手で即座にかなえられると彼が思っているのであれば、それは簡単な誤りではすまないと思われる、と言った。『あなたはいつでも熱心にアクロポリスへ行かれて、よきものを与えたまえと神々に祈り願われるけれども、あなたがたまたま願っておられるそのものを、かの神々が与えたまうことができるかどうかは、あなたは御存知ありません。それは例えば文法家の門を叩いて文法の知識を授けてくれるよう懇願し、自分では他のことは何も手がけずにいて、ただそれを得れば即座に文法家の仕事をすることができるようになる知識を求めるという場合と同じことです』

399

こうぼくが話している間に、プロディコスはその青年に反撃を加える準備をしていた。それは君がいまさっき言っていたちょうどその通りを示して自己弁護しようというもので、神々に祈っていたのが無駄であったと明らかになることを心配してのことであった。そのうちに体育場の管理官がやって来て、彼に体育場から立ち去るよう命じた。それは若い人たちにふさわしくないことを話し合っているから、ということで、ふさわしくなければとうぜん悪いことであるのは明らかだ、というのだった。——

一六

さてぼくが君にこういうことを話して聞かせたのは、ひとびとが哲学に対してどのような態度を取るか見ても

1 『アルキビアデス I』106D参照。

らうためだったのだ。もしいまプロディコスがこの場にいてこのことを言ったのであれば、彼は気が違っているのだとここにいる人たちに思われて、そのあげく体育場から追い出されるのが落ちだろう。ところが君は、いまこんな工合にたいへんうまく論じ、聴衆を納得させたばかりでなく、反論者をも君の意見に賛成させてしまったくらいだと思われている。それは明らかに、ちょうど法廷に見られるのと同じことで、二人の人が同じことの証人となる場合、一方は立派なよき人であると思われているが、他方は悪い人だと思われているとすれば、悪い人の証言によっては陪審員は少しも説得されず、それどころかおそらく反対の意見を持つだろう。ところがそれを、立派なよき人だと思われているほうが述べる場合には、すっかりそれが本当だと思われるであろう。こういうわけで、たぶんいまここにいる人たちも、君とプロディコスに対して、何かこのようなことを感じているであろう。つまりひとびとは彼のほうはソフィストであり大言壮語する人だが、君のほうはれっきとした市民であり一目も二目もおかれていると考えている。したがって彼らは議論そのものはさておいて、それを言っている人がどのような人かを見なければならない、と考えているのだ」

B

C

「しかし実際のところ」とエラシストラトスが言った、「ソクラテス、あなたはふざけておっしゃっておられても、わたしにはクリティアスの言っていることには明らかに一理あるように思われます」

「いやいやゼウスにかけて」とぼくは言った、「ちっともふざけてなどいないよ。しかしこの二人はこの問題をうまく立派に話し合ってきたのだから、どうして話の残りもやりおおせないことがあろうか。さて君たちにはまだ考察してもらわなければならないことが残っている、とぼくは思うのだ。なぜならいま君たちの間で、富がある人にはよいものであり、ある人には悪いものである、というこの点では意見の一致が得られたらしいからね。

D

だからあと残っているのは、富を得ることはそれ自体何であるかの考察だ。そのわけは、君たちはまずこの問題を知らなくては、それが悪いものなのかよいものなのか、という点で意見の一致を見ることもできないだろうからだ。[1] ぼくとしても、力の及ぶかぎりは君たちといっしょに考察してゆくに吝(やぶさ)かではない。それでは、富を得ることがよいことだと主張する人に、その富について、そもそもどんなものであるか、言ってもらうことにしよう」

E

一七

「とおっしゃっても、しかし」とエリュクシアスが言った、「ソクラテス、わたしは富を得ることについて、それが他の人と何もそう異っておかしなことだと言うのではありません。つまり財産をたくさん手に入れること、これが富を得ることだというのですから。このクリティアスにしても、富を得ることが何かこれ以外のことだとは考えていないと思います」

「そういうことならばさらに」とぼくは言った、「今度は財産とはいかなるものか、の考察が残っていることになるだろう。もう少し後になって、この点について、またもや二人で別のことを考えていることが明らかになるようなことのないようにね。なぜなら、たとえばあのカルタゴ人たちはこんな通貨を用いている。小さな皮に、せいぜい一スタテール銀貨[2]ほどの大きさのものが結びつけられていて、その結びつけられたものが何であるかは、

400

1 『メノン』71A～B参照。これはソクラテス常用の論法である。
2 二ドラクメに相当する。

それを作った人以外は誰も知らない。それに刻印が押されてひとは貨幣として用い、そしてこのようなものをいちばんたくさん所有する人が、いちばんたくさん財産を持っていると思われ、したがってまたいちばん富裕であると思われる。しかしわれわれの国において、このようなものをいくらたくさん持っている人がいても、山から

B 掘り出した石ころをたくさん持っている場合と同然でしかないだろう。またスパルタでは、鉄の重さを測ってそれを貨幣とみなしており、それも役に立たない屑鉄を使っている。そしてたくさんの重量のこんな鉄を所有する人が金持だと思われているが、他の国ではこれを持っていても何の値打もない。またエティオピアでは、彫刻された石を用いているが、それはスパルタの人には何の使いみちもないものである。また遊牧のスキュティア人にあっては、プゥリュティオンの家を持つ人があっても金持だとは思われないのは、われわれの国でリュカベトス(1)の山を持っている場合と同然であろう。

一八

C こうしてみると、これらのもののいずれも財産ではありえないことは明らかである、それを持っていても、それだからといって他の人より金持だとは思われない人もある以上はね。むしろ」とぼくは言った、「そのいずれも、ある人々には財産であり、それを持つ人は金持であるが、ある人々にとっては財産でもないし、それのおかげで金持になるわけでもない、それはちょうど美と醜も、すべての人にとって同じものがそうなのではなく、人が違えばその基準も違うのと同様である。したがってもし、スキュティア人にとっては家は財産でないが、われ

D われにとっては財産であるのはいったいなぜか、あるいは皮はカルタゴ人にとっては財産だが、われわれにはそ

うではないのはなぜか、あるいは鉄はスパルタ人には財産だが、われわれにはそうではないのはなぜか、ということをわれわれが考えてみようとするならば、そこに見出す答というのはまあこんなものではないだろうか。たとえばアテナイで、広場(アゴラー)に転がっている誰も使いもしない石を千タラントン[2]の重さ持っている人があっても、そのために他の人より金持だと見なされるようなことがあるだろうか」

「わたしにはそうは思われません」

「ところがしかし、それがリュクニトスの石[3]千タラントンを持っているのであれば、たいそう金持だとわれわれは言うだろうね？」

E　「まったくその通りです」

一九

「そのわけはこうなのだろうか」とぼくは言った、「われわれにとって一方は役に立つものだが、他方は役に立たないものだからだろうか」

「そうです」

1　アテナイの北東郊外にある小高い丘。
2　一タラントンは約三六キログラム。
3　パロス島産出の大理石のこと。リュクノスとはランプの意味で、これを掘り出すためにランプが必要だったから、という説と、この大理石の光沢がランプの光のようだったから、という説とがある。394E注2に挙げたペンテリコス産のものと並んでアテナイで珍重されていた。

「そこでまたスキュティアにおいても、こういうわけで家は彼らにとって財産ではない、——つまり彼らには家は何の役にも立たないという理由でね。そしてスキュティアの人は、どんなに見事な家でも、自分にとっては皮の服ほどの値打もないとみなすだろう。自分にとって一方は役に立つものだが、他方は役には立たないからだ。また同様にわれわれにとっては、カルタゴの貨幣は財産だとは思われない。なぜならこれをもってしては、われわれの必要とするものを、銀貨を用いる場合のようには得られないし、したがってこれはわれわれにとって役に立たないものだからである」

「ごもっともです」

「したがって、およそわれわれにとって役に立つものだけが財産なのであり、役に立たないものは財産ではないことになる」

401

「するといかがでしょう、ソクラテス」とエリュクシアスが口をはさんで言った、「わたしたちはお互いに話し合ったり傷つけ合ったりその他いろいろな手を使っている（役立てている）ではありませんか？ いったいそれが皆わたしたちにとって財産になるのでしょうか？ たしかに役に立つものであることは明らかですのにね。このように考えてもまた、財産とはいったい何であるのか、わたしたちにまだ明らかになってはいなかったのです。というのは、およそ財産といわれるほどのものは必ず役に立つものでなければならない、ということにはすべての人の意見が大体一致しているのですが、しかし役に立つものがすべて財産というわけではないのですから、そのうちのどのようなものが財産なのでしょうか」

二〇

B 「さあそれでは[1]、もう一度こんなふうに考えて行ったら、ぼくたちが求めているものがいっそうよく見出せるのではなかろうか。つまりぼくたちが財産を使うゆえんはいったい何か、また財産を持つことは何を目的にして考え出されたのか、——たとえば薬は病気を退けるために考え出された、というようなことだ。というのも、そうすればきっとわれわれに問題がいっそう明らかになるだろうからね。およそ財産であるものはすべて役に立つものでもあるが、役に立つものの中の一種がわれわれの言うところの財産である、というのが必然と思われるのだから、このあと考察しなければならない問題として残っているのは、どのような目的のために使われて役に立つものが財産なのか、ということであろう。なぜなら、われわれが何かを作るために用いるものはすべてきっと

C 役に立つものだろうが、それはちょうど魂を持っているものはすべて動物であるようなもので、だがしかしその動物の中の一種族をわれわれは人間と呼んでいるのだからね。そこでもし誰かがわれわれに、何がなくなれば医術もその道具も要らなくなるのだろうか、とたずねたとしたら、われわれはそれに答えて、もし諸〻の病気が身体から取り去られて、ぜんぜん病気にならないか、あるいはなってもすぐに取り去られるかする場合にそうなる、と言うことができるだろう。そうしてみれば、思うに医術というのは、いろいろな知識の中で、病気を除き去るというこのことのために役に立つものだということになる。

1　テキストの切り方は、スイエ、ヘルマンに従って、ここからソクラテスの言葉とする。

二

D　またもし誰かが改めてわれわれにたずねて、何が取り去られるとわれわれは財産を必要としなくなるのだろうか、と聞くとしたら、いったい答えることができるだろうか？　それができなければ、改めてこう考えてみよう。さあ、もし人間が食べものや飲みものなしで生きることができ、またそれで飢えも渇きも感じないとすれば、飲食物そのものも、あるいはそれを手に入れるための銀とか何か他のものとかも必要とすることがあるだろうか？」

「要らないとわたしには思われます」

E　「では、その他のものでも同じことなのではないか。もしわれわれが身体の面倒をみるために、いま必要としているもの、すなわち暖かさとか時には涼しさとか、またその他身体が欠乏を感じて要求するものがすべて要らないとすれば、いわゆる財産なるものは、われわれにとって無用のものとなるだろう。つまり、われわれがいま財産を手にしたいと望んでいるのは、われわれがそのつど必要を感ずる身体の欲望と要求を充たさんがためなのだが、もし誰一人としてこれらの目的とされるものを何一つまるで必要としないならばね。だからもし財産の所有はこのことのため、すなわち身体が必要としているものの面倒をみることのために役に立つものであるとすれば、いまもしこのことがわれわれからすっかり取り去られるならば、われわれは財産を少しも必要としないだろうし、おそらく財産などまったくなくなってしまうだろう」

「そう思われます」

「するとどうやらわれわれには、いろいろなものの中で、いま言ったことをするのに役に立つものが財産であると思われる」

一三

そういうものが財産であるということに、エリュクシアスは同意したとはいえ、このちょっとした議論は彼を大いに混乱させていた。

402 「ではこういうことはどうだろう。同じ事物が同じ仕事のために、時には役に立つが時には役に立たない、というのはあり得ることだと言ったものだろうか」

「わたしならそうだとは言いません。むしろ、もしわたしたちが同じ仕事のために、そのものを何か必要とするならば、それはまた役に立つものでもあるのだ、とわたしには思われますし、もし必要としなければ役に立つものではないと思われます」

「するともしわれわれが火を使わなくとも銅の彫像を作ることができるとすれば、火はこの仕事のためには少しも必要ではない、そしてもし必要でないなら、それはわれわれの役に立つものでもないことになるのではないか。同じ論法はその他のものについても通用するだろう」

B 「そう思われます」

「すると、それがなくても何かが生じうるというかぎりのものは、どれもみな、そのことのためにはわれわれにとって何の役にも立たないと思われるのではないか」

「そうです」

「では、銀や金やまたその他にも、食物や飲物や衣服、寝床、家などとは違って、われわれが身体のために直接そのものを使うわけではないものがいろいろあるが、もしわれわれがそういうものがなくても、身体の必要とするところを充して、もはや欠けるところがないようにしうることが明らかな時には、そういう銀、金、その他 C その類のものは、この目的のためにはわれわれにとって何の役にも立たないものであると思われるだろう。とにかくそれらのものがなくても生ずることができるのだからね」

「そうです」

「したがってまたそれらは、何の役にも立たないのならば、われわれにとって財産とも思われないだろう。そうではなくて、それらは、われわれがそれによって役に立つものを手に入れることができる手段でしかないものであろう」

二三

「ソクラテス、金や銀やその類の他のものがそれゆえにわたしたちにとって財産ではない、ということの点には、わたしはどうも納得しかねます。といいますのは、なるほどわたしたちにとってとにかく役に立たないものは財 D 産でもない、というあの点と、有用な財産なら身体の世話という今の目的のために最も役に立つものの中に入る、ということには大いに納得しているのですが、しかしわたしたちは現にこれらのものを用いて必要なものを調達しているのですから、それがわたしたちの生きてゆく上で役に立つものではない、ということの点には納得できな

いのです」
「さあそれでは、こんなことをわれわれはどのように言ったものだろうか。いったい音楽とか読み書きとか、あるいは何か他の知識を教えて、その代りにその報酬を貰って自分たち自身のために必要なものを手に入れている人たちというのはいるだろうか」
「はい、います」
E
「ではその人たちは、その知識によって必要な品々を手に入れることができるわけだ。ちょうどわれわれが金や銀と引き換えに得ているのと同じように、その知識と引き換えにね」
「そうです」
「では彼らが生きてゆくために用いるものを、それによって手に入れているのであれば、そのもの自身も生きてゆく上に役に立つものであるのではないか。なぜなら銀にしても、それが役に立つものであるとわれわれが言うのはこのため、すなわち、それによってわれわれが身体のために必要とするものを手に入れることができるからなのだから」
「その通りです」と彼は言った。

二四

「すると、それらの知識がこの目的のために役に立つものに属するとすれば、金や銀が財産である理由とまさに同じ理由によって、知識が財産であることはわれわれには明らかなのではないか。またそれを持っている人が、

他の人より金持であるということも明らかなことだ。少し前にはわれわれは[1]、彼らが最も金持であるかどうかという議論を、あんなに苦労して受け入れていたがね。しかしいま意見の一致を見たところからしても、そういう結論になるのは必至で、時としてより知識のある人がいっそう金持であるということになるのだ。なぜなら、もし誰かがわれわれに、いったい馬は誰でもすべての人に役に立つものだと思うか、とたずねたとすれば、君はさて、それを認めるだろうか。それとも、どのように馬を用いるかを知っている人には役に立つだろうが、それを知らない人には役に立たない、と言うのではないかね」

「そう言うでしょう」

「それでは」とぼくは言った、「同じ論法によって、薬にしても誰でもすべての人に役に立つというわけではなく、それをいかに用いるべきかをちゃんと知っている人にだけ役に立つのではないか」

「そうです」

「ではその他のものでもすべて同様ではないか」

「そのようです」

B

「すると金でも銀でもその他財産だと思われているものでも、それをどう使うべきかをちゃんと知っている人にだけ役に立つものだ、ということになる」

「その通りです」

「では前には[2]、それらのもののそれぞれをどこでどんなふうに使うべきかを知るのは、立派なよき人にだけできることだ、と思われていたのではないか」

「そうです」

「したがって人間の中でも立派なよき人にだけそれらは役に立つということになる。その人たちがいかに使うべきかを知っているのだからね。そしてこの人たちにだけ役に立つのならば、それらが財産であるというのもこの人たちにとってだけのことであると思われる。しかしながら思うに、馬術を知らないために、馬を持っていても、今は自分にとっては何の役にも立たない、という人でも、もし誰かこの人を騎手にしてくれる人があれば、それは同時にまた以前より富裕にもしてくれたことになるだろう。前には当人にとって役に立たないものだったものを、役に立つものにしてくれたわけだからね。つまりひとに何かある知識を授けることによって、同時にその人を金持にもしたことになるわけだ」

「そう思われますね」

二五

「とはいえクリティアスに代って誓えると思うのだが、彼は今のこの議論ではまったく納得しなかったらしい」

「ええけっして」とクリティアスは言った、「もしそんなことを信じるようなら、わたしはどうかしているのでしょうよ。それよりもどうしてさっきの話を終いまでやりとげられなかったのですか。金や銀やその他そういっ

C D

1 394A～395E.

2 397E.

た財産だと思われているものがじつはそうではない、というあの議論ですがね。あなたが今ちょうど委しく話しておられるこの議論にしても、わたしは拝聴して大変に感心しているのですから」

そこでぼくは言った、「クリティアス、君がぼくの話を聞いて楽しいというのは、ちょうど吟誦詩人がホメロスの詩を吟誦するのを聞いて楽しいというのと同じようなことらしい。君はこれらの言葉は何一つ本当だとは思っていないのだからね。

二六

E　とはいえ、さあ、こんな問題についてはわれわれはどう言ったものだろう。人々のうちで大工にとっては、家を作るためになにかあるものが役に立つ、と君は言うだろうか」

「そうだと思われます」

「それでは、石や煉瓦や木材や、他にも何かそのようなものがあればそれも含めて、彼らが家を作るのに用いるそれらのものが役に立つものである、とわれわれは言ったものだろうか。それともまた、彼らが家を作るときに使う道具や、それら木材や石を用意するのに使う道具や、さらにその道具のまた道具もそうだと言ったものだろうか」

「わたしには」と彼は言った、「それらすべてが、かの目的のために役に立つものだと思われます」

「それでは」とぼくは言った、「その他の仕事においても、それぞれの仕事のためにわれわれが使うそのものだけでなく、それを用意するのに使うもので、それが生ずるためになくてはならないものもまた役に立つものな

のではないか」
「まったくその通りです」
「ではさらにまた、それらを調達するのに使うものや、そのまた一つ先のものや、さらにまたそれを作るために使うものや、さらにまたその先のもの、というふうに、ついには無限にたくさんのものに至るが、そのすべてが最初のものを作り出すために役に立つもの、と思われることになるのは必然なのではないか」
「事実それらがそうなるのに何の支障もありません」と彼は言った。

二七

「ではもし人に食べものや飲みものや衣服やその他身体のために用いようとするものが備わっているとしたらどうだろう。いったい、その上に金や銀やその他、現に持っているものを調達するための手段となるものなど何かさらに必要とするだろうか」
「わたしにはそうは思われません」

「では人が身体の必要のためにそれらのいかなるものも必要とはしない時がある、とわれわれには思われるのではないか」
「はい、そうです」
「そうすると、もしそれらのものがこの仕事のためには必要でないものだと思われるならば、今度は反対に役に立つものと思われることはけっしてあってはならないのではないか。なぜなら、同じ仕事のために時には役に

立ち時には役に立たないというようなことはあり得ない、と定められていたのだからね」[1]

「しかしそうだとすると」と彼は言った、「あなたの議論もわたしの議論も同じことになりますね。だってもしそれらのものがいったんその目的のために役に立つものになるならば、それが今度は役に立たないものだ、と

C いうことにはけっしてなりえないだろうというのですからね。しかしいまわたしが言うのは、役に立つといっても、何か悪いものを作り出すためという場合もあれば、また役に立つものを作り出すためという時もある、ということなのです」

「ではいったい、何か悪いものが何かよいものを作り出すために有用でありうるだろうか」[2]

「そういうことはないと思います」

「そしてわれわれがよいものであるというのは、人が徳によって行うもののことなのだろうか」

「そうです」

「それでは、もし人が誰か他の人の言葉を聞きとる働きをすっかり奪われているとしたら、言葉を通じて教えられるかぎりのものを何か学ぶことができるだろうか」[3]

「ゼウスに誓って、できないとわたしには思われます」

D 「それでは、聞くことはわれわれにとって徳を得るために役に立つものの一つだと思われるのではないか。少くとも徳が聞くことによって教えられるものであり、また学習のためにわれわれがこの聞くことを用いる以上はね」

「そう思われます」

二八

「では、もし医術が病気の人を治すことができるのであれば、時として医術もまた徳を得るために役に立つものの一つであることはわれわれに明らかなのではないか。――医術の助けでものを聞く働きが与えられる以上はね」

「そう言っていっこうに差支えありません」

「ではまたさらに、もしわれわれが財産の力によって医術を身につけるとするならば、財産もまたわれわれにとって徳を得るために役に立つものであることは明らかなのだろうか」

E

「その通りですとも」と彼は言った。

「ではさらにまた、同様にしてわれわれが財産を得る手段とするものもそうなのではないか」

「まったくのところすべてそうなります」

「それでは、人が悪いことや恥ずべきことをして自分のために銀貨を手に入れ、それを支払って医術を習得し、その医術によってそれまでは聞くことができなかったのができるようになることがある、と君には思われるだろうか。そしてまさにその聞くことを、徳やその他何かその類のもののために用いるのだ、と思われるだろうか」

1　402A1-4.

2　テキストの切り方は、スイエ、ヘルマンに従い、ἔγωγ᾽ ἂν φαίην をクリティアスの言葉に入れる。

3　テキストの読み方は、スイエ、ヘルマンに従い、コンマと γε を省く。

「わたしにはまったくそうだと思われます」
「しかるに、悪いものであるならば、徳を得るために役に立つものではありえないのではないか」
「はい、役に立つものではありません」
「してみると、それぞれの目的のために役に立つものをわれわれが調達する手段となるものが、また当の目的のために役に立つものであるとは、必ずしも決っていないわけだ。というのは、それだと時として悪いものが何かよい目的のために役に立つものである、と思われる場合もあることになるからね。

二九

しかしそれは、次のことを見ればいっそう明らかになるだろう。もしそれぞれの目的のために役に立つものというのは、その目的のものが始めから存在する場合は別として、それなしでは目的のものは生じえないというもののことであるとしたら、さあ、このようなものについて君はどう言うだろうか。いったい無知が知識のために役に立つものでありうるのだろうか。あるいは病気が健康のために、また悪徳が徳のために役に立つものでありうるのだろうか」
「わたしなら、そうは言いません」
「ところが次のことはありえないとわれわれは認めるだろう。はじめに無知があったのではない人の中に知識が生ずることや、また健康が、はじめに病気でなかった人の中に生ずること、また徳が悪徳があったのではない人の中に生ずることはありえない、とね」

B ——いまぼくが思うに、たしかに彼はそうだと言ったのだった。——

「してみれば、あるものが生ずるためになくてはならないものが、そのあるものにとって役に立つものでもある、とは必ずしもきまってはいないように思われる。もしそうなら、明らかにわれわれにとって無知は知識のために役に立つものであり、また病気は健康のために、悪徳は徳のために役に立つものであることになるだろうからね」

三〇

彼は、これらすべてが財産であるということにならないかぎりは、以上の議論でもなかなか納得しそうにもなかった。ぼくは彼を説得するのは、諺に言う石を煮る(1)のと同じことなのを見て取って、こう言った。

C 「いやもうこの議論は止めておこう。役に立つものと財産とが同じものなのかどうか、われわれは意見の一致を見ることができないのだからね。しかしもう一つこういう問題についてはどう言ったものだろうか。身体と毎日の生計のためにできるだけたくさんのものを必要とする人の場合と、できるだけ少し、またささやかなものさえあればよい人の場合とでは、われわれはどちらのほうがより幸福で、またいっそうすぐれていると考えるだろうか。この問題もおそらくこんなふうにすればいちばんうまく考察されることになるだろう。その人をわが身に D うつして考えて、病気にかかっている場合と健康である場合と、どちらの状態のほうがよいか考察するならばね」

1 始めから不可能なことに無駄骨折りすることを言う諺。アリストパネス『蜂』二八〇行にも見られる。

「いや、それなら」と彼は言った、「そんなにたいそうな考察も要りません」
「それはたぶん」とぼくは言った、「健康な人の状態の方が病気の人よりもすぐれていることは誰にでもたやすく認められるから、というのだろう。ではどうだ、われわれがより多くの、またよりいろいろなものを必要とするようになるのはどちらの場合だろう、病気の時だろうか、健康な時だろうか」
「それはわたしたちが病気の時です」

E

「してみれば、われわれが自分でもいちばん悪い状態にある時に、身体の快楽のためにあるものを激しく、また量も多く欲しがり必要とするわけだね」(1)
「そうです」

三一

「それでは同じ論法によって、そういったものを必要とするのがいちばん少ない時に、その人は自分でもいちばんよい状態にある、ということが明らかなように、今度は二人の人がいて、一方は激しくまたたくさん欲しがり必要とするが、他方は少しだけ、それもおだやかに欲するという場合も同様なのではないか。たとえばこんなことだ。ある人々が博奕(ばくち)うちだったり、あるいは大酒飲みだったり、あるいはまた大食らいだったりする人々が——、というのはこれらはみな欲望以外の何ものでもないからね」
「たしかにその通りです」
「そして欲望というのはすべて、何かが欠けていることに他ならない。するとこれをいちばん多く感じている

406
人は、そのようなものをぜんぜん感じないとか、あるいはなるたけ少ししか感じないとかいう人よりも悪い状態にあるわけだ」

「まったくのところわたしも、そのような人はたいそう困った人たちだと思います。そしてそういう状態がひどければひどいほど、それだけいっそう困った人だということになります」

「それでは、ある目的のためにわれわれがそれをちょうど必要とするというのでなければ、それらのものはわれわれにとってこの目的のために役に立つものではありえない、と思われるのではないか」

「そうです」

「それゆえにとうぜんのこととして、もしそれらのものが、身体が必要としているものの面倒をみるために、われわれに対して役に立つものであるべきならば、同時にまたわれわれがこの目的のために、それらを必要としていることになるのではないか」

「わたしはそうだと思います」

「そうすると、この目的のために役に立つものがいちばんたくさんある人というのは、またこの目的のためにいちばんたくさんのものを必要としている人であることは明らかではないか。役に立つものはすべて、必ずまた必要とされてもいるにきまっている以上はね」

「わたしにはそうなることは明らかだと思われます」

1　『ピレボス』44E～45C、『ゴルギアス』493～495参照。

「したがってこの論法に従うかぎりは、財産がたくさんある人というのは、身体の面倒をみるために使うたくさんのものを必要としてもいる、ということは必然と思われる。この目的のために役に立つものが財産だということが明らかになっていたのだからね。かくてとうぜんの帰結として、われわれには、最も富める人々が最も悪い状態にあるということは明らかであろう。この種のものをいちばんたくさん欠いている人たちなのだからね」

アクシオコス

——死について——

西村純一郎訳

登場人物

ソクラテス

クレイニアス

アクシオコス

一

ソクラテス　キュノサルゲス[1]へ出かけようとしてイリソス川[2]のほとりにさしかかったとき、わたしの耳に「ソクラテス、ソクラテス」と、誰かの叫ぶ声がとびこんできた。それでふり向いてどこからかと見まわしていたら、アクシオコスの息子クレイニアスが、音楽家のダモン[3]やグラウコンの息子のカルミデス[4]といっしょに、カリロエ[5]のほうへ走っていくのが見える。クレイニアスにとって、ダモンは音楽の方面の先生であり、カルミデスは友愛

B

でもって恋しかつ恋される仲であった人だ。そこでわたしは、手っ取り早く出会うために〔キュノサルゲスへ〕直行する道からそれて、かれらのほうへ面と向っていくべきだと思った。

ところでクレイニアスは涙ながらに言った、「ソクラテス、あなたのことでいつも噂にのぼるあの知恵を示す機会は今なのです。というのは、わたしの父がにわかに悪くなって臨終を目前にしています。そして悲しみにくれて末期を堪えかねています。以前には、死を恐れる人たちを嘲り、気安くからかってすらいたのですけれども。ですから、いらして、あなたのいつもの仕方で父を励ましてやって下さい。父が行くべき所へ嘆かずに行ってく

C

れて、また、そうさせてあげることで、わたしやあとに残る者たちにとっても敬虔なつとめが果たされますように」「いや、むろん、クレイニアス、ふさわしいことなら何ひとつわたしは断わりはしないだろう。しかもきみは敬虔なつとめにと招いてくれているのだしね。しかしとにかく急ごう。事情がそうなら迅速を要するから」

クレイニアス　ソクラテス、あなたが現われただけで父は気持ちが楽になるでしょう。じじつこれまでも何度

も父は、病状から立ち直ってきたのですから。

365 D

さて、城壁ぞいの道のイトンの門[6]のところを、さらに急ぎながら行ってみると、――というのは、クレイニアスの父はこの門の近く、アマゾン[7]たちの記念柱のすぐそばに住んでいたからだが――、かれは、わたしたちが会って見たところでは、すでに感触を取り戻し、身体(からだ)はしっかりしていたけれども、気魄は弱っていて、慰めなしではまったくどうにもならぬ状態であり、しばしばからだを起しては、涙を流したり手を叩いたりしながら呻き声を立てていた。

1 「白犬」と訳せる、アテナイ市の南郊外ディオメイア区の、イリソス川の南側にある神域で、ヘラクレスの神殿及び同名の体育場があった。犬儒派のアンティステネスが問答をしたところとしても知られている。

2 この川は、アテナイ市東南郊外にそびえるヒュメットス山の北斜面に源を発し、アテナイ市城壁の南側を東から西に流れ、ケピソス川に合流してサロニカ湾に注ぐ。

3 ランプロスおよびアガトクレスの弟子で、当代の最も有名な音楽家。『国家』III. 400B～Cには音楽理論の権威者として言及されている。

4 ここに出ているグラウコンは、プラトンの母方の祖父である。

カルミデス(前四五〇頃―四〇三年)はプラトンの母の弟。なお『カルミデス』154A～B, 158A～Bおよび『テアゲス』128Dをみよ。

5 イリソス川の堤に近く、この川とオリュンポスの社(アクロポリス東南端にあるゼウスの社)との間にある有名な泉。いまクレイニアスは城壁ぞいの道を川上の方へ、東北方向に走っている。

6 アテナイの城壁にある門の一つで、アクロポリスないしディオニュソス劇場の南にあったらしい。

7 伝説に残る女戦士たちよりなる民族である。コーカサスから来たと伝えられ、小アジアの北東部、黒海沿岸に住み、地中海沿岸各地を侵略したという。またアイスキュロス『慈みの女神たち』六八八行他によれば、かの女らはテセウスをうらんでアテナイへ来襲し、アレイオス・パゴスの丘に陣取って激戦ののち敗れたという。

二

それで、かれを見るとわたしは言った、「アクシオコス、これはどうしたことだ？　以前の誇り、徳に対する一貫した讃辞、きみのなかの不撓不屈の勇猛心はどこへいったのだ？　だってきみは、まるで臆病な競技者のようになって、体育〔練習〕場ではさっそうとして見えていたのに、いざ試合となっておくれをとっているのだから。

B　きみは言論によく耳を傾けてきたひとで、年齢もそれほどになっているというのに、また、ほかの点は何でもないにしてもとくにアテナイ人であるというのに、もともとから定められてあった事柄をていねいに考察しようとはしないのかね？　つまり、みんなに言われている普通の言い方だが、人生は一種の異郷生活である、そして人はほどよくこの世を過ごしたら、あとはパイアン(1)を歌うまでにはいかずとも機嫌よく、帰るべき所へ帰って行かねばならないというあの定めのことを。そして、そんなに柔弱なありさまで執着をひき離しかねているというのはまるで幼児のようであって、思慮深い年齢らしくもないのだということを」

C　**アクシオコス**　それは本当だ、ソクラテス。そしてきみの言うのが正しいことは、わたしにははっきりわかっている。ところが、まさにこの由々しい問題の瀬戸際にきてみると、どうしてだかしらないが、あの強硬にくどいまでに語られていた言論が、知らぬまに雲散霧消してかえりみられないようになり、むしろそれにかわって、もしもわたしがこの世の光ともろもろの善きものを奪われようものならとか、またわたしが腐敗して蛆虫か虫けらになって、目も見えず耳も聞こえず、ゆきあたりばったりにごろごろすることになろうものならとかという、ある種の恐怖心が取りつき、わたしの理性をずたずたに引き裂いているのだよ。

三

D **ソクラテス** それはねアクシオコス、きみが無理解に加えて無考えであって、無感覚と感覚とを接続させて、自分自身に矛盾することを言ったりしたりしているからだよ。つまり、きみは、一方で無感覚になることを嘆きながら、同時に他方で腐敗することや楽しみを奪われることを苦にしており、しかもそれは、異なったものになって生きるために死ぬのだ、そして完全な無感覚ないし生まれる以前のと同じ無感覚へと移るのではないのだと思ってのことである。にもかかわらずそのことを、考慮に入れていないのだよ。ところが、ドラコン(2)やクレイステネス(3)の国政の時代には、きみの身辺に何ひとつ悪いことはふりかからなかったのだが、——なぜって、そもそも第一に、ふりかかる対象のきみがいなかったのだから——、それと同じく、死後にだってふりかかってくることはないだろう。なぜなら、ふりかかろうにも、そのきみがいないだろうからね。だとすればだ、きみの言うような駄弁はいっさいふりすてなさい。一旦、結合が解き放たれ、魂が自己本来の場所に坐を与えられると、とり残された身体は、土の質でしかなく理性を欠いているから、もはや人間ではないということ、このことをよくわ

E

1 元来はアポロンその他の神々に、後には人間にも、捧げられた一種の讃歌。人生の苦痛や悲哀をいたわる歌であり、戦勝歌であり、宴会の祝い歌でもあった。

2 アテナイで初めて掟を制定した(前六二四/三年)人で、ソロンの立法(前五九四/三年)に先立つ。おおかたの犯罪を死罪とした峻厳さで知られる。

3 アテナイの政治家で、前六世紀末に、ペイシストラトス及びヒッピアスの僭主制の崩壊後徹底した民主改革を断行し、アテナイ民主制の基礎を敷いた。その改革は、従来の氏族制の四部族を地区制の一〇部族に分け替えたり、陶片追放の制度を定めたりで、相当の犠牲者を出した。

(365)

きまえて。

なぜなら、わたしたちは魂なのだから。すなわち、死すべきものという牢獄に閉じ込められてきた不死なる生きものなのだから。366 そして一方、この仮小舎のほうは、困ったことにもともとからの定めがこれを〔わたしたちに〕当てがってくれたのだけれども、このものには、楽しみといえば、うわべだけでつかのまに飛び去るような、そして〔楽しさ以上の〕もっと多くの苦しさに〔移るように、苦しさと〕混ぜ合わされてある楽しさが、そなわっており、また苦しみといえば、楽しさを微塵もふくまぬ、まじりけのない、しかも永続きする苦しみが、そなわっているというわけなのだからね。つまり、もろもろの病気や、もろもろの感覚器官の炎症や、さらには内臓の疾患だがね。そしてそれらの病苦を、魂は、〔自身が身体(からだ)中に〕もろもろの器官を通じてゆきわたっているので、やむなくいっしょに苦しんでいるわけで、だから魂は、天にある〔自身と〕同族の精気(1)に恋いこがれもし渇望もしているのだ。B かしこでの生活と踊りにあこがれてね。というわけだからしたがって、生きることから離れるということは、悪いことから善いことへ移行することなのだ。

四

アクシオコス　そうだとすると、ソクラテス、生きることを悪と見なすのなら、きみはなぜそのなかに留まっているのか？　しかも瞑想家として、理性においてわれわれ大多数の者たちに抜きんでているきみが？

ソクラテス　しかし、アクシオコス、きみは真実を証言しているとは思えないね。きみはアテナイ人の大衆と同じように、わたしが物事の探求を好む者であるのを見て、だから何かを知っている者だと思っているのだね。

C ところがわたしは、そこらの普通一般のことを知りたいと、祈るばかりなのだ。つまり、深遠な事柄を知るにはほど遠い者なのだ。そして、わたしが語っていることは、ほかならぬ賢い人プロディコスの[2]〔言葉の〕おうむ返しなのだ。その言葉のあるものは半ドラクメで、あるものは二ドラクメで、あるものは四ドラクメで、買われたものだがね。というのは、あの人は、ただでは誰にも教えず、いつでもエピカルモスの[3]文句を唱えるのがかれの習慣だからね。「手が手を洗う」とね、つまり、ものを出せ、そのうえでものを取れとね。とにかく、つい最近[4]もかれはヒッポニコスの子カリアスの[5]邸で講演をし、ほかならぬこの私が、すんでのところで人生に終止符をうつと

1　原語はアイテール。『パイドン』109B〜Dに、水中生物の知らぬ空気中世界が水の外にあるように、空気中生物の知らぬ精気(アイテール)宇宙が空気層の外にあるという考え方が紹介されている。

2　アッティカ東南沖ケオス島出身、外交使節としてたびたびアテナイへ来、かたわら講演をしたソフィスト(『ヒッピアス(大)』282C)。ソクラテスと同年輩(『プロタゴラス』317C)ないしやや年上で、よく戯れにソクラテスの先生とされている(『メノン』96Dなど)。『プロタゴラス』315D〜316Aには、前四三三/二年頃四〇歳くらいのプロディコスがカリアス邸で講じている有様が描かれている。『クラテュロス』384B〜Cには、それより後年にソクラテスがプロディコスの一ドラクメ(小麦約一七リットル相当の貨幣単位)分の講義を聴いたと記されている。『ソクラテスの弁明』19Eによればプロディコスは前三九九年に存命中。

3　シケリアの喜劇詩人(前五三〇頃—四四〇年頃)。ただし出生地は小アジア西南端沖のコス島か。引用断片については、Fr. I. 23B30(DK)をみよ。

4　この対話の設定年代は前四〇四年頃と考えられる。368D注6と解説一の末尾(三〇九ページ)をみよ。

5　アテナイきっての富豪(前四五〇頃—三七〇年頃)。『プロタゴラス』314E〜316Aによれば、前四三三年頃すでにその邸宅はソフィストたちの逗留場所であり、『ソクラテスの弁明』20A〜Bによれば、前三九九年になお息子たちのためにソフィストを迎えており、他の人々が払った合計を越える金額をソフィストたちに与えて来ている。かれの姉妹は一人はアルキビアデスの妻、もう一人はイソクラテスの母であり、かれの父ヒッポニコスは前四二四年にデリオンで戦死した将軍であり、母は再婚でペリクレスの妻となった。またかれ自身は政治・軍事面でも名を残している。

ころであったほど、それほどまで、生きるということを非難告発したばかりだ。そしてそれ以後わたしの魂は、死にたがっている、アクシオコス。

五

D

アクシオコス　で、語られたのは、どんな内容だったのかね？

ソクラテス　想い出すままにそれを話してあげよう。かれは言った、――

年齢のうえでいえば、どんな時期が苦しみに無縁であろうか？　生まれた最初の時には、嬰児は、生きることを苦痛から始めるので泣き声をあげるのではないか？　ともかく、何ひとつ苦しみの種には事欠かないわけで、空腹だったり、寒かったり、暑かったり、叩かれたりすると苦痛を感ずるのだ。受ける苦しみをしゃべる力はまだないが、泣き声を立てるとか、そのいらだたしさをあらわすあの一つの声だけは持っていてだね。そして、数

E

多くの苦痛をなめて七歳に達すると、児童の付添たち、読み書きの先生たち、児童体育の先生たちが絶対支配者となって立ち現われる。そして成長してゆく間には、文芸解説者たち、幾何学者たち、軍事教練師たち、たいへんな数の主人たちが上に立つ。そして、青年たち(一八歳)の名簿に登録された後は、担当長官とびんたの恐怖が、

367

さらにはリュケイオンとかアカデメイアとか体育場監督官たちとか警棒とか、際限のない厭うべきものがかれらを取締る。そして青年の世代は、終始、風紀監督官たちと、アレイオス・パゴス(1)の評議会(2)に属する青年問題委員会のもとに置かれている。ところで、それらのものから解放されるときになると、すぐに、人間はどんな人生行路をゆくのだろうかという思案や推理が心に忍び込む。そして将来の困難を思うと、初めにあった恐怖などは子

供の遊びごとや案山子に見えてくる、幼児たちはそれらをほんとうに恐がるけれども。というのは、遠征や敗北 B やたえまのない戦闘があるのだから。それから、そのつぎには、知らぬまにあの老年がこっそりやってくる。もともとからの定めのもとで死すべくまた回復しがたく定められているものは、すべてそこへと流れつくのだけれども。そして、もしひとが、生きることを、返すべきものであったとしてなるたけ早く返すようにしないなら、もともとからの定めは、いわば高利貸となって立ちはだかり、ある人からは視覚を、またある人からは聴覚を、また多くのばあい両方を抵当としてとりたてる。そして、もし人がなおも生きながらえるなら、麻痺させ、不具にし、脱臼捻挫を起こさせる。そのほか、かなり年をとっていながら壮年同様に元気な人たちがいて、そして、ものわかりの点では、老人たちは再度子供になってゆく。

六

C このことのゆえに(3)神々もまた、人間界の事情をよく知っておられ、神々の最も気にかけられるような人たちを、〔いまの〕生存から解放してくださる。というのは、〔デルポイにあるアポロン〕神のピュト(4)神社を建設したアガメ

1 リュケイオンはアテナイ市東郊外イリソス川ぞいにあった体育場。アカデメイアは、元来は英雄アカデモスの所領とされ、アテナイ市北西一キロメートル余り、ケピソス川のほとりにあって、ここにも体育場があった。これはプラトンやアリストテレスの学校開設以前への言及である。

2 「アレスの岩丘」の意味で、アクロポリスの西、すぐそばにある岩だらけの高台である。アテナイの議会は昔からここで行われた。評議会については368E注1をみよ。この一文のテキストはビュデ版スイエによる。

3 テキストはビュデ版スイエによる。

4 ポキスのパルナッソス山麓のデルポイの町の古名、もしくは、この地域の名。周囲およそ三キロメートルである。

デスとトロポニオスにしても、(1)自分たちには最善のものが与えられるようにと祈ったら、眠りに陥り、もはや起き上らなかった。また、アルゴスの〔ヘラ女神につかえる〕巫女の息子たちも、(2)その母が同じように、息子たちにはその敬虔な行ないのゆえにヘラ女神から何かの褒美が与えられるようにと祈ったら、——というのはその息子たちは、輓馬(ばんば)が〔畑に出ていて〕間に合わなかったとき、自分たちが軛(くびき)を引いて母を神殿まで運んだのだが——、その祈りがすむと、その夜、他界したのである。人生にまつわる出来事を神にも等しい口ぶりで予言するがごとくに語る詩人たちの言葉を、彼らがどんなに人生を嘆き悲しんでいるかを、一々引いていては長くなるだろう、が、ひとりだけ、特に引き合いに出すに値する詩人のことをとりあげよう。かれはこう言っている、——

D

それは、かように、神々が、
腑がいない死すべき者に、
嘆き悲しみつつ生きよと、
運命の糸を紡ぎたもうたからなのだ。(3)

そして——

E

それは、そもそも、
地上に息しうごめくかぎりの
すべてのうちに、人間以上に
みじめな者はないからなのだ。(4)

ところがその詩人は、アンピアラオスの(5)ことを何と言っているか？——

この者によせて、
アイギスの〔楯持つ〕ゼウスも、
心深き愛をいだき、
またアポロンも、
優しさのかぎり愛(いつく)しみたもう。
されば、老(おい)の閾(しきい)にも至らざりき。(6)
また、ひとりの詩人は、こう勧めて、——
生まれ来る者は泣き悲しめよ、
かほどの不幸の中へ、

---

1 アガメデスとトロポニオスは兄弟で、ともに建築家として優れ、デルポイのアポロン神殿や、ボイオティアのヒュリア市のヒュリエウス王の宝物殿などを建てたと伝えられる。

2 アルゴスはペロポネソスの一地方で、女神ヘラ(通常ゼウスの妻と見なされている)に対する信仰はこの地方でとくに強かった。巫女の息子たちとはクレオビスとビトンのこと。ヘロドトス『歴史』第一巻(三一)によれば、ソロンはクロイソスに世界で二番目に幸福な人間として、この二人を紹介したという。

3 『イリアス』第二四巻五二五—五二六行。

4 『イリアス』第一七巻四四六—四四七行。

5 アンピアラオスがゼウスとアポロンに愛されたのは、予言者としてであるが、他方、かれは、死を予見していたにもかかわらず、アルゴス七人の武将の一人としてテバイに遠征した。その勇敢な戦いの故にゼウスによって不死とせられた勇気ある英雄とされる。

6 『オデュッセイア』第一五巻二四五—二四六行。アンピアラオスを指している。

来るからは(1)。

きみには、どう思われるかね？　いや、もう止めよう。ほかの詩人たちにまで言及して、約束以上に話を引き延ばしたりしないようにね。

七

ところが、人はどのような生業あるいは技術を選ぶなら、不満を感じたり現在の境遇に腹を立てたりせずにすむだろうか？　あの手工業の婦人労務者たちに会ってみるべきかね？　かの女らは、夜の明けぬうちから夜になるまで苦役して、やっとのことで食糧を手に入れる生活をしており、それで自分たちのことを残念がり、悲嘆と涙にくれて夜通し眠れもしないのだが。いやむしろ、船乗りの人生を取りあげたものかね？　それはあれほどの危険を冒して海を渡り、しかもビアス(2)が言ったように、死んだ人たちにも生きた人たちにも出会わないというものなのだが。というのは、もともと地上に住むべき人間が、両棲動物のように自身を海に投じたからなのだ、だれもみな運命のままになってね。

ところで、農耕は楽しいものかね？　もちろんだ。しかし、むしろ世間でも言うように、その全体が膿のかたまりなのではないかね？　のべつ苦痛の口実を見つけてくるのだものね。「こんどは旱魃(かんばつ)だ」「こんどは豪雨だ」「こんどは焼けつくほど暑い」「こんどは〔小麦の〕黒錆病(くろさびびょう)だ」「こんどは季節はずれに暑かったり寒かったりする」などと、泣き声をあげて言うからだね？

ところで、——生業の多くはさておくとして——、大いに誉れの高い国政となるとこれは、どれだけの危険を

冒して進められることか？　なるほど国政は、腫物が熱を持つときのように、踊り上らんばかりの胸がどきどきD するような喜びを持つものではあるが、しかしその失敗は苦痛であり、一万べん死ぬよりもみじめなことだ。なぜなら、大衆のために生きるとはいえ、民衆のもてあそびぐさとなって追放され、ののしられ、処罰せられ、死刑になり、憐れと思われるということなら、いかに唇を鳴らし手を叩いての称讃を受けたにせよ、だれが幸福になりえよう？　というのも、ね、そうだろう、政治にくわしいアクシオコス、ミルティアデス(3)はどこで死んだかね？　テミストクレス(4)はどこで？　エピアルテス(5)はどこで？　つい最近では、あの一〇人の将軍たち(6)はどこで死

1　出所をエウリピデスの Fr. 449(Nauck^2)などに求める説もある。

2　『イリアス』第四巻二九六行、第一三巻六九一行、第二〇巻四六〇行に出てくるビアスと考えるべきか、それとも、七賢人の一人であるビアスと考えるべきかに迷うのであるが、いずれにしてもこの箇所にぴったりあてはまる典拠は見当らない。

3　アテナイの政治家・将軍(前五五〇頃―四八九年頃)。前四九〇年マラトンの戦でペルシアの大軍を敗走させ、ギリシア軍を戦勝に導いた。しかし前四八九年早春パロス島遠征を強行して失敗の後、政敵により投獄され、足に受けた負傷がもとで死んだ。『ゴルギアス』516D～Eをみよ。

4　アテナイの有名な大政治家・将軍(前五二八頃―四六二年頃)。前四八〇年かれはギリシア連合艦隊を指揮してサラミス沖海戦でペルシアの大艦隊を破った。しかし前四七〇年頃、対スパルタ政策についてキモンと対立し陶片追放に処され、しばらくアルゴスにいた後、大王アルタクセルクセス一世のもとに身をよせ、マグネシアで没した。『ゴルギアス』516Dをみよ。

5　ペリクレスの友人であり、その支持をえて政治家になった。民主勢力を伸ばしアレイオス・パゴスの権力を削減することに努力した。ために少数派の怨みを買い、前四六一年頃暗殺された。

6　『ソクラテスの弁明』32Bおよび『ゴルギアス』473E～474Aに詳しい。前四〇六年、アテナイ艦隊はアルギヌゥサイ群島(レスボス島の東南)の海戦でスパルタ艦隊を破ったが、嵐のために味方の水夫や戦死者の遺体や船の残骸を波にさらわれたために、一〇人の将軍たちは、政敵たちの側からその責任を問われ訴えられた。次注をみよ。

E 369 んだのかね？　あの時わたしは、〔民衆に〕意見を聞くことには反対したのだが、――というのは、たけり狂っている民衆を煽動するということは、品位のあることとは思われなかったからね。(1) ところが、その翌日、テラメネスおよびカリクセノスの一味(2)の者たちは、議長席の役員たちを買収し、相手も買収されて、あの人たちを裁判抜きで死刑にするようにと決議したのだ。もっともきみだけは、三万人が国民議会に集まっていた中で、エウリュプトレモスといっしょになって、(3)あの人たちの弁護をしていたのだったね。

アクシオコス　そのとおりだ、ソクラテス。そして少くともわたしは、あの時以来、議長席というものにはもう飽きあきしたし、国政ほど堪え難いものは何ひとつもないと思うようになったよ。その点は、実際の事件の場にいた人たちには言わないでもわかることだがね。だって、きみは、まるで遠くから眺めてでもいたかのように、そんなふうな喋り方をしているけれども、〔きみにせよわたしにせよ〕実際経験を通って来たわたしたちは、さらに正確なことを知っているのだものね。じっさいのところ、ねえ、ソクラテス、大衆というものは、いってみれば B 烏合の衆と、らんぼうで口の軽い連中とからの寄せ集めなのだろうが、恩知らずで、気まぐれで、粗暴で、口汚く、無教養なものなのだ。しかし、その大衆の仲間になろうとする者は、はるかにもっとみじめだね。

ソクラテス　それでは、アクシオコス、きみは、〔国政という〕自由さもはなはだしい知識を、その他の知識にくらべてとくに忌わしいと考えているわけだが、そのばあいわたしたちは、そのほかの生業のことについてはどう受けとるべきなのか？　〔それらも〕避けたほうがよい、とうけとるべきではないかね？

八

ところで、あのプロディコスからも、「死は、生きている者たちにも、他界した者たちにも、関係がない」と言っているのを、わたしはかつて聞いたことがあるのだが。

アクシオコス それは、どういう意味だね？ ソクラテス。

C

ソクラテス つまり、生存している者たちの側には死は存在しないし、他方、死んだ者たちは存在しない、ということだ。そこからして、死は、今、きみには関係がないし——というのは、きみは死んではいないのだから——、また、ひょっとしてきみが不幸な目にあうとしても、それもきみには関係がないだろう——というのは、きみはもう存在していないだろうから——。とすると、現にアクシオコスに関係がなく、将来も関係がないであろう事柄について、アクシオコスが嘆き悲しむという、この苦しみは無駄なことだ。そしてそれは、人が、スキ

1 （前注と同じ典拠によれば）この時ソクラテスは評議会（ブーレー、五〇〇人）の運営を月番でおこなう政務審議委員（プリュタニス、五〇人、任期三五、六日）に、たまたま月番であったアンティオキス部族の代表五〇人の一人として加わっており、しかもそのうえ抽籤による一日議長の席についていた。その日国民会議（エクレシア）が開かれたが、ソクラテスは評議会が国民会議へ将軍たちの懲罰を提議するのを、独力で阻止したらしい。

2 将軍懲罰の首謀者テラメネス（前四五五頃—四〇四年）は無節操な政治家で悪名高く、最後は三〇人寡頭政府の数に選ばれたが、やがて内紛を起し処刑された。カリクセノスは将軍懲罰の時の民衆煽動で名を残した。かれは事件の直後、平静に戻った民衆が将軍たちの処刑を後悔し煽動者を憎みだしたので、国外へ逃亡し、前四〇三年特赦令が出た後帰国したが、誰にも相手にされず飢え死したという。クセノポン『ギリシア史』第一巻（七）をみよ。

3 この事件を詳述しているクセノポンの上掲箇所によれば、処刑されたのは結局六名であった。アクシオコスへの言及は見られないが、「エウリュプトレモスほか幾人かが、カリクセノスを違法者として弾劾した」とある。エウリュプトレモスはアルキビアデスの従兄弟で、この時、評議会議員であった。

ュラとかケンタウロスとかについて[1]、いいかえれば、現にきみに関係がなく、また臨終の後にもきみに関係がないであろう事柄について、嘆き悲しむのが無駄であるのと同じことなのだ。なぜなら、恐ろしいものというのは、存在している者たちにとってはあるけれども、存在していない者たちにとっては、どうしてあることができようか？

D

アクシオコス　きみは、いま流行の世間話の中から、その賢そうな語り口を取って来たのだね。というのは、その、青年たち向けにうまく整えられたおしゃべりは、あの世間話に由来するものだからね。だがね、たとえきみが、ソクラテス、それらよりはもっと説得的な言論をやかましく並べ立てようとも、生存の善さのもろもろを失うということは、わたしを悲しませる。だって、理性は、言論の巧みさにつり込まれて耳を傾けるようなことはなく、それらの語り口では、理性の表皮をかすめさえもしないのでね。むろん言いまわしの荘重さ華麗さには、

E

役立っているけれども、しかし真理には届いていないからね。ところが、他方、煩悶する心は、詭弁に安んじはせず、魂に届く力のある言葉によってでなければ、満足させられない。

九

370

ソクラテス　それはだね、アクシオコス、きみが、よく考えもしないで、善いものを失うことと、悪いことを感じる感覚とを、結び合わせるからなのだ。〔そのときにはもう〕死んでいるのだということを、きみは忘れて、そのような感覚を〔そこへ〕持ちこんでいてね。なぜなら、善いものを失うということで、ひとを苦しませるのは、〔失うことに〕対応しつつ悪いことを感じる感受性なのだけれども、現に存在しない人は、失うということを感じ

ることもないのだから。じっさい、苦痛を惹き起すであろうもののことを、知らせてくるはずもない器官において、どうして苦痛が生じたりしようか？　だって、アクシオコス、きみが無分別にも最初から、何らかの仕方でせめて一つは感覚があると想定しているのでないかぎりには、きみが死に怯えるということは、けっしてないはずなのだからね。ところが現実にはきみは、魂を失うだろうと恐れて、自分自身を動顚させており、そして、失うということに対し、魂を立ち合わせている。そして、一方では、感覚しないであろうということを恐れ、他方B では、存在しなくなるであろう感覚が、感知するだろうと考えている。

魂の不死について沢山の美しい言論があることは、さておくとして、――つまり、〔もし魂が〕死すべき定めのものならば、つぎのような大それた事業に、あこがれなどはしなかっただろう。すなわち、力ではかなわぬ野獣たちにいどみかかり、海洋を横断し、町々を建設し、もろもろの国制を定め、天空に眼を向け、星々の周行、日C 月の軌道、それらの出没、それらの蝕とすみやかな回復、春分秋分と夏至冬至、すばる星の見える冬、夏の風、そして滝の雨、雷光を伴う龍巻の通ったすさまじい跡、などを見つめ、そしてこれら宇宙の変化のさまざまを年代に応じて書き記し天文暦を作るなどとね。(2) ただし、魂がかくも広大な規模の事象を考え知るに至ったのは、そ

1　スキュラは、一二本の足、六つの頭と長い首、それぞれの頭の口に三列の鋭い歯を持ち、姿が犬に似た恐ろしい怪物。ケンタウロスは腰から上が人間、下半身が馬(または身体の正面が人間、背後が馬)。いずれも神話伝説上の怪物。ここでは「実在しないもの」の例として挙げられている。実在しないとする考え方があったことは、アリストテレス『分析論後書』第二巻(89^b32)からも察せられる。

2　『法律』X. 888E～889E でも、魂(精神)は、物的自然の秩序から離反する自由を持ち、魂独自の秩序によって自然界を支配するもののごとくに描かれている。

のよりどころとなる、神に由来するある息[1]が、実際に魂の中にあったからだとするのなら話は別だけれども。

一〇

以上からして、アクシオコス、きみの移ってゆく先は、死へではなくて不死へであり、善きものを剝奪される
D
のでもなく、むしろ喜びがいっそう純粋になるのであり、その快さは、死すべき身体に混ぜ合わされているものではなく、むしろいかなる種類の苦悩もふくまぬ、純粋な快さであるだろう。つまり、そういうところへ、きみは、この〔身体の〕牢獄から解き放たれて、赴くだろう。かしこでは、すべてにわたって、労苦も愁嘆も老け込むことも要らず、そして災禍を苦しむことのない、波乱のない一つの生活があり、それは、ゆるぎない穏やかさの静かな生活であり、そしてきみは、もともとから定められてあった事柄をくまなく考察し、大衆や劇場を相手にではなく、首尾整った真実を目ざして愛知にいそしむ。

アクシオコス　きみは、その言論でもってわたしを、最初とは反対のところへつれてきている。というのは、
E
わたしにはもはや死を恐れる心はなく、それどころかすでに、――これは、わたしも弁論家たちを真似て、〔対立を〕ちょっと際立たせて言おうとするのだが――、死を憧れる心すら起っている。そしてもうさっきから天体現象のことを論議したり、神に属する永劫の軌道の上をたどったりしていて、気弱になっていたのからも立ち直り、新しく甦えっているのでね。

一一

ソクラテス　ところで、どうだね、ほかにも話をというのなら、マゴス僧のゴブリュエス[2]がわたしに伝えてくれた話なのだが、──
かれはこう言っていた。
かれ自身の祖父で同名のゴブリュエスは、クセルクセス渡峡の当時[3]、二柱の神の生まれたもうた島デロス[4]へ、その島を戦略基地化されぬように見張るために派遣された。そのときかれは、オピスとヘカエルゲ[5]が極北に住む

1　原語はプネウマ。Diog. L. IX. 19によれば、息(呼吸)と魂を同一視する考え方は、クセノパネス(前六世紀)まで遡るという。『パイドン』70Aには、「魂は息や煙のように飛散して消滅する」という俗説が紹介されている。プラトン自身の立場で魂と息を関係づけるとすれば、とうぜん「魂は神に由来する息である」と言わざるを得まい。ただし訳者も、その典拠を、ここ以外には知らない。諸家はこの箇所を、「神の息」を重視するストア派(前三世紀のクリュシッポスの言葉(cf. H. von Arnim, *Stoicorum Veterum Fragmenta*, II. 299, 11; II. 112, 31)などをみよ)の影響によるものとみて、偽作の証拠の一つとしている。

2　Diog. L. II. 45に、「アリストテレスによれば、シリアからアテナイへ来たあるマゴス僧(ゾロアスタ教のペルシア祭司階級の僧)がソクラテスに、ソクラテスはひどい死に方をしようと宣告した」とある。また同書I. 2には、前四八〇年(ペルシア王クセルクセスのギリシア遠征渡峡)から前三三一年(ペルシア王朝崩壊)までのマゴス僧系譜に言及し、人名例示の三人目にゴブリュアスの名前を挙げている(アー→エはイオニア方言)。

3　前注をみよ。ヘロドトス『歴史』第七巻(七二)によれば、この時クセルクセス軍のシリア人部隊の長にゴブリュアスなる人物がいたという。

4　二柱の神とはアポロンとアルテミスのこと。デロスはエーゲ海キュクラデス群島の小島で、ギリシアの宗教・政治連合の中心地であり、ペルシア軍はこの島がギリシア軍の拠点になることを警戒していた。

5　ヘロドトス上掲書第四巻(三五)に、デロスの伝承として、アポロンとアルテミスがデロスへ戻って来たとき、二人の極北人娘オピスとアルゲがついて来たと記されている。ここではアルゲの位置にボレアス(北風)の娘ヘカエルゲが入っている。

人々[1]のところから持ち帰った、若干の青銅製文字板によって、つぎのことを学び取ることになった。すなわち、魂は、身体から解き離された後、眼に見えない場所へ、地下のあの世へ移ってゆく。そこには、ゼウスの宮廷に少

B

しも劣らぬ大きさの、プルットン[2]の王宮がある。少しも劣らぬというのは、大地は宇宙の中央を占め、天蓋は球の形をしているが、それの一方の側の半球は〔ゼウスおよび〕天上の神々が受け持ち、他方を〔プルットンおよび〕地下の神々が受け持っているからである。つまり、あるいは兄弟であったり、あるいは兄弟の子供たちであったりする神々が、ね。ところで、冥府に通じる道の門は、鉄の錠と閂とで固められている。そしてそれが開くと、

C

まずアケロン河が、その後でコキュトス河[3]が迎え容れるのは、これらの河をつたってミノスとラダマンテュス[4]の前へ、つまり真相の庭と呼ばれる場所へつれてゆかれるべき人たちである。そこには裁判官たちが坐っていて、そこへ到着する人たちの一人一人に、生前、何の生活を送ってきたか、また、身体をもって〔現世に〕住んでいたとき何の生業についていたかと、訊問する。これに対して嘘を言うことはけっしてできない。

ところで、〔こちらでの〕生存の間に、善い神霊[5]が息を吹き込んだかぎりの人たちは、信心深い人たちのいる場所へ行って、居を定める。そこでは、季節季節が豊かであり、あらゆる種類の果物がたわわにみのり、清らかな水の小川が流れ、ありとあらゆる草地は色さまざまの花で春のように賑わい、そして愛知者たちの談論、詩人た

D

ちの劇場、輪舞する合唱団、演奏会、楽しい饗宴と主催者の寄進[6]による祭の祝宴などが催されていて、苦しみというものはみじんもなく、いとも甘美な生活である。なぜなら、冬の嵐も夏の日照りもひどくはならず、むしろ太陽の柔らかな光線とまじり合って穏やかな空気がただよっているからである。ここに、聖なる儀式を受けてきた人たちのための、特別席とでもいうべき場所がある。そしてその人たちは、その席に着いてからも、聖なる儀

式を共々に行うのである。

E　とすると、きみは神々の一族〔となる儀式を受けた者〕[7]なのだから、どうして第一番にこの名誉にあずかれぬことがあろうか？　ヘラクレス[8]やディオニュソス[9]やかれらの従者たちにしても、地下界へ降りて行く際には、あらかじめこちらで密儀を受け、エレウシスの女神[10]から、あの世への道を進む勇気を借り受けたという話である。

しかし他方、〔こちらでの〕生存を、悪事の道に過ごしたかぎりの人たちは、エリニュスたち[11]の手で、タルタロ

1　極北人のことは北方伝説にはなく、アポロン信仰のデロス伝説の中に、極北に幸福者たちの住む理想境があるとされている（ヘロドトス『歴史』第四巻（三一—三三））。

2　『イリアス』第一五巻一八七行以下に、ゼウスは空、ポセイドンは海、プルゥトンは冥府を主宰し、地上は三者の共有とするという分担取り決めのことが、言及されている。なお『ゴルギアス』523Aをみよ。

3　『パイドン』112E～113Cに、地表と冥界の諸河川中、最大のものはオケアノス（大洋）、アケロン（いわゆる三途の河）、ピュリプレゲトン（火の河）、コキュトス（嘆きの河）であるという。

4　神話ではこの両人はゼウスとエウロペから生まれた兄弟で、ミノスはクレタ島王、ラダマンテュスはその補佐、ともに立法者として名高く、死後は冥府の裁判官となった。『ゴルギアス』523A～524Aをみよ。

5　370C注1および解説三一〇ページをみよ。

6　祭礼には多額の費用を要したが、一部の選ばれた人に課せられた寄進でまかなわれ、一般人はその恩恵に浴するという制度があった。

7　解説三〇五ページ登場人物の項をみよ。

8　十二の難行苦行で有名な英雄である。出生地や家系についての記録が多様であるのは、フェニキアとかエジプトの宗教が起源であるのかもしれない。

9　「酒神」として有名。ここでは、密儀に加わり冥府に進む人間ないし半神半人として描かれている。トラキア生まれとも、小アジアのプリュギア生まれとも言われる。

10　デメテルのこと。穀物を産む大地と農業の女神で、安定した家庭生活を守る。エレウシスはアッティカの都市で、ヒッポテュオンティス部族に属する区域であり、デメテルとペルセポネとを讃える密儀で有名。

11　ティシポネ、アレクト、メガイラという三姉妹の復讐の女神（エリニュス）たちで、罰をもたらす。

ス(1)（奈落）を通り、暗黒のえたいもしれぬ穴場へと導かれる。そこには、神をあなどった人たちの場所があり、ダナオス(2)の娘たちが終ることのない水くみをしており、タンタロスは喉が渇き、ティテュオスは肝臓が喰われては再生するということを果しもなく繰り返し、シシュポス(3)の岩は〔転り落ちて〕仕上らず、その完了がまたしても苦役の始まりとなって際限がない。そこでは、かれらは、野獣どもに身体を舐めまわされたり、復讐の女神たちのたいまつで絶えず焼かれたり、あらゆる拷問で責めさいなまれて、永遠に続く刑罰のために憔悴させられているばかりである。

一二

以上は、わたしがゴブリュエスから聞いたものだが、取る取らぬはきみしだいだよ、アクシオコス。というのは、わたしは、言論によってあれでもないこれでもないと引き戻されながらではあるけれども、つぎのことだけは確実に知っているのだから。すなわち、――魂はすべて不死であり、それは、この地上からほかへ移ったら、苦しみ悩むこともなくなる――とね。そこからして、きみは、アクシオコス、地下界へ行くにしても天上界へ行くにしても、きっと幸福であるにちがいない。信心深い生活を送ってきたきみなのだから。

アクシオコス　ソクラテス、わたしは恥ずかしくてきみにものが言えない。というのは、わたしは、もはや死を恋い焦れさえもするほどであり、死を恐れているどころではないのだから。そこまで、こんどの言論もまた、先の天空に関わる言論と同様に、わたしを説得してくれたし、そしてもはやわたしは、〔いまの〕生存を軽んじるようになっている。より善き家へと移ろうとしているのだものね。が、今のところは、語られた事柄をしずかに、

わたしひとりで再考してみよう。で、正午になったら来てくれたまえ、ソクラテス。

ソクラテス　きみの言うようにしよう。で、わたしもキュノサルゲスへ散歩に引き返そう。そこからこちらへ呼び寄せられたのだからね。

1　『パイドン』112Aに詳しい。ほとんど地球の中心に達する穴あるいは割目である。

2　アイギュプトスと双生児の兄弟で、五〇人の娘があったが、ヒュペルムネストラを除く四九人が、アイギュプトスの四九人の息子を殺したので、その罰として篩あるいは孔のあいた容器で水をくむことを科せられた。

3　『オデュッセイア』第一一巻五七六―六〇〇行によれば、冥府においてガイアの子ティテュオスは、(ゼウスの后レトに乱暴をした罪で)禿鷹に肝臓をついばまれており、(ゼウスの子)タンタロスは、(神々の食ネクタルとアンブロシアを人間に与えた罪、またはわが子ペロプスを料理して神神に供した罪で)口もとまで来ている水を飲めない渇きにあえぎ、(コリントスの創建者)シシュポスは、ゼウスの秘密をあばいた罪で)丘の頂へ石を押し上げることを繰り返すという罰を科せられている。ただし(　)内は別伝。

文献案内

「文献案内」目次

一　ギリシア語原典（全集・選集）

プラトンの著作は、

J. Burnet, *Platonis opera*, 5 voll., Oxford, 1899–1906 ; repr. 1973.

のうちに全集として与えられている。原文を読む人たちには、入手も容易で、原文も比較的よく校訂されているので、この Oxford Classical Texts の全集をすすめたいと思う。（この岩波版全集においても、底本として用いられている。）

その内容はつぎのようになっている。

第一巻　エウテュプロン　ソクラテスの弁明　クリトン　パイドン　クラテュロス　テアイテトス　ソピステス　ポリティコス（政治家）

第二巻　パルメニデス　ピレボス　饗宴　パイドロス　アルキビアデスI　アルキビアデスII　ヒッパルコス　恋がたき

第三巻　テアゲス　カルミデス　ラケス　リュシス　エウテュデモス　プロタゴラス　ゴルギアス　メノン　ヒッピアス（大）　ヒッピアス（小）　イオン　メネクセノス

第四巻　クレイトポン　国家　ティマイオス　クリティアス

第五巻　ミノス　法律　エピノミス（法律後篇）　書簡集　定義集　外篇（正しさについて　徳について　デモドコス　シシュポス　エリュクシアス　アクシオコス）

プラトン全集は、遠い昔からいろいろ出ているが、活字によって印刷された近世の原典プラトン全集は、一五一三年のアルドス版(Editio Aldina)にまでさかのぼることができる。一般にはしかし、一五七八年のステファヌス版(ギリシア語原典とラテン訳が各ページの左右に対照的に印刷)、

H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, Genf, 3 voll.

が基準になって、以後のプラトンのテクストや翻訳書には、この書物のページを示す数字(および多くの場合、一ページ内のＡＢＣＤＥの段落)が、それぞれ対応する箇所に記され、プラトンの言葉の引用なども、このステファヌス版のページ数に従って、どの対話篇のどの箇所の言葉であるかが示されるならわしになっている(例えば、『クリトン』44B、『パイドン』95Eのごとく)。ただし、全三巻の各巻ごとにページが改まって一ページから始まっているから、たとえば『ソクラテスの弁明』27C(第一巻所収)、『ピレボス』27C(第二巻所収)、『ティマイオス』27C(第三巻所収)のごとく、異なった著作について同一ページが現われることもある。ステファヌス版の内容および配列順はつぎのようになっている。

第一巻　エウテュプロン　ソクラテスの弁明　クリトン　パイドン　テアゲス　恋がたき　テアイテトス　ソピステス　エウテュデモス　プロタゴラス　ヒッピアス(小)　クラテュロス　ゴルギアス　イオン

第二巻　ピレボス　メノン　アルキビアデスI　アルキビアデスII　カルミデス　ラケス　リュシス　ヒッパルコス　メネクセノス　ポリティコス(政治家)　ミノス　国家　法律　エピノミス(法律後篇)

第三巻　ティマイオス　クリティアス　パルメニデス　饗宴　パイドロス　ヒッピアス(大)　書簡集　外篇(アクシオコス　正しさについて　徳について　デモドコス　シシュポス　エリュクシアス　クレイトポン)

定義集

その後のプラトン全集では、

I. Bekker, *Platonis scripta graece omnia*, Londini, 1816-26.

の一一冊本が、プラトンの写本の比較研究にもとづいての、始めての出版として記念される。スコリア（欄外古注）、ラテン訳その他を含み、いろいろな注釈がついている。

Fr. Ast, *Platonis quae extant opera*, Lipsiae, 1819-38.

は、一一冊本で、希羅対照になっていて、最後の第一〇巻と第一一巻に注がついている。よく用いられる *Lexicon Platonicum* はこれの附録のようなかたちで、一八三五年から三八年にかけて、三冊本で出され、一九六九年に再刊されている。

同じような希羅対照本では、

Hirschig = Schneider, *Platonis opera*, Paris(Didot), 1846-56.

の三冊本も、わりによく用いられる。その第三巻はフンツィカーとデュブナーによって再版されているが、Argumenta や Indices が含まれている。

G. Stallbaum, *Platonis opera omnia*, Gothae, 1827-60.

は、注釈つきの一〇巻で、各巻がまた分冊になっているのもある。その注釈はすぐれていて、今日でも有用である。新版がウォールラープ(M. Wohlrab)、アーペルト(O. Apelt)などによって企てられていたが、まだ少ししか出ていない。

注釈付き選集本では、

L. F. Heindorf, *Platonis dialogi selecti*, Berolini, 1802-10.

の五冊本も、全集ではないが、今日なお参考になる点を含んでいる。

しかし一般的には、原文を読むには、なるべく新しい校訂本を用いる方がよい。Bibliotheca Teubneriana の、

C. (=K.) Fr. Hermann, *Platonis dialogi secundum Thrasylli tetralogias dispositi.* Post C. Fr. Hermann recogn. M. Wohlrab, Lipsiae, 1887–1902; Nachdr. 1921–36.

の六冊本も、もう古いわけであるが、第六巻だけは、アルビノスやアルキノオスの『プラトン入門』とか、オリュンピオドロスの『プラトン伝』などを含んでいるので、なお有用である。この巻には、スコリア(欄外古注)やティマイオスの『プラトン語解』も含まれている。

バーネット校訂本よりも新しいテクストとしては、フランスの Collection des Universités de France, publiée sous le patronage de l'Association Guillaume Budé(ビュデ本)のうちに含まれている、

Platon, Œuvres complètes.

が一番すぐれている。フランス学界の一流人物を動員し、一九二〇―六四年にかけてつくられた全一四巻二七冊のギリシア・フランス対訳本で、注解もついており、原文批判も綿密になされている。

その内容および担当者はつぎのようになっている。

第一巻　ヒッピアス(小)　アルキビアデスI　ソクラテスの弁明　エウテュプロン　クリトン――M. Croiset

第二巻　ヒッピアス(大)　ラケス　リュシス　カルミデス――A. Croiset

第三巻の一　プロタゴラス――A. Croiset

第三巻の二　ゴルギアス　メノン――A. Croiset

第四巻の一　パイドン――L. Robin

第四巻の二　饗宴――L. Robin

第四巻の三　パイドロス――L. Robin
第五巻の一　イオン　メネクセノス　エウテュデモス――L. Méridier
第五巻の二　クラテュロス――L. Méridier
第六巻　国家(第一―三巻)――E. Chambry
第七巻の一　国家(第四―七巻)――E. Chambry
第七巻の二　国家(第八―一〇巻)――E. Chambry
第八巻の一　パルメニデス――A. Diès
第八巻の二　テアイテトス――A. Diès
第八巻の三　ソピステス――A. Diès
第九巻の一　ポリティコス(政治家)――A. Diès
第九巻の二　ピレボス――A. Diès
第一〇巻　ティマイオス　クリティアス――A. Rivaud
第一一巻の一　法律(第一―二巻)――É. Des Places
第一一巻の二　法律(第三―六巻)――É. Des Places
第一二巻の一　法律(第七―一〇巻)――A. Diès
第一二巻の二　法律(第一一―一二巻)――A. Diès　エピノミス(法律後篇)――É. Des Places
第一三巻の一　書簡集――J. Souilhé
第一三巻の二　容疑書(アルキビアデスII　ヒッパルコス　ミノス　恋がたき　テアゲス　クレイトポン)――J. Souilhé

第一三巻の三　偽書(正しさについて　徳について　デモドコス　シシュポス　エリュクシアス　アクシオコス　定義集)——J. Souilhé

第一四巻の一　レクシコン(用語辞典)(Α-Λ)——É. Des Places

第一四巻の二　レクシコン(用語辞典)(Μ-Ω)——É. Des Places

イギリスでも The Loeb Classical Library のなかに、ほとんどプラトンの全著作が、希英対訳で与えられている。これは『国家』を P. Shorey が、『法律』と『ティマイオス』『書簡集』等を R. G. Bury が担当しているほかは、大部分が H. N. Fowler と W. R. M. Lamb によって担当されている。フランスのビュデ本(前出)にくらべると、原文の取り扱い方が簡単すぎるようであるが、一般の使用者にはそれで充分間に合うように思われる。

二　外国語訳

翻訳では、フィキヌス(Marsilius Ficinus=Marsilio Ficino, 1433-99)のラテン訳が最初の全訳で、後のすべてのプラトン訳は多かれ少なかれ、その影響を受けている。研究的にプラトンの翻訳を見る場合には、参照の必要がある。さきに挙げたベッカーのプラトン全集(*Platonis scripta graece omnia*)第一〇巻、一一巻に収められている。

各国語訳では、シュライエルマッハーの独訳(一八〇四—一〇年)全二巻五冊、クーザンの仏訳(一八二二—四〇年)全一三巻、ジョウエットの英訳(一八七一年)全五巻などが、いわば古典的な地位を占めている。後者は、B. Jowett, *The Dialogues of Plato*, Oxford, 3 ed. 1892; 4 ed. rev. by D. J. Allan and H. E. Dale, Oxford, 1953. として重版され、今日でも容易に入手できる。プラトンの言葉の意味をよくとらえて、自由にわかり易く訳しているから、一般の読者に好適であると思われる。しかし原文と比べながら読むのには、シュライエルマッハーの独訳がよいかも知れない。逐語訳に近いからである。しかしドイツ語の文章としては、それだけで読んだのでは、決し

てわかり易くない。これの一部はレクラム文庫の中にも、少し新しく手を入れたものが出ているが、まとまったものとしては、Klassiker des Altertums の一部として、

Platons Ausgewählte Werke, deutsch von Schleiermacher, München, 1918.

の五冊本が出ている。

その後いろいろ新しい訳が出ているが、比較的新しくて、学問的にも信用のできるのは、さきに挙げたビュデ本プラトン全集(*Platon, Œuvres complètes*)の仏訳であろう。これは訳文だけの版を別に買うこともできる。

そのほかの新しい仏訳としては、

L. Robin, *Œuvres complètes de Platon*, 2 voll., Paris, 1950 (Bibliothèque de la Pléiade).

がある。ただし『パルメニデス』と『ティマイオス』の訳のみはモロー(M. J. Moreau)の手になるものである。

英訳では、これもさきに挙げた The Loeb Classical Library のなかのプラトンが新しいけれども、特にこれを他よりすぐれているとすることはできないように思われる。しかしジョウエット訳(*The Dialogues of Plato*)が自由訳なので、もう少し逐語訳に近いものを読みたいと思う英語の読者は、これを読んだらよいかも知れない。

最も新しい英訳としては、

Plato. The Collected Dialogues of Plato, including the letters, ed. by E. Hamilton and H. Cairns, N. Y., 1961.

がある。クーパー(L. Cooper)、ジョウエット(B. Jowett)、テイラー(A. E. Taylor)その他による訳である。

なお、注釈つきの翻訳として特別の新しいねらいをもち、現在進行中の Oxford Clarendon Plato Series (General Editor : M. J. Woods) のうち、既刊のものとしては、

J. McDowell, *Plato Theaetetus*, Oxford, 1973.

D. Gallop, *Plato Phaedo*, Oxford, 1975.

J. C. B. Gosling, *Plato Philebus*, Oxford, 1975.

がある。

独訳は、シュライエルマッハーの系統を引いて、どちらかと言えば逐語訳の傾向が多い。

H. Müller und K. Steinhart, *Platons Sämtliche Werke*, Leipzig, 1850–66.

は、その傾向のよい訳であるが、

O. Apelt, *Platons Sämtliche Dialoge*, Leipzig, 1916–26.

は、独訳としては、かなり自由訳になっていて、新解釈も少なくない。その点は新しい訳としての特色をもっていると言うことができる。しかしこの訳だけに頼るのは、必ずしも安全ではないかもしれない。なおこの Felix Meiner 版 Philosophische Bibliothek のプラトンは、大部分がアーペルトの訳であるが、『ラケス』『エウテュプロン』(G. Schneider)、『パイドロス』(C. Ritter)、『饗宴』(K. Hildebrandt)などは別である。

一般にプラトンの翻訳にはフィキヌスのラテン訳以来の伝統があり、また国によっても、傾向の違う点があるから、その点を承知して読まなければならない。またそれらの訳の原文となるものも、細部においては決して同一ではなく、しかもこれらの研究は年と共に進み、いろいろ議論も出ているから、疑問の箇所は他の翻訳や注釈書を参照しなければならない。

三　原典の伝承、原文批判

ところで、プラトンの原文は現在どのようなかたちで、われわれに伝えられているのであろうか。その伝来の歴史はどのようなものであろうか。このような事柄に興味をもつ人々のためには、まず、

F. W. Hall, *A Companion to Classical Texts*, Oxford, 1913.

R. Renehan, *Greek Textual Criticism*, Cambridge/Mass., 1969.

などが、一般的な知識を与えてくれる。

プラトンのテクストについては、

H. Alline, *Histoire du texte de Platon*, Paris, 1915.

というよい書物がある。記述も興味深く読むことができる。これ以外のものは、部分的な問題を専門的に取り扱ったものが多いから、あまり一般向きではないが、

M. Schanz, *Studien zur Geschichte des Platonischen Textes*, Würzburg, 1874.

M. Schanz, *Ueber den Platocodex der Markusbibliothek in Venedig Append. Class. 4 Nr. 1*, Leipzig, 1877.

M. Wohlrab, Die Platonhandschriften und ihre gegenseitigen Beziehungen, *Jahrbücher für klassische Philologie. Supplementband*, XV, SS. 641–728, Leipzig, 1887.

H. Usener, Unser Platontext (*Nachrichten von der Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen*, 1892, Nr. II, SS. 26–50, Nr. VI, SS. 181–215). In: *Kleine Schriften*, III, Leipzig, 1914.

A. C. Clark, *The Descent of Manuscripts*, Oxford, 1918.

E. Deneke, *De Platonis Dial. Libri Vind. F Memoria*, Göttingen, 1922.

L. A. Post, *The Vatican Plato and its Relations*, Middletown, 1934.

G. Jachmann, *Der Platontext*, Göttingen, 1942.

P.-M. Schuhl, La Transmission de l'œuvre de Platon (*Encyclopédie Française*, 19, 1957, 20/13–20/15).

などが注目される。

これらのテクストについての簡単な注意は、各校訂本の序文などにも見られるし、異本のそれぞれの読み方につ

いては、前記バーネット(*Platonis opera*)、ビュデ(*Platon, Œuvres complètes*)などのプラトン全集に、それぞれ脚注のかたちで、apparatus criticusがついている。なお、これの詳しいものには、

M. Schanz, *Platonis opera*, Lipsiae, 1875–87.

がある。これの『ソピステス』(一八八七年)は、その最後に出たものであるが、その原文批判上の注が重要視されている。この全集にはOctavausgabeとkritische Ausgabeがあるけれども、原文批判に関しては後者の方が重要である。

H. Richards, *Platonica*, London, 1911.

は、プラトンの全著作について、原文批判の注だけを集めたものである。いろいろな新しい読み方を提案している。

スコリア(欄外古注)の由来については、なお、

L. Cohn, Untersuchungen über die Quellen der Plato-Scholien, *Jahrbücher für klassische Philologie. Supplement-band*, XIII, SS. 771–864, Leipzig, 1884.

という研究がある。

なお、スコリアを序文・注解付きではじめて集大成したものとして、

W. C. Greene, *Scholia Platonica*, Haverford, 1938.

がある。

また、プラトンのマニュスクリプト(写本)を集大成したものとしては、

Plato manuscripts, edited by R. S. Brumbaugh and R. Wells, with the assistance of D. Scott and H. V. Botsis, New Haven and London, Yale University Library, 2 voll., 1962.

がある。これはイエール大学図書館のプロジェクトで、プラトンのマニュスクリプトをうつしたマイクロフィルム

のカタログである。第一部は、現在ベルギー、デンマーク、イギリス、ドイツ、イタリーにあるマニュスクリプト、第二部は、オーストリア、チェコスロバキア、フランス、オランダ、スペインにあるマニュスクリプト、及び一六〇〇年以降のマニュスクリプトとしてベルギー、デンマーク、イギリス、ドイツ、イタリーにあるものをふくんでいる。

The Plato manuscripts, a New Index, prepared by the Plato Microfilm Project of the Yale University Library under the direction of R. S. Brumbaugh and R. Wells, New Haven and London, Yale University Press, 1968. は、前記のイエール・マイクロフィルム・コレクションに基いて、世界中にある一五〇〇年以前のマニュスクリプトをすべて網羅して表にのせ、さらに対照表、パピュルス表などをも含んでいる。

四　著作の真偽論、執筆時期(順序)の推定

ところで、これらのプラトンの著作として伝えられているものが、はたしてプラトンの著作であるかどうかということについても、昔から若干疑問とされるものがあったのであるが、一九世紀のドイツ学界において、これの極端な懐疑主義が流行したことがある。それはもはや今日では一つの昔語りになってしまったが、しかし今日でも若干の問題はのこされている。すなわち今日でも真偽の決定しない、疑わしいものが若干残されているのであるが、そのあるものはそれの真偽が全体のプラトン解釈に、それほどの影響をもたないけれども、他のものは、真偽いかんによって、プラトン像がかなり変って来ると思われる。

J. Socher, *Ueber Platons Schriften*, Müinchen, 1820.

は、その点において、きわめて興味のある書物で、彼は Platon aus Platon erkennen (S. 24) の立場に立って、プラトンの Normal-Werke 七篇を選び、これを標準にして、他の対話篇の真偽を決定することを試みたのであるが、その結果『エピノミス(法律後篇)』『書簡集』『パルメニデス』『ソピステス』『ポリティコス(政治家)』『クリティア

ス』など、大部分は新プラトン派以来重要視されて来ていた著作を、Normal-Werkeに選ばれた『パイドン』『プロタゴラス』『ゴルギアス』『パイドロス』『饗宴』『国家』『ティマイオス』の思想と矛盾するの故をもって、きわめて疑わしいものであると断定した。そしてこの断定は、その後のドイツ学界に多くの影響を及ぼしているのである。しかしこれは、プラトンの著作の間に思想上の不一致があることを示すとしても、一方のみを真正のプラトン思想とする理由にはならないのであって、むしろプラトンの哲学体系というようなものを、任意の対話篇からつくり上げて、これを標準にして、他の対話篇の真偽を決定するというような、それまでのドイツ学者の方法に対して疑問をもたせる結果になるわけである。

かくてゾーヘルの結論に対しては、

G. Grote, *Plato and the other Companions of Socrates*, 3 voll., 1865 ; new ed., 4 voll., London, 1888 ; Index volume, 1870 ; repr. N. Y., 1973.

を代表として、むしろ昔から伝えられているものは、一応これを認めようとする、伝統主義の立場に立つイギリスの学界から、

L. Campbell, *The Sophistes and Politicus of Plato*, Oxford, 1867 ; repr. N. Y., 1973.

が、現われて、決定的な反対の答をすることになった。彼はこの書物のgeneral introductionにおいて、『ソピステス』と『ポリティコス(政治家)』の用語と語法の特色が、『ティマイオス』『クリティアス』『法律』などと共通であって、他の対話篇と著しく異なることを示した。しかしこの差異は、直ちに偽作であることを示すものではない。同じ差異は、アリストテレス(『政治学』第二巻(1271b1)、『生成消滅論』第一巻(325b24))がプラトンの著として語っている『ティマイオス』『法律』にも共通に見られるところであって、ゾーヘルもNormal-Werkeのうちに『ティマイオス』を数えているからである。従ってプラトンの著作のうちに見出される、文体上のこのような差異は、

ゾーヘルが指摘したような、思想上の差異と共に、別な解釈によって説明されなければならなくなる。この新しい見地は、プラトンの思想も文体も、年代によって変化したと考えることによって得られる。『法律』が『国家』よりも後の作であることは、アリストテレス（『政治学』第二巻（1264^b26–27））の証言するところであり、それが遺稿のごときものであった（*Diogenes Laert.*, III. 37）とさえ言われているのであるから、これと類似語の多い著作が後期のものとされ、他が前期のものとなり、その間の順序が文体や内容の細密な研究によって、いろいろに推定されることになった。しかしこれも大体の前後を推定することはできても、細かい順序をきめることは困難の模様で、問題はなお残されている。

また真偽論についても、『エピノミス（法律後篇）』と『書簡集』については、まだ議論が分れているところがある。真偽論と著作年代の問題、さらには、それに伴なうプラトン解釈について、一般的な叙述を求めるなら、

H. Raeder, *Platons philosophische Entwicklung*, Leipzig, 1905; 2 Aufl. 1920; Nachdr. Aalen, 1973.

が手頃であろう。

もっと具体的な取り扱い方を知るのには、

W. Dittenberger, Sprachliche Kriterien für die Chronologie der platonischen Dialoge, *Hermes*, XVI, 1881, SS. 321–345.

M. Schanz, *Zur* Entwicklung des platonischen Stils, *Hermes*, XXI, 1886, SS. 439–459.

C. Ritter, *Untersuchungen über Plato. Die Echtheit und Chronologie der platonischen Schriften*, Stuttgart, 1888.

H. von Arnim, *De Platonis dialogis quaestiones chronologicae*, Rostock, 1896.

G. Janell, Quaestiones Platonicae, *Jahrbücher für klassische Philologie. Supplementband*, XXVI, 1901, SS. 265–326.

などによるべきである。アルニム、ヤネルにおいては、特にいわゆるhiatus（二語間の母音連続）の問題——ブラス

の書(F. Blass, *Die attische Beredsamkeit*, Bd. II, 2 Aufl. Leipzig, 1887, SS. 457 ff.)参照——が取り扱われている。

W. Lutoslauski, *The Origin and Growth of Plato's Logic, with an Account of Plato's Style and of the Chronology of his Writings*, London, 1897 ; repr. 1905.

は、これらの総括的研究を目ざしたものである。同じ著者による、

W. Lutoslauski, Principes de stylométrie appliqués à la chronologie des œuvres de Platon, *Revue des Études grecques*, 1898, pp. 61-81.

W. Lutoslauski, Sur une nouvelle méthode pour déterminer la chronologie des dialogues de Platon, *Mémoire en le 16 mai 1896, à l'Institute de France devant l'Académie des sciences morales et politiques.*

のうち後者は河野与一訳『プラトーン対話篇年代決定の新方法』(昭和4年)となって、岩波の「哲学論叢」の一冊として出ている。これらの研究の大略を知るのに便利である。邦語文献としては、ほかに、

三井浩「プラトーン哲学資料論——プラトーンに於ける哲学的精神の発展序説——」(『哲学研究』26の12、27の5、6、7)

がある。

なお『書簡集』と『エピノミス(法律後篇)』の真偽論については、

H. Raeder, Ueber die Echtheit der platonischen Briefe, *Rheinisches Museum für Philologie*, N. F., LXI, 1906, SS. 427-471, 511-542.

R. Adam, *Die Echtheit der platonischen Briefe*, Berlin, 1906.

R. Hackforth, *The Authorship of the Platonic Epistles*, Manchester, 1913.

E. Howald, *Die Briefe Platons*, Zürich, 1923.

L. A. Post, *Thirteen Epistles of Plato*, Oxford, 1925.
F. Müller, *Stilistische Untersuchungen der Epinomis des Philippos von Opus*, Berlin, 1927.
A. E. Taylor, *Plato and the Authorship of the Epinomis*, Oxford, 1929.
F. Novotný, *Platonis Epistulae commentariis illustratae*, Brno, 1930.
J. Harward, *The Platonic Epistles*, transl. with introd. and notes, Cambridge, 1932.
G. R. Morrow, *Studies in the Platonic Epistles*, Urbana, 1935.
H. Raeder, *Platons Epinomis*, København, 1938.
G. Pasquali, *Le lettre di Platone*, Firenze, 1938.
R. S. Bluck, *Plato's Seventh and Eighth Letters*, Cambridge, 1947.
E. Howald, *Platonis Epistulae genuinae*, Zürich, 1951.
F. Novotný, *Platonis Epinomis commentariis illustrata*, Praha, 1959.
G. R. Morrow, *Plato's Epistles*, Urbana, 1935 ; revised ed. N. Y., 1962.
L. Edelstein, *Plato's Seventh Letter*, Leiden, 1966.

などが注目される。

五　プラトンの生涯と思想

さてかくのごとく、プラトンの著作が年代によって、内容形式文体に差異を示すことが明らかになると、プラトン解釈は体系的な見方よりも、発展史的な見地を取るようになって来る。そしてプラトンの思想は、ソクラテスとアリストテレスの間におかれて、その間の連続をたどることが求められるようになる。そこには当然、前期から後

期への哲学思想の発展をどのようにとらえるか、またそれとの関連において、いわゆる「ソクラテス問題」、「書かれざる教説（アカデメイア学園での講義）」の問題、「第三の人間」の問題を中心とするイデア論への評価、等々のさまざまの解釈上の問題が生じてくる。

しかしこれらについては後に逐次見て行くことにして、まずこのような特殊の問題を離れて、プラトンの生涯・著作・思想及びその背景などを全般的に知りたいと思うならば、

E. Zeller, *Die Philosophie der Griechen*, 2 Teil, 1 Abt., Leipzig, 1888 ; 6 Aufl. Hildesheim, 1963.

G. Grote, *Plato and the other Companions of Socrates*, new ed., 4 voll., London, 1888 ; repr. N. Y., 1973.

C. Ritter, *Platon, sein Leben, seine Schriften, seine Lehre*, 2 Bde., München, 1910–23.

U. von Wilamowitz-Moellendorff, *Platon, sein Leben und seine Werke*, 2 Bde. Berlin, 1919 ; Bd. I. 5 Aufl. bearb. und mit einem Nachwort vers. von B. Snell ; Bd. II. 3 Aufl. bearb. und mit einem Nachwort von R. Stark, Berlin, 1959–62.

などが、いずれも大冊ではあるが、どれか読まれてよいであろう。また、

A. E. Taylor, *Plato, the Man and his Work*, London, 1926 ; 7 ed. 1960 ; repr. 1971.

P. Friedländer, *Platon*, 3 Bde. I und II, 3 Aufl. 1964 ; III, 2 Aufl. Berlin, 1960.（英訳 *Plato I : An Introduction. II : The Dialogues, First Period. III : The Dialogues, Second Period.* transl. by H. Meyerhoff, N. Y., 1958.）

P. Shorey, *What Plato said*, Chicago, 1933 ; 6 impr. 1965.

K. Hildebrandt, *Platon. Der Kampf des Geistes um die Macht*, Berlin, 1933.

L. Robin, *Platon*, Paris, 1935 ; Nouvelle éd. avec bibliogr. mise à jour et complétée, 1968.

などは、いずれも代表的な書物ということができるであろう。なお、

J. Burnet, *Greek Philosophy: Thales to Plato*, London, 1914; repr. 1961.

G. C. Field, *Plato and his Contemporaries*, London, 1930; 2 ed. 1948.

H. Raeder, *Platons philosophische Entwicklung*, Leipzig, 1905; 2 Aufl. 1920.

J. Stenzel, *Platon der Erzieher*, Leipzig, 1928; Nachdr. Hamburg, 1961.

などもこの類に入れてよいかも知れぬ。ただし、バーネットの書物のソクラテス、プラトンに関する部分は、いわゆるバーネット＝テイラー説という特殊な解釈上の立場に立って書かれている。もっと簡単なものでは、少し古いが、

W. Windelband, *Platon*, Stuttgart, 1898; 7 Aufl. 1923.

A. E. Taylor, *Plato* (Philosophers ancient & modern), London, 1922.

などを挙げることができる。ヴィンデルバントのものは、著作の取り扱いが旧式とはいえ、また、テイラーのものは、いわゆるバーネット＝テイラー説が表面に表われていないで、両者とも全体的な見通しができてよく書かれている。ヴィンデルバントの翻訳としては、出隆・田中美知太郎訳『プラトン』(大村書店　大正13年)がある。

これより新しいものでは、

H. Herter, *Platons Akademie*, Bonn, 1928; 2 Aufl. 1952.

A. Diès, *Platon* (Les grands cœurs), Paris, 1930.

P. Shorey, *Platonism Ancient and Modern*, California, 1938.

A. Koyré, *Introduction à la lecture de Platon*, N. Y., 1945; réimpr. Paris, 1962. (英訳 *Discovering Plato*. transl. by L. C. Rosenfield, N. Y., 1945; paberback, 1968.)

W. Jaeger, *Paideia. Die Formung des griechischen Menschen*, Bd. II, III, Berlin, 1944-47; Ungekürzter photome-

chanischer Nachdruck in einem Band, Berlin/N. Y., 1973. (Eng. transl. by G. Highet, Oxford, 1944-45.)

V. Goldschmidt, *Les Dialogues de Platon. Structure et méthode dialectique*, Paris, 1947 ; 2 éd. 1963.

K. Schilling, *Platon. Einführung in seine Philosophie*, Wurzach/Württ, 1948.

R. S. Bluck, *Plato's Life and Thought, with a transl. of the Seventh Letter*, London, 1949.

E. Hoffmann, *Platon. Eine Einführung in sein Philosophieren*, Zürich, 1950 ; Neuausg. 1961.

P.-M. Schuhl, *L'Œuvre de Platon*, Paris, 1954 ; 2 éd. 1958.

H. Gauss, *Philosophischer Handkommentar zu den Dialogen Platos.*

1 Teil, 1 Hälfte : *Allgemeine Einleitung in die platonische Philosophie*, Bern, 1952 ; Nachdr. 1971.

1 Teil, 2 Hälfte : *Die Frühdialoge*, Bern, 1954.

2 Teil, 1 Hälfte : *Die Dialoge der Übergangszeit. Gorgias, Meno, Euthydem, Menexenus und Cratylus*, Bern, 1956.

2 Teil, 2 Hälfte : *Die Dialoge der literarischen Meisterschaft. Phädo, Symposium, Staat und Phädrus*, Bern, 1958.

3 Teil, *Die Spätdialoge.*

1 Hälfte : *Theätet, Parmenides, Sophist und Politicus*, Bern, 1960.

2 Hälfte : *Philebus, Timaeus, Critias und Gesetze*, Bern, 1961.

Register, Bern, 1967.

I. M. Crombie, *Plato. The Midwife's Apprentice*, London, 1964.

O. Wichmann, *Platon. Ideelle Gesamtdarstellung und Studienwerk*, Darmstadt, 1966.

K. Bormann, *Platon*, Freiburg/München, 1973.

などがある。ガウスのものは、流行の議論とは一応無関係に、あるいは旧式とも思われるようなしかたで、内容だ

けで議論しているが、今日ではかえってこの方が新鮮な印象を与えるかもしれない。

プラトンの哲学思想だけについては、一般的なものとしては、

P. Shorey, *The Unity of Plato's Thought*, Chicago, 1903 ; new impr. 1960.

J. A. Stewart, *Plato's Doctrine of Ideas*, Oxford, 1909 ; repr. N. Y., 1964.

P. E. More, *Platonism*, Princeton, 1917 ; repr. N. Y., 1969.

A. E. Taylor, *Platonism and its Influence*, London, 1924 ; repr. N. Y., 1963.

J. Burnet, *Platonism*, California, 1928.

J. G. Frazer, *The Growth of Plato's Ideal Theory. An Essay*, London, 1930 ; repr. N. Y., 1967.

C. Ritter, *Die Kerngedanken der platonischen Philosophie*, München, 1931.

G. M. A. Grube, *Plato's Thought*, London, 1935 ; new ed. Boston, 1958.

R. Demos, *The Philosophy of Plato*, N. Y., 1939 ; repr. 1966.

G. C. Field, *The Philosophy of Plato*, Oxford, 1949.

W. D. Ross, *Plato's Theory of Ideas*, Oxford 1951 ; 2 ed. 1953 ; repr. 1971.

P.-M. Schuhl, *L'Œuvre de Platon*, Paris, 1954 ; 2 éd. 1958.

R. C. Lodge, *The Philosophy of Plato*, London, 1956.

A. D. Winspear, *The Genesis of Plato's Thought*, 2 ed. N. Y., 1956.

L. Robin, *Les rapports de l'être et de la connaissance d'après Platon*. Publié par P.-M. Schuhl, Paris, 1957.

K. Hildebrandt, *Platon. Logos und Mythos*, 2 Aufl. Berlin, 1959.

N. Gulley, *Plato's Theory of Knowledge*, London, 1962.

I. M. Crombie, *An Examination of Plato's Doctrines.*
Vol. I. *Plato on Man and Society*, London, 1962.
Vol. II. *Plato on Knowledge and Reality*, London, 1963.
E. A. Havelock, *Preface to Plato*, Oxford, 1963.
W. Bröcker, *Platos Gespräche*, Frankfurt a. M., 1964, 2 Aufl. 1967.
J. E. Raven, *Plato's Thought in the Making. A Study of the Development of his Metaphysics*, Cambridge, 1965.
J. Moreau, *Le Sens du Platonisme*, Paris, 1967.
H. Gundert, *Der platonische Dialog*, Heidelberg, 1968.
T. M. Robinson, *Plato's Psychology*, Toronto, 1970.
G. Martin, *Platons Ideenlehre*, Berlin/N. Y., 1973.

などが注目される。バーネットのものは、出隆・宮崎幸三訳『プラトン哲学』(岩波文庫)があるが、右にふれたように、きわめて特殊な解釈のもとに書かれているので、注意しなければならない(バーネット＝テイラー説については、六「ソクラテス問題」の項を参照)。リッターのものはアレス(A. Alles)の英訳 *The Essence of Plato's Philosophy*, London, 1933. がある。

もう少しつっこんだもの、あるいは特殊なものとしては、

D. Peipers, *Ontologia Platonica*, Lipsiae, 1883.
E. Frank, *Plato und die sogenannten Pythagoreer*, Halle, 1923 ; Nachdr. 1962.
A. J. Festugière, *Contemplation et vie contemplative selon Platon*, Paris, 1936 ; 2 éd. 1950.
R. Schaerer, *La Question platonicienne. Étude sur les rapports de la pensée et de l'expression dans les Dialogues,*

Paris, 1938 ; 2 éd. revue et argumentée d'une postface : à la Recherche de Platon, 1969.

J. Moreau, *La construction de l'idéalisme platonicien*, Paris, 1939 ; reprogr. Hildesheim, 1967.

S. Pétrement, *Le Dualisme chez Platon. Les Gnostiques et les Manichéens*, Paris, 1947.

V. Goldschmidt, *Le Paradigme dans le Dialectique platonicienne*, Paris, 1947.

B. Liebrucks, *Platons Entwicklung zur Dialektik. Untersuchungen zum Problem des Eleatismus*, Frankfurt a. M., 1949.

J. Moreau, *Réalisme et idéalisme chez Platon*, Paris, 1951.

M. Vanhoutte, *La Méthode ontologique de Platon*, Paris, 1956.

H. M. Wolff, *Plato. Der Kampf ums Sein*, Bern, 1957.

K. Gaiser, *Protreptik und Paränese bei Platon. Untersuchungen zur Form des platonischen Dialogs*, Stuttgart, 1959.

P.-M. Schuhl, *Études platoniciennes*, Paris, 1960.

H.-G. Gadamer, *Platos dialektische Ethik und andere Studien zur platonischen Philosophie*, Hamburg, 1968.

R. Marten, *Der Logos der Dialektik*, Berlin, 1965.

G. Prauss, *Platon und der logischer Eleatismus*, Berlin, 1966.

H. Meinhardt, *Teilhabe bei Platon*, Freiburg/München, 1968.

V. Goldschmidt, *Questions Platoniciennes*, Paris, 1970.

A.-J. Festugière, *Les Trois《Protreptiques》de Platon. Euthydème, Phédon, Epinomis*, Paris, 1973.

H. Joly, *Le Renversement platonicien. Logos, Episteme, Polis*, Paris, 1974.

などが挙げられるだろう。

特殊研究はいろいろあって、全部を枚挙はできないが、

E. Zeller, *Platonische Studien*, Tübingen, 1839; Neudr. Amsterdam, 1969.

H. Bonitz, *Platonische Studien*, 3 Aufl. Berlin, 1886; Neudr. 1968.

F. Horn, *Platonstudien*, Wien, 1904.

C. Ritter, *Neue Untersuchungen über Platon*, München, 1910.

W. F. R. Hardie, *A Study in Plato*, Oxford, 1936.

J. B. Skemp, *The Theory of Motion in Plato's Later Dialogues*, Cambridge, 1942; enlarged ed. Amsterdam, 1967.

H. F. Cherniss, *The Riddle of the Early Academy*, Berkeley/Los Angeles, 1945.

H. F. Cherniss, *Aristotle's Criticism of Plato and the Academy*, I, Baltimore, 1944; repr. N. Y., 1962.

W. G. Runcimann, *Plato's Later Epistemology*, Cambridge, 1962.

E. W. Schipper, *Forms in Plato's Later Dialogues*, The Hague, 1965.

C. J. de Vogel, *Philosophia*, Part I: *Studies in Greek Philosophy*, Assen, 1970, pp. 155-292.

J. M. E. Moravisik (ed.), *Patterns in Plato's Thought*, Boston, 1973.

などは、プラトンの後期著作についての研究を主要な内容としている。ただしボーニッツだけは、前期著作についても論じている。

なお前期の著作や思想については、

M. Pohlenz, *Aus Platos Werdezeit*, Berlin, 1913.

H. von Arnim, *Platos Jugenddialoge und die Entstehungszeit des Phaidros*, Leipzig, 1914; reprograph. 1967.

J. Hirschberger, *Die Phronesis in der Philosophie Platons vor dem Staate*, Leipzig, 1932.

R. Robinson, *Plato's Earlier Dialectic*, N. Y., 1941; 2 ed. Oxford, 1953; repr. 1970.

R. Guardini, *Der Tod des Sokrates. Eine Interpretation der platonischen Schriften Euthyphron, Apologie, Kriton und Phaidon*, Bern, 1945; Neudr. München, 1969.

R. Böhme, *Von Sokrates zur Ideenlehre: Beobachtungen zur Chronologie des platonischen Frühwerks*, Bern, 1959.

L. Noussan-Letrry, *Spekulatives Denken in Platons Frühschriften. Apologie und Kriton*, Freiburg/München, 1974.

などの研究がある。

六 「ソクラテス問題」、「書かれざる教説（アカデメイア学園での講義）」

しかしながら、先にも述べたごとく、このように前期・後期の思想といっても、それぞれをどのような特色のもとにとらえるか、またそもそもプラトン自身の中心思想は何か、といった点については、学者の間に必ずしも一定公認の見解があるわけではなく、右に挙げられた書物も、多かれ少なかれその解釈上の立場を異にしている。

そのような解釈上の問題点の一つとして、まず、プラトンの著作の大部分がソクラテスを主役とする対話篇の形で書かれているという事実と関連して、「ソクラテス問題」があり、先にふれたいわゆるバーネット＝テイラー説も、この問題にかかわっている。

ソクラテスについては、われわれはプラトンの対話篇、特に『ソクラテスの弁明』『クリトン』『パイドン』『饗宴』など、ソクラテスが登場して活躍する対話篇から、最も多くの材料を得るのであるが、なおまたクセノポンの『ソクラテスの思い出』『ソクラテスの弁明』『饗宴』や、アリストパネスの喜劇『雲』なども、欠くことのできない資料を提供してくれる。またアイスキネスその他の、いわゆるソクラテス学派の人たちについて知り得る事柄は、また間接にソクラテスを知る材料となり、ディオゲネス・ラエルティオス『著名なる哲学者の生涯、思想、言行』

第二巻（一八―四七）も、また参考にすべき事柄を含んでいる。

ところでわれわれは、どこまでクセノポンの証言を信用することができるであろうか。この問題はまた、プラトンの対話篇に出て来るソクラテスを、われわれはどこまで実際のソクラテスと見なし得るかという問題と相関的である。最初の印象では、対話篇のソクラテスはつくりものであると考えられやすい。これに反して歴史家としてのクセノポンは、ソクラテスについても事実を語っていると考えられる。かくて実際のソクラテス、あるいは史的ソクラテスと呼ばれるものは、クセノポンの伝えているのがそれであって、プラトンのソクラテスは、プラトン自身の思想をのべるための傀儡に過ぎないというような考えが、ヘーゲルの『哲学史』（二の六九）などを出発点として、哲学史家のドグマになろうとした。しかしながら、実際のクセノポンやプラトンを調べてみると、そう簡単に一方だけを信じたり、疑ったりすることができなくなる。かくて、

K. Joël, *Der echte und der xenophontische Sokrates*, Berlin, 1893-1901.

の三冊本が現われて、このようなドグマに挑戦し、かえってクセノポンの史料価値を否定することになった。この書はあまり読みやすくなく、議論も混雑しているけれども、とにかくこれによって一石が投じられ、学界はこれまでと反対の方向を取るようになって来た。

L. Robin, Les Mémorables de Xénophon et notre connaissance de la philosophie de Socrate, *Année Philosophique*, XXI, Paris, 1910, pp. 1-47.

は、クセノポンの否定を極端に押し進めたものであり、

J. Burnet, *Plato's Phaedo*, Oxford, 1911 ; repr. 1972. —Introduction, pp. ix-lvi.

A. E. Taylor, *Varia Socratica*, Oxford, 1911.

は、さらに一歩を進めて、プラトンのソクラテスこそ真のソクラテスであり、プラトンの描くソクラテスを、われ

われはことごとく信じなければならないとし、従来プラトン説とされていたイデア論のようなものまで、ソクラテス説であるとする、いわゆるバーネット＝テイラー説を発展させることになる。そしてクセノポンやアリストテレスの証言は、これに反する限り否定されなければならなくなる。

J. Burnet, *Greek Philosophy*, Part I: Thales to Plato, London, 1914.

は、この立場からソクラテスとプラトンを取り扱ったものであり、

A. E. Taylor, *Socrates*, Edinburgh, 1932; repr. Boston, 1951.

も、やはりこのような見方のソクラテス伝であることを知らねばならない。これには林武二訳(桜井書店　昭和21年)ほか他にも訳が出ている。しかしこの立場もまた批判されねばならない点をもっているのであって、その前提は必ずしもよく証明されてはいず、今日の学界ではほとんど容認されていない。

G. C. Field, *Plato and his Contemporaries*, London, 1930; 2 ed. 1948.

は、その最も鋭利な批評を含んでいる書物の一つである。それはまた同時にクセノポンの弁護にもなっている。かくて実際のソクラテスを知るための史料批判の問題は、ひとつの難問題なのであって、ソクラテスが実際に考えていた思想を確かめるというようなことは、なかなか容易な仕事ではないのである。しかもソクラテスについて何かを語ろうとすれば、われわれは不可避的にこの問題にぶつからなければならなくなる。

H. Maier, *Sokrates, sein Werk und seine geschichtliche Stellung*, Tübingen, 1913.

も、クセノポンやアリストテレスの証言を否定して、むしろプラトンを信じようとする立場で書かれているが、しかしそのソクラテスは、バーネットやテイラーのソクラテスとは全く異なり、よき生活をすすめる人(プロトレプティコス)、直観と行動の人という面が強調されて、学問の人という面がむしろ否定されている。それはつまりアリストテレス証言の否定の仕方が、バーネットやテイラーと逆になっているからであり、またソクラテスの実際の

姿をプラトンのうちに求めると言っても、それはバーネットやテイラーのように、プラトンのソクラテスをすべて歴史的事実に対応するものとは考えず、その間にプラトン自身のものとソクラテスのものを区別する——といっても、それは一種の循環論かも知れないのであるが、そのような——材料の選び方から帰結して来ているのである。

このようにして、史料批判の困難は、またソクラテス解釈全体の困難にもなっている。しかもマイヤーが課題にしたような、ソクラテスの史的地位の決定は、ニイチェやキルケゴールの名前に結びつけて考えられるような、広義のソクラテス観の問題とも関連し、他にもいろいろな問題をもっているのである。

C. Ritter, *Sokrates*, Tübingen, 1931.

は、ソクラテスの宗教的一面に注意を向けていること以外には、別に新奇な点はないように思われるのであるが、しかしそれの附録になっているいくつかの短い Exkurs は、ソクラテス問題のいろいろな面を気づかせてくれる。

第二次大戦後、バーネット＝テイラー説に対する反動として、

O. Gigon, *Sokrates, Sein Bild in Dichtung und Geschichte*, Bern, 1947.

が、思想家ソクラテスについて決定的なことは何も言えない、とする極端な懐疑論を吐いて以来、ソクラテス問題をめぐって再び種々の論議がかわされた。その際、バーネット＝テイラー説とギゴン説の両極端を排すべく(但し、必ずしも成功しているとは言えないが)登場したのがポルトガルの、

V. De Magalhães-Vilhena, *Le problème de Socrate : le Socrate historique et le Socrate de Platon*, Paris, 1952.

V. De Magalhães-Vilhena, *Socrate et la légende platonicienne*, Paris, 1952.

である。ヴィリエナは、プラトンの描くソクラテス像の厳密な史実性をも、ソクラテスについて知る可能性を極端に否定する懐疑論をも、いずれも過去の仮説として斥ける。

ここで問題になるのはアリストテレスの報告の価値である。

W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics*, 2 voll, Oxford, 1924; 2 ed. 1948; repr. N. Y., 1956.

によると、イデア論をソクラテスに帰することをアリストテレスの証言は妨げている。これに対してバーネットは、イデアの存在をはじめて主張したのは『ソピステス』248Aの「イデアの友」であり、それはソクラテス及びその仲間の後期ピュタゴラス派だと主張する。この点では、ヴィリエナはロス説に賛成して、バーネット説は不自然だと批判する。しかし、「概念の哲学」をソクラテスに帰することについては、ヴィリエナはアリストテレスに同調しない。

E. Zeller, *Die Philosophie der Griechen*, 2 Teil, 1 Abteilung: Sokrates und die Sokratiker. Plato und die alte Akademie, 5 Aufl. Leipzig, 1922; Neudr. Hildesheim, 1963.

É. Boutroux, *Études d'histoire de la philosophie*, 4 éd. Paris, 1925.

のようにソクラテスをアリストテレス化せずに、ヴィリエナはプラトン化する。プラトンをソクラテスから切り離す所以のアリストテレスの「コーリスモス(普遍者の超越)」論は、ソクラテスからプラトンがそう離れてはいなかったという事実によって説明され得る、とヴィリエナは考える。ただ、

C. J. de Vogel, The Present State of the Socratic Problem, *Phronesis*, I, 1955, pp. 26–35.

も批判しているように、ヴィリエナがプラトンの証言の優位性を強調するあまり、アリストテレスの報告の資料的価値を全く無視し、アリストテレスの著作との照合を意識的に行なっていないという点には、やはり相当問題が残るように思われる。

ソクラテスについては昔から多くの書物が出ているが、史料批判の問題は、それらを何か時代おくれのもののように感じさせたりするが、しかしソクラテスの問題は、まだいろいろな面をもっているから、それらを簡単に棄ててしまうことはできない。

ソクラテスを取り扱った文献は、古代哲学史の綜合的記述をめざして現在刊行中のもので、古代哲学史の記念碑的業績とも評されている、

W. K. C. Guthrie, *A History of Greek Philosophy*, Vol. III : The Fifth-Century Enlightenment, Cambridge, 1969.

の巻末にかなりくわしい Bibliography がついているから、それを参照されたい。ガスリーのこの書物のソクラテスの部分は独立に、

W. K. C. Guthrie, *Socrates*, Cambridge, 1971.

として再刊されている。

なお、邦語文献としては、

田中美知太郎「雲のソクラテス」(『田中美知太郎全集』第七巻所収)

田中美知太郎『ソクラテス』(岩波新書、『田中美知太郎全集』第三巻所収)

などを参照されたい。

さて、プラトンの哲学を知るためには、アカデメイア学園における彼の講義、いわゆる「書かれざる教説」(アグラパ・ドグマタ)の吟味研究が必要だということについては、すでに古代末期の「秘教的」と「顕教的」との対立にも見られる。

この書かれざるプラトニズム、あるいは少なくともそれを回復させる可能性について、英語圏の学者は、どちらかといえば懐疑的であるが、ドイツにおいては、古くは、

C. (=K.) Fr. Hermann, Ueber Platos schriftstellerische Motive, *Gesammelte Abhandlungen*, Göttingen, 1849, SS. 281 ff.

が、プラトンの学説の核心はその著作の中には書きおろされなかった。その哲学の最高原理、イデア論には、著作の中では暗示的もしくは付随的にふれられているだけで、その対象はむしろ講義のために取っておかれたとし、

W. Jaeger, *Studien zur Entstehungsgeschichte der Metaphysik des Aristoteles*, Berlin, 1912.

も、アリストテレス研究をふまえて、ヘルマンに近い主張をしている。この伝統もあってか、

H. J. Krämer, *Arete bei Platon und Aristoteles. Zum Wesen und zur Geschichte der platonischen Ontologie*, Heidelberg, 1959.

は、プラトンが少数者のための秘密として故意かつ慎重に残しておいた秘説をもっていたことを示そうとし、しかもこれはたいていの対話篇の行間に滲出しているから、晩年になってからの発展ではなく、かつ、「善について」という講義題目に意義があるとする。

K. Gaiser, *Platons ungeschreibene Lehre. Studien zur systematischen und geschichtlichen Begründung der Wissenschaften in der Platonischen Schule*, Stuttgart, 1963.

は、アカデメイア学園での教育活動についての証拠を援用して、クレーマーの主張を支持している。

英語圏においても、この問題を扱ったものとして最近、

J. N. Findlay, *Plato. The Written and Unwritten Doctrines*, London, 1974.

が出た。巻末には Translated Passages illustrating Plato's Unwritten Doctrines が補足されていて初学者には便利であろう。

また、この問題についての最近の諸家の論文を集めたものとして、

H.-G. Gadamer und W. Schadewaldt (vorgelegt), *Idee und Zahl. Studien zur platonischen Philosophie*, Heidelberg, 1968.

J. Wippern (hrsg.), *Das Problem der ungeschriebenen Lehre Platons. Beiträge zum Verständnis der platonischen Prinzipienphilosophie*, Darmstadt, 1972.

がある。

しかし、プラトンの講義、アリストテレス及びその弟子、注釈家たちの報告の意義を強調するあまり、プラトンの対話篇の資料的価値を否認する傾向はあまりに行き過ぎで、その点は、

H. F. Cherniss, *Aristotle's Criticism of Plato and the Academy*, I, Baltimore, 1944; repr. N. Y., 1962.

H. F. Cherniss, *The Riddle of the Early Academy*, Berkeley/Los Angeles, 1945.

の指摘するとおりであろう。

七　後期思想とイデア論

以上の問題はいずれも、プラトン哲学の「発展」をどのようにとらえるか、その後期思想の特色は何か、とくに、『饗宴』『パイドン』『国家』『パイドロス』に展開されたイデア論に対して、はたしてプラトンは後期に至って重大な修正を加え、もしくはこれを放棄したかどうか、という問題に関連している。

（1）　ジャクスン、シュテンツェル、ナートルプ

H. Jackson, Plato's Later Theory of Ideas, *The Journal of Philology*, X, 1882, pp. 253 sqq.; XI, 1882, pp. 287 sqq.; XIII, 1884, pp. 1 sqq.; XIII, pp. 242 sqq.; XIV, 1885, pp. 173 sqq.; XV, 1886, pp. 280 sqq.

は、プラトンのイデア論が、『パルメニデス』を境にして、前期と後期に分れ、それが非常に違うものであることを、『国家』と『ピレボス』の比較によって示し、一時大いにイギリスの学界を驚かしたものである。この一部は、

高田三郎によって邦訳され、『哲学研究』(12の11・12)に紹介されたことがある。むろん、ジャクスン説については、いろいろの批判が行なわれ、そのままには受け入れられなかったが、前に見たバーネット＝テイラー説も、やはり後期思想を区別して、これをプラトン独自のものとなし、前期の思想をすべてソクラテスに帰している点は、ジャクスンと共通の前提に立っていると言うことができる。つまりプラトンの著作にあらわれた前期後期の区別を、プラトン自身の変化として理解するか、あるいはソクラテスとプラトンの間の相違として理解するかという別があるだけである。

ドイツにおいても、

J. Stenzel, *Studien zur Entwicklung der platonischen Dialektik von Sokrates zu Aristoteles*, 2 Aufl. Leipzig, 1931; 3 Aufl. Stuttgart, 1961.

がやはり後期著作の論理的なイデア論を、『国家』篇に代表されているような、前期の実践的なイデアの考え方から区別し、その変化を説明しようとしている。それはツェラー(E. Zeller, *Die Philosophie der Griechen*＝前出)やナートルプのプラトン解釈(後出)に対立し、マイヤーのソクラテス解釈(H. Maier, *Sokrates*＝前出)に結びつくものであるが、他方また、

W. Jaeger, *Aristoteles. Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung*, Berlin, 1923.

などにおいて明らかにされたような、プラトン学徒としてのアリストテレスの初期思想とプラトンの後期思想との連続を明らかにし、後のイデア論批評にあらわれたアリストテレスをも、そのような連絡において見ようと試みている。これはしかしジャクスンもすでに試みたことなのである。ただし、これらの発展変化説に対しては、P. Shorey (*What Plato said*＝前出、*The Unity of Plato's Thought*＝後出)のごとく、反対に統一的立場を強調する傾向もあることを忘れてはならないであろう。わが国においては、以前においてナートルプのプラトン解釈が行なわれ、

後にはシュテンツェルの解釈が受けいれられたことがあるけれども、両者ともドイツ哲学的な Begriff をめぐって考えている点は同じで、これだけでプラトン解釈の問題を片づけるのは、決して正しいことではないであろう。しかしこれらの学者の研究は、いろいろ哲学的に興味深い暗示を含んでいるから、よくプラトンのテクストを読んだ上で、これらを利用するのは結構であると思われる。シュテンツェルの著は D. J. Allan によって *Plato's Method of Dialectic*, Oxford, 1940; repr. N. Y., 1973. と題して英訳されている。

シュテンツェルのその他の重要な著書としては、

J. Stenzel, *Zahl und Gestalt bei Platon und Aristoteles*, Leipzig, 1924; 3 Aufl. Darmstadt, 1959.

J. Stenzel, *Platon der Erzieher*, Leipzig, 1928; Neudr. Hamburg, 1961.

J. Stenzel, *Metaphysik des Altertums*, München, 1931.

J. Stenzel, *Kleine Schriften zur griechischen Philosophie*, Darmstadt, 1956.

などがある。ナートルプのものでは、

P. Natorp, *Platos Ideenlehre. Eine Einführung in den Idealismus*, 2 Aufl. Leipzig, 1921; Nachdr. Hamburg, 1961.

が代表的である。同じく、

P. Natorp, *Ueber Platos Ideenlehre.* (Philosophische Vorträge, Nr. 5), Berlin, 1914; 2 Aufl. 1925.

も小冊子ではあるが、よく書かれている。またナートルプの師であるコーヘンの、

H. Cohen, *Platos Ideenlehre und die Mathematik*, Marburg, 1879.

も一読されてよいであろう。これは岩波の「哲学論叢」中に高田三郎訳『プラトンのイデア論と数学』(昭和3年)が出ており、原文は H. Cohen, *Schriften zur Philosophie und Zeitgeschichte*, Berlin, 1928. の二冊本のうち、第一巻に収められている。

(2) 現代の論争(「第三の人間」論その他)

ところで、以上のようなプラトン後期思想解釈の問題は、最近にいたってとくに、「哲学の革命」と称された分析哲学運動の流れと接触することによって大きな論争をよび起こし、英米の哲学界全般にひとつの波紋を及ぼしている。主としてオクスフォード大学に拠点をもつ非形式論理的分析派の学者たちは、『パルメニデス』『テアイテトス』『ソピステス』といった後期の対話篇の中に、自分たちの仕事の先駆を見出そうとする。その有力な一人であるライルは、

G. Ryle, Plato's *Parmenides*, *Mind*, N. S., XLVIII, 1939, pp. 129–151, 302–325; repr. in R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965, pp. 97–147.

において、右の後期諸対話篇におけるプラトンの探究が、ヒュームやカントの学説のある部分と対応し、ラッセルの命題函数理論やタイプ理論と親近性をもち、とりわけヴィトゲンシュタインの *Tractatus Logico-Philosophicus* のほとんどすべてと最も親近性をもっていると信じる旨を表明した。

しかし、このようにプラトンが彼らから偉大な先駆者とみなされるためには、一つの重大な条件が必要であった。すなわちそれは、プラトンが初・中期対話篇において展開したイデア論という形而上学の誤まりをみずから認め、いわばその罪を悔い改めているのでなければならぬ、ということである。この悔い改めの転機とされるのは、いうまでもなく、『パルメニデス』のいわゆる第一部であり、そこでプラトンが老パルメニデスの口から語らせた批判的設問——いわゆる「第三の人間」論をふくむいくつかのアポリアー——は、イデア論の諸前提にとり完全に致命的な有効性をもつとされる。これによってプラトンは、以後イデア論をその論理的困難のゆえに意識的に放棄し、日常言語の非形式論理的分析へと探求の方向を大きく変えて成果を挙げたことになるから、まさにその点において、

今世紀初めのブラッドレイ(F. H. Bradley)を中心とする思弁的実在論的哲学から、今日のオクスフォード・アナリストたちに至るまでの英国哲学の動きを、かなり正確に先取りしていたことになる。

これは、先にのべた往年のジャクスン説やバーネット＝テイラー説とはまた違った装いのもとに復活した、プラトンによるイデア論放棄の説の現代版である。現在、前記のライルのほか、オーエン(G. E. L. Owen)、アクリル(J. L. Ackrill)、ロビンソン(R. Robinson)、クロス(R. C. Cross)等々が、細部の問題点について互いに異論はあっても、右のような基本線に関するかぎり、共同して論陣を張っている。こうした論点をめぐる諸論文を編集したものとしては、

R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965.

G. Vlastos (ed.), *Plato I: Metaphysics and Epistemology. A Collection of Critical Essays*, N. Y., 1971.

がある。

むろん、このようなプラトン像は、実際のプラトンのテクストの解釈の上で、幾多の障害に出あわざるをえない。げんに、もしプラトンが『パルメニデス』を転機としてイデア論を放棄したのであれば、彼の晩年近くの――少なくとも『パルメニデス』以後の――執筆であることがほぼ公認されてきた『ティマイオス』や『第七書簡』の中に、それが依然力づよく表明されている事実をどう説明するのか。こんにちの学者たちにはもはや、過去のバーネット＝テイラー説がこの点についてとった説明をそのままくり返すことは許されないであろう。

そこで前記のオーエンは、

G. E. L. Owen, The Place of the *Timaeus* in Plato's Dialogues, *C. Q.* N. S., III, 1953, pp. 79–95; repr. in R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965, pp. 313–338.

という論文において、『ティマイオス』が『パルメニデス』以前に書かれた中期著作であることを、文体研究と思

想内容の両面から論証しようと試み、また、ライルは、

G. Ryle, *Plato's Progress*, Cambridge, 1966.

において、『第七書簡』が、その中に記載されているプラトンのシケリア旅行にまつわるいろいろの出来事のクロノロジカルな検討によって、絶対にプラトンの真作とはみなしえないと論じている。

これまでの『ティマイオス』後期説は一九世紀後半の文体統計諸研究の成果によっても確証されていた。オーエンは従来の文体統計法による著作時順推定を斥けて、L. Billig の clausulae(一定のリズムを生むための文節末の語の配列)研究(*Journal of Philology*, XXXV, 1920, pp. 225–256)による時順推定法を採択して、『ティマイオス』『クリティアス』は『国家』グループの「最後を飾る作品」であり、故にその位置は『パルメニデス』『テアイテトス』『ソピステス』『ポリティコス(政治家)』などのいわゆる批判的対話篇群より前、従って『ピレボス』よりはるか前であるとする。オーエンが『ティマイオス』の位置を『パルメニデス』より前とする意図は、批判的対話篇群を、『ティマイオス』に表明されているイデア論の思想、とくにその「パラデイグマ(範型)主義」(イデアと個物との関係を、原物・範型とその似像との関係により説明する考え)から救出することにある。オーエンのこの意図は、学界にもかなり大きな影響をあたえ、

J. Gould, *The Development of Plato's Ethics*, Cambridge, 1955; repr. N. Y., 1972.

D. W. Hamlyn, The Communication of forms and the development of Plato's Logic, *Philos. Q.*, V, 1955, pp. 289–302.

J. M. E. Moravcsik, The 'Third Man' Argument and Plato's Theory of Forms, *Phronesis*, VIII, 1963, pp. 50–62.

等が、この説を採っている。

しかし、オーエン説は、

H. F. Cherniss, The Relation of the *Timaeus* to Plato's Later Dialogues, *American J. Philol.*, LXXVIII, 1957, pp. 225–266; repr. in R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965, pp. 339–378.
の鋭い批判に遭遇する。チャーニスは、オーエン説の根拠たるBilligのclausulae統計表数値の不備及びその前提の不当性を実証的に指摘、検討するとともに、オーエンの意図を歓迎した前記オクスフォード・アナリストたちのプラトン解釈を伝統的、正統的な立場から斥けている。チャーニスの論点は、(1)『クラテュロス』『パルメニデス』『テアイテトス』の位置は『ティマイオス』より前、(2)『ティマイオス』の位置が『ソピステス』『ポリティコス(政治家)』『ピレボス』より前だとするオーエン説には明白な証拠がなく、むしろ、少なくとも『ソピステス』『ポリティコス(政治家)』が『ティマイオス』より前だとする方が根拠がある。(3)これらの批判的対話篇群の著作時順がどうであろうと、『ティマイオス』の示す哲学的理論はそれらのどの作品とも矛盾せず、また拒否されてもいない、といった諸点にわたっている。とくに、かりにオーエンのように『ティマイオス』を『パルメニデス』より前の著作と見なしたとしても、しかし彼が極力拒けようとするイデア論の「パラデイグマ(範型)主義」は、依然として、後期の批判的対話篇群の一つである、たとえば『ポリティコス(政治家)』(285D～286A)に歴然と表明されている、という事実の指摘は、このオーエンの「プラトンによるイデア論放棄」の説に対して、ほとんど決定的な打撃を与えている観がある。

けれども、哲学的に最も興味ぶかく、また事柄そのものの性格上、問題の中心とならざるをえないのはやはり、『パルメニデス』の第一部において提出されている最大の難問、いわゆる「第三の人間」(132A～B)の困難と「イデア＝パラデイグマ(範型)」説への反論(132C～133A)が、はたしてほんとうにプラトンのイデア論に対してヴァリッドであるかどうか(そしてプラトン自身はその点をどう考えていたか)の検討であろう。前記オーエンやチャーニスの論説においても、この点をどう見るかが、イデア論解釈全体にとっての大きな分れ目となっているのである。

今世紀、

A. E. Taylor, Parmenides, Zeno, and Socrates, *Proceedings of the Aristotelian Society*, XVI, 1915–16, pp. 234–289; repr. in A. E. Taylor, *Philosophical Studies*, London, 1934.

以来、多くの人びとがこの問題を論じたが、なかんずく最近の一連の論争の先駆をなしたのは、

G. Vlastos, The Third man Argument in the *Parmenides*, *Philos. R.*, LXIII, 1954, pp. 319–349; repr. in R. E. Allen(ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965, pp. 231–264.

である。ヴラストスは、「第三の人間」の困難はプラトンのイデア論に対して完全に有効であり、『パルメニデス』前半での、巨匠パルメニデスによるイデア論批判は、自説のもつこうした困難を前にして当惑したプラトン自身の誠実な記録であると主張する。また、このように「第三の人間」の困難がプラトンのイデア論に対して有効であるのは、根本的には、イデア論が 'Self-Predication' と 'Non-Identity' という二つの前提を含んでいるからであると言う。（なお、プラトンに関するヴラストスの他の諸論文を集めたものとして、G. Vlastos, *Platonic Studies*, Princeton, 1973. がある。）

この論説が口火となって、

W. Sellars, Vlastos and 'The Third Man', *Philos. R.*, LXIV, 1955, pp. 405–437.

P. T. Geach, The Third Man Again, *Philos. R.*, LXV, 1956, pp. 72–82; repr. in R. E. Allen(ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965, pp. 265–278.

G. Vlastos, Postcript to the Third Man: A Reply To Mr. Geach, *Philos. R.*, LXV, 1956, pp. 83–94; repr. in R. E. Allen(ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965, pp. 279–292.

R. S. Bluck, The Parmenides and the Third Man, *C. Q.* N. S., VI, 1956, pp. 29–37.

H. F. Cherniss, A Much Misread Passage of the *Timaeus* (*Timaeus* 49C7-50B5), *American J. Philol.*, LXXV, 1954, pp. 113-130.

H. F. Cherniss, The Relation of the Timaeus to Plato's Later Dialogues, *American J. Philol.*, LXXVIII, 1957, pp. 247-263 ; repr. in R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965, pp. 339-378.

N. B. Booth, Assumptions involved in the Third Man Argument, *Phronesis*, III, 1958, pp. 146-149.

W. G. Runciman, Plato's *Parmenides*, *Harvard Studies in Classical Philology*, LXIV, 1959, pp. 89-120 ; repr. in R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965, pp. 149-184.

R. E. Allen, Participation and Predication in Plato's Middle Dialogues, *Philos. R.*, LXIX, 1960 ; repr. in R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965, pp. 43-60 ; repr. in G. Vlastos (ed.), *Plato I : Metaphysics and Epistemology*, N. Y., 1971, pp. 167-183.

A. L. Peck, Plato versus Parmenides, *Philos. R.*, LXXI, 1962, pp. 159-184.

R. J. Butler, The Measure and Weight of the Third Man, *Mind*, LXXII, 1963, pp. 62-78.

J. M. E. Moravcsik, The 'Third Man' Argument and Plato's Theory of Forms, *Phronesis*, VIII, 1963, pp. 50-62.

C. Strang, Plato and the Third Man, *Proceedings of the Aristotelian Society*, Suppl., XXXVII, 1963, pp. 147-164 ; repr. in G. Vlastos (ed.), *Plato I : Metaphysics and Epistemology*, N. Y., 1971, pp. 184-200.

G. Vlastos, Plato's 'Third Man' Argument (*Parm.* 132 A 1-B 2), *Philos. Q.*, XIX, 1969, pp. 289-301 ; repr. in G. Vlastos, *Platonic Studies*, Princeton, 1973, pp. 342-360.

G. Vlastos, 'Self-Predication' in Plato's Later Period, *Philos. R.*, LXXVIII, 1969, pp. 74-78.

K. W. Rankin, The Duplicity of Plato's Third Man, *Mind*, LXXVIII, 1969, pp. 178-197.

K. W. Rankin, Is the TMA an Inconsistent Triad? *Philos. Q.*, XX, 1970, pp. 378–380.

R. A. Shiner, Self-Predication and the "Third Man" Argument, *Journal of the History of Philosophy*, VIII, 1970, pp. 371–386.

S. M. Cohen, The Logic of the Third Man, *Philos. Rev.*, LXXX, 1971, pp. 448–475.

S. Panagiotou, Vlastos on *Parm.* 132 A 1–B 2: Some of his Text and Logic, *Philos. Q.*, XXI, 1971, pp. 255–259.

H. Teloh and D. J. Louzecky, Plato's Third Man Argument, *Phronesis*, XVII, 1972, pp. 80–94.

J. C. Dybikowski, Professor Owen, Aristotle and The Third Man Argument, *Mind*, LXXXI, 1972, pp. 445–447.

J. S. Clegg, Self-Predication and Linguistic Reference in Plato's Theory of Forms, *Phronesis*, XVIII, 1973, pp. 26–43.

というふうに、きわめて活潑な論争が展開されつつある。これらの論説のうち、ヴラストスやオクスフォード派の反イデア論者たちに対して反論を加えているのは、前記チャーニスのほか、ブラック、アレン、ペックなどである。

また藤沢令夫の最近の論文、

Norio Fujisawa, "Ἔχειν, Μετέχειν, and Idioms of 'Paradeigmatism' in Plato's Theory of Forms, *Phronesis*, XIX, 1974, pp. 30–58.

は、「第三の人間」の困難がプラトンのイデア論に対して有効であるという見方は、プラトンの思想を、アリストテレスの論理・哲学用語の枠組を通じて解釈しようとする根づよい傾向から由来していると指摘し、プラトン自身は、アリストテレスのそれとは全く異なったイデア論独自の記述方式を発展させていたことを、テクストの調査を通じて実証しようとした研究である。

現代の尖鋭な論理的意識のもとに行なわれつつあるこの問題をめぐる論争は、その視野が論理的興味にのみ局限

されることさえなければ、形而上学成立の可否を決める最も根本的な分岐点となり、ひいては、そのことに伴なって、価値的なものをいかに位置づけるかについての態度決定の分岐点となるであろう。その点で、

藤沢令夫「形而上学の存在理由」(日本哲学会編『哲学』No. 24, 1974, pp. 1–23)を参照されたい。

八　政治思想

ところで、今世紀においてプラトンがかつてないほどに一般の人びとの注意をひき、活潑な論議をよび起こしたのは、第一次大戦以後の現実の状況そのものが、プラトンの時代のそれと酷似、対応してきたことによるものであった。それは『国家』を中心とするプラトンの政治思想に関連する面においてである。

R. H. S. Crossman, *Plato Today*, N. Y., 1937 ; revised ed. London, 1959 ; repr. 1963.

は、「プラトンがわれわれの研究対象としてかくも適切になったのは、プラトンの時代とわれわれ自身の時代との、おどろくべきほどの類似性である。プラトンに対するわれわれの理解の道を開いたのは第一次大戦であると言っても過言ではない」と書いている。しかし、このクロスマンのほか、

W. Fite, *The Platonic Legend*, N. Y., 1934.

B. Farrington, *Science and Politics in the ancient World*, London, 1939 ; 2 impr. 1946.

A. D. Winspear, *The Genesis of Plato's Thought*, N. Y., 1940 ; 2 ed. 1956.

などは、プラトンの政治思想に対する関心が切実である反面、プラトンを全体主義者、権威主義者、反動主義者、非合理主義者等々と断定することにやや急でありすぎるきらいがあり、時代的な対応を強調するあまり、プラトンについての不正確な引用、曲解、誤解が多いといわなければならない。同じく、

K. R. Popper, *The Open Society and Its Enemies*, Vol. I: *The Spell of Plato*, 1945; 4 ed. revised, Princeton, 1962; Paperback, London, 1973-74.

は、いわゆる〈開かれた社会〉〈自由社会〉の論敵の一人プラトン攻撃に第一巻の大部分を捧げ、歴史的決定論(ポパーの言う「歴史主義」)者と断定して非難する。しかし、プラトンのうちに「歴史主義」を見つけ出そうとすることは、見当違いであって、これについてはすでに多くの専門家たちが公正で客観的な書評を行なっている。たとえば、

G. C. Field, *Philosophy*, XXI, New Books, 1946, pp. 271-276.

R. Hackforth, Plato's Political Philosophy, *C. R.*, LXI, 1947, pp. 55-57.

R. Robinson, Dr. Popper's Defense of Democracy, *Philos. R.*, LX, 1951, pp. 487-507.

などを参照。

また、ポパーに対する反駁は、

J. D. Wild, *Plato's Modern Enemies and the Theory of Natural Law*, Chicago/London, 1953.

R. B. Levinson, *In Defense of Plato*, Cambridge/Mass., 1953.

などにも見られる。なお、全般的には、

W. C. Greene, Platonism and its Critics, *Harvard Studies in Classical Philology*, LXI, 1953, pp. 39-71.

を参照。

注意しなければならぬのは、『国家』そのものがすでに典型的にそうであるように、またその他ふつう政治哲学的性格のものとされる『ゴルギアス』『ポリティコス(政治家)』『法律』等のどれをとっても明確に看取されるように、プラトンの「政治思想」は、形而上学・認識論・倫理学・自然学の諸領域にわたって深く根をひろげ、そしてそのようなものとして、これらの対話篇はすべての対話篇と緊密に連絡し合っているということである。したがっ

て、もしプラトンの「政治思想」をほんとうに論じようとするならば、人間と自然と世界に関するこの思想の総体を、すみずみまで受けとめてかからなければならない。この文字通りの有機的全体から、ただわれわれの観念による「政治思想」だけを取り出して論じてみても、その論議は皮相に流れざるをえないであろう。

以上の論争的性格の諸論説のほか、プラトンの政治思想についての文献として、つぎのものを挙げることができる。

L. Robin, Platon et la science sociale, *Revue de Métaphysique et de Morale*, XX, 1913 ; repr. L. Robin, *La Pensée hellénique des origines à Épicure*, Paris, 1942 ; 2 éd. 1967, pp. 177–230.

E. Barker, *Greek Political Theory, Plato and his Predecessors*, 2 ed. London, 1918 ; repr. 1960.

E. Barker, *The Political Thought of Plato and Aristotle*, London, 1906 ; repr. N. Y., 1959.

E. Salin, *Platon und die griechische Utopie*, München, 1921.

M. B. Foster, *The Political Philosophies of Plato and Hegel*, Oxford, 1935 ; repr. N. Y., 1965.

P. Lachièze-Rey, *Les idées morales, sociales et politiques de Platon*, Paris, 1938 ; 2 éd. 1951.

D. Greene, *Man in his pride. A Study in the political Philosophy of Thucydides and Plato*, Chicago, 1950.

T. A. Sinclair, *A History of Greek Political Thought*, London, 1951 ; new ed. 1961.

M. Vanhoutte, *La Philosophie politique de Platon dans les《Lois》*, Louvain, 1954.

J. Luccioni, *La Pensée politique de Platon*, Paris, 1958.

A. W. Gouldner, *Enter Plato. Classical Greece and the Origins of Social Theory*, N. Y./London, 1965.

R. Maurer, *Platons „Staat“ und die Demokratie. Historisch-systematische Überlegungen zur politischen Ethik*, Berlin, 1970.

A. B. Hentschke, *Politik und Philosophie bei Plato und Aristoteles. Die Stellung der „Nomoi" in platonischen Gesamtwerk und die politische Theorie des Aristoteles*, Frankfurt a. M., 1971.

九　自然学

科学史的な観点から古代ギリシアの思想家たちが顧みられるとき、しばしば高く評価されるのはタレスにはじまるミレトス学派、ヒッポクラテス医学派、とくに原子論によって近代科学の仮設を先取りしたデモクリトスなどであって、プラトンの役割はむしろ否定的な評価を受けることがよくある。

B. Farrington, *Science in Antiquity*, London, 1936.

B. Farrington, *Greek Science. Its meaning for us*, 1: *Thales to Aristotle*, 2: *Theophrastus to Galen*, Harmondsworth, 1944-49.

G. Thomson, *Studies in Ancient Greek Society*, Vol. II: *The First Philosophers*, London, 1955, esp. pp. 318-328.

B. Russell, *A History of Western Philosophy and Its Connection with political and social Circumstances from the earliest times to the present day*, N. Y., 1945. (pp. 104-149: Plato)

H. Reichenbach, *The Rise of scientific Philosophy*, Berkeley, 1951.

G. Sarton, *A History of Science*, Vol. I: *Ancient Science through the golden Age of Greece*, Cambridge/Mass., 1952. (esp. ch. XVII: Mathematics and Astronomy in Plato's Time)

といった科学史家や科学主義者たちによると、プラトンは、目にみえる現象よりも、目にみえず思惟されるだけのものを尊重せよと説き、天上的なイデアの世界を賞揚して、科学の対象となる地上の感覚的世界を非実在的と判定し、自然への純粋な好奇心と偏見なき研究を人間的な価値観のもとに従属せしめ、あるいは「作る知」を「使う知」

の下位に置いて、手仕事的な技術を低級（バナウソス）な営みとして蔑視する。こうした態度は芽生えつつあった実証科学と技術の進歩を阻害した「反動的」な態度であり、科学的精神にとっての「デカダンス」であるとする。

しかし、右のような科学の評論家たちの主張に対して、現場の第一級の科学者たちの見解はおのずから別であるといえるのであって、たとえばハイゼンベルクの、

W. Heisenberg, *Physics and Philosophy : The Revolution in modern Science*, London, 1959 ; repr. N. Y., 1962.

W. Heisenberg, *Das Naturbild der heutigen Physik*, Hamburg, 1955.（英訳 *The Physicist's Conception of Nature*, transl. by A. J. Pomerans, Westport/Connecticut, 1958 ; repr. 1970.)

は、ギリシアの自然学全般についてすぐれた理解を示しているが、とくに、自然というこの可視的世界に関するプラトンの『ティマイオス』に見られるような基本的な把握と、デモクリトスのそれとをくらべて、現代の物理学の基本思想は決定的にデモクリトスに反対し、プラトンの側に立つものであることを指摘している。

科学的思考へのプラトンの寄与に対する積極的な評価については、右のハイゼンベルクのほか、

A. N. Whitehead, *The Concept of Nature*, Cambridge, 1920 ; repr. 1964.

A. N. Whitehead, *An Inquiry concerning the Principle of Natural Knowledge*, Cambridge, 1925.

A. N. Whitehead, *Science and the Modern World*, Cambridge, 1926 ; repr. 1953.

P. Shorey, Platonism and the History of Science, *Proceedings of the American Philosophical Society*, LXVI, 1927, pp. 159–182.

A. E. Taylor, *Platonism and its Influence*, London, 1924 ; repr. N. Y., 1963.（本全集月報 1 以下に翻訳連載中）

C. F. von Weizsäcker, *Platonische Naturwissenschaft im Laufe der Geschichte*, Göttingen, 1972.

などを参照。

プラトンの自然学は、ちょうどその政治思想だけがいわゆる「政治思想」だけで孤立しているのではなかったのと同じように、ただ「自然学」だけで他から切り離されてあるのではない。プラトンの自然学は、「思惟とロゴスによってとらえられる、つねにあるもの」と「思わくと感覚によってとらえられる、つねに成り行くもの」との峻別を、その根本前提としてもつ(『ティマイオス』28A)。だから、その自然像をはっきりさせようとすれば、どうしてもイデア論と呼ばれる彼の中心思想に行き当る。その点で、

H. F. Cherniss, The Philosophical Economy of the Theory of Ideas, *American J. Philol.*, LVII, 1936, pp. 445-456 ; repr. in R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965, pp. 1-12 ; repr. in G. Vlastos (ed.), *Plato I : Metaphysics and Epistemology*, N. Y., 1971, pp. 16-27.

も示唆しているように、このイデア論は、人間の生き方に関してプラトンが師ソクラテスから受けついだ基本的態度の哲学表現であり、まさにそのようなものとして、価値と認識と存在の諸領域にかかわるさまざまの問題を統一的に把握し解決するための原理にほかならなかった。

したがって、そのような原理のもとにプラトンが「自然」について認定せざるをえなかった諸事実——自然というこの可視的世界が徹底的なたえざる生成消滅の世界であること、それに関する認識はどこまでも蓋然性の域にとどまらざるをえないこと、あるということの最後的な拠り所を粒子的実体のかたちでこの世界内に求めるのは論理的不透明を含むこと、そのようなあることの根拠はむしろ、「思惟されるもの」のほうに求められるべきこと、等々——が、その後独立の道を歩んだ自然科学そのものの探究の推進によって基本的に確かめられつつあることは、イデア論が俯瞰する人間経験の全領域にわたって、それら諸経験の哲学的把握の上に思いがけない重要な波紋を及ぼすことになるのである。

なお、プラトンの自然学を取り扱った文献として、つぎのものを挙げることができる。

C. Baeumker, *Das Problem der Materie in der griechischen Philosophie*, Münster, 1890.
A. Rivaud, *Le Problème du Devenir et la Notion de la Matière*, Paris, 1906.
C. Ritter, *Platons Stellung zu den Aufgaben der Naturwissenschaft*, Heidelberg, 1919.
L. Robin, Études sur la signification et la place de la physique dans la philosophie de Platon, *Revue Philosophique*, LXXXVI, 1918; repr. L. Robin, *La Pensée hellénique des origines à Épicure*, Paris, 1942; 2 éd. 1967, pp. 231-336.
C. Mugler, *La physique de Platon*, Paris, 1960.
D. J. Schulz, *Das Problem der Materie in Platons 《Timaios》*, Bonn, 1966.
H. Perls, *Plato. Seine Auffassung vom Kosmos*, Bern/München, 1966.
Th. G. Sinnige, *Matter and Infinity in the presocratic Schools and Plato*, Assen, 1968; 2 ed. 1971.——巻末の General Bibliography が有益である。
Th. J. Tracy, *Physiological Theory and the Doctrine of the Mean in Plato and Aristotle*, The Hague/Paris, 1969.
A. Virieux-Reymond, *Platon ou la géométrisation de l'Univers*, Paris, 1970.
D. R. Dicks, *Early Greek Astronomy to Aristotle*, Ithaca, 1970.

一〇　プラトン哲学のその他の諸側面

プラトン哲学の中心をなすイデア論、またとくにその頂点にある「善」のイデアについて語った箇所として、『国家』の第六巻から第七巻にかけて展開される有名な三つの比喩――「太陽」「線分」「洞窟」――がある。これらの比喩は、これだけが全体の関連からひき離されて解釈をほどこされる危険性が多い。

その一つの例は、

M. Heidegger, *Platons Lehre von der Wahrheit*, Bern, 1947; 2 Aufl. 1954.

である。ハイデッガーは『国家』の「洞窟」の比喩のギリシア語原文をページの左側に、右側にその対訳を書いて説明した上で、ギリシア語の ἀλήθεια についての独自の語原論を典拠として、「真理」を Unverborgenheit と解した上で、プラトンにおいてすでに Unverborgenheit としての根源的真理の喪失の徴候がきざし、それにかわって Richtigkeit としての主観的真理の擡頭がみられるとする。

ハイデッガーのこの真理観に対する反対としては、たとえば、フリートレンダーは、

P. Friedländer, *Platon*, Bd. I: *Seinswahrheit und Lebenswirklichkeit*, 2 erweiterte und verbesserte Aufl., Berlin, 1954.

の第一一章に「マルティン・ハイデッガーとの対決」という副題をつけて、「アレーテイア」と題する論文を発表し、ハイデッガーの真理観を、文献学者の立場から批判する。もっとも、フリートレンダーは右の著書の英訳本、

Plato I. An Introduction, transl. by H. Meyerhoff, N. Y., 1958.

では、この「アレーテイア」の論旨の誤りに気づいて、加筆修正している。さらに、一九六四年の校閲補訂第三版では、右の副題も「著者自身との、及びマルティン・ハイデッガーとの対決」と書き換え、当初のハイデッガー批判も穏健すぎる批評に変ってしまっている。

また、現代イギリスの一部でおこなわれている議論も、三つの比喩の比較・対応だけを問題にして、全体的なテーマを忘れているきらいがあるので、その点の注意は必要であろう。

これらの議論および主要な参考文献を簡単に見るのには、たとえば、

D. A. Rees, Introduction to J. Adam, *The Republic of Plato*, vol. I, 2 ed. Cambridge, 1963, pp. xxxi-xliii.

R. C. Cross and A. D. Woozley, *Plato's Republic. A Philosophical Commentary*, 1964. (ch. 9 : Sun, Line and Cave)
などが便利である。日本語文献としては、
『古代哲学研究(METHODOS)』I、II——「太陽」「線分」「洞窟」の比喩特集—— 京都大学西洋哲学史教室、
古代哲学談話会刊　昭和43・44年。
がある。

要するに、三つの比喩はそれなりの完結性をもってはいるが、細部は、適度の伸縮性をもっていて、また別に取り上げることができるのであるから、われわれはこれを、『国家』全篇のつながりのなかで見ることを忘れてはならないのである。その点でもっとくわしく見るのには、

J. L. Stocks, The Divided Line of Plato, *Rep.* VI, *C. Q.*, V, 1911, pp. 73–88 ; repr. in J. L. Stocks, *The Limits of Purpose and other Essays*, London, 1932, pp. 189–218.
A. S. Ferguson, Plato's Simile of Light, Part I : The Similes of the Sun and the Line, *C. Q.*, XV, 1921, pp. 131–152.
A. S. Ferguson, Plato's Simile of Light, Part II : The Allegory of the Cave, *C. Q.*, XVI, 1922, pp. 15–28.
A. S. Ferguson, Plato's Simile of Light again, *C. Q.*, XXVIII, 1934, pp. 190–210.
H. J. Paton, Plato's Theory of εἰκασία, *Proceedings of the Aristotelian Society*, XXII, 1921–22, pp. 69–104 ; repr. in H. J. Paton, *In Defence of Reason*, N. Y., 1951, pp. 255–282.
N. R. Murphy, The "Simile of Light" in Plato's *Republic*, *C. Q.*, XXVI, 1932, pp. 93–102.
N. R. Murphy, Back to the Cave, *C. Q.*, XXVIII, 1934, pp. 211–213.
A. E. Taylor, Note on Plato's *Republic*, VI, 510 C 2–5, *Mind*, N. S., XLIII, 1934, pp. 81–84.
W. F. R. Hardie, *A Study in Plato*, Oxford, 1936.

R. Robinson, *Plato's Earlier Dialectic*, N. Y., 1941 ; 2 ed. Oxford, 1953.
H. W. B. Joseph, *Knowledge and the Good in Plato's Republic*, Oxford, 1948.
N. R. Murphy, *The Interpretation of Plato's Republic*, Oxford, 1951 ; 2 ed. 1960.
W. D. Ross, *Plato's Theory of Ideas*, Oxford, 1951 ; 2 ed. 1953 ; repr. 1971.
J. E. Raven, Sun, Divided Line and Cave, *C. Q.* N. S. III, 1953, pp. 22–32.
A. Wedberg, *Plato's Philosophy of Mathematics*, Stockholm, 1955.
L. Robin, *Les rapports de l'être et de la connaissance d'après Platon*, Publié par P.-M. Schuhl, Paris, 1957.
D. W. Hamlyn, *Eikasia* in Plato's *Republic*, *Philos. Q.*, VIII, 1958, pp. 14–23.
D. Tarrant, Greek Metaphors of Light, *C. Q.* N. S. X, 1960, pp. 181–187.
J. Malcolm, The Line and the Cave, *Phronesis*, VII, 1962, pp. 38–45.
J. Ferguson, Sun, Line and Cave again, *C. Q.* N. S. XIII, 1963, pp. 188–193.
J. A. Brentlinger, The Divided Line and Plato's "Theory of Intermediates", *Phronesis*, VIII, 1963, pp. 48–56.
R. C. Cross and A. D. Woozley, *Plato's Republic. A philosophycal Commentary*, London, 1964.
J. E. Raven, *Plato's Thought in the Making*, Cambridge, 1965.
R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, 1965.
J. B. Skemp, Individual and Civic Virtue in the *Republic*, *Phronesis*, XIV, 1969, pp. 107–110.
R. J. Fogelin, Three Platonic Analogies, *Philos. R.*, LXXX, 1971, pp. 371–382.

などがある。

プラトン哲学のひとつの重要な因子であるその数学的側面については、

G. Milhaud, *Les philosophes géomètres de la Grèce, Platon et ses prédécesseurs*, Paris, 1900 ; 2 éd 1934

L. Robin, *La théorie platonicienne des idées et des nombres d'après Aristote. Étude historique et critique*, Paris, 1908 ; réimpr. Hildesheim, 1963.

T. L. Heath, *A History of Greek mathematics*, 2 voll., Oxford, 1921.

T. L. Heath, *A Manual of Greek mathematics*, Oxford, 1931.

O. Toeplitz, Das Verhältnis von Mathematik und Ideenlehre bei Plato(*Quellen und Studien zur Geschichte der Mathematik*, Abt. B, Bd. I, H. 1, SS. 3–33), Berlin, 1929.

A. Diès, *Le nombre de Platon. Essai d'exégèse et d'histoire*, Paris, 1936.

C. Mugler, *Platon et la Recherche mathématique de son époque*, Strasbourg, 1948 ; repr. Naarden, 1969.

R. S. Brumbaugh, *Plato's Mathematical Imagination. The Mathematical passages in the Dialogues and their interpretation*, Bloomington, 1954.

A. Wedberg, *Plato's Philosophy of Mathematics*, Stockholm, 1955.

F. Lasserre, *The Birth of Mathematics in the Age of Plato*, London, 1964.

R. M. Hare, Plato and the Mathematicians. In : R. Bambrough(ed.), *New Essays on Plato and Aristotle*, London, 1965, pp. 21–38.

などが、前記 Cohen(*Platos Ideenlehre und die Mathematik*), Frank(*Plato und die sogenannten Pythagoreer*), Stenzel(*Zahl und Gestalt bei Platon und Aristoteles*)の書と共に、プラトン哲学の数学的側面に興味をもつ研究者のために、いろいろ参考となる書物である。ただし、ディエスの書は、『国家』篇の問題を取り扱った極めて特殊なものである。なおトエプリッツの論文は、長沢信寿訳が『哲学研究』(22の5)に出ている。

つぎにエロースについては、

R. Lagerborg, *Die platonische Liebe*, Leipzig, 1926.

C. Ritter, *Platonische Liebe*, Tübingen, 1931.

L. Robin, *La théorie platonicienne de l'amour*, 2 éd. Paris, 1933 ; Nouvelle éd. 1964.

Th. Gould, *Platonic Love*, London, 1963.

J. M. Rist, *Eros and Psyche. Studies in Plato, Plotinus, and Origen*, Toronto, 1964.

が、それぞれ参考になる書物だと思う。

プラトンのミュートスをどう解するかは、その哲学の根本にもかかわる問題だが、新カント派のイデア解釈を導入したことで知られる、

J. A. Stewart, *The Myths of Plato*, London, 1905 ; ed. and newly introd. by G. R. Levy, 1960.

や、

K. Reinhardt, *Platons Mythen*, Bonn, 1927 ; Nachdr. Göttingen, 1960.

以後のものでは、

P. Frutiger, *Les Mythes de Platon. Étude philosophique et littéraire*, Paris, 1930.

P.-M. Schuhl, *Études sur la fabulation platonicienne*, Paris, 1947 ; 2 éd. 1968.

R. S. Brumbaugh, *Plato's Mathematical Imagination*, Bloomington, 1954.

W. Hirsch, *Platons Weg zum Mythos*, Berlin, 1971.

がある。

また、有名な芸術批判（詩人追放論）に関しては、

G. Finsler, *Platon und die aristotelische Poetik*, Leipzig, 1900

S. H. Butcher, *Aristotle's Theory of Poetry and fine Art*, London, 1911 ; With a prefatory Essay "Aristotelian literary criticism" by J. Gassner, 4 ed. N. Y., 1955.

E. A. Havelock, *Preface to Plato*, Oxford, 1963.

G. F. Else, *The Structure and Date of Book 10 of Plato's Republic*, Heidelberg, 1972.

のほか、諸家の問題になっているものでは、

R. G. Collingwood, *The Principles of Art*, Oxford, 1938 ; paperback, 1963.

R. G. Collingwood, Plato's Philosophy of Art, *Mind*, N. S. XXXIV, 1925, pp. 154-172 ; repr. in R. G. Collingwood, *Essays in the Philosophy of art*, Bloomington, 1964.

がある。

なお、芸術論一般については、

W. C. Greene, Plato's View of Poetry, *Harvard Studies in Classical Philology*, XXIX, 1918, pp. 1-75.

E. Cassirer, Eidos und Eidolon, das Problem des Schönen und der Kunst in Platons Dialogen, *Vorträge der Bibliothek Warburg*, I, 1922/3, SS. 1-27.

J. Tate, "Imitation" in Plato's *Republic*, *C. Q.*, XXII, 1928, pp. 16-23.

J. Tate, Plato and "Imitation", *C. Q.*, XXVI, 1932, pp. 161-169.

P.-M. Schuhl, *Platon et l'art de son temps*, Paris, 1934 ; 2 éd. 1952.

J. W. H. Atkins, *Literary Criticism in Antiquity*, 2 voll., Cambridge, 1934 ; repr. London, 1952.

T. B. L. Webster, Greek Theories of Art and Literature down to 400 B.C., *C. Q.*, XXXIII, 1939, pp. 166-179.

W. J. Verdenius, *Mimesis. Plato's Doctrine of artistic imitation and its meaning to us*, Leiden, 1949.
R. C. Lodge, *Plato's Theory of Art*, London, 1953.
T. B. L. Webster, *Art and Literature in fourth century Athens*, London, 1956.
G. F. Else, "Imitation" in the fifth century, *Classical Philology*, LIII, 1958, pp. 73–90, and addendum p. 245.
E. Moutsopoulos, *La Musique dans l'Œuvre de Platon*, Paris, 1959.
E. Sack, *Platons Musikaesthetik*, Stuttgart, 1959.
P. Vicaire, *Platon. Critique littéraire*, Paris, 1960.
L. Richter, *Zur Wissenschaftslehre von der Musik bei Platon und Aristoteles*, Berlin, 1961.
J. G. Warry, *Greek Aesthetic Theory. A Study of callistic and aesthetic Concepts in the Works of Plato and Aristotle*, London, 1962.
R. C. Cross and A. D. Woozley, *Plato's Republic. A philosophical Commentary*, London, 1964.
P. Vicaire, *Recherches sur les Mots désignant la Poésie et le Poète dans l'Œuvre de Platon*, Paris, 1964.
G. M. A. Grube, *The Greek and Roman Critics*, London, 1965.
R. Harriott, *Poetry and Criticism before Plato*, London, 1969.
W. J. Oates, *Plato's View of Art*, N. Y., 1972.

がある。邦語文献としては、古くは、

深田康算「プラトーの美学」(『深田康算全集』1所収　岩波書店　昭和5年)

がある。

宗教的側面については、

P. E. More, *The Religion of Plato*, Princeton, 1921.
A. Diès, *Autour de Platon*, Paris, 1926 ; 2 tirage 1972, pp. 523–603.
V. D. Macchioro, *From Orpheus to Paul, a history of Orphism*, N. Y., 1930.
E. Hoffmann, *Platonismus und Mystik im Altertum*, Heidelberg, 1935.
A. J. Festugière, *Contemplation et vie contemplative selon Platon*, Paris, 1936.
Fr. Solmsen, *Plato's Theology*, Ithaca, 1942 ; repr. N. Y., 1967.
O. Reverdin, *La Religion de la cité platonicienne*, Paris, 1945.
V. Goldschmidt, *La Religion de Platon*, Paris, 1949 ; 2 éd. 1970.
R. J. Henle, *Saint Thomas and Platonism. A Study of the Plato and platonic texts in the writings of Saint Thomas*, 2 voll., The Hague, 1956 ; repr. 1970.
A. Fox, *Plato and the Christians*, London, 1957.
J. M. Feibleman, *Religious Platonism*, London, 1959.
E. Hoffmann, *Platonismus und Christliche Philosophie*, Zürich, 1960.
D. Roloff, *Gottähnlichkeit, Vergöttlichung und Erhöhung zu seligem Leben. Untersuchungen zur Herkunft der platonischen Angleichung an Gott*, Berlin, 1970.
J. Ogilvie, *The Theology of Plato. Compared with the principles of oriental and grecian Philosophers*, London, 1973 ; repr. N. Y., 1975.
がある。

なお、これまでに出たプラトンの倫理、政治、芸術、宗教思想に関する問題提起的な雑誌論文をいくつか編集し

たものとして、

G. Vlastos (ed.), *Plato II: Ethics, Politics, and Philosophy of Art and Religion. A Collection of Critical Essays*, N. Y., 1971.

がある。

プシューケー（魂・精神・いのち）を取り扱ったものでは、

L. Robin, *La théorie platonicienne de l'amour*, 2 éd. Paris, 1933; Nouvelle éd. 1964.

H. Barth, *Die Seele in der Philosophie Platons*, Tübingen, 1921.

J. Moreau, *L'Âme du monde de Platon aux Stoïciens*, Paris, 1939.

J. B. Skemp, *The Theory of motion in Plato's Later Dialogues*, Cambridge, 1942; enlarged ed. Amsterdam, 1967.

W. K. C. Guthrie, Plato's views on the nature of the soul, *Recherches sur la tradition platonicienne*, Genève, 1955, pp. 3–22.

K. Oehler, *Die Lehre vom noetischen und dianoetischen Denken bei Platon und Aristoteles. Ein Beitrag zur Erforschung der Geschichte des Bewußtseinsproblems in der Antike*, München, 1962.

R. L. Patterson, *Plato on Immortality*, Pennsylvania, 1965.

Y. Brès, *La psychologie de Platon*, Paris, 1968.

A. Graeser, *Probleme der platonischen Seelenteilungslehre*, München, 1969.

T. M. Robinson, *Plato's Psychology*, Toronto, 1970.

A. F. Kremen, *Platons metaphysische Psychologie*, Köln, 1973.

がある。

また、プラトンのシケリア旅行に関するものとしては、

L. Marcuse, *Plato and Dionysius, A double biography*, N. Y., 1947.

G. R. Levy, *Plato in Sicily*, London, 1956.

K. von Fritz, *Platon in Sizilien und das Problem der Philosophenherrschaft*, Berlin, 1968.

G. Ryle, *Plato's Progress*, Cambridge, 1966.

がある。

アカデメイア学園に関するものでは、

F. W. Bussell, *The School of Plato. Its Origin, Development, and Revival under the Roman Empire*, London, 1896.

H. Usener, Organisation der Wissenschaftlichen Arbeit. In : H. Usener, *Vorträge und Aufsätze*, 2 Aufl. Berlin, 1914, SS. 67–102.

H. Cherniss, *The Riddle of the Early Academy*, Berkeley/Los Angeles, 1945.

H. Herter, *Platons Akademie*, Bonn, 1946 ; 2 Aufl. 1952.

J. Brun, *Platon et l'Académie*, Paris, 1960.

G. Ryle, Dialectic in the Academy. In : R. Bambrough (ed.), *New Essays on Plato and Aristotle*, London, 1965, pp. 39–68.

などがある。

またプラトンの教育論としては、

J. Stenzel, *Platon der Erzieher*, Leipzig, 1928 ; Neudr. Hamburg, 1961.

R. L. Nettleship, *The Theory of Education in Plato's Republic*, Oxford, 1935 ; repr. 1969.

W. Moberly, *Plato's conception of Education and its meaning for today*, London, 1944.

R. C. Lodge, *Plato's Theory of Education*, London, 1947.

H. I. Marrou, *Histoire de l'éducation dans l'antiquité*, Paris, 6 éd. 1965.

E. Fink, *Metaphysik der Erziehung im Weltverständnis von Plato und Aristoteles*, Frankfurt a. M., 1970.

などがある。

また、多少特殊だが、プラトンの用語研究としては、

J. Souilhé, *Étude sur le terme* Δύναμις *dans les dialogues de Platon*, Paris, 1919.

R. Mugnier, *Le sens du mot* ΘΕΙΟΣ *chez Platon*, Paris, 1930.

J. van Camp et P. Canart, *Le Sens du mot* ΘΕΙΟΣ *chez Platon*, Louvain, 1956.

J. Sprute, *Der Begriff der DOXA in der platonischen Philosophie*, Göttingen, 1962.

J. Lyons, *Structual Semantics. An Analysis of part of the vocabulary of Plato*, Oxford, 1963; repr. 1972.

C. Jäger, *"NUS" in Platons Dialogen*, Göttingen, 1967.

D. Mannsperger, *Physis bei Platon*, Berlin, 1969.

J. Kube, ΤΕΧΝΗ *und* ΑΡΕΤΗ. *Sophistisches und Platonisches Tugendwissen*, Berlin, 1969.

E. Tielsch, *Die platonischen Versionen der griechischen Doxalehre. Ein philosophisches Lexikon mit Kommentar*, Meisenheim a. Glan, 1970.

H.-E. Pester, *Platons Bewegte USIA*, Wiesbaden, 1971.

A. Hermann, *Untersuchungen zu Platons Auffassung von der Hedoné*, Göttingen, 1972.

Th. Ebert, *Meinung und Wissen in der Philosophie Platons. Untersuchungen zum ‚Charmides', ‚Menon' und ‚Staat'*,

Berlin, 1974.

がそれぞれ参考になる書物だと思う。

このほか、

A. Diès, *Autour de Platon. Essais de critique et d'histoire*, Paris, 1926; 2 tirage revu et corrigé, 1972.

P.-M. Schuhl, *Études sur la fabulation platonicienne*, Introduction—État présent des études platoniciennes, Paris, 1947, pp. 3-25.

W. D. Ross and D. J. Allan, The Greek Philosophers in *Fifty Years (And Twelve) of Classical Scholarship*, Oxford, 1968, pp. 159-181.

は、プラトン研究の各種の問題に触れているから、研究の大勢を知るのに便利である。

また、

H. Leisegang, *Die Platondeutung der Gegenwart*, Karlsruhe, 1929.

は、ドイツに偏してはいるが、ひと昔前のプラトン研究の状況を知るのに便利である。

最近のものとしては、

H. E. Cherniss, Plato 1950-1957, *Lustrum. Forschungsberichte aus dem Bereich des klassischen Altertums*, Göttingen, IV, 1960, pp. 5-308; V, 1961, pp. 321-615.

は、一九五〇—五七年の間に発表、刊行されたプラトン関係の書物や論文を短評つきでまとめた業績である。

また、

E. M. Manasse, Platonliteratur, *Philosophische Rundschau*, Tübingen, 5 Jahrgang Beiheft 1, 1957, SS. 1-61; 9

Jahrgang, Beiheft 2, 1961, SS. 1–241.

は、おおよそ一九三〇—六二年の間のプラトン文献をくわしく論評し、Beiheft 1 の方はドイツ語の文献を、Beiheft 2 は英語の文献を取り扱っている。

また、プラトン研究の文献については、古いものでは、

Fr. Ueberweg, *Grundriss der Geschichte der Philosophie*, Teil I: *Die Philosophie des Altertums*, hrsg. von K. Praechter, Basel/Stuttgart, 12 Aufl. 1926; Nachdr. 1960.

によればよいが、大要はむしろ、

L. Robin, *Platon*, Paris, 1935; Nouvelle éd. avec bibliogr. mise à jour et complétée, 1968.

の巻末の Bibliographie を見る方がよい。

新しいものでは、

O. Gigon, *Platon.* (Bibliographische Einführungen in das Studium der Philosophie 12, hrsg. von I. M. Bochenski, Bern, 1950.)

W. Totok, *Handbuch der Geschichte der Philosophie*, Bd. I: *ALTERTUM. Indische, Chinesische, Griechisch-römische Philosophie*, Frankfurt a. M., 1964.

が便利である。

邦語の書物としては、

『田中美知太郎全集』（筑摩書房　昭和43—44年）

第一巻「ロゴスとイデア」「善と必然との間に」

第三巻「ソクラテス」「ソフィスト」

第四巻「プラトン解説四篇」

第五巻「ギリシア研究篇」(「プラトン「イデア説」の由来」「プラトンの年代について」などをふくむ)

藤沢令夫『実在と価値――哲学の復権』(筑摩書房　昭和44年)

藤沢令夫「哲学の形成と確立――タレスからアリストテレスまで――」(岩波講座『哲学』第一六巻『哲学の歴史』Ⅰ　岩波書店　昭和43年)

田中美知太郎編『哲学の歴史』(人文書院　昭和50年)

などを挙げておきたい。

二　各対話篇についての注釈

しかしながら、プラトン研究の根本は、プラトンをよく読んで、自分でよく考えてみることである。どんな研究も、この基礎ができていなければ、全くの空中楼閣で、何の意味もない。われわれはさしあたり、わが国プラトン研究の主力を、この基礎工事に集中しなければならない。その場合プラトンの原文を精読するには、何よりも自分の努力が大切であるが、なおそのほかに、ヨーロッパのプラトン研究が、過去二千年余にわたって蓄積して来たところのものを利用しなければならない。いわゆる注釈書は、すでにギリシア・ローマ時代から出ているが、われわれがさしあたり有効に用いることのできるものは、各対話篇についてのシュタルバウム以後の注釈書である。網羅はとても望めないが、よく使われるもの、比較的新しいもので、一応主要なものだけをここでは紹介しておきたい。イギリスのものが大部分を占めているが、現在のところ、この方面ではイギリスの学者が、一番よい仕事をしている。なお一言注意しておきたいことは、これらの注釈書は研究者のためであって、初学者向きの解釈書と同じではないから、不勉強の手助けにはならぬということである。プラトン研究には、注釈もあり、翻訳もあるから、勉強

は容易であるなどと考える者もあるが、実際はかえって逆で、いろいろな注釈や研究や翻訳が出ているから、自分だけのいい加減な解釈では通らず、勉強も丁寧にしなければならなくなるのである。そしてそういう勉強が、われわれの訓練とも、修行ともなるわけである。

J. Riddell, *The Apology of Plato*, Oxford, 1877 ; repr. N. Y., 1973. ——テクスト・注釈。

M. Schanz, *Apologia* (Sammlung ausgewählter Dialoge Platos mit deutschem Kommentar, Bd. III), Leipzig, 1893.

J. Burnet, *Plato's Euthyphro, Apology of Socrates and Crito*, Oxford, 1924 ; repr. 1974. ——テクスト・注釈。

R. Hackforth, *The Composition of Plato's Apology*, Cambridge, 1933.

F. J. Weber, *Platons Apologie des Sokrates*, Paderborn, 1971. ——テクスト・注釈。

C. E. Graves, *The Euthyphro and Menexenus of Plato*, London, 1881 ; repr. 1964. ——テクスト・注釈。

J. Adam, *Platonis Euthyphro*, Cambridge, 1890. ——テクスト・注釈。

K. Reich, *Euthyphron*, Hamburg, 1968. ——希独対訳。

R. E. Allen, *Plato's 'Euthyphro' and the Earlier Theory of Forms*, London, 1970. ——翻訳・注釈。

J. Adam, *Plato. Crito*, Cambridge, 1888 ; repr. 1966. ——テクスト・注釈。

I. von Loewenclau, *Der platonische Menexenos*, Stuttgart, 1961.

J. M. Macgregor, *Plato. Ion*, Cambridge, 1912 ; repr. 1965. ——テクスト・注釈。

M. T. Tatham, *The Laches of Plato*, London, 1888 ; repr. 1938. ——テクスト・注釈。

P. Vicaire, *Platon. Lachès et Lysis*, Paris, 1963. ——テクスト・注釈。

T. G. Tuckey, *Plato's "Charmides"*, Cambridge, 1951 ; repr. 1968. ——翻訳・注釈。

E. Martens, *Das selbstbezügliche Wissen in Platons „Charmides“*, München, 1973.

J. Adam and A. M. Adam, *Platonis Protagoras*, Cambridge, 1893 ; repr. 1953. ——テクスト・注釈。

W. H. Thompson, *The Gorgias of Plato*, London, 1871 ; repr. N. Y., 1973. ——テクスト・注釈。

G. Lodge, *Plato. Gorgias*, Boston/N. Y./Chicago/London, 1890. ——テクスト・注釈。

E. R. Dodds, *Plato. Gorgias*, Oxford, 1959. ——テクスト・注釈。

田中美知太郎・加来彰俊『プラトン著作集　ゴルギアス』(序説・翻訳・注解・研究用注)（岩波書店　昭和35年）

E. H. Gifford, *The Euthydemus of Plato*, Oxford, 1905 ; repr. N. Y., 1973. ——テクスト・注釈。

R. K. Sprague, *Plato's Use of Fallacy. A Study of the Euthydemus and some other Dialogues*, London, 1962.

D. Tarrant, *The Hippias Major*, Cambridge, 1928. ——テクスト・注釈。

E. S. Thompson, *The Meno of Plato*, London, 1901. ——テクスト・注釈。

R. S. Bluck, *Plato's Meno*, Cambridge, 1961. ——テクスト・注釈。

J. Klein, *A Commentary on Plato's Meno*, North Carolina, 1965.

G. F. Rettig, *Platonis Symposium*, Halle, 1875.

R. G. Bury, *The Symposium of Plato*, Cambridge, 1909 ; new impr. 1962. ——テクスト・注釈。

S. Rosen, *Plato's Symposium*, New Haven/London, 1968. ——注釈（ランニング・コメンタリイ）。

R. D. Archer-Hind, *The Phaedo of Plato*, 2 ed. London, 1894 ; repr. N. Y., 1973. ——テクスト・注釈。

M. Wohlrab, *Plato 6 : Phaidon*, Leipzig, 1908. ——テクスト・注釈。

J. Burnet, *Plato's Phaedo*, Oxford, 1911 ; repr. 1972. ——テクスト・注釈。

F. Dirlmeier, *Platon. Phaidon*, Griechisch und Deutsch, München, 1949.

R. Hackforth, *Plato's Phaedo*, Cambridge, 1955 ; repr. 1972. ——翻訳・注釈(ランニング・コメンタリイ)。

R. S. Bluck, *Plato's Phaedo*, London, 1955. ——翻訳・注釈(ランニング・コメンタリイ)。

R. Loriaux, *Le Phédon de Platon. Commentaire et traduction*, Vol. I (57a-84b), Namur, 1969.

D. Gallop, *Plato. Phaedo*, Oxford, 1975. ——翻訳・注釈。

B. Jowett and L. Campbell, *The Republic of Plato*, 3 voll., Oxford, 1894 ; repr. N. Y., 1973. ——テクスト・注釈。

J. Adam, *The Republic of Plato*, Cambridge, 1902 ; with a new introd. by D. A. Rees, 1963. ——テクスト・注釈。

R. L. Nettleship, *Lectures on the Republic of Plato*, London, 1897 ; 2 ed. 1901 ; new ed. 1962.

A. D. Lindsay, *The Republic of Plato*, 1908. (new American ed. of "Everyman's Libr.", N. Y., 1950 ; London, 1954.) ——翻訳。

F. M. Cornford, *The Republic of Plato*, Oxford, 1941 ; repr. N. Y., 1954. ——翻訳。

N. R. Murphy, *The Interpretation of Plato's Republic*, Oxford, 1951.

R. C. Cross and A. D. Woozley, *Plato's Republic. A Philosophical Commentary*, London, 1964.

I. A. Richards, *Plato's Republic*, Cambridge, 1966. ——翻訳。

T. J. Andersson, *Polis and Psyche. A Motif in Plato's Republic*, Göteborg, 1971.

R. Lerner, *Averroes on Plato's "Republic"*, translated, with an Introduction and Notes, Ithaca/London, 1974.

W. H. Thompson, *The Phaedrus of Plato*, London, 1868 ; repr. N. Y., 1973. ——テクスト・注釈。

R. Hackforth, *Plato's Phaedrus*, Cambridge, 1952 ; repr. 1972. ——翻訳・注釈(ランニング・コメンタリイ)。

G. J. De Vries, *A Commentary on the Phaedrus of Plato*, Amsterdam, 1969. ——注釈。

田中美知太郎・藤沢令夫『プラトン著作集　パイドロス』(序説・翻訳・注解・研究用注)(岩波書店　昭和32年)

P. Friedländer, *Der Grosse Alkibiades*, Bonn, 1921.

L. Campbell, *The Theaetetus of Plato*, Oxford, 1861 ; 2 ed. 1883 ; repr. N. Y., 1973. ——テクスト・注釈。

M. Wohlrab, *Platonis Theaetetus*, Leipzig, 1891.

F. M. Cornford, *Plato's Theory of Knowledge* (*The Theaetetus and Sophist of Plato*), London, 1935 ; 5 ed. N. Y., 1957. ——翻訳・注釈(ランニング・コメンタリイ)。

J. McDowell, *Plato. Theaetetus*, Oxford, 1973. ——翻訳・注釈。

田中美知太郎『テアイテトス』（岩波書店　昭和13年）

L. Campbell, *The Sophistes and Politicus of Plato*, Oxford, 1867 ; repr. N. Y., 1973. ——テクスト・注釈。

O. Apelt, *Platonis Sophista*, Leipzig, 1897.

A. Diès, *La définition de l'être et la nature des Idées dans le Sophiste de Platon*, Paris, 1909 ; 2 éd. 1932 ; réimpr. 1963.

W. Kamlah, *Platons Selbstkritik im Sophistes*, München, 1963.

R. Marten, *Der Logos der Dialektik. Eine Theorie zu Platons „Sophistes"*, Berlin, 1965.

A. E. Taylor, *Plato. The Sophist and The Statesman*, ed. by R. Klibansky and E. Anscombe, Edinburgh, 1961 ; repr. Folkestone/London, 1971. ——序説・翻訳。

R. S. Bluck, *Plato's Sophist*, ed. by G. C. Neal, Manchester, 1975. ——注釈。

J. B. Skemp, *Plato's Statesman*, London, 1952 ; repr. 1961. ——翻訳。

W. W. Waddell, *The Parmenides of Plato*, Glasgow, 1894.

A. E. Taylor, *The Parmenides of Plato*, Oxford, 1934. ——翻訳。

J. Wahl, *Étude sur le Parménide de Platon*, Paris, 1926 ; 4 éd. 1951.

F. M. Cornford, *Plato and Parmenides. Parmenides' "Way of Truth" and Plato's "Parmenides"*, London, 1939 ; 4 impr. 1958. ――翻訳・注釈（ランニング・コメンタリイ）。

Ch. Badham, *Platonis Philebus*, London, 2 ed. 1878.

E. Poste, *The Philebus of Plato*, Oxford, 1860.

R. G. Bury, *The Philebus of Plato*, Cambridge, 1897 ; repr. N. Y., 1973. ――テクスト・注釈。

R. Hackforth, *Plato's Examination of Pleasure*, A Transl. of the *Philebus*, Cambridge, 1958 ; repr. 1972. ――翻訳・注釈（ランニング・コメンタリイ）。

A. E. Taylor, *Plato. Philebus and Epinomis*, ed. by R. Klibansky. With the co-operation of G. Calogero and A. C. Lloyd, London, 1956. ――序説・翻訳。

R. A. Shiner, *Knowledge and Reality in Plato's Philebus*, Assen, 1974.

J. C. B. Gosling, *Plato Philebus*, Oxford, 1975. ――翻訳・注釈。

Th. H. Martin, *Études sur le Timée de Platon*, 2 voll., Paris, 1841. ――注釈。

R. D. Archer-Hind, *The Timaeus of Plato*, London, 1888 ; repr. N. Y., 1973. ――テクスト・注釈。

J. C. Wilson, *On the Interpretation of Plato's Timaeus*, London, 1889.

A. E. Taylor, *A Commentary on Plato's Timaeus*, Oxford, 1928 ; repr. 1972. ――注釈。

F. M. Cornford, *Plato's Cosmology. The Timaeus of Plato*, London, 1937 ; 5 impr. N. Y., 1957 ; repr. 1971. ――翻訳・注釈（ランニング・コメンタリイ）。

H. Perls, *Platon. Sa conception du Kosmos*, 2 voll., N. Y., 1945.

R. Kapferer, *Platons Timaios oder Die Schrift über die Natur*, Stuttgart, 1952. ——翻訳・注釈。

C. Ritter, *Platos Gesetze. Kommentar zum griechischen Text*, Leipzig, 1896.

E. B. England, *The Laws of Plato*, 2 voll., Manchester, 1921. ——テクスト・注釈。

A. E. Taylor, *The Laws of Plato*, London, 1934. ——翻訳。

G. Müller, *Studien zu den platonischen Nomoi*, München, 1951.

G. R. Morrow, *Plato's Cretan City. A Historical Interpretation of the Laws*, Princeton, 1960.

W. Neumann und J. Kerschensteiner, *Platon : Briefe*, München, 1967. ——希独対訳。

J. Harward, *The Epinomis of Plato*, Oxford, 1928. ——翻訳・注釈。

F. Novotný, *Platonis Epinomis commentariis illustrata*, Praha, 1959. ——注釈。

W. Andreae, *Platons Briefe*, Jena, 1923.

O. Apelt, *Platons Briefe*, Leipzig, 1921.

E. Howald, *Die Briefe Platons*, Zürich, 1923.

L. A. Post, *Thirteen Epistles of Plato*, Oxford, 1925.

Fr. Egermann, *Die platonischen Briefe VII und VIII*, Berlin, 1928.

F. Novotný, *Platonis Epistulae commentariis illustratae*, Brno, 1930.

J. Harward, *The Platonic Epistles*, Cambridge, 1932.

G. R. Morrow, *Studies in the Platonic Epistles*, Urbana, 1935.

R. S. Bluck, *Plato's Seventh and Eighth Letters*, Cambridge, 1947.

G. R. Morrow, *Plato's Epistles*, Urbana, 1935 ; rev. ed. N. Y., 1962.

H.-G. Gadamer, *Dialektik und Sophistik im siebenten platonischen Brief*, Heidelberg, 1964.

L. Edelstein, *Plato's Seventh Letter*, Leiden, 1966.

などが注釈書と解説書の主要なものである。

またこのほか、プラトン辞典のようなものが要求されるであろうが、それには上記、

Fr. Ast, *Lexicon Platonicum*, Leipzig, 3 voll., 1835-38; Neudr. N. Y., 1969.

É. Des Places, *Platon Lexique*, 2 voll., 1964. (ビュデ本)

のほか、

M. Stockhammer, *Plato Dictionary*, N. Y., 1963.

H. Perls, *Lexikon der platonischen Begriffe*, Bern/München, 1973.

がある。

もっとよい辞典をつくることがL. CampbellとJ. Burnetの協力によって企てられたことがあるけれども、ついに実現に至らなかった。ティマイオスの『プラトン語解』は、特殊な言葉だけを取り扱ったものである。一般の研究者のためにはディドー(Didot)本(Hirschig = Schneider, *Platonis opera*)の索引、一般の読者のためには、アーペルト(O. Apelt)のプラトン翻訳(*Platons Dialoge*)の*Platon-Index als Gesamtregister zu der Übersetzung in der Philosophischen Bibliothek*あるいはナートルプ(P. Natorp)の*Platos Ideenlehre*(前出)の索引、O. Wichmann, *Platon. Ideelle Gesamtdarstellung und Studienwerk*, Darmstadt, 1966.の索引などが、ある程度まで役立ち得るであろう。

一二　邦語参考文献

〔テクスト〕

田中美知太郎校註『原典 プラトン ソクラテスの弁明』(岩波書店　昭和25年　改訂版昭和49年)

〔邦　訳〕

今日に至るまでのプラトン翻訳の大体を記せば次のようになる。

木村鷹太郎訳『プラトーン全集』全一一巻　(冨山房　明治41―44年　再刊大正14年)

巻一　ハルミデース　リュシス　ラッヘース　プロータゴラス　エウチュデーモス　イオーン

巻二　メノーン　エウチュフローン　辯證　クリトーン　ファイドーン　宴會

巻三　理想國(上)

巻四　理想國(下)　チマイオス　クリチアス

巻五　ファイドロス　ゴルギアス

巻六　テアイテートス　詭辯家　政治家

巻七　國憲(上)

巻八　國憲(下)

巻九　クラチュロス　パルメニデース　フィレーボス

巻十　小ヒッピアス　アルキビアデース　メネキセノス　アルキビアデース　エリュキシアス　〔附録〕ソークラテース論語(キセノフォーン著)

巻十一　註釋　固有名詞原綴字對照　索引

岡田正三訳『プラトーン全集』全六巻（全国書房　昭和44―47年、初刊は全一二巻　昭和21―27年）
第一巻（昭和44年）　エウテュプローン　ソークラテースの弁明　クリトーン　パイドーン　クラテュロス　テアイテートス　学者
第二巻（昭和44年）　饗宴　パイドロス　パルメニデース　ピレーボス　第一アルキビアデース　第二アルキビアデース　ヒッパルコス　恋する人々
第三巻（昭和44年）　テアゲース　カルミデース　ラケース　リュシス　エウテュデーモス　プロタゴラース　ゴルギアース　メノーン
第四巻（昭和45年）　国家　クレイトポーン
第五巻（昭和46年）　ミーノース　法律
第六巻（昭和47年）　政治家　法律後書　長篇ヒッピアース　短篇ヒッピアース　イオーン　メネクセノス　チーマイオス　クリチアース　手紙集　外篇（ノテウオメノイ）――正しさについて　徳について　デーモドコス　シーシュポス　エリュクシアース　アクシオコス――　定義集
田中美知太郎編『プラトン』（世界文学大系3　筑摩書房　昭和34年　再刊昭和47年）
田中美知太郎訳『ソクラテスの弁明』『アルキビアデス』『テアイテトス』。藤沢令夫訳『パイドン』『プロタゴラス』『メノン』。鈴木照雄訳『饗宴』。生島幹三訳『ラケス』
田中美知太郎編『プラトン名著集』（新潮社　昭和38年）
松永雄二訳『カルミデス』。生島幹三訳『リュシス』。鈴木照雄訳『イオン』。加来彰俊訳『パイドロス』。森進一訳『饗宴』。池田美恵訳『パイドン』。田中美知太郎訳『ソクラテスの弁明』『クリトン』。藤沢令夫訳『ゴル

ギアス』
田中美知太郎編『プラトン』（世界の大思想1　河出書房　昭和40年）
山本光雄訳『国家』。田中美知太郎訳『ソクラテスの弁明』『クリトン』
田中美知太郎編『プラトンⅠ』（世界古典文学全集14　筑摩書房　昭和39年）
田中美知太郎訳『ソクラテスの弁明』『クリトン』『アルキビアデス』『テアイテトス』。藤沢令夫訳『パイドン』『プロタゴラス』『メノン』。鈴木照雄訳『饗宴』。加来彰俊訳『メネクセノス』。森進一訳『エウテュプロン』。生島幹三訳『ラケス』。北嶋美雪訳『ヒッピアス（大）』
田中美知太郎編『プラトンⅡ』（世界古典文学全集15　筑摩書房　昭和45年）
田中美知太郎・藤沢令夫・尼ヶ崎徳一・津村寛二訳『国家』。水野有庸訳『エピノミス』。長坂公一訳『書簡集』
田中美知太郎編『プラトンⅠ』（世界の名著6　中央公論社　昭和41年）
生島幹三訳『リュシス』。鈴木照雄訳『饗宴』。加来彰俊訳『メネクセノス』。藤沢令夫訳『ゴルギアス』。田中美知太郎訳『ソクラテスの弁明』『クリトン』『クレイトポン』。池田美恵訳『パイドン』
田中美知太郎編『プラトンⅡ』（世界の名著7　中央公論社　昭和44年）
田中美知太郎・藤沢令夫・森進一・山野耕治訳『国家』。田之頭安彦訳『クリティアス』。長坂公一訳『第七書簡』
『プラトン著作集』全一〇巻（勁草書房　昭和46年―）
第一巻（昭和46年）村治能就・廣川洋一訳『クラテュロス』。向坂寛訳『饗宴』。池田美恵訳『パルメニデス』。
加来彰俊訳『ソピステス』

第二巻（昭和48年）　式部久訳『法律』〔上〕Ⅰ―Ⅵ巻
第三巻（昭和50年）　式部久訳『法律』〔下〕Ⅶ―Ⅻ巻

山本光雄編『プラトン全集』　全一〇巻　別巻一　（角川書店　昭和48―50年）
第一巻（昭和48年）　山本光雄訳『エウテュプロン』『ソクラテスの弁明』『クリトン』。村治能就訳『パイドン』。戸塚七郎訳『クラテュロス』
第二巻（昭和49年）　戸塚七郎訳『テアイテトス』。新海邦治訳『ソフィスト』。副島民雄訳『政治家』。山本光雄訳『パルメニデス』
第三巻（昭和48年）　戸塚七郎訳『ピレボス』。山本光雄訳『饗宴』。副島民雄訳『パイドロス』。東千尋訳『恋仇』
第四巻（昭和48年）　山本光雄訳『第一アルキビアデス』『ラケス』『リュシス』『エウテュデモス』。東千尋訳『第二アルキビアデス』『ヒッパルコス』。千葉茂美訳『テアゲス』『カルミデス』
第五巻（昭和49年）　山本光雄訳『プロタゴラス』。内藤純郎訳『ゴルギアス』。副島民雄訳『メノン』
第六巻（昭和49年）　山本光雄訳『ヒッピアス（大）』『メネクセノス』。村治能就訳『ヒッピアス（小）』。内藤亨代訳『イオン』。副島民雄訳『クレイトポン』『クリティアス』『ミノス』。泉治典訳『ティマイオス』
第七巻（昭和48年）　山本光雄訳『国家』（上）（第一―七巻）
第八巻（昭和49年）　山本光雄訳『国家』（下）（第八―一〇巻）『書簡集』
第九巻（昭和50年）　山本光雄訳『法律』（上）（第一―八巻）
第一〇巻（昭和50年）　山本光雄訳『法律』（下）（第九―一二巻）。新海邦治訳『法律補遺』。泉治典訳『定義集』。上岡宏訳『正しさについて』『徳について』『デモドコス』『シシュポス』。小沢克彦訳『エリュクシアス』『アクシオコス』

別巻(未刊)　ディオゲネス・ラエルティオス『プラトン』他。年譜。総索引。

久保勉訳『ソクラテスの弁明・クリトン』(岩波文庫　昭和2年――阿部次郎と共訳――　改版昭和25年、39年)

山本光雄訳『ソクラテスの弁明・クリトン』(角川文庫　昭和29年)

田中美知太郎・池田美恵訳『ソークラテースの弁明・クリトーン・パイドーン』(新潮文庫　昭和43年)

田中美知太郎訳『ソークラテースの弁明』『クリトーン』。池田美恵訳『パイドーン』

戸塚七郎訳『ソクラテスの弁明・饗宴』(旺文社文庫　昭和44年)

副島民雄訳『ソクラテスの弁明・クリトン・パイドン』(講談社　昭和47年)

菊池慧一郎訳『パイドン』(岩波書店　大正13年)

菊池慧一郎訳『プロタゴラス』(岩波書店　大正14年　岩波文庫　昭和2年)

村治能就訳『パイドン』(角川文庫　昭和43年)

久保勉訳『饗宴』(岩波文庫　昭和27年)

山本光雄訳『饗宴』(角川文庫　昭和27年)

森進一訳『饗宴』(新潮文庫　昭和43年)

三井浩・金松賢諒訳『パイドロス・リュシス・酒宴』(玉川大学　世界教育宝典　昭和34年)

三井浩訳『パイドロス』『リュシス』。金松賢諒訳『酒宴』

山本光雄訳『リュシス』(世界人生論全集1　筑摩書房　昭和38年)

斎藤忍随訳『カルミデス』(同右)

副島民雄訳『メノン・エウチュプロン』(近藤書店　昭和18年)

山本光雄訳『エウチュデモス』(近藤書店　昭和17年)

長沢信寿訳『パルメニデース』（弘文堂　昭和19年）
田中美知太郎訳『テアイテトス』（岩波書店　昭和13年　岩波文庫　昭和41年）
田中美知太郎・藤沢令夫（訳 注解）『プラトン著作集 パイドロス』（岩波書店　昭和32年）
藤沢令夫訳『パイドロス』（岩波文庫　昭和42年）
鹿野治助訳『ゴルギアース』（弘文堂　昭和29年）
田中美知太郎・加来彰俊（訳 注解）『プラトン著作集 ゴルギアス』（岩波書店　昭和35年）
加来彰俊訳『ゴルギアス』（岩波文庫　昭和42年）
長沢信寿訳『国家』〈一・二〉（弘文堂　昭和26―27年）
〃　『国家』第一巻（原典四巻まで）、第二巻（原典八巻まで）（東海大学出版会　昭和45・46年）
青木巌訳『国家』〈上・下〉（創元文庫　昭和29年）
山本光雄訳『国家』（世界大思想全集　河出書房　昭和30年）
鹿野治助訳『ソピステース』（岩波書店　昭和7年）
後藤孝弟訳『ピィレーボス』（岩波書店　昭和7年）
高田三郎訳編『プラトンの自叙伝』（アテネ文庫　弘文堂　昭和24年）
山本光雄訳『プラトン書簡集』（角川文庫　昭和45年）
鈴木明子訳『法治国論』（章華社　昭和5年）
山本光雄訳『法律』第一巻、第二巻（近藤書店　昭和21・24年）

〔翻訳文献〕

ヴィンデルバント　出隆・田中美知太郎訳『プラトン』（大村書店　大正13年）
ヴェドベリ　山川偉也訳『プラトンの数理哲学』（法律文化社　昭和50年）
ガスリー　式部久・澄田宏訳『ギリシアの哲学者たち』（理想社　昭和48年）
グアルディーニ　山村直資訳『ソクラテスの死』（法政大学出版局　昭和43年）
クセノフォーン　佐々木理訳『ソークラテースの思い出』（岩波文庫　昭和28年　改版昭和49年）
クルトジンガー　清水武訳『プラトン』（三省堂　昭和11年）
コイレ　川田殖訳『プラトン』（みすず書房　昭和47年）
コーヘン　高田三郎訳『プラトンのイデア論と数学』（哲学論叢17　岩波書店　昭和3年）
コーンフォード　大川瑞穂訳『ソクラテス以前以後—ギリシア哲学小史』（以文社　昭和47年）
ジャクスン　高田三郎訳『ピレボス篇とアリストテレスの形而上学第一章第六節』（『哲学研究』12の11・12　昭和2年）
シュパイザー　山川偉也訳『プラトン弁証法の研究——『パルメニデス』注解——』（法律文化社　昭和50年）
ソルムゼン　長沢信寿訳『数学的方法の構成に及ぼせるプラトーンの影響』（『哲学研究』20の11　昭和10年）
テイラー　藤沢令夫、内山勝利、鎌田邦宏、吉田昌市、今林万里子、小川隆雄訳『プラトニズムとその影響』（プラトン全集　月報1以下　岩波書店　昭和49年—）
テイラー　林竹二訳『ソクラテス』（桜井書店　昭和21年）
〃　松浪信三郎訳『ソクラテス』（パンセ書房　昭和25年）
トエプリッツ　長沢信寿訳『プラトーンにおける数学と形相論との関係』（『哲学研究』22の5　昭和12年）

ド・フォーゲル　藤沢令夫・稲垣良典・加藤信朗他訳『ギリシア哲学と宗教』（筑摩書房　昭和44年）
ハイデッガー　木場深定訳『プラトンの真理論』（理想社　昭和36年）
バーネット　出隆・宮崎幸三訳『プラトン哲学』（岩波文庫　昭和27年）
バリ　田中美知太郎訳『プラトンのパイドロス』（『哲学研究』11の8　大正15年）
ブラン　有田潤訳『ソクラテス』（クセジュ文庫　昭和36年）
〃　戸塚七郎訳『プラトン』（クセジュ文庫　昭和37年）
プラントル　藤井義夫訳『プラトン哲学よりのアリストテレス論理学の発展について』（哲学論叢39　岩波書店　昭和5年）
ブロシャール　河野与一訳『プラトーン哲学に於ける生成』（哲学論叢20　岩波書店　昭和4年）
〃　河野与一訳『プラトーンの「饗宴」について』（哲学論叢28　岩波書店　昭和4年）
ペーター　内館忠蔵訳『プラトンとプラトン哲学』（理想社　昭和6・21年）
〃　八太舟三訳『プラトーとプラトー主義』（春秋社　昭和8年）
ポッパー　武田弘道訳『自由社会の哲学とその論敵』（世界思想社　昭和48年）
マルチン　久野昭訳『ソクラテス』（ロ・ロ・ロ伝記叢書　理想社　昭和43年）
〃　久野昭訳『プラトン』（ロ・ロ・ロ伝記叢書　理想社　昭和47年）
ヤスパース　山内友三郎訳『ソクラテスとプラトン』（理想社　昭和41年）
ルトスワフスキ　河野与一訳『プラトーン対話篇年代決定の新方法』（哲学論叢24　岩波書店　昭和4年）
ロス　服部英次郎訳『問題の人ソクラテス』（『哲学研究』19の8　昭和9年）

〔単行本〕

田中美知太郎『ロゴスとイデア』（岩波書店　昭和22年）
〃『善と必然との間に――人間的自由の前提となるもの――』（岩波書店　昭和27年）
〃『ソクラテス』（岩波新書　昭和32年）
〃『プラトン「饗宴」への招待』（筑摩書房　昭和46年）
『田中美知太郎全集』全一四巻（筑摩書房　昭和43―46年）
藤沢令夫『実在と価値――哲学の復権』（筑摩書房　昭和44年）
斎藤忍随『プラトン』（岩波新書　昭和48年）

〔雑誌論文〕

浅野楢英「普遍の問題――プラトンの見解とアリストテレスおよび現代分析哲学者たちの諸見解との比較――」（『哲学研究』515-516　昭和45年）
生島幹三「プラトン『国家』A巻におけるトラシュマコスとソクラテスの論争の意味について」（『西洋古典学研究』XIII　昭和40年）
池田康男「プラトンにおけるDegrees of Realityおよびそれに附帯する問題について」（『古代哲学研究(METHODOS)』III　昭和45年）
伊東斌「コイノニア理論における「異」について――Plato, Sophistes 251a～259b――」（『西洋古典学研究』XV　昭和42年）
井上忠「プラトンの方法をめぐって――アリストテレスのプラトン理解の一断面――」（『西洋古典学研究』V　昭和

32年)

〃「イデア」(『哲学雑誌』752 昭和40年)

〃「プラトンのソクラテス像——アリストテレスによせて——」(『古典古代における伝承と伝記』所収 岩波書店 昭和50年)

今林万里子「『国家』の三つの比喩」(『古代哲学研究(METHODOS)』II 昭和44年)

今道友信「プラトンの芸術論覚え書」(『理想』376 昭和39年)

〃「プラトンにおけるイデアと一般者」(『西洋古典学研究』XII 昭和39年)

〃「思索の主体は誰か——プラトンの知識論について——」(『西洋古典学研究』XIX 昭和46年)

岩崎勉「プラトンに於ける「見真」に就いて」(『西洋古典学研究』XIV 昭和41年)

岩田靖夫「『ポリーテイアー』におけるドクサとエピステーメー(一)」(『哲学雑誌』752 昭和40年)

内野祥子「『パイドーン』におけるミュートスについて」(『哲学雑誌』752 昭和40年)

内山勝利「『ポリテイア』まで——初期プラトンについての一試論——」(『古代哲学研究(METHODOS)』II 昭和44年)

〃「感覚的事物とイデアとの間——3本の指の意味するもの・『国家』523C-524Dなど——」(『古代哲学研究(METHODOS)』VI 昭和48年)

岡田正三「プラトーンはなぜ書いたか」(『西洋古典学研究』XIII 昭和40年)

加川航三郎「プラトーン〝アポロギア〟についての一疑問」(『西洋古典学研究』II 昭和29年)

加来彰俊「τὰ αὐτοῦ πράττειν・プラトンの正義論について」(『西洋古典学研究』IV 昭和31年)

〃「ゴルギアス篇におけるプラトンの意図」(『西洋古典学研究』VIII 昭和35年)

加来彰俊「プラトンの政治論」（『理想』409　昭和42年）
加藤信朗「分割の問題（一と多）――プラトン研究」（『哲学雑誌』719-720　昭和29年）
〃「プラトンの神学」（『哲学雑誌』731　昭和31年）
金松賢諒「ソープロシュネー論――『カルミデス』を拠典として――」（『鈴木大拙博士頌寿記念論文集』　昭和35年）
鹿野治助「時代的背景とプラトーンのイデア論」（『哲学研究』19の2、4　昭和9年）
種山恭子「必然ということ――『チマイオス』解釈の一断面――」（『哲学研究』40の10　昭和35年）
〃「プラトン『ティマイオス』における無秩序な動について――運動と秩序――」（『西洋古典学研究』XII　昭和39年）
〃「「解釈」の問題についての覚え書き――『ティマイオス』解釈と『ティマイオス』の自然解釈と――」（『古代哲学研究(METHODOS)』II　昭和44年）
小池澄夫「「消滅」概念を中心とする一つの整理――『パイドン』の魂不死論証の周辺――」（『古代哲学研究(METHODOS)』VII　昭和50年）
近藤洋逸「近代科学の形成とプラトニズム」（『思想』345　昭和28年）
斉藤信治「ソクラテスのイロニー」（『哲学雑誌』704　昭和24年）
〃「キェルケゴールのソクラテス解釈」（『理想』239-240　昭和28年）
斉藤忍随「《Ἀλήθεια》と《ἀλήθεια》――Platon *"Politeia"* 508D以下の読み方について――」（『西洋古典学研究』XVI　昭和43年）
向坂寛「ἀληθεῖς ἡδοναί と καθαραὶ ἡδοναί――『ピレボス』66C．オルペウスの言葉の解釈をめぐって――」（『西洋古典学研究』XXI　昭和48年）

左近司祥子「プラトンの"Politikos"の第三ディアイレシスについて」(日本哲学会編『哲学』18　昭和43年)
〃　「プラトーンの哲学とΠαιδιά」(『西洋古典学研究』XXII　昭和49年)
式部久「*Phaedo*における Δεύτερος Πλοῦς」(『西洋古典学研究』VI　昭和33年)
〃　「『ピレボス』における快楽の諸相の分析――ディアイレシスの方法との関連で――」(『西洋古典学研究』XXI　昭和48年)
副島民雄「プラトンの〃場所〃について」(『哲学雑誌』724　昭和29年)
高田三郎「プラトンに於ける自体と存在」(『哲学研究』13の5　昭和3年)
武宮諦「Platon, *Gorgias* 481B sqq. について――πρὸς τὸ βέλτιστον θεραπεύειν ということの意味――」(『西洋古典学研究』XI　昭和38年)
田中享英「プラトンと方法」(『理想』455　昭和46年)
田中邦夫「ΦΙΛΟΣΟΦΟΣとΦΙΛΟΔΟΞΟΣの区別の基準としてのΓΝΩΣΙΣとΔΟΞΑ・その一」(『古代哲学研究(METHODOS)』IV　昭和46年)
〃　「――その二」(同誌V　昭和47年)
田中秀央「プラトーンのアカデーメイアに就いて」(『心』　昭和47年)
田中美知太郎「プラトンの『パルメニデス』131E～132Bについて――所謂「第三の人間」とプラトンのイデア論――」(『哲学研究』11の10　大正15年)
〃　「プラトンのイデアに就いて」(『哲学研究』14の11　昭和4年)
〃　「デアレクチケー」(『思想』89　昭和4年)
〃　「プラトン「イデア説」の由来」(『理想』69　昭和11年)

田中美知太郎「プロトレプチコス」（『哲学研究』23の11　昭和13年、24の3、10　昭和14年）
〃　「雲のソクラテス」（『波多野精一先生還暦記念論文集・哲学及び宗教と其歴史』　昭和13年）
〃　「イデア」（『思想』257　昭和18年）
〃　「最も必要なものだけの国家」（『思想』272　昭和21年）
〃　「善の意味——ソクラテス的な問いのかたちで」（『哲学研究』34の4　昭和25年）
〃　「古典研究における解釈の問題——プロクロスの註釈から——」（『西洋古典学研究』Ⅰ　昭和28年）
〃　「ヘーゲルとプラトン」（日本哲学会編『哲学』20　昭和45年）
田辺元「プラトニズムの自己超越と福音信仰」（『展望』　昭和22年）
津村寛二「プラトンとアリストテレスにおける「なにであるか」の問いについて」（日本哲学会編『哲学』14　昭和39年）
〃　「『パイドン』における第二の航海について」（『古代哲学研究(METHODOS)』Ⅲ　昭和45年）
〃　「エイドスとロゴスの対応についての一考察——『ソピステス』259E5-6——」（『西洋古典学研究』XXI　昭和48年）
長坂公一「ヌース素描——晩年のプラトンが愛用した一用語の研究」（『哲学研究』476　昭和36年）
〃　「プラトン第七書簡の謎」（『哲学研究』487　昭和38年）
〃　「動くものと動かされるもの（プラトン『法律』第10巻から）」（『西洋古典学研究』XV　昭和42年）
長沢信寿「プラトンに於ける知識への道——『テヘアエテーツス』研究」（『哲学研究』20の5、6、7　昭和10年）
〃　「二種の『テアイテトス』」（『哲学研究』23の9　昭和13年）
中村一彦「プラトン『パイドン』のイデア論の性格に関する一考察」（『古代哲学研究(METHODOS)』Ⅲ　昭和45

年）

〃「「善のイデア」へのアプローチ——πρῶτον φίλον (*Lysis* 219D1) を介して」（『西洋古典学研究』XXIII 昭和50年）

西田幾太郎「プラトンのイデアの本質」（『続思索と体験』岩波書店 昭和12年）

新田博「『国家』VI—VIIにおける3つの比喩と哲学の諸問題——ヒュポテシスとエイドス——」（『古代哲学研究(METHODOS)』I 昭和43年）

野町啓「《ティマイオス》(28B7)解釈史ノート——ギリシア哲学とクリスト教との交流の一断面——」（『西洋古典学研究』XIX 昭和46年）

波多野精一「ソフィストとソクラテス」（『哲学研究』4の1 大正8年）

廣川洋一「似像制作術と哲学——《δι' εἰκόνος λέγειν》の意味するもの——」（『古代哲学研究(METHODOS)』V 昭和47年）

藤沢令夫「プラトンの認識論の分析」（『哲学研究』36の3 昭和27年）

〃「ΕΙΚΩΣ ΛΟΓΟΣ——Platon における自然学のあり方について——」（『西洋古典学研究』II 昭和29年）

〃「見うしなわれた原像」（『思想』359 昭和29年）

〃「文芸の χάρις, ὀρθότης, ὠφελία——Platon の文芸論に関する若干の基礎的考察——」（『西洋古典学研究』IV 昭和31年）

〃「プラトンにおける論争の論理——西洋における哲学的思想の確立にあたって——」（『思想』478 昭和39年。『実在と価値——哲学の復権』筑摩書房 昭和44年に再録）

〃「精神の秩序——プラトンの哲学思想について——」（『理想』376 昭和39年。『実在と価値——哲学の復権』

に再録）
藤沢令夫「プラトンと現代」（『理想』409　昭和42年。『実在と価値――哲学の復権』に再録）
〃「観ること(θεωρία)と為すこと(πρᾶξις)――イソクラテス、プラトン、および後期アリストテレスとの比較におけるアリストテレス『プロトレプティコス』の哲学思想――」（『西洋古典学研究』XXI　昭和48年）
〃「形而上学の存在理由」（日本哲学会編『哲学』24　昭和49年）
真方忠道「デウテロス　プルース――Platon, *Phaidon* 99d-107b について――」（『西洋古典学研究』XX　昭和47年）
松居正俊「第七書簡真偽論一考察」（『西洋古典学研究』XVIII　昭和45年）
松永雄二「Phaedo 102B3-103C9――プラトンの「一と多」とアリストテレスの「主語的なものと述語的なもの」の問題の一断面」（『西洋古典学研究』X　昭和37年）
〃「イデア論のもつ「存在」把握について」（『理想』409　昭和42年）
〃「イデアの離在と分有について――ある序説――」（日本哲学会編『哲学』17　昭和42年）
水野一「プラトンのイデア数論に関する一考察」（『西洋古典学研究』VI　昭和33年）
三井浩「プラトーン哲学資料論――プラトーンに於ける哲学的精神の発展序説――」（『哲学研究』26の12、27の5、6、7　昭和16、17年）
村治能就「プラトンとアリストテレス」（『理想』409　昭和42年）
森進一「アルキビアデス――『饗宴』に於ける――」（『西洋古典学研究』IX　昭和36年）
〃「エイコース・ロゴス」（『哲学研究』483　昭和38年）
森俊洋「プラトンの知識論に関する一つの予備的考察――*Soph.* 251-9 の τὸ ὄν, ταὐτόν, θάτερον をめぐって――」（『西洋古典学研究』XVIII　昭和45年）

山下正男「プラトンにおける否定性の論理構造とディアレクティケー」(『西洋古典学研究』V　昭和32年)
山田潤二「ソクラテスの死」(『西洋古典学研究』V　昭和32年)
山野耕治「いわゆる《理想国》ということ――プラトンのΠΟΛΙΤΕΙΑにおけるψυχήとπόλιςのanalogiaに関する一考察――」(『西洋古典学研究』VII　昭和34年)
〃「最近のプラトン研究について」(『理想』409　昭和42年)
〃「プラトンの視点」(『西洋古典学研究』XIX　昭和46年)
山内得立「プラトンの「魂」」(『理想』164　昭和21年)
〃「場所とコーラ」(『哲学研究』30の2　昭和21年)
山本光雄「プラトン晩年の宗教思想――『ノモイ』を中心として――」(『哲学雑誌』665　昭和17年)
〃「プラトンの革命論――所謂彼の政体変化の弁証法について」(『哲学雑誌』704　昭和24年)
吉岡潔「プラトーンの二、三の問題」(日本哲学会編『哲学』20　昭和39年)
和辻哲郎「プラトンの国家的倫理学」(『思想』204　昭和14年)

〔五十音順〕

*

邦語参考文献については比較的容易に入手もしくは閲覧できると思われるものに限って重点的に収載した。なお、右に挙げた文献のうちには、海外の専門雑誌に掲載された論文もいくつか含まれている。その際、頻出する専門雑誌名については省略形を用いたので、左にその略号表を添える。

American J. Philol. = *American Journal of Philology*

C. Q.＝Classical Quarterly
C. R.＝Classical Review
Philos. Q.＝Philosophical Quarterly
Philos. R.＝Philosophical Review

あとがき

本稿を作成するにあたっては、基本的には、
田中美知太郎「古代哲学」(『田中美知太郎全集』第三巻所収　筑摩書房　昭和44年　旧題名「古代哲学一　プラトン迄」(下村寅太郎、淡野安太郎編『哲学研究入門』所収　小石川書房　昭和24年))
藤沢令夫「プラトンと現代」(『理想』409　昭和42年　藤沢令夫『実在と価値――哲学の復権』再録　筑摩書房　昭和44年)
山野耕治「最近のプラトン研究について」(『理想』409　昭和42年)
山野耕治「文献解題」(藤沢令夫編著『哲学を学ぶ人のために』所収　世界思想社　昭和47年)
などを主たる素材としつつ、その後の諸成果をもふまえて、山野が草案をつくり、これに田中美知太郎と藤沢令夫が適宜補足を加えたうえ、最後に山野が整理してまとめた。
なお、右に挙げた文献は大部分を田中、藤沢、山野が直接所持しているもの、および京都大学文学部図書室に所蔵されているもののうちから選んだ。筆者の目にふれたもの、記憶しているものだけを挙げたので、あるいはまだこのほかにも注目すべきものがあるかもしれない。

しかし、本稿はあくまでも文献案内を兼ねた研究入門を意図したもので、完全な文献目録を意図したものではないことをあらためておことわりしておきたい。

山野耕治

『定義集』解説

向坂　寛

一　当篇の内容と構成

中世写本はプラトン全集に約二百からなる定義集をつけ加えた。定義される概念は、「太陽」、「神」、「勇気」、「国家」、「音節」など、自然学、神学、倫理学、政治学、文法学などの多くのジャンルにわたっている。しかし、時には同じ概念が二カ所で異った定義の下に紹介されている（85、161では、同じ「好機」（καιρός）が定義されている）。そして、どの概念も一つもしくは複数の説明がついており、時にはその複数の説明も、同じ思想を少し修正したに過ぎないものもある。たとえば、29の「忍耐」では、「立派なことのために苦痛（λύπη）に耐えること」と並んで「立派なことのために苦労（πόνος）に耐えること」というふうに、一語のみ入れかえられているに過ぎないものがある。また、一つの概念を定義するのに、異った三つの観点からの説明の組合せに甘んじている場合もある。たとえば、「太陽」を定義するに、「それが登り、また沈むまでが同じ〔ところにある〕人々によって観られる唯一の天の火」として自然学的に、また「昼に輝く星」としてその属性から、また、「永遠の生命をもつ最大の生きもの」として古人の神秘的概念によって説明されている。定義さるべき概念の並べ方は、1―20までは大体自然学的なものが多く、後は政治学、文法学、倫理学等々のジャンルのものが混合しているようである。おそらく、当『定義集』の一人も

しくは複数の編者は、一定の思想の下に統一的に概念を配列したようには思えず、むしろアト・ランダムに言葉のリストを作ったかのように思われる。

二　定義の起源と意味

ギリシアでは、かなり早くから、諸学派の人々が「定義」への関心を払って来た。数の定義をミレトス学派のタレスに帰す学者もいる。アリストテレスは『形而上学』第一三巻(1078^{b}19 sqq.)でソクラテス前にピュタゴラス学派の人々が「好機」、「正義」、「結婚」等のなんであるかを説明し、またデモクリトスは「熱さ」、「寒さ」等を定義したと証言している。また、ゴンペルツによると、「定義」の最初の論文として、ヒッポクラテスの名の下に伝えられた医学書を挙げている[1]。「技術について」の論文のこの著者は、医学の本質を正確に述べているようである。ソフィストのゴルギアスは「弁論術」と「色」の定義をしているし[2]、プロディコスは言葉の意味を明確に区別する努力をしていた[3]。しかし、なんと言っても、アリストテレスも言うように[4]、「帰納的論法と普遍的定義」に心を配り、倫理上の諸徳の定義に専心したのはソクラテスであった。プラトンの初期対話篇は、こうしたソクラテスの定義に迫る執念を忠実に描写していると言えよう。ものの本質を知るためには、正確な言葉で表現する必要があり、そのためには、言葉の概念を相互に明晰に区別する必要があった。この概念の狩猟を、プラトンは『ソピステス』『ポリティコス(政治家)』『ピレボス』において、分割法(ディアイレシス)の下にくりひろげるのである。アカデメイアの若い学徒たちは、プラトンの教導のもとに、この新しい思索の訓練に熱意をもって従事したに違いない(この学徒の中にはアリストテレスもいたわけであり、アリストテレス自身、後年教育の必要上、定義集を書いている[5])。大体、この時期に、アカデメイアのレッスンに必要な重要な言葉の定義集が出版されたように思われる。ディオゲネス・ラエルティオスはアカデメイアの二番目の学頭となったスペウシッポスの作品の中に、『定義集』の一冊を挙

げている。[6] アリストテレスの弟子テオフラストスも『性格論』の中で三〇の性格定義をしている。ストア学派はアカデメイアから、かの教育上の方法を借り、それを発展させた。クリュシッポスも倫理や科学上のもろもろの定義集を書いている。[7]

そもそも「定義集」と訳されたギリシア語 ὅροι の字義は「境界」とか「限界」を意味する（ラテン語の definitio も同じである）。それはある概念をより広い、もしくはより狭い境界の中に閉じこめることなのである。「より広い境界」を類概念、「より狭い境界」を種差と言ってもよいかもしれない。つまり類概念に種差を加えることによって定義が完全になると言えよう。たとえば「人間」を定義する場合、プラトンの分割法を借用すると、まず、「人間」だけでなく、「牛」や「馬」などの多くの種的形相が相互に異っているものでありながら「動物」という一つの類的形相の中に含まれていることを見てとり、今度はその「動物」という類を「二本足のもの」、「四本足のもの」とに分け、次に「二本足のもの」を「理性をもつもの」と「理性をもたないもの」とに分け、最後に「二本足の、理性をもつ、動物」という定義が得られるわけである。そして、この「より広い」、そしてまた「より狭い」境界（ὅροι）の中に、人間とは何かの答となる本質が、他のものと区別されて、より明瞭に閉じこめられるわけである。もちろんのこと、他のものと明瞭に区別されない場合は、「とは何か」の答を充足させない不充分な定義となる。ディオゲネス・ラエルティオスによると、プラトンが、「人間とは二本足の、羽のない動物である」と定義して好評を博していると、キュニコス学派のディオゲネスが、雄鶏の羽をむしって、それを手にプラトンの教室に入った。そして「これがプラトンの言う人間だ」と言った。そこで、この定義にさらに「平たい爪をもつ」というのが付加されたという。[8] この定義は、当『定義集』121に収められている。アリストテレスは、人間は「ロゴスをもつ動物」[9]と定義したが、同じ人間を「平たい爪をもつ、二本足の動物」と定義したにせよ、これらの定義に従って、これに該当

するものをひき出して来た時、ひき出されたものがすべて「人間」であったとすれば、この定義は一つの普遍性を得たことになる。つまり、「人間」という一つの特殊を、わかりやすい、共通の、普遍的言葉の中に、閉じこめ、摑まえられるようにする、これが定義の意味である。そしてそのことは、人様々な意味のもとに摑まえていた曖昧な対象を、明確に他のものと区別し、理解させることになり、このことによって人は誤解や欺瞞を避けることができる。『パイドロス』(262B)の中で、人が騙されるのは、事柄が互いにどこか似ているからで、一見似ていて事実似ていない時なのだとソクラテスは言う。明白に似ていないものについては始めから騙されることはないが、この似て非なるものの対象が問題なのである。概してギリシア人は不明確なことが嫌いで、明晰を愛する精神の持主であった。学問的定義の形をとらないまでも、この定義の精神は、ホメロスにも見出される。人間には死すべき(θνατοι)というエピセットがつけられ、神々には不死なる(ἀθάνατοι)という形容詞がつけられて表現されている。[10] ピンダロスも「神の種族と人間族の力は全くかけはなれている。われわれは無であるが、青銅の天族は永遠に続く」[11]と言い、明瞭に一線を画している。そもそもギリシア語そのものが、この定義の精神を代表しているものではあるまいか。完全に透徹した、曖昧な点のない文章の統制を実現するために、対をなしたり、群をなしたりして働くパーティクルや、一〇箇の分詞をもつ規則動詞などを挙げれば充分であろう。たとえば、二つの文章(もしくは節、句)があって、後の文章が前のものの単につけ加えである時、τε を置いたり、後文が前文の対立の意味の場合は、μέν … δέ を置いたりする。もちろん、この場合英語にも while, on the other hand という表現があるが、「ギリシア語はこのことをもっとずっと容易に、本能的に、そして常時やってのける」[12]のである。

　こうした定義の精神は、ただ単に「騙されない」ためばかりではなく、積極的に真理の発見に連なっているものなのである。有名な「あるものはある、ないものはない」というパルメニデスの存在定義は、一見あたりまえの、つまらぬことのように見えるが、ここから、あるものがないものになる生成消滅の現世は真に存在(ある)するもの

ではないとする考え方がひき出されて来る。ソクラテスも「法」とはなにかを定義するため、「さあ、それでは君は認めるかね、正しいことは不正であり、不正なことが正しいということを。それとも、正しいことは正しく、不正なことは不正であるときめるかね」(『ミノス』315E)と対話を始めるのである。このようなことはあたりまえのことなのである。しかし、このあたりまえのことをきちんと初めにきめてかからないと一歩も進めない、これがギリシア人なのである。

このように見て来る時、ギリシア人がいろいろ定義を作ったということは、むしろ当然すぎると言えよう。

三　当『定義集』成立推定年代

プラトン全集のもとに集められた当『定義集』は、果してプラトンの手になるものであろうか。思うに何人もそれを信ずるものはいないであろう。しかし、四世紀の終り頃に生きたアンモニオス(Ammonios)とかいう人に誤って帰せられている「類似語、異語について」というタイトルの小辞典は別である。その中で、παιδεία, παίδευσις の定義を引用して、「プラトンが『定義集』で言っているように」とつけ加えている。また五世紀のオリュンピオドロスは『プラトン哲学序論』(二六)で、これがスペウシッポスにさかのぼるという伝えを述べている。プラトンの甥、スペウシッポスには『定義集』の著作があることは、前に述べた通りである。また、アダムによると、ウィーン写本(Vindobonensis 32)の『定義集』冒頭に、スペウシッポスの名が書かれている。[13] ミュラーによれば、当『定義集』の一部はアカデメイア時代に、スペウシッポスがプラトンの直接の口頭の講義から、または講義ノートから借りて書いたのではないかと推論している。そしてそれがこの『定義集』の中で、赤い糸のように全体を貫いて輝いているという。[14]

それにもかかわらず、ビュザンティオンのアリストパネス(前二五七—一八〇年)もトラシュロス(後一世紀頃)も、

プラトンの『定義集』については一言も述べてはいないのである。しかし、アカデメイアによって集められたプラトンの作品の中に、この小さな『定義集』が存在した可能性は充分考えられる。いずれにせよ、当『定義集』の成立年代は、アカデメイア初期以前にはさかのぼらないことは確かである。

ところでこの作品を、プラトンが、あるいはスペウシッポスが、あるいは当時のアカデメイア学派の誰かが書いたにせよ、われわれの手もとに伝えられている『定義集』の内容からみると、彼らのうちの誰か一人が書いたとは思えないほど、内容が変化しているのである。つまり、この中には明らかに、異った三つの思想傾向が見出されるのである。すなわち、プラトン(アカデメイア学派)的思想、アリストテレス(ペリパトス学派)的思想、そしてストア学派の思想である。このような作品内容の相違と多様性は、作者の統一性を許すことができないものとなる。たしかに、この『定義集』のどれをとってみても、プラトン思想の影響と反映を示してはいる。しかし、明らかにアリストテレスの政治学から、または倫理学からのものや、ストア学派の定義からとられたものが多々存在する。

とするとどういうことになるのか。これをスイエ(J. Souilhé)は次のように推論する。すなわち、この『定義集』の構成は、もっと遅い時代に構成されたもので、少くともストア学派以前にさかのぼることはないであろうと言う。確かに初めはアカデメイア(プラトン、もしくはスペウシッポス)の「定義集」が基礎となったが、やがて、それらのあるものは失われ、一方、時代と共に別の新たなものが付加され大きくなって来たのではないか。これを証拠だてるものとして、われわれの中世写本をとりあげることができる。それらの原本は、今日われわれが読む完全なテクストを持っていなかったようで、最も古い中世写本の三つ、Parisinus 1807(A写本)AD. 9, Vaticanus graecus 1(O写本)AD. 10, Palatinus Vaticanus 173(P写本)AD. 11は、一様にいくつかの文節が欠落している。この重大な欠落は、言葉の類似性から来る誤りによって説明できるたぐいのものではないのである。

おそらく手書き人は自分の原本の中の、ずっと後になって書き込まれた欄外書きこみや、その他の原本では見出

されたかもしれない文節を読みとらなかったのであろう。つまり、もともと、複数の「定義集」のシリーズがあって、後になって一つのテクストのもとに結びつけられ、やがてそれがプラトン学派のものとされるに至ったと言うのである。[15] スイエの推論によると、この『定義集』はおそらく、ストア学派の理論とアカデメイア学派の理論とが、難なく折衷したシンクレティズム(折衷主義)の時代に構成されたのであろうと言う。

いずれにせよ、当『定義集』は、明確に区別し、判別し、限定することを愛し、それを特質とするギリシア精神の結晶の一つということができよう。

(1) T. Gomperz, *The Greek Thinkers*, translated by L. Magnus, I, p. 491.
(2) Plato, *Meno*, 76 D.
(3) Plato, *Cratylus*, 384 B.
(4) Aristotle, *Metaphysica*, 987^{b}1.
(5) Diogenes Laertius, V, 23.
(6) Ibid., IV, 5.
(7) Ibid., VII, 199–200.
(8) Ibid., VI, 40.
(9) Aristotle, *Ethica Nicomachea*, 1098^{a}.
(10) Homer, *Iliad*, II, 447 ; *Ody.*, V, 2, III, 3.
(11) Pindar, *Nem.*, VI, 1 sqq.
(12) H. D. F. Kitto, *The Greeks*, p. 27 (A Pelican Book).
(13) R. Adam, *Über eine unter Platos Namen erhaltene Sammlung von Definitionen, in Philologus*, S. 366–376.
(14) H. Müller, *Platon's sämmtliche Werke*, VIII, Anmerkungen.
(15) J. Souilhé, *Platon, Œuvres complètes*, XIII, 3^{e} partie, Definitions, Notice.

主な使用文献

J. Burnet, *Platonis opera*, V, Oxford, 1907.

H. Müller, *Platon's sämmtliche Werke*, VIII, Leipzig, 1866.

F. Ast, *Platonis opera*, IX, Lipsae, 1827.

J. Souilhé, *Platon, Œuvres complètes*, XIII, 3^e^ partie, 1962.

H. von Arnim, *Stoicorum Veterum Fragmenta*, I, II, III, Teubner, 1968.

P. Shorey, *What Plato said*, (The Chicago University Press), 1973.

Diogenes Laertius, I, II (The Loeb Classical Lib.), 1950.

「プラトン外篇」について

副島民雄

ここに収録されている六篇『正しさについて』『徳について』『デモドコス』『シシュポス』『エリュクシアス』『アクシオコス』はいずれもバーネットの『プラトン全集』第五巻第三部のなかの「プラトン外篇」(ΠΛΑΤΩΝΟΣ ΝΟΘΕΥΟΜΕΝΟΙ――「ノテウオメノイ」は、字義通りには、「正嫡でない子供」、「庶子」の意味であって、ここでは「プラトンの著作であることが疑われるもの」「疑プラトン著作集」ないし「プラトンの著作からはずされた作品」の意――)中のものである。これらがプラトンの真作でないことは、今日ではすでに明らかにされているところである。普通トラシュロス(ティベリウス帝の治下に生存し、後三六年に死んだと伝えられている)が『プラトン著作集』から「四部作集」を編纂したと伝えられているが、その際上記六篇は偽作として除外された。ディオゲネス・ラエルティオス(Diog. L. III. 56–62)はこの集をトラシュロスが公刊したことを伝え、その内容を紹介している。そして、彼は疑わしいものとしてあげている作品のなかに『エリュクシアス』『シシュポス』『アクシオコス』『デモドコス』を数えている。にもかかわらず、上記の作品は内容的にはプラトン―アカデメイア系の発想法を受け継ぐものであることもまた明らかである。このことは、それぞれの作品につけられた注を見てもわかるように、『プロタゴラス』『ゴルギアス』『メノン』など、プラトンの比較的初期の作品に関係が深いことからも推察されよう。

しかし、これらの作品と比べてみて、「外篇」の諸篇には議論の晦渋さが目立つ。それは前記のプラトンの対話

篇のうちにも胚芽のごとくに存在して対話を彩っていた論争術的懐疑論が、これらの作品では全体に瀰漫している
からである。これについて考えられることは「外篇」に対して『両論』(δισσοὶ λόγοι)あるいは『両論』的考え方の
影響の著しいことである。

『両論』に関しては、その作者も知られていないし、その創作時期も明確には知られていない。しかし、すくな
くともペロポネソス戦争終結(前四〇四年)の後に書かれたものであろうと推定されている(K. Freeman, *Companion to the Pre-Socratic Philosophers*, Oxford, 1959[2], p. 417)。とにかく、さきにあげたプラトンの初期作品以前に書
かれたであろうことは、まちがいないことのように思われる。もしこのことが承認されるとすれば、前記プラトン
の対話篇に『両論』的な考え方の影響がみられるのはうなずける。ソクラテスもプラトンも論争術に対して対話法
を、ソフィズムに対して哲学を主張したことは周知のことである。けれども、新しい発想法に興味を覚えたであろ
うこともまたたしかなことであろう。そしてこの空気を彼らのエピゴーネンが感得しないはずはない。メガラ派に
「堆積論」や「禿頭論」や「エレクトラ」のような詭弁が出ていることからもわかるように、すでにアカデメイア
の内部にソフィズムへの関心が高まっていたことがうかがわれる。それはおそらくプラトンの死後、いっそう普遍
化し深化したと思われる。のちにアカデメイアが懐疑論の絶えざる発生源になっているのも不思議ではない。以上
のことを考えて、「外篇」のこれらは初期アカデメイアの、上のような雰囲気のなかで、その構成員によって書か
れたものであり、それもプラトンの死後、前四世紀末にできたものであろうと推察される。これらがプラトンの真
作でないと考えられる根拠としては、上に述べたような内容上の懐疑的傾向をあげることができるとともに、芸術
的潤いと宗教的深みの欠如を指摘することができる。もっとも『エリュクシアス』と『アクシオコス』については
事情がすこし異なるのでそれらの解説のところで別に述べる。

『両論』は、別名を『討論』(διαλέξεις)と言い、Fr. 90(DK)およびフリーマン(前掲書pp. 417-423)などに紹介されている。いまその項目を拾ってみると、

(一) 善と悪について(περὶ ἀγαθῶ καὶ κακῶ)——

或る人々はこれらをそれぞれ別であると言い、或る人々は同じであると言う。たとえば或る人々にとっては善であるが、或る人々にとっては悪であり、また同じ人にとっても或る時には善であるが、或る時には悪であると言う。

(二) 美と醜について(περὶ καλοῦ καὶ αἰσχροῦ)——

(三) 正と不正について(περὶ δικαίου καὶ ἀδίκου)——

(四) 真と偽について(περὶ ἀλαθέος καὶ ψεύδεος)——

(五) 狂人と正気の人、知者と無知な人は同じことを言ったりしたりする(ταὐτὰ τοὶ μαινόμενοι καὶ σωφρονοῦντες καὶ τοὶ σοφοὶ καὶ τοὶ ἀμαθεῖς καὶ λέγοντι καὶ πράσσοντι)ということについて——

(六) 知恵と徳について、それらは教えられうるか(περὶ τᾶς σοφίας καὶ τᾶς ἀρετᾶς, αἰ διδακτόν)ということについて——

各々、教えられえないという論拠が五つ、教えられうるという論拠が五つあげられる。すなわち、教えられえないとする論拠として、

(1) もし汝が何ものかを誰かに与えるならば、汝はそれを持つことができない。

(2) もしそれが教えられうるならば、音楽の場合と同様、教師がなければならないはずである。

(3) ギリシアの賢人たちは彼らの友人たちにもその自分の持っている術を教えたはずである。

(4) 或る人びとはソフィストの下で学んだにもかかわらず、少しも改善されなかった。

(5) ソフィストにつかなかったのに立派な人物になった者がたくさんいる。

次に教えられうるとする論拠として、

(1) 教師は実際に文字を教え、竪琴弾きは竪琴の弾き方を教えるにもかかわらず、彼ら自身の知識を保有している。

(2) もし知恵や徳が教えられえないとすれば、ソフィストは他の何を教えるのか。アナクサゴラスやピュタゴラスには弟子があった。

(3) ポリュクレイトスは息子に彫刻を教えた……。

(4) ソフィストにつかないで賢くなる人たちもいる。文字を学ぶ人たちは大てい教わるのではない。

(5) 生まれつきの素質によって、人はソフィストから教わらなくても、そのほかのところから(たぶん父母から)多くのことを容易に聞き覚えることができる。

がそれぞれあげられる。

(七) すべての官職はくじで決められるべきか、それとも適材を選ぶべきか。

(八) 簡潔に会話しかつ物事について真実を理解することができるのは、同じ人であり、同じ技術に属する。

(九) 知識や生活に役立つ最大かつ最善の発見は記憶である。

『両論』は以上の九項目について、ひとは肯定、否定の両論をなすことができると述べている。ソフィストたちは、このような対立の論を用いてその弟子たちに機械的に答えうるように教えた。この作品はこれに続く部分は失われてしまっているが、当時としては教科書としてととのったものとして魅力があったものと思われる。これをかたわらにしてこれらの「外篇」を読むならば、「外篇」の理解に寄与するところが多いであろう。

なお、この「外篇」によって、われわれはアカデメイアにおける知的活動や流行の主題について知ることができ

るのみならず、前四世紀における対話の様式をうかがうことができると思われる点において、数少ない証言として、これら「外篇」に資料的価値を認めることができよう(*Platon, Œuvres complètes*, Introduction, ix-x, Paris, 1930. 参照)。

最後に、『正しさについて』『徳について』『デモドコス』『シシュポス』『エリュクシアス』『アクシオコス』六篇の「外篇」を通じて全体として言えることを二、三述べて、あとの詳細については各篇の個別の解説にゆずりたい。はじめの二篇『正しさについて』と『徳について』は、それぞれテーマといい説き方といい、これまでのプラトンの真作のニュアンスを濃厚に残しているので、プラトンの未定稿を読む思いがするものであるが、次の『デモドコス』と『シシュポス』を見るに及んでわれわれは一種の戸惑いを感ぜずにはいられない。それはテーマに思いがけない展開があり、論の進行の仕方に例のない晦渋さがみられるからである。『デモドコス』では、審議、助言、投票、訴訟、信用の問題、『シシュポス』では審議の問題がそれぞれ取り扱われている。もともと議論好きのギリシア人の間では早くからこのような問題は取り扱われていたと思われるし、プラトンの『ソクラテスの弁明』もその片鱗を示すものであると言っていい。しかしまたこれらの問題は、ポリス政体の傾斜、崩壊の時代に及んで、人々の公私の生活、ことに私生活の中に複雑に錯綜して、日常生活における重要関心事となっていったと思われ、また当然アカデメイア内でもそれが話題となり、さらにプラトニズムを基礎としつつも、時代の諸潮流とともにヘレニズム的な、個人の幸福な生活の探究という方向へ、具体的には幸福と、財産や富の問題の解決を指し示す方向へと進んでいったとも思われる。

われわれはその定着の一段階として『エリュクシアス』と『アクシオコス』をみることができる。それだけにこの二篇は前の四篇に比べると年代もかなり後れていると思われる。そして『アクシオコス』の consolatio(慰め)に

前後して consolatio 文学隆盛が招来され、そしてやがてボエティウスの『哲学の慰め』(De Consolatione Philosophiae) が現われる。これはその流れをくむ一つの大きな成果であると言ってよいだろう。

なおこの「外篇」の章分けは C. Fr. Hermann, *Platonis Dialogi*, VI, Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana, Lipsiae, 1902. によった。

『正しさについて』解説

副島民雄

登場人物

ソクラテス(Socrates)
無名氏

標題の『正しさについて』というのは、これと同じ題目がプラトンの『国家』の副題として用いられており、またディオゲネス・ラエルティオスによると、ソクラテスを崇拝しソクラテスと対話してそれをノートしたというアテナイ人で靴作り業者のシモン(Diog. L. II. 122)、アカデメイアにおけるプラトンの後継者スペウシッポス(Ibid., IV. 4)、その次の後継者クセノクラテス(Ibid., IV. 12)、それからアリストテレス(Ibid., V. 22)、その学徒ポントスのヘラクレイデス(Ibid., V. 86)が、いずれも『正しさについて』という題目で論文を書いたことになっている。それほどにこの題目は古代において魅力あるものであったらしい。それもソクラテス―プラトンにおいて発展した倫理、そしてプラトンにおいて完成したポリス倫理における正義論、それが結晶した『国家』、この新鮮な体系がアカデメイア中を魅了したであろうことは想像に難くない。けれども、ポリス政体は、すでにプラトンの在世中に動揺のなかにあり、その実体はプラトンの死後間もなく事実上崩壊し、アカデメイアとその理想は、空しき思想の孤児

としてあとに残されることになった。目標を失った理想は、当然、矮小化せざるをえないし、現実化せざるをえないことになる。本篇はこのようなアカデメイアの状勢のなかで、その一員によって書かれたものの一つであったと思われる。そして、たまたま幸運にも生き残ったのであろう。したがって本篇の作者として特定の人の名をあげることはできない。けれども、そのなかにはソクラテス―プラトン倫理の精神と言いうるものは一応は備わっていると見ることができるとともに、しかし反面エピゴーネンの作らしく実用化し、矮小化しているとみることができる。

本篇の対話は、プラトンの真作の場合と同様に、まず、「正しさ」(τὸ δίκαιον)とは何かという問いによって始まる。そして、それは「公認されたもの」と答えられる。すなわちそれはまず第一に「正しさ」は何のために用いるものであるかという、「正しさ」の目的を問うところから始められる。眼は見るためにあり、魂は知るためにあり、声は話をするためにあるが、同様にして正しさは何のために用いるのか、正しさの目的とするのは何であろうか、という問いが立てられる。

ものの大小はものさしと測量術によって識別され、それを行なう者が測量家である。同様にしてものの軽重ははかりと秤量術によって識別され、またそれを行なう者が秤量家である。同様にして、われわれが正不正を判定しようとするとき、その判定者は裁判官であり、裁判官は言論を用いて裁判術によって判定をするのである。それでは裁判官が言論と裁判術によって正不正を判定するというが、それはその正不正は何であるからなのか、と問いは言いかえられる。しかしこの答えは直接には与えられず、議論は別の仕方で展開する。すなわち、ひとが不正を行ない不正な人間であったり邪悪であったりするのは故意に自ら好んでそうなのか、それとも不本意ながらそうなのか、という観点の導入である。

かくて問題は、「好んで邪悪な者はなく、好まざるに至福なる者もなし」という詩人の言葉が提出され、この言

葉の真偽を吟味してみるという形で考察される。ギリシア語の τὸ δίκαιον は「正しいこと」「正しいもの」「正しさ」「正義」など、いろいろに訳しうるので、この答えは特殊ではあっても、不自然ではない。しかしその特殊性がソクラテスによって指摘され、順序立てて次のように「正しさ」とは何かの追求が行なわれることになる。

さて正しいのは真実を言うこと、欺かないこと、益することであり、逆に偽りを言ったり、欺いたり、害をあたえたりするのは不正なことである。ところが敵に対しては、偽りを言うこと、欺くこと、害をあたえることは正しいことであり、また友に対しても、益するためには偽りを言うことや欺くことが正しいということも言いうる。そうすると真実を言うことと偽りを言うことは共に正しく、共に不正であるということになり、また欺くことと欺かないこと、害することと益することに関しても同様のことが言える。とすると、そのいずれが正しく、いずれが不正なのか。これを決定するのは、その行ないがしかるべき、時宜にかなったときに為されたかどうかということである。すなわち、しかるべきとき、時宜にかなったときを知っているということ、すなわちその知識である。つまり、正しい人は知識(エピステーメー)あるいは知恵(ソピアー)によって正しいのであり、不正な人は無知によって不正なのである。

しかしながら、ひとは決して故意に無知であることはない、したがって人は故意に不正を行ない、不正な人間、邪悪な人間であることはないという結論となる。

これを要するに、本篇は正と不正、知識と無知、故意と不本意の三対の概念の相関関係を明らかにしようとしたものであるが、そのこと自体は別に新しいことではなく、すでにプラトンの真作対話篇において、しばしば、取り扱われていることである。ただ正と不正の『両論』的意味を展開させている点が、興味をひくということができよう。

主な使用文献

H. Müller und K. Steinhart, *Platons Sämtliche Werke*, VIII, Leipzig, 1866.

C. Fr. Hermann, *Platonis Dialogi*, VI, Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana, Lipsiae, 1902.

J. Souilhé, *Platon, Œuvres complètes*, XIII, 3e partie, Dialogues apocryphes, Paris(Budé), 1930.

Platon, Œuvres complètes, Traduction nouvelle et notes par L. Robin avec la collaboration de M. J. Moreau, II (Bibliothèque de la Pléiade), Paris, 1950.

Diogenes Laertios, ed. by R. D. Hicks(The Loeb Classical Library), 1925.

邦訳

岡田正三『プラトーン全集Ⅲ』所収(全国書房)、改訳版昭和四四年。

『徳について』解説

副島民雄

登場人物

ソクラテス(Socrates)

ヒッポトロポス(Hippotropos)　文字通りには馬の飼育者という意味。技術者の証言を得るために導入したもので特定の人物ではない。これが固有名詞に用いられた例は他にはないが、ここでは一応固有名詞のごとく取り扱った。

本篇のはじめの一節は、『メノン』(70A)「わたしに言ってくれることができるでしょうか、ソクラテス、徳は教えられうるものなのか、それとも、教えられうるものではなくて修練によって得られるものなのか、それとも、修練によって得られるものでも学習によって得られるものでもなくて、人間にそれがそなわるのは生まれつきによるのかあるいは他の何らかの仕方によるのか」と言われているものを、多少簡易化した繰り返しである。そして徳が教えられうるかという問題は『メノン』の主要なテーマであり、それはまた同じプラトンの『プロタゴラス』でも扱われている(323C～324D, 361A～C など参照)。そこで、本篇はこの二篇の焼き直しとみることもできる。けれども、本篇とこの二篇とをくらべてみると、われわれは両者の間に量的な違いのほかに、内容における違いを認めないわけにはいかない。

本篇の題名となっている「徳」(アレテー)というのは、もともと、人やものの「すぐれていること」「優秀さ」「善さ」を意味するから、「徳」という限定された意味だけでなく「優秀性」「卓越性」と解したほうがよい場合が往々にしてあるのであるが、本篇も「徳」が教えられうるかどうかの考察は、そのような広い意味でのアレテー、すなわち技術におけるアレテーから始められる。ソクラテスの対話相手のヒッポトロポスというのは馬の飼育者のことなので、本篇では乗馬術や馬乗りを育てることが時として話題となるが、それと並べて例示されるのは、料理、医術、大工、相撲などである。これらの術に通じた有能な者が、すぐれた料理人、すぐれた医者とか言われ、彼らがもつ「優秀さ」「卓越性」が彼らのアレテーと言われるのである。そこで、もしひとが大工のアレテーを得たいと望むならば、大工のアレテーを持った優秀な人のところに行けば、そのアレテーを学ぶことができるし、すぐれた医者になろうと欲するなら、すぐれた医者のもとに行って、彼から学べばよいわけである。すると人間として知恵のある、すぐれた人になりたいと欲するならば、人間としてすぐれた人々から、もしそれが教えられうるものならば、学べばよいという道理になる。それではそれは誰なのか。『メノン』の場合と同様に、当時すぐれた政治家としてその徳を尊敬されていたトゥキュディデス、テミストクレス、アリステイデス、ペリクレスのごとき人物について、彼らがその人たちなのかどうか実証的に検討され、そして、だいたいにおいて『メノン』と同様の道をたどる。すなわち、彼らはその息子たちを上手な馬乗りにするとか上手な相撲とりにするとか、その他音楽や体育競技などにおいてすぐれた者にするとかいうことはできたが、自分のもっている、人間としての優秀性、すなわち徳を伝えることはできなかったし、世の人々も彼らを徳の教師としては認めていない。しかし、彼らは交際範囲が広いのだから、自分ができなければ、他のそういう人をいくらでも求めることができたはずである。ところが彼らはそういう教師を見つけることもできなかった。教師もなければ弟子もないわけであるから、結局、そのような徳の専門家はいないことになる、したがって、そのような徳は教えられないことになる。

そこで、今度は、いま一つの可能性が考察の対象となる。そのような徳は人間の生まれつきによるのではないかという可能性である。しかしそれは、もしそのようなすぐれた生まれつきの素質というものがあるとしても、それを識別する技術がないので、それを知るよしもないとし、簡単に打ち切られる。そうすると、すぐれた人が生ずるのはただ神からの恵みによる、神慮によるほかはないのだということになる。そしてこれが本篇の結末である。しかし、これはあまりにも結論を急ぎすぎた観がする。

ここで『メノン』や『プロタゴラス』との相違に注意するならば、『メノン』88A~Bや『プロタゴラス』325A sqq. では、節制、勇気、正義などの人間のもつべき徳は、知識として認識されているのに対して、本篇においては、徳が知識であるという明確な把握なしに、徳が教えられうるものであるかどうかが問題とされていること、また『メノン』においては、単なる思いなしと知識とを区別し、徳をそのようなものとしての知識として考えているのに対して、本篇では徳をただ神与のものとみなしていること、そしていま一つ重要なことは、『メノン』の結論と本篇の結論とは、徳が神からの賜物であるということによって、一致しているように思われるが、じつは『メノン』の場合は、徳が神与のものかもしれないという可能性を暗示することで、徳は教えられえないという、徳の非可学性を肯定したのではないのに対し、本篇ではむしろこれを結論づけた観がある、というような点に気づくのである。このような点からみて、本篇は簡単に手本を模倣しようとしたところに破綻をみせていると言うことができると思う。

本篇の『徳について』という題目は、『正しさについて』と同様、ソクラテス―プラトン―アカデメイア圏における流行のテーマとして、いろいろに取り扱われたものの一つと考えられる。ディオゲネス・ラエルティオスによると、アリスティッポス(Diog. L. II. 85)、クセノクラテス(Ibid., IV. 12)、テオプラストス(Ibid., V. 46)に同名の作があったことが記されている。いずれにしても、『正しさについて』の場合と同様、本篇もアカデメイア圏のエ

ピゴーネンのこしらえもの的作品であると言うことができよう。

使用文献および邦訳については『正しさについて』解説末参照。

『デモドコス』解説

副島民雄

登場人物

デモドコス(Demodocos)　『テアゲス』の対話人物と同名であるが、同一人物であるかどうか不明。

無名氏

本篇は他の五篇とは違って、対話者としてソクラテスの名は出されていないで、或る無名氏がデモドコスに対して話すという形がとられている。とはいえ、やはり、ソクラテスが暗示されていることは明らかであろう。また、形の上では対話であるが、その大部分は対話とは言い難いほどにモノローグ的である。対話の形を保持している部分も、それは単なる対話であって、プラトンの真作におけるように問答法的に発展する対話ではない。

また本篇には「助言について」という副題がつけられているが――この副題は真作のそれのようにトラシュロスのあたえているものではなくて、いくつかの写本(O、Y、Z)に付せられているものである――、内容は、必ずしも関連するとは考えられない四つのトピックに分かれているものの集まりである。

I(一―四章)は「審議と助言」を取り扱ったもので、量的にいって全体の約半分を占めている。問題は最初に提示されているように、(1)審議のための集会を行なう意味(380A～381A)、(2)その集会において助言を行なう

者の熱意(381A〜C)、(3)与えられた助言についての投票の効用(381C〜382E)という三つの面から考察される。まず(1)に関しては、審議すべき問題について正しく、かつ経験にもとづいた助言を与えることができるのは、そのような問題に関して正しい助言をすることのできる知識をもった人であるはずであるが、そのような人たちはその審議集会に集まった人たちの全部か、一部か。全部なら集会を催す必要はないのだから、一部とすべきであろうが、その場合にはそういう知識のある一人の人から助言を聞けば十分なはずである。だとすると多数の者から助言を聞こうとするのはなぜか、といった問題の考察である。(2)は、(1)で言われたように、正しい助言をする者は一人で多数の者が行なうのと同じ効果をもつのであるから、一人で十分であり、知識のない、無知無経験な者の助言の熱意は理不尽であるとするものであり、(3)の投票の場合も、投票によって何を判定するのか、真に助言者に値するのは、助言をする事柄の知識をもっていることであったが、それを判定するのも、その事について知識をもっていることであって、真の判定者とはそのような者であるはずである。したがって投票に訴える者がかかる判定者たりうることはないのであり、とすれば投票はいかなる効用をもつのかということが考察されるのである。

II(五—六章)は「訴訟に際して告訴する者の言い分のみを聞けばよいのか、それとも告訴する者と弁明する者の双方から聞く必要があるのかどうか」の問題である。訴訟の裁判に当たっては、告訴する側の言い分のみならず、弁明する側の言い分も聞かねばならぬ。それを前者のみから聞いて後者の言を聞かないならば、正しい裁判をすることはできないということが主張される。ついでこれに対して、双方から聞くことの意義について懐疑的な立場から考察がなされる。すなわち、一方だけが話す場合に、事の真偽を見分けることができないのと同様に、双方が反対の主張をする場合にもまた、同じくその真偽をいかにして見分けることができるかが問題となる。双方が話すことによって真相を明らかにするとした場合に、二人が同時に話すことによってだとすることはできない。めいめいが順番にでなければならない。ところがもしめいめいが同じことを順番に明らかにするとすれば、はじめの者の言

を聞くだけで十分である。また双方が明らかにするなら、それぞれも明らかにするはずである。しかしそれぞれが明らかにするなら、むろん先に言うほうが先に明らかにし、あとの人の言を聞く必要はないことになる。かくして、それでもなお双方から聞くことを必要とするかという疑問を投げかけて終っている。

Ⅲ(七章)は貸与と信用の問題。「相手が自分を信用しないで金を貸してくれない場合、責められねばならないのは相手か、それとも自分自身か」という問題が扱われている。それは自分自分である。なぜなら望んでいるものを手に入れた者と、手に入れそこねた者とでは、過ちは後者のほうにあり、それは相手にしかるべき、適正な要求をしなかったからである。したがって借金を申し込んで、金を借りられなかった当人に過ちはあるのである。また信用の問題も、しかるべき、適正な仕方で相手と交際しない人間は、相手に対して善からぬ扱いをしていることになるのだから、相手から信用されない場合に、過ちはやはり自分自身にある、というようなものである。

Ⅳ(八章)は「人は誰を信用すべきか」という問題である。

人は誰かれかまわずゆきあたりばったりの人間を信用してもよいのか、それとも身内の者や友人を信用すべきなのか。(1)もしゆきあたりばったりの、未知の人間を、彼らの言うことが真か偽かよく調べもせずに、たちまち信用する場合に、人が非難されるのは、その人がそのことによって過ちを犯すことになるからである。しかし逆にもし人が身内の者や友人のほうをいっそう信用するとしたら、それは彼らのほうが信用に値すると考えるからであろうが、しかし彼らのなかにも信用すべきでないことを言う人がいるのではないか、彼らの言うことの真偽も調べてみる必要があるのではないかという問題が生じてきて、身内の者や友人のほうをゆきあたりばったりの人間より信用すべきだとする根拠がなくなる。(2)同じ人間が或る人たちには友人だが、或る人たちには未知である場合に、(1)の帰結から、その人間は信用に値すると同時に、信用に値しないということになる。(3)ゆきあたりばったりの人間も、身内の者や友人も、同じことを言う場合には、両方とも同じように信用しなければならない。すると問

題は元に戻り、誰を信用すべきかということがわからないことになる。かくて、この問題でも真の認識についての不可知論的懐疑論的態度が表明されていると言うことができよう。

以上のようなところから本篇もやはり他三篇と等しくソフィスト的懐疑論的作品として、特にメガラ学派的傾向の人の手になるものとみることができよう。スイエも前四世紀の作としている。

使用文献および邦訳については『正しさについて』解説末参照。

『シシュポス』解説

副島民雄

登場人物

ソクラテス(Socrates)
シシュポス(Sisyphos)　テッタリア出身の裕福で名声ある人物。本文であきらかであるように、パルサロスの政治に助言者として、審議会に召集されていた。

『シシュポス』には「審議について」という副題——この副題も『デモドコス』の場合と同様で、L写本(Laurentianus 80, 17)のもの——がつけられているように、本篇は、審議集会を開いて国事を審議する場合に、その審議というのは何であるかを問題とするのである。そして、その際『メノン』80Eにおける論争術的な命題、「ひとは知っていることも知っていないことも探求することはできない、なぜならば、知っていることは、すでに知っているから、探求する必要はないし、また知っていないことは、何を探求してよいかわからないから、探求することをしないから」を基調にしている。そこで、問題になるのは、「人々は知識をもっているものについて審議するのか、そうでないものについて審議するのか」ということである。

まず最初に、審議というのは「人が自分自身のためになしとげるべき最善のことを発見しようと努め、探求する

こと」(388B)だと言われる。では探求というのは人が知っていることに関して行なうのか、それとも知らないことに関して行なうのか。知っていることを探し求めることはないから、知ってはいないことに関して探求は行なわれるのであるが、それは、例えば幾何学において、幾何学者が対角線について探求するという場合に、そのものが対角線であるかどうかということについてではなくて、正方形の一辺に対する対角線の比はいくらかということについて探求するというのと同じ意味である。そこで国にとって最善であることを発見しようと努め、探求するという場合に、その探求のさまたげになるのは無知である。音楽や舵取り術の場合についてと同様、国における最善のこととは何であるかの知識をもたない人は、それを審議することもできないのである。

しかし知識をもっていない場合には、人は探求するよりもむしろ識者から学ぶべきである(390A)。ところが審議集会で人々はじっさいにはそうはしないで、即興や想像を語っているだけである。

さらに、審議がそうした想像や即興を語るようなこととは何か異なるものだとしても、審議に関して、立派に審議するとか、立派でない仕方で審議するとかいう審議の優劣や、審議する者の優劣はどういうところから言えるのかという問題がある。さて審議というのはすべて未来のことに関係するものである(390D)。ところで、未来のことというのは現に*ある*ものでもないし、まだ生じてもいないものなのであるから、それはいかなる有りよう(存在性)ももっていないものである。つまり非存在である。ちょうど的を射る場合に、的が置かれているならば、それをよくあてるか否かによって上手に射る者と下手に射る者とを区別することができるが、的がない場合には、その勝負を判定することができないのと同様に、審議の場合も、存在しないものについて審議するということは不可能であり、存在しない対象については立派な審議も立派でない審議もありえず、また立派な審議者も、立派でない拙劣な審議者もありえないことになる。

このようにして、本篇は、この問題の考察を他日の宿題とするということで終っているが(391D)、結論におい

ては、未来のことについて審議することの不可能なこと、そのために集まることの無意味であることを主張して、終っているということができるのであって、はじめにあげた『メノン』の命題を論証したことになる。

けれども、『メノン』では、知識のこのアポリアー打開の道として「神与」という領域が示され、それが「想起」によって形而上学に基礎付けられることになったが、本篇においては知識の根源を人間の領域よりより高い処、神の世界に暗示するのにとどめている。それには二つの理由が考えられる。問題がすでに『メノン』『アルキビアデスI』などで取り扱われていることなので、それを要約するために単純化したものか、それとも、知識へのアポリアーの打開に積極的な態度を示さなかったのは、すでにアカデメイア内にきざしたソフィズム的な懐疑的虚無的思想の故であったのか。ミュラーが示唆しているように、本篇における知識論が、冥界で打開の道のない絶望的な刑罰に苦しむあの神話のなかのシシュポスの運命にも似ているところから、本篇の題名としたのではないかと推論するとしても、あながち筋違いのことではないかもしれない。

本篇の作者については、『正しさについて』『徳について』と同様、アカデメイアのなかの人が考えられるだけで、より詳細確実なことは言えない。

使用文献および邦訳については『正しさについて』解説末参照。

『エリュクシアス』解説

尼ヶ崎徳一

登場人物

ソクラテス(Socrates)　本篇の対話がなされるのは、だいたい五三／四歳の頃の話として設定されている。

エリュクシアス(Eryxias)　アテナイ市ステイリア区出身の青年(392A)。クリティアスとは親戚でもあり、また友人でもあった(396D)。それ以外のことは不明。

クリティアス(Critias)　プラトンの母のいとこにあたる人。前四〇四年の三〇人独裁政権の指導者となった。思想家として幾つかの著作もあったし、笛をよくたしなんだともいわれている。この話の頃は、恐らく政界に乗り出す直前で、大体四〇歳を過ぎて間もない頃と思われる。『カルミデス』『プロタゴラス』『ティマイオス』の登場人物説明を参照されたい。

エラシストラトス(Erasistratos)　クセノポンの『ギリシア史』第二巻(三の二)に、前四〇四年の三〇人独裁政権の指導者の一人としてこの名が挙げられているが、パイアクスの息子も同名であったので、果してどちらのことだったのかは判らない。

一

本書は、トラシュロスによるプラトン全集編集の時に、すでに偽書として収録されたらしく[1]、その後今日に至るまでずっとそのように位置づけられて来ている。そしてまた、誰が何時頃作ったものか、についてもそれ程問題に

されなかったようで、はっきりしたことは何も判っていない。一〇世紀末に編纂されたとされる百科辞典スダ（或いはスイダス）では、アイスキネスの著作目録の中に本書の名が挙げられているが、[2]これは誤まりと見る方がよいらしい。なぜなら本書の別名とされる『エラシストラトス』が、別の書として挙げられていたり、他に明らかに別人の書であるものも並べて挙げられていたりしているからであるという。そして誤まりの由来としては、アイスキネスの対話篇『テラウゲス』及び『カリアス』が、同じく富について論じているために、同じ内容を持つものとしてまとめてここにおかれたものであろう、と推定されている。[3]

むしろ本書の成立年代を推定する一つの手掛りとしては、399Aに出てくる「体育場の管理官」のエピソードが考えられる。このように人に退去を命じ得るのは、一つの役職としてそれだけの権限を持っていたからであるが、[4]アテナイにおいて、この役職がこういう内容で確立するのは、前三世紀の始めのこととされている。それ以前の前五―四世紀のアテナイでは、この職はただごく瑣末的な典礼を執り行なうだけの役目であったのが、後には青年の補導という積極的な役目を果すようになったものらしい。[5]本書で、プロディコスに対して、青年に有害な話をしているから、といって退去を命ずるのは、この前三世紀以降の体育場管理官と考えなければならない。したがって本書の成立も、前三世紀以後のことと推定されるわけである。

本書の著者に関しては、対話の内容から推定するより他はなく、近代の研究者によって、あるいはストア派の人の作、またはストア派並びに犬儒派の影響の下に書かれたもの、とされたり（シュロール、[6]ショリー[7]）、あるいはアカデメイアの人による、ストアの見解に対する批判とされたり（テイラー）、[8]さらにはストア派・犬儒派・懐疑派の折衷とされたり（スイエ）[9]していているが、いずれも結局は単なる推定の域を出ない。こうした推定がなされる所以を見るために、本書の論点および構成を見てみよう。

（1）Diog. L. III. 62に『アクシオコス』『シシュポス』『デモドコス』と共に、偽書と一般に認められている対話篇（νοθευ-

ονται ὁμολογουμένως)の中に数えられており、そのすぐ前では、トラシュロスによる四部作形式のプラトン全集編集や、アリストパネス等による三部作形式の編集が紹介されているところから、こう推定してよいであろう。

(2) Suidas, *Lexicographus* (ed. Adler), II, p. 183. 31. なおここには『アルキビアデス』『アクシオコス』の名も一緒に挙げられている。

(3) J. Souilhé, *Platon, Œuvres complètes*, XIII, 3e partie, Dialogues apocryphes, 1930. p. 87; D. E. Eichholz, *The Pseudoplatonic Dialogue Eryxias* (The Classical Quarterly, XXIX, 1935), p. 141; H. Krauss, *Aeschinis Socratici reliquiae* (Teubner), 1911. p. 30.

(4) 役職であったという点については、アリストテレス『政治学』第六巻(1323a1)参照。

(5) J. Oehler, *in Pauly-Wissowa*, Bd. VII, pp. 1969 sqq.

(6) O. Schrohl, *De Eryxia qui fertur Platonis*, 1901.

(7) P. Shorey, *What Plato Said*, 1933. p. 436.

(8) A. E. Taylor, *Plato, the Man and his Work*, 1926. p. 550.

(9) Souilhé, *op. cit.*, p. 83.

二

『カルミデス』篇を思わせるような登場人物の設定と、『リュシス』篇を思わせる対話導入の場面設定がなされたあと(一―二章)、富についての問答が始められるが、

I　先ず「最も賢い人が最も富裕である」ということが、(1)最も価値の高いものを持つことが、最も富裕ということであり、(2)幸福が最も価値の高いものであり、(3)幸福即ち最もよくやるのは知恵によってである、という推論の上で提示される(三―四章)。

(4)また、知恵があっても生活必需品にすらこと欠くような場合でも富裕といえるのか、という反論に対しては、

逆に資産を処分する場合には、知恵の故によく処理できる、としてこれを斥ける(五—六章)。

Ⅱ　次に「富を得ることは、よき人にとってはよいものであるが、悪しき人にとっては悪いものである」ということが、具体的な例を用いて示され(八—一一章)、さらに、同じ主張をしたものとして、プロディコスの話が紹介されるが(一二—一五章)、実際にはあまり関係のない議論へと移って行ってしまう。

Ⅲ　改めて、そもそも富を得ること自体が何であるかが問われ、(1)富を得ることとは「多くの財産を持つこと」であるとされ(一七章)、(2)その財産(χρήματα)とは「役に立つもの」(χρήσιμα)のことであるが(一八—一九章)、役に立つもののすべてが財産というわけではなく、(3)「身体の欲望と必要を充すべく、それの世話のために役立つもの」が財産である(二〇—二一章)。

Ⅳ　次に「役に立つ」ということについても、立ち入った規定がなされ、当の目的のために、(1)「いかなる場合にも、なしではすまされないもの」のこととされ、したがって金貨銀貨などは、身体の必要を充すために、ただ間接的に有用なものにとどまり、財産ではないことになる(二二章)。

(2)これには直ちに反論が出され、金貨銀貨その他は、現に身体の世話に必要なものの調達に役立っている、とされるが、それならさらに一歩すすめて、知識も同じ理由で財産ということになり、そこでⅠの命題がもう少し明確に主張される。すなわちⅡと結びついて、(a)「ものは、それをいかに使うべきか、を知っている人にのみ役立ち、それは立派なよき人だけであり、したがってその人たちにとってのみ財産なのである」。また、(b)「ひとに或る知識を授けることによって、同時にその人を金持にもしたことになる」(二三—二四章)。

Ⅴ　しかしなお、金銀その他の通貨が財産ではない、ということは納得されず、その問題は一般化されて、(1)或る目的のために、直接役に立つものと、間接的に役に立つもの、という区別から論議される。後者は無限に多くなり得るが、そうなると例えば、恥ずべき手段によって財貨を得て、それによって医術の助けによって聴覚を得、そ

れによって徳を学び習う、という場合もあり得るわけで、それでは、(a)「悪しきものが、よきものを得るために役立つことはあり得ず」、(b)「役に立つものなら、必ずいつでも役に立つはずである」という承認事項と相容れないことになる(二五—二八章)。

(2)また、目的にとって conditio sine qua non となるものが役に立つもの、という規定からも、それを無制限に適用すれば、無知が知識のために、病気が健康のために、先ずなければならないもの故、役に立つものである、ということになってしまうであろう(二九章)。

VI 最後に「最も富める人は、最も悪い状態にある」ということが、(1)わずかなものしか必要としない時、人はよい状態にあり、多くのものを欲し、必要とする者は、即ちそれだけ欠如しているわけで、それは悪い状態にある。(2)富める人は、財産即ち身体の必要を充すに役立つものを多く持つが、それはそのために多くのものを必要としている人である。ということから結論されて(三〇—三一章)、対話篇は終っている。

三

全篇を通じて、議論が進められて行くのに中心的な役割を果しているのは、富を決定するのは有用性であり、ものを何のためにいかに用いるかによってその価値は決まる、という考えである。この〈価値と有用性〉、一般には〈善と有用性〉の結びつきは、プラトンにおいてしばしば見出される、基礎的許容事項の一つであった(例えば『ゴルギアス』474D〜475C, 499D、『メノン』87E、『ラケス』192C〜D、『国家』II. 379Bなど)。また特にIIの議論は、『エウテュデモス』280B sqq. 特に281B〜C、『メノン』88A〜Bの議論とだいたい一致している。

しかしもっとよく対応しているものを探せば、クセノポンの『家政論』[10]ということになるであろう。そこでは、主題も同じ富・財産について、ソクラテスが、(イ)役に立つものが財産であり(一の九、一一)、(ロ)同じものでも、

その用い方を知っている者にとっては財産であるが、知らない者にとっては財産ではない、とし(一の一〇)、(ハ)したがって、その用い方を知らず、役に立たない時には、貨幣といえども財産ではない、と述べる(一の一二—一三、二の一二)。またさらに、ソクラテスは対話の相手クリトブロスに向って、(ニ)その社会的身分、地位からして、自分の持てる豊かな富でもなおかつ不十分、不満足なクリトブロスよりも、現在の貧しさで十分であり、満足しているソクラテスの方が富裕である、ということを示す(二の二—八)。

これはそれぞれ、(イ)はⅢの(2)、(ロ)はⅣの(2)の(a)(b)、(ハ)はⅣの(1)、(ニ)はⅥの議論と対応している。このような考え方、及び対話の運び方は、ソクラテスの——それも特に犬儒派が引継いで強調したような——一面をよく示している、と言ってよいであろう。しかしまた他方で、諸家が指摘するように、ストア派の説、表現に通じるようなところも、かなりはっきりと見られるように思われる。

(10) Xenophon, *Oeconomicus* (ed. E. C. Marchant, in The Loeb Classical Library).

四

本書で主張される命題の中で、Ⅰ(394 A)は、ことにそれがⅣの(2)において(a)の形で規定される場合(403 B)、ストア派の solus sapiens dives という主張[11]を思わせるし、またⅤ(1)の(a)での主張(404 C, E)も、ストア派で「富が善きものではない」とされる際の論法[12]とほぼ平行している。さらにⅤ(1)の(b)も「よく用いられることも、悪く用いられることもあり得るものは、善きものではない」という議論[13]と相通ずる。こうして本書の著者に関して、何らかの形でストア派との結びつきが想定されるわけである。

また、世間一般の人々が追い求める富、財貨を、むしろ軽蔑して、もっと大切なものが他にある、ということを人々に知らせる、というのは、ソクラテスの生涯を通じての一つの大きなモチーフであったが、それを引継いで犬

儒派が、富の蔑視の一面を強く浮きぼりにして見せ、さらにそれをストア派が引継いだわけで、外的な富は、それ自体ではよくも悪くもない indifferent なもの、とされている。[14] ソクラテスでは、富はまだ一応はよきものの中に数えられており、その点で本書の最後の命題VIを見てみると、すでにソクラテスの段階をこえた考えがうかがわれ、やはりこの著者とストア派とのつながりは、かなり強く想定せざるを得ないであろう。

しかしながら、そこから直ちに、本書がストア派の立場から書かれたものであるとか、この著者がストア派の人であった、とか言うこともできないように思われる。個々の議論を単独に取り上げて考えると、あるいはストア派の議論、主張と同じものであっても、はたしてそれが本書の全体を通して首尾一貫した主張であるのか、またそうしたストアの教えを説くことが本書の目的であったのか、あるいはもっと広い関連で、ストア派のこれ以外の思想とうまく整合しているかどうか、いろいろと問題があって、簡単には断定できないであろう。

(11) H. von Arnim, *Stoicorum Veterum Fragmenta*, III. 593–598.
(12) *ibid.*, 151–152.
(13) *ibid.*, 117.
(14) *ibid.*, 117, 122.

五

いま一つ本書で目につくことは、ソクラテスが、いわばそれぞれの議論のつなぎのような形で、何度か問答法の作法・心得のようなことを述べている点である(七章、八章、一〇章、一六章、二五章)。そして実際になされる問答を見てみると、その主要部分となるIII以下の問答では、「有用性」ということを軸にして基本的な価値観を立てて、それに基いて貨幣は富、財産ではない、というパラドックスを出し、議論の上ではそうならざるを得なくても、

心情的には納得し難いのを見て、また新らしいパラドックスVIを出す、ということで終っている。

ジョウエットは、本書のあちらこちらに、ちょっとしたところで、プラトンの諸作品から取られた模倣が見られることを指摘して、学生のExerciseのようであると評しているが、[15] それとはまた違った意味で、この作品には学校での作文練習を思わせるものがある。すなわち、プラトンの手本に倣って、ソクラテスの問答を描く対話篇を構成しているわけであるが、実際の内容では、ソクラテスが対話を導いて行く手法の一面だけが出てきて、詭弁めいた論法に終始している。作品全体の長さからみれば、不相応に何度も問答法の心得を述べているのが、何か取って付けたように、内容上の足らないところをそれで補おうとでもしているような感じを持たせる。

こうしてみると、個々の議論はともかくとして、全体の議論の目的、方向、形式においては、やはりソクラテスを再現して描き出すことを目指しているもので、ただ時代が前三世紀に入っているために、ストア派の思想の反映は避け難かった、というわけで、スイエ、アイヒホルツの主張のように、前三世紀初め頃のアカデメイアの人の作、と考えるのが一応適当だろうと思われる。

(15) B. Jowett, *The Dialogues of Plato*, II, 1892. p. 557.

なお翻訳にあたって参考にしたのは、テキストではスイエ、ヘルマン(Hermann, Teubner版全集第六巻)、訳ではフィチーノ、ジョウエット、スイエ、木村鷹太郎、岡田正三諸氏のものなどである。

『アクシオコス』解説

長坂公一

登場人物

ソクラテス(Socrates)

クレイニアス(Cleinias)　アクシオコスの息子。『エウテュデモス』の登場人物の一人である。

アクシオコス(Axiochos)　『エウテュデモス』275 A (cf. 271 B, 273 A, 274 B)によれば、先代アルキビアデスの子、そして有名な政治家アルキビアデス(前四五〇頃—四〇四年)の叔父である。アンドキデス『弁論』(一の一六)には、前四一五年、密儀をおこなった信者の一人として処罰され、財産を競売に付され、アテナイから逃亡したとある。

一

『アクシオコス』あるいは「死について」は、アクシオコスの息子クレイニアスから、父が死に直面して不安がっているので、慰めてほしいと頼まれて、ソクラテスがアクシオコスと対話するという形ではじまっている。この対話の冒頭部分には対話形式(直接対話)と叙説形式(報告体)との奇妙な混合が見られる。

ソクラテスの言わんとするところは「みんなに言われている普通の言い方だが、人生は一種の異郷生活である、

そして人はほどよくこの世を過ごしたら、あとは……機嫌よく、帰るべき所へ帰って行かねばならない」(365B)、言いかえれば「アクシオコス、きみの移ってゆく先は、死へではなくて不死へであり、善きものを剝奪されるのでもなく、むしろ喜びがいっそう純粋になるのである」(370C～D)ということである。その対話の論旨はほぼつぎのように分析される。

慰めの対話(一)(364D～366B)

(1) 死の恐怖。アクシオコスが死の恐怖を訴える(364D～365A)。

(2) 慰め。ソクラテスはアクシオコスに、なぜそんなに不安になったのかと訊ねながら、人生は一時の異郷滞在であり、生を終れば安らかにその行くべき所へ行くべきではないかと、諺をふまえて慰める(365A～B)。

(3) 反論。アクシオコスは反論する。その諺を頭では理解できるが、この理解は死の恐怖を消す力にはならぬ。そして、この世の光と諸〻の善きものを失い、身体が腐って蛆虫に変るとしたら、やはり恐ろしい、と(365C)。

(4) 弁明。ソクラテスは恐怖の生じる原因は想定の錯誤にあると指摘する。人間が生存中に持っている人間的感受性を、死後の死体や蛆虫がやはり持っているかのように錯覚・想定するところから、恐怖心は生じるのである。そして、人間の本来の自己は魂なのであり、魂は、身体や物的世界の牢獄から解放されて、この世をこえた神の精気(アイテール)に満ちた世界へ帰るべきだと、ソクラテスは説く(365D～366B)。

慰めの対話(二)(366B～369C)

(1) 死の恐怖。アクシオコスは、ではソクラテスは何故いますぐ死のうとしないのかと問い返す。この反問は暗に、死の恐怖の消えていないことを示している。その暗示をくんでソクラテスは、表面の問いには答えず(『パイ

ドン』61C～62Cでは答えているが）、重ねて恐怖心を慰める言葉に向う（366B）。

（2）慰め。ソクラテスはソフィストのプロディコスから聞いた話や、神話や詩歌、さらには実生活での経験などを引きながら、この世の人生の厭わしさを描いてみせる。つぎにプロディコスから聞いたという「死は、生きている者たちにも、他界した者たちにも、関係がない」という論をふまえて、「死はきみに無関係だ」と推論する。その際、プロディコスから聞いたという理由づけは、感覚主観的、唯物論的なもので、ソクラテスやプラトンの立場と相い容れないものであるが、「死はきみに無関係だ」という結論だけは、超越世界を認めるソクラテス－プラトンの立場からも言える言葉である。だからむしろここでソクラテスは、その結論を立てるために、相手を考えてとりあえず唯物論的論拠を持ち出したものと見られる。この部分を詭弁、立場の折衷、論旨混乱などと譏るのは不当であろう（366B～369C）。

（3）反論。しかしアクシオコスは、「死はきみに無関係だ」という推論を、詭弁とみてしりぞけ、重ねて死の恐怖を表明する（369D～E）。

（4）弁明。ソクラテスは再び死の恐怖の生ずる原因について、死者にも感覚があると誤まって想定している点に原因があるともう一度指摘し、ついで、魂の不死の論を持ち出す。魂は極めて大規模な事象を考察することができる。これは魂の中に、神の息（プネウマ）が宿っているからにちがいない、と。そしてここでも「神の息」という言葉によって、魂の帰るべき所は神の超越世界であることを、ソクラテスは示唆している（369E～370C）。

対話の結論（370C～E, 372A）

（1）ソクラテスは慰めの対話を二度重ねたあとで、「きみが行くのは死へではなく不死へなのだ」と結論し、不死とは、死（諸々の善きものを奪われること）でもなく、生（魂が身体の牢獄に囚われている状態）でもなく、むし

ろ平静な境涯であり、真実にあるものを眺めつつ真に知を求め哲学することのできる境涯であると、説明する(370C～D)。

(2) アクシオコスはこれにうなずき、死の恐怖は除かれたと言い、すでに死(ここでは通俗用語、以上の論旨からは、不死とあるべきもの)への旅立ちを期待するようにさえなっていて、真の知を求める考察もさっきから始まっていると、認めている。ここに、重ねて「すでに」「さっきから」とあるのは、「不死への旅立ちは存命中に始まり、必ずしも臨終を待つものではないのではないか」という当時の問題意識を、反映しているとも受け取られる(370D～E, 372A)。

ミュートス(371A～372A)

ソクラテスは最後に神話によって、不老不死の甘美な生活の世界(いわゆる極楽)と永劫苦の世界(いわゆる地獄)を描き分け、前者へ行くための条件として、「魂が善き神霊(ダイモーン)の息(プネウマ)にふれること」を挙げている。そして、この対話篇において、魂の帰るべき不死の世界に関係して、精気(アイテール)、神の息(ティオン・プネウマ)、善き神霊(ダイモーン)の息(プネウマ)、などの言葉が、一貫性をもって使われていることは注目に価する。そこには一つの重要な問題意識が表明されているのである。すなわち、――たとえ「魂は不死の世界へ帰るべきものだ」とか「その魂にとっては死は無関係だ」とかの結論を承認したにせよ、それが単なる生存者の側の理解にとどまるならば、――いいかえれば、身体の牢獄が少しでも破れ魂が外の精気に直接にふれるのでないかぎりは――、「不死の世界」も結局は生存者の心が想定した世界、主観の産物、観念の産物でしかないことになる。これでは死の問題は充分には解決しない(なぜなら、死後にも感覚はあるという想定から生じる恐怖心に対し、不死の世界があるというもう一つの想定を対立させ、一つの想定で他の想定を打ち消そうとするのであるから、充分な結

着はつかないのである）。そこで魂が外なる精気に直接にふれるということが、最後の不可欠の鍵となるのであり、その点を、いまの「精気」「神の息」「善き神霊の息」などの言葉は、言表しているわけである。なお、エレウシス密儀の話題が出て来ることも（371D〜E）、この一点に関わる言及として、注目されよう。

なお、この対話のおこなわれた時として想定されている年代については、368Dに、前四〇六年の「一〇人の将軍」事件が言及され、また364Aに、前四〇三年没のカルミデスが生きて登場しているので、前四〇四年頃であると解してよい。そしてその年代には、ソクラテスは六五歳、カルミデスは四六歳くらい、その恋人であり、ダモンに音楽を習っているクレイニアス（364A）は、たぶん一七歳くらい、その父アクシオコスは、365Bに「年齢もそれほどになっている」「思慮深い年齢」などとあり、またアルキビアデス（この頃四六歳くらい）の叔父であることなどを考慮して、五六歳くらいであったと、想像してよかろうか。ともかくソクラテスよりは年下のようである。

二

以上が本篇の構成および論旨であるが、これをconsolatio（慰め）の文学の視点から見るとき、本篇は特別な地位を持つといえる。すなわち後に盛んになる慰めの文学の先駆的ギリシア資料として、しかも生死問題にかかわる基本事項を、極めて簡潔、平易にまとめたいわば臨床用教本の逸品として、目をみはるべき文献である。アレクサンドレイアのクレメンス（二世紀）やストバイオス（五世紀）が、本篇をプラトンの真作として引用していることや、フィチーノ（一五世紀）以来、さまざまな臆測が繰り返されていることからみても、本篇を高く評価する読者の伝統は連綿として続いているといえる。またその善さが評価されればこそ、本篇は、偽作の烙印を押されながらもプラトン全集からはずされることなく保存されて来たと、いうべきであろう。

とはいえ、本篇には種々問題点があることも事実である。スイエ(J. Souilhé)は、死の不幸を慰める文学の草分けとしてはクラントル(前三三五―二七五年)をあげ、本篇はクラントルの模倣であるとしている。クラントルは古アカデメイア員としてクセノクラテスの弟子で、ポレモンやクラテスやアルケシラオスと親交のあった人で、また、彼の『悲歎について』(ペリ・ペントゥス)はキケロの『娘トゥリアのための慰め』のモデルにもなったといわれる。そして『アクシオコス』の論の運びにはクラントルの作品をまねたと思われるふしがいくつかみとめられると、スイエは言っている。また本篇が後代の筆であることの理由として、エピクロスの影響が認められるとする学者も少なくない。すなわち、死は生者にも死者にも来ないという命題(本篇 369B)は、ここではソフィストのプロディコスに帰されているが、実はこれはエピクロス(前三四一―二七〇年)のアトミズムにおいて徹底されたものだというのである。彼によれば、われわれの霊魂も身体もアトムから成っていて、身体内のアトムは感覚を持っている。死によって霊魂も分解し感覚を失う。そこで死は、われわれが存在する間は、われわれに来ないし、死が来るときはわれわれはすでに存在しないというのである。

また本篇の中にストア主義の要素をみとめるのも、諸家の通例である。ゼノン(前三三六―二六四年)で特異な発展を見たプネウマ(πνεῦμα)の思想が、控え目ながら本篇に採用されているという。すなわち――ゼノンのプネウマは神の心、宇宙霊魂として秩序の源として宇宙に浸透するものであり(Diog. L. VII. 136 sqq.)、本篇(370C)に「魂がかくも広大な規模の事象を考え知るに至ったのは、そのよりどころとなる、神に由来するある息(プネウマ)が、実際に魂の中にあったからだ」とあるのが、これにあたる。また本篇(370D)に「かしこでは、すべてにわたって、労苦も愁嘆も老け込むことも要らず、そして災禍を苦しむことのない、波乱のない一つの生活があり、それは、ゆるぎない穏やかさの静かな生活であり、そしてきみは、もともとから定められてあった事柄をくまなく考察し、大衆や劇場を相手にではなく、首尾整った真実を目ざして愛知にいそしむ」とあるのは、ストア主義の宇宙論に相応

ずるものである。ゼノンによれば宇宙(コスモス)は神と人との国であって、神の理性(ロゴス)によって支配されている。これがストアの自然法である。哲学の目的は宇宙のこの理(ロゴス)の理解にあり、それが霊魂の治癒であり幸福である。そして幸福は、自然理解のための、自然に従って生きる、生活である。したがってその生活は、大衆や観客のごとき外界の対象に向けられるべきものではなく、真理そのものに向かう、感情情緒にゆさぶられない平静なる生活である、——と。

また本篇の用語については、ミュラー(Müller(1866))、シュヴァリエ(Chevalier(1915))、スイエ(1930)、ショリー(Shorey(1933))などが言及しているが、いずれもその語彙がソクラテス－プラトン期のものよりはるかに後代のものであることを指摘している。またショリーは、本篇の著作を前四世紀の終りとするインミッシュ(Immisch(1896))の説と、前一世紀の始め以前ではないとするシュヴァリエの説とを紹介している(p. 666)。ミュラーは、プラトンにとって異質な、部分的には新プラトン主義において起こった表現があるのみならず、慰めの対話の部分に見られる活気と暖かさにもかかわらず、説話法的要素が対話法的要素を凌駕している点からみて、ソクラテスよりもむしろセネカ、エピクテトスを想い出させるものがあるとし、本篇を後期アレクサンドレイア期(前一世紀)のプラトニカーに帰すべきことを仮定している。スイエは、既述のとおり本篇著作については、その典拠とも思われるもの、たとえばクラントルの『悲歎について』と本篇とを対比させるなどして、結論として、本篇はキリスト教時代に先立つシュンクレティズムの時代、前一世紀に書かれたものであろうと述べている。なお最後に、ディオゲネス・ラエルティオス(Diog. L. III. 62)によれば、後一世紀のトラシュロスによるプラトン著作集編纂の当時、本篇は偽作であるとするのが定説であったという。また、Diog. L. II. 61 には、本篇とは別に、ソクラテス仲間のアイスキネスも、『アクシオコス』なる題名のソクラテス対話篇を著したとあり、また同じく Diog. L. IV. 12 には、アカデメイア第三代学頭クセノクラテス(前三九六—三一四年)にも、『死について』なる題名の作品があったと記さ

れている。
　これを要するに、本篇は、前一世紀末頃、後期ストアの時期より少し前の時期に、当時におけるアカデメイアの内部あるいはプラトンの哲学や学風を詳しく知る者の手によって成ったものと思われる。

主な使用文献

F. Ast, *Platonis opera*, VIII, Leipzig, 1825.
H. Müller und K. Steinhart, *Platons Sämtliche Werke*, VIII, Leipzig, 1866.
Diogenes Laertios, ed. R. D. Hicks (The Loeb Classical Library), 1925.
J. Souilhé, *Platon, Œuvres complètes*, XIII, 3e partie, Dialogues apocryphes, Paris, 1930 (BUDÉ).
P. Shorey, *What Plato Said*, Chicago, 1933.
H. Diels und W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 8th ed., Berlin, 1956.
Ficinus, *Platonis Dialogi Vol. XI*, latine juxta interprelationem Ficini, London, 1826.
A. Brinkmann, Platons Axiochos, *Rheinisches Museum*, LI (1896), S. 441-454.
C. Fr. Hermann, *Platonis Dialogi secundum Trasylli Tetralogias dispositi*, VI (Bibliotheca Teubneriana), Lipsiae, 1907.

後　記

当第十五巻の主要な訳者たる副島民雄君が、校正過程で逝去されたので、本巻を完了させるために、北嶋美雪、長坂公一両君の助力を仰がねばならなかった。わたしは副島訳と解説に対して、校正過程でこれを見て、助言する約束をしていたのであるが、いろいろな事情で、それを果すことができないでいたが、いま君の逝去にあって全く申し訳なく思った。後ればせながら一通りの検討を試みたが、同君が健康でなお存命であったら、なお補足改訂されたであろうと思われるところが見られたので、いかにすべきか思案しなければならなかった。その結果、訳文に関しては出来るだけ正確達意を目ざす本全集の一般方針に従い、思い切った改訂を加えることにし、この仕事を北嶋君に一任した。そして解説については、この訳文改訂に伴って必要となる改変を加えたが、出来るだけ故人の考えを生かすようにつとめた。また索引についても故人の作製したものを土台として、これを整理することにした。これらの仕事のすべては北嶋君の分担である。

なお本巻プラトン外篇の一般解説は、これを副島君に一任し、全体としての統一を期したため、『エリュクシアス』『アクシオコス』についても、副島君の解説があったけれども、これは未完のものと見られたので、これの解説は尼ヶ崎、長坂の両君に分担してもらって、前者は全く新しく書き直され、後者も多くの手を入れることになった。また索引もそれぞれ両君の分担作製したものである。なお『アクシオコス』訳文は西村訳原稿に小生が若干の手入れをしておいたが、前記長坂君の解説に合わせて、訳文と注になお若干の改訂をしなければならないことになった。同様にして、『定義集』についても、これまた長坂君の協力に負うところが少くなかった。いずれにしても、このようなことは、また他の巻の訳文、解説についても、編集者として小生と藤沢君が常時配慮したのであるが、特に

本巻においては専門学者の研究も未だ充分ではなく、問題点も少くないので、出来るだけの配慮をして、全体として少しでも完全に近いものを期したわけである。これらの仕事はまた本来的には副島君に期待することが多かったのであって、もし同君がなお存命中であったら、いろいろの助言を得ることができたであろうが、それが出来なくなってしまったことは、まことに遺憾なことである。本巻をいくらかでも完全なものにして、同君の霊にささげたいと思う。至らざるところの多い仕上りではあるが、同君もわれわれの努力だけは諒としてくれるだろうと思う。

一九七五年八月

田中美知太郎

タ 行

ナ 行

ハ 行

マ 行

ヤ 行

ラ 行

ワ 行

『アクシオコス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．
本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，これに対応している．
固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

マ 行

ヤ 行

ラ 行

『エリュクシアス』索引

数字と ABCDE は，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字と BCDE(A は数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

タ 行

ナ 行

ハ 行

『シシュポス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

タ 行

ハ 行

マ 行

ヤ 行

ラ 行

『デモドコス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

タ 行

ナ 行

ハ 行

ヤ 行

『徳について』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

『正しさについて』索引

数字と ABCDE は，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字と BCDE(A は数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

タ 行

ハ 行

マ 行

ナ 行

ハ 行

マ 行

ヤ 行

ラ 行

ワ 行

サ 行

タ 行

『定義集』索引

数字と ABCDE は，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．〔 〕内の数字は，訳者が便宜上付した，定義の番号を示している．また，本文で定義されている概念にはすべてギリシア語を並記した．

プラトン全集 15　　第 12 回配本(全 15 巻　別巻 1)

1975 年 10 月 30 日　発行

¥ 2800

訳　者　向　坂　寛
副　島　民　雄
尼　ヶ　崎　徳　一
西　村　純　一　郎

発行者　岩　波　雄　二　郎

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社　岩　波　書　店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします